
GANTZ 埼玉

お月さま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GANTZ 埼玉

【Nコード】

N9882P

【作者名】

お月さま

【あらすじ】

「黒い球の部屋って知ってる？」その文章を見た主人公、川和公は興味本位で調べだす。するとあるサイト「黒い球の部屋・GANTZ」を見つだす。公は内容に興味を持ち、住人になりたいと望んだ。すると、寝ている間にある部屋へときていた。・・・・・・・5回目のミッション、戦闘に苦戦するGANTZメンバー一行。誰にだって辛い過去があるさ。そんなの、人から見たら優しくても、自分は辛い。龍は辛いとは思わないのか、少なくとも考えてはいた。

1話 部屋への興味（前書き）

今頃的な感じで投稿させて頂きます。今、原作では全国の兵が多々登場しているので、これを載せるのは、はつきり言って不安です！。でも、例え原作で埼玉の人が出てきたとしてもこの小説は書き続けたいと思います。どうぞ温かい目で見てやってくださいえ・・・。

主人公

川和 公（かわかず こう）

18歳 定時制高校生3年

1話

部屋への興味

昼間働いて夜間は勉強。それは人から見れば少し忙しい日常に思える。でもそれは、慣れた日常であり、当たり前前の日常だった。

だが、いくら慣れたといっても、忙しかどうか正直に言えば忙しい。

その忙しさは、平日の朝の6時から夜の10時まで暇という時間が一切ない。一切ないとは少し言い過ぎかもしれないが、暇な時間を総合するとやっぱり全然ないと言える位だと思う。

普段はそんなけど、今日は珍しく学校は休みで、俺はこれから会社から帰宅するところだ。

学校行かずに、そのまま家に帰宅するのは何週間ぶりという感じなので、家に帰ったらなにをしようかと楽しみでしかたがない。

家に帰るといっても、俺は一人暮らしだから帰るのはアパートだ。

今となつて、一人暮らしを後悔している自分がいるが。でも、悔やんでもしかたないし、出来るところまで一人暮らしは続けるつもりだ。理由はどうであれ、家族には結構無理言って一人暮らしを始めたからだ。

そして気づけば俺はアパートの前についていた。

バックから鍵を取り出し、部屋に入る。そしてすぐさま宝であるPCを起動させた。

ヒュイイイ・・・

「小説つと・・・」

独り言を呟きながら俺はその小説サイトにキーワードを検索すると、素人が作った小説を読み始めた。・・・そうやって読み始めて数分、なんとなくだが文章に目が行かない事に気がついた。

「・・・なんか今日は気分がのらないな・・・小説を読む気にならない・・・」

寝ようと思ったが、その前にお気に入りスレを見てから。と、思い、スレを開いて読み始めた。するとなにやら意味不明って言うか単純明快って言うか・・・興味深い文章がPC画面に映った。

「黒い球の部屋って知ってる？」

「なんだこれ、黒い球の部屋？」

謎に思った、この文に惹かれた俺は、試しに検索欄に「黒い球の部屋」と検索してみた。すぐに見つかることはなかったが、探せば意外と早く見つかった。

「これか・・・？」

黒い球の部屋

このページの内容は自分の体験した事実のみを記すものである
一切のフィクション・虚言・妄想は含まれていない

G A N T Z

その部屋には黒い球があった

直径1m程のチタンの様な光沢のあるドス黒い球だ
この球には様々な武器や道具がおさめられていて
その性能はどれも現代科学の範疇から外れている

これらを使用する人間は神にも悪魔にもなれるだろう・・・
それだけの能力と魅力をこの球は秘めている

いつの頃からかこの球は‘ガンツ’と呼ばれている
俺は知らないが、昔のテレビ番組に出ていた
ロボットの名前を誰かが昔この球につけたらしい

理由はこの頁を最後まで読めば分かるが
この球が採点するからだ

人間は必ず死ぬ 俺がそうなった様に
まず死ぬ事がこの黒い球に選ばれるための最初の条件になる

選ばれるというのは正しい表現ではないが便宜上使用している
この件については後述する

次にこの黒い球‘‘ガンツ’’の存在目的について説明する
それは実に単純明快なことである

使者に新しい命を与えて地球上に潜む宇宙人を退治させる
という事だ

宇宙人 それは一見荒唐無稽の様に思えるのだが
ヤツらは確実に しかも相当数でこの地上に存在していて
その姿や形 生体も様々だ

ヤツらはなぜ退治されなければならないのか？
そんな理由はわからないし 知りたいとも思わないが
少なくともやらなければやられるのだ

もつとも俺の場合はそんな理由のためだけに
こんな事をしているのではない

面白すぎるこの内容を読んで、俺は薄っすらと笑みを浮かべた。
確かに、実際にこんな事があつたら面白いだろうし、実際に体験し

てみたいとも思える。

「ガンツ・・・ウケる・・・・・・・・」

俺はそのサイト端にある、並ぶ文をクリックしてみた。

発端

- 序章 -

- 召還 -

- 狩猟 -

- 採点 -

- 帰還 -

なりゆきを示すこれは実に隅々まで記載しており、納得の出来るような内容だった。

考察

- 目的 -

- 道具 -

- 黒幕 -

これはやっぱり考察って感じがした。悪魔で予想、確信的に言うてはいなかった。

リンク

- 屍体 -

- 兵器 -

- 禁忌 -

- 基他 -

よく意味は分からなかったがしてはいけない事なのだろう。

そして俺は、小説が記載されているところをクリックすると、このサイトを運営している人が体験したと言っものを読み始めた。そこにはいろいろな星人と戦闘を繰り返した体験談的に載っているが、はつきり言つと、小説と言つよりは記録に残すみたいなき方だつた。

予想以上の興味のためか、眠気を忘れて俺は読み続けた。

そして記録を読み始めて数時間、最後のネギ星人編にたどりついたとき、今までとは違ふ流れに驚く俺がいた。

「スーツの重要性に気づいた男、クロノ ケイ」

スーツの重要性に気づいた男か……。これから面白くなつてきそつだな。

だが、更新はネギ星人編で終わっており、中途半端な感じで読み終わった。

「更新途中か？早く続きが読みたいな……」

興味を持ったものが、途中でと終わるという事はなかなか嫌な気分だ。でも、いつかは更新するだろう……。気持ちをポジティブに切り替えた。すると、俺はとてつもない睡魔に襲われた。

そりやそつだ、最近寝不足だつたと思つし。体が異常なまでに疲労を訴えたのだ。

「眠気がやばい・・・寝ようか・・・風呂・・・いいや朝風呂で・・・」

俺は体を這いずりながらベットに移動すると、心で何も考えることなく深い眠りについた。

1話 部屋への興味（後書き）

。 次回話も頑張って考えます。 暖かい目で見てやってくださいませ・・・

2話

部屋の黒い球（前書き）

暖かい目で見てやってくだせえ・・・。

2話 部屋の黒い球

おい、起きるんだ！

誰かが、俺の体を大きく揺さぶり、起きるよう俺に促す。うなが

起きろ～～～って！

誰かが俺の体を更に大きく揺さぶる。さすがにうざい事だ・・・。

「・・・あゝ・・・誰だよ・・・」

そんな言葉とともに俺は上体を起こすと、目を擦って意識をしつかり覚ますと、俺の目の前には髪の毛の薄い、サラリーマンがいた。

「オッサン・・・俺の部屋でなにしてんの・・・？」

「なに、ここは君の部屋なのか？じゃあ早くここから私を出してくれ！！」

「は？入ってこれて出れない訳・・・ってあれ？俺の部屋じゃない・・・」

そう、そこは俺の部屋ではなく、見覚えもない、ただ部屋だった。

「おい！早く私達を外にだすんだ！！」

「ああ、ごめん、前言撤回、俺の部屋じゃない・・・ってかここどこですか？」

「なんだ・・・分からないのか・・・出れると思ったのに・・・」

ハゲのオッサンはそういうと俺から離れて行き、目の前にあるテラスに腰を掛けた。俺はとりあえず部屋を見回してみた。するとどうだろう、俺の隣には直径1m程の黒い球が宙に浮いて、そこに、あった。

「黒い球・・・って、え？」

俺はあのサイトのことを思い出した。

「これが夢じゃなかったら、あのサイトの小説は真実なのか？」

グイツ・・・

「!？」

誰かが、俺の服の袖を引っ張った。俺は急な事にびっくりしながらも、引っ張られた方向をむくと、そこには、身長165cm位の短髪ショートで鋭い目をした女が、俺の服の袖が伸びる位の力で引っ張っていた。

「ちょっと」

「はい、なんでしょう?」

「ちょっとこっちに来いよ」

「え?・・・ああ」

彼女はさらに俺の袖を引っ張ると、廊下に向かって走り出した。
俺はただ引つ張られるがままに廊下に移動をすると、彼女は、袖から手をはなして廊下の壁に腰を下ろした。

そして彼女は俺の顔を見て話し出した。

「いやー、中年ばっかの男女だけだったから若者が来て助かったぜ
」!

男みたいな発言をかます彼女に俺は少しばかり驚いた。

「は?」

「あんたは、何歳なん?」

「え、18歳ですけど・・・」

「マジか! 私と同じ年じゃん!」

「はあ、そうなんですか」

「ところでさ、あんたってこの部屋の事、本当に知らんの? あっ
ちの部屋で知ってるみたいな事、言ってたじゃん?」

知っていると言えるほどは知っていないが、知らないといえば嘘になる。俺は少し考え、考えたすえに嘘をつく事に決めた。

「うん、知りません・・・」

「やつぱりか」。まあ、しょうがないよね・・・」

「あなたはこの部屋の事を知らないんですか？」

「知ってたら聞かないって。てゆーかそれ愚問ぐもんだよ？」

「・・・ですね」

少し間、沈黙が続く。・・・すると彼女はなにかを思ったのか、俺の方を振り向いた。

「そういえば、あんたって名前なんていうの？」

「え、名前か・・・川和 公ですよ・・・」

「私は・・・実夏みか、それだけ覚えといて」

聞いた俺は、首を縦に振った。

「そうそう、それと、ちょっと質問したいんだけどさ、公って死んだときの記憶って、ある？」

「死んだときの記憶？ ないですね」

「ないんだ・・・私にはあるんだ・・・いや、この部屋に来た人

全員に死んだときの記憶がある。 あんたにないのは、ちょっと意外だったけど・・・」

それを聞くと、俺はまた、サイトの事を思い出した。

「死ぬことがこの黒い球に選ばれる最初の条件になる」

「そっか、俺は死んだのか・・・」

少しブラックな気持ちになった。どんな理由で死んだにせよ、眠っている間に死んだというのは、ちょっとショックだったからだ。

「そういえば、実夏さんには死んだ時の記憶があるって言ってましたけど、どのように死んだんですか？」

失礼を承知で聞いてみた。

「え・・・まあ簡単に言えば交通事故、車に撥ねられたんだ・・・」

実夏は、車が突っ込んできた時の記憶を思い出したのか、震えだした。一瞬といえども相当怖かったんだろう事を思わせる。

「なんか、失礼なこと聞いてすいません・・・」

「いいいいいよ、気にすることはないって・・・」

まだ震える実夏の体をみて、聞くんじゃなかったと思った。

「もうひとつ聞きたいことがあるんですけど・・・いいですか？」

「ああ、いいよ、何？」

「この部屋には何人くらい人がいるんですか？」

「見てくれば分かるけど……。私がこの部屋に来た時は3人だったな。今はもつと増えてるかもね」

「戻り……。ますか？」

別に1人で行けばいいじゃん。そう思ったが、実夏にそれを聞いてみると、案外簡単に了承した。だから、2人そろって残りの人間にいる、黒い球のある部屋に戻った。すると人数はかなり増えている様子で、5、6人程度ではなかった。

なので、とりあえず俺は、この部屋にいる人を見回し、数えた。

まとまって座っているサラリーマンとOL6人

子供のいる夫婦3人

ホームレスであろう格好の中年1人

どこかの料理人だろうかコック服を着た女性が1人

あとは俺と実夏2人で計13人

「結構人増えたな〜13人か〜」

「なんか部屋が結構狭く感じるな・・・」

さーいたまはくゆたかーな〜ところー
でもいがいとなにもない〜
でもいがいとーなにかあるー〜

黒い球から、奇妙な音楽が流れ始めた。

そして、そんな急な音楽に12人の集団は黒い球に眼が行った。

「なんなんだ、この歌は。　なんでこの黒い球から流れた？」

俺は疑問に思ったが、簡単に考えれば、その黒い球から音楽が流れたという事だけで、別に珍しくもなんともない事だ。

「これは、埼玉しらね〜奴が歌う歌だろ〜な」

実夏が笑いながら、俺にそう呟いた。だが、俺はどう答えたらいいのかが分からないために、「ああ、そうだな」としか答えられなかった。

「おい！球になにか映ったぞー！！」

30代のサラリーマンがみんなに知らせるように大声でそう叫んだ。もちろん俺達は黒い球に映るものをみた。

あなた達の命は
亡くなりました

新しい命を
どう使おうが
私の勝手です

という理屈なのです

この文章を見て部屋内は沈黙に包まれた。

「は・・・なんか意味わかんね・・・新しい命は、なにか使われるのか？」

「つまりところ、俺らは、生き返らせられて、逆らえないって事だろ？」

普通に俺が思ったことを言った。

画面はまたも変わり、今度はさらに意味の分からない事が写真付で映し出された。

あなた達はこれから
この方をやっつけに行ってください

マツチヨサピ星人

特徴

力もち

血管が浮き出てる

好きなこと

せん闘

あっぱ〜

口癖

上腕にとつ筋どうだ〜

「なんだよこのマツチヨサピ星人って、名前も顔もキモすぎだろ〜」

サラリーマンがそう言って笑い始めると、周りも笑い始めた。俺と実夏は、笑う事無く黒い球に映った文字を見つめていた。

「やっつけに行ってくださいだっよ・・・公」

「そっらしいな・・・」

ガシャン！！

今度は、黒い球が3箇所、扉が勢いよく開いた。その開かれた扉の左右には、銃器と思われる武器とコントローラー的な物が収納されていた。

皆はその銃器やコントローラーを取り出し、興味津々に観察を始める。

「へへよく出来てますな、本物でしょうか？これは・・・」

「ママ、僕もあれほしい・・・」

「だ、だめよ！ 本物だったらどうするの・・・」

「うわあ！！中に人が入ってる！！」

中年男性達が武器やらを手にとって観察をし始めたので、俺も実夏も興味をもってその銃器を取ろうとした。だが、それを見ていた中年男性達は、俺達を怒鳴りつけた。

「こら！君達は触るんじゃない！ 本物だったらどうするんだ！」

「若者はこういうのを手に取ると、すぐ試し撃ちとか言って軽率な行動にでますからね」

「今は我々が調べている、終わるまで触るんじゃない！」

・・・試し撃ちなんてそんな事しねーよ！ 心底言いたくなつたが、言つても話は通じないだろうし、目を細め、口を尖らせながら黙って見てる事にした。

「黒い球の後ろにはなにやらケースがありましたよ・・・」

「公ちゃん？ 誰だ・・・？」

サラリーマンはケースに公ちゃんと書いてある事を声に出して言ったので、俺は反応しサラリーマンの方をみた。すると、サラリーマンと眼が合い、俺に質問をしてきた。

「君、名前は公と言うのか？」

「はい、そうですけど・・・」

「するとこれは君のという事になるのか・・・？」

そう言つと、サラリーマンは箱を地面に置いてケースの蓋^{ふた}をあけた。

「何だこれは・・・全身黒タイツ？ タイツではないか・・・」

「なんかの特殊スーツなんじゃねーの？ なんとか星人を倒しに行けって言つてたしよ？」

実夏が笑いながらそう言った。

「こんな薄い服で身を守れるほど、世の中の科学は進歩しとらんよ・・・」

「そんなこと言ったってさ、さっき黒い球が人間を作り出すところを見てたでしょ。もしかしたらなにか効果があるのかもしれないよ？ 例えば動きやすいとか」

「・・・まあ、どうでもでもいいがね、着たければ着ればいいさ」

サラリーマンはそう言うと、スーツとケースを地面に置いたまま、再び仲間のいる黒い球に戻っていった。

「そつえば公は知らないか・・・あの黒い球はあんたを作り出したように、人間を作りだす事ができるんだぜ」

「へーそうなんだ・・・」

黒い球が人間を作り出すことはサイトを見ていて分かっていた。そしてサイトが言っていた事は、今この部屋ですべてが実現されていた。

「どうする？ このスーツ、着るの？」

当たり前だ、このスーツがどんなにすごい力を持っているか俺は知っているからな。

「着てみて損は無いんじゃないかな。俺は着るよ」

「マジか、多分ぴっちぴちだよ、その服・・・」

「お前も着たほうがいいって。スーツをもらってきなよ」

「マジで言ってるのかよ！ これ着るためには多分1回ーーーー」

「・・・俺がもらってくるよ。 ちょっと待っててくれ」

「お、おい！ ちょっと待ってて!!」

俺は実夏の言葉を無視してサラリーマンに近づくと、スーツを取ってくるよう進言した。

「えっと・・・これか？」

ケースにはミカと書いてあった。そして俺は「ああ、これだ・・・」
「と言って口をニヤリとさせると、俺はすぐさま実夏のもとへ戻り、ケースを渡した。

「おい、マジで着んのかよ！ 私は恥ずかしくて・・・」

俺はまた実夏の言葉を無視して廊下に向かい、服を脱ぎ始めた。
そのあとで、実夏は俺を追ってきて、着たくない事を進言しようとしたのか、俺に姿を見せたが、俺が服を脱いでる所を見た時、すぐさま部屋の壁越しに移動して、俺に強く言った。

「てめー、1言言ってからそういう事やれよ！ アブねーだろ!!」

「ごめんごめん、俺もちょっとびびったわ・・・」

俺は再びスーツを着始めた。スーツは、かなりと言っていいほどぴちぴちで、下着をスーツの下に着れないほどのきつさだった。

「きつ過ぎ、着かたにコツがあるな・・・」

かなり苦労しながら完璧にスーツを着終わった。

「かなりぴったりだな、なんか俺のために仕立てたみたいだ・・・」

まあ、とりあえず着終わった、実夏に知らせようかな。着終わった事を知らせるべく部屋にもどった。

「おい実夏、着終わったぞ、お前も着替えてこいよ」

「お前さ、上から何か着ろよ・・・」

「ん、まあ、細かい事は気にすんなって、お前も早く着替えてこい」

「これをマジで着るのか・・・、恥ずかしいだろうお前見ててもだけど、そのぴっちぴちぶり・・・」

「お前は上から何か着ればいいじゃん・・・早く行ってこい」

実夏はかなり嫌々廊下に向かって歩いていき、俺に念を押すように言った。

「解ってると思うけどよ、覗くなよ・・・覗いたら殺すから・・・」

「そんな事しねーよ・・・餓鬼じゃないんだから」

実夏は警戒している様だったが、俺は本当に覗かない。だからそんなに警戒しなくてもいいのに・・・。

「おい、君……」

「……はい？」

サラリーマンが俺に寄ってきて質問をしてきた。

「着てみて、なにか変わったような感じはするか？」

「いいえ、特には……」

そう言つとサラリーマンは笑いだし、俺を馬鹿にしたような顔をした。

「はっはっは！やっぱりただの服の様だな！」

「さあ、どうなんすかね……」

みんなが俺を馬鹿にしたような顔で笑い出した。3人の親子については出来る限り子供に見せないように子供を影に隠した。

……まあ、いいさ、この部屋の真実を知っているのは俺だけだし、このスーツを着た俺と実夏は生き残る確率がかなりあがる訳だし……。

俺はみんなにそんな目をされても傷つく事なく、それどころか笑つてみんなに言い返した。

「あなた方は着ないんですか？なにかあってからでは遅いんですよ・
・現に俺達は事があったからここにいるんでしょう……」

そんな事を言ったとしてもみんなの着たくない気持ちが変わると思っ
てはいないが、念のため言っておいた。

「あ！？なんだ！！ここは！！」

サラリーマンの一人の頭が消え始めた。そう、戦地への転送が
始まったのだ・・・。

2話 部屋の黒い球（後書き）

公と気があつた女性の名前は、近澤 実夏（ちかさわ みか）

公と同じ18歳 全日高校生3年

3話 試練考攻

「な・・・今度は消えていくぞ!!」

「きゃーーーー!! なに!?! なんなの!?! 今度はなによ!!!」

「うるせゝよてめゝらはゝゝ」

突然の事にびっくりしたサラリーマンとOLはかなり混乱して叫んでいた、それに対してホームレスは黙るようには大声で罵声をあびせた。もちろん俺はあわてる事無くそれを落ち着いて見ていた。

行っってください。

00:59:51

黒い球に「行っってください」という文字とともに、一時間分の数字が記載された。俺はこれを見て制限時間だろうと思った。

「・・・転送される前に武器を手に入れておかないとだな」

この混乱はチャンスだ。そう思った俺は、黒い球に近づくと、銃器に手を伸ばした。

「おい！触るなと言っただろう！」

サラリーマンが俺の行動に気づいていた、だが今はこんな馬鹿な大人の言葉を聞いている暇など無いので、俺はサラリーマンの言葉を無視して黒い球に収納されている銃器、X型のショットガンを手にとった。

「公と言ったな・・・まだそれは本物かはわからない、今すぐ黒い球にそれを戻すんだ！」

「お断りですよ・・・それに、これは本物です」

「なに！？本物！？それじゃ・・・っう！ここは・・・」

「ラッキー！今のうちに・・・」

運良くサラリーマンが転送され始めた、俺はすぐさま黒い球にあるX型のショットガン2丁とコントローラー1個を手にとった。

「実夏は着替え終わったのかな・・・見に行こうにも行きづらいな・・・」

そんな事を呟きながらも見に行こうか迷っていると自分の転送が開始されていた。

「あ・・・来た・・・転送・・・」

頭が転送先に浮かび出された、そして俺はここがどこなのか、実夏が先に来ていないかを確認した。

「実夏・・・いないか」

すぐ近くには場所を認識するべきものはなかった。しかし、ここは住宅街ということはすぐにわかった。

「まったくここはどこなの・・・」

「外、出れたな・・・帰ろう帰ろう・・・」

先に転送されて来ていた親子とコック服の女、ホームレスは早々に帰り始めた。

「え！？うそ！？ここどこだよ！！」

実夏が大声で出現した。

「外・・・マジ最悪だよ・・・」

ゆっくりと映し出されるその体は全身が黒いスーツで包まれているがその上からは何も羽織っていないかった。

「なんだよ・・・スーツから上、なにも着てないじゃん」

「このスーツを着るのに手間取って着れなかったんだよ！！」

俺は笑いを殺しながら必死に耐えた。

「結構似合ってるよ・・・大丈夫だって・・・」

「関係ねーよ！私は恥ずかしいんだ！」

うん、確かに恥ずかしいだろう事は俺にもよくわかった。スーツによつて胸やら腰がものすごく強調されていたからだ。

「あれ・・・銃を持ってきたんだ・・・サラリーマンが触るなって言つてなかったか？」

「うん・・・隙についてね・・・1丁やるよ」

「お！マジか！サンキュ」

俺はX型のショットガンを実夏に1丁渡した。

「・・・・・・・・！！」

・・・どこからともなく、聞き覚えのあるおっさんくさい声が聞こえた。

「こらゝ君達！待ちなさい！！」

「あちゃーきちやったね・・・」

実夏がめんどくさそうな顔をした。

「勝手にそれに触りおつて・・・それをよこしなさい」

「俺は渡す気はありませんよ・・・なんとか星人を倒しに行けって言われたでしょう」

「星人はいない！日本に限っているはずが無い」

どこからその確信がくるのか知らないが、俺は絶対にこれを渡す気はなかった。

「さっきの部屋に居る時・・・君はそれを本物だとも言ったし・・・」

「どういう事なんだよ・・・公・・・」

めんどくさい、この言葉が心の中に浮かんた。だが、言わないと言わないでさらにめんどくさい事になるだろうと思った俺は正直に伝えることにした。

「この部屋の事を知っていたのは事実だよ・・・」

「!-!」

「でも着たのは今日が始めてだし、ネット上で知ったから・・・確信は・・・だから嘘をついた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

サラリーマンの口が動かなくなった、だいたい話が読めたんだろう。

「と・・・とりあえずその銃器を私によこすんだ・・・私が責任を

持って警察に届ける」

サラリーマンがその発言を見ると、後に残りのサラリーマンと〇しが集まってきた。

「課長・・・なにがあったんですか？外に出れたんですし、早く帰りはしょうよ」

課長の部下、は早く帰る事を進言した・・・だが、残りのサラリーマンと〇しの言葉を無視して課長とやらは俺の顔をじつと見る。そして手をゆつくりと俺に近づけ、早く渡せと言わんばかりの行動をとった。

「言っておきますけど、俺は銃を渡す気はないですよ？」

「なに・・・？」

課長の眉間にしわがより、怒りが俺に伝わってくる。

「あ、そうだ・・・もう一つ言っておきますけど、もう星人との戦闘は始まっています、だからいつか星人と遭遇する事になりますし、殺し合いをする事になります」

俺がそう言うと、サラリーマンも〇しもドヨンと暗い顔を浮かべた。だが、ここで課長が急に笑い始めた。

「はっはっは！星人やら、宇宙人やらなんて、この日本にいる訳ないではないか」

「じゃあ、そう信じていてください・・・実夏、行こうぜ・・・」

「え？お・・・おう・・・」

「おい！こら！待て！！」

これ以上話すのはめんどくさかった俺は実夏と共に星人を探し始めた。

俺はコントローラーを取り出し、いじくって見る。すると地図付のレーダーが表示され、星人の居場所、俺達黒い球の部屋に呼ばれたメンバーの居場所が手に取るようにわかった。

「俺達の近くに敵の反応だ、そろそろ星人が現れる・・・」

「おおい！マジかよ！勝てんのかよ！銃の使い方もわかんねーぞ！」

そういや俺も銃の使い方がわかんなかった、俺はショットガンをしつかりと両手に持ち、調べてみた。

「レントゲンの機能もついてるのか？画面越しだと物が透けて見える・・・」

俺はそのレントゲンを覗きながら、地面に向かって銃口をむけ、銃のトリガーを引いた。

ぐっ カチッ

「?? 何もでない・・・」

「引金が2つあるじゃん・・・これを2つ同時に引くんじゃねーの

「？」

実夏が提案した事に俺は納得し、俺は地面に向かって引金を2つ同時にひいた。

ぐっ ギョーン・・・

発射音だろうか、なにやら不明な音声が響き渡る。

「・・・・・・・・何もでない・・・・・・・・もしかして本物ではないとか？」

その時だった、もの凄い音をたてながら地面が爆発したのだ。

ドドーン！

「うおー!!」

「うそー!!」

驚いた・・・、頑丈なアスファルトが木端微塵に粉碎した。俺と実夏は驚き、銃の恐ろしさを隠しながら小さく笑った。

「ははは・・・・・・・・すげえ・・・・・・・・こんなの・・・・・・・・完璧死ぬだろ・・・・・・・・」

「本当に、本物なの・・・・・・・・かよ」

「ふむ・・・・・・・・そなたら、細いな・・・・・・・・」

「!？」

誰とも知れぬ声に俺と実夏は振り返った。するとそこには黒い球に映しだされた写真と違わない顔のマッチョサピ星人がそこに立っていた。

「星人のおでましか・・・」

「写真で見たときより気持ち悪いな・・・」

「おまえらより私のほうが上腕にとう筋があるの・・・」

「ああ？」

口癖がどうか言ってたな・・・そのまますぎるぜ・・・。とりあえず俺は、手に持っているショットガンを筋肉星人に向けた。

「おい公、本当に撃つのか？あいつ、人間じゃないのか？」

「分からねえ・・・でも、結局は、殺さなきゃいけない・・・」

俺は指に力を込め、マッチョサピ星人に向かってトリガーを引いた。

ギョーン・・・

恐らく当たっただろう、なんとなく確信を持てた一撃。

ババン！！

マツチヨサピ星人の頭が膨らみ、破裂した。周囲には赤に少し黄色のはいった、血が撒き散らされ、肉片が家の塀にくっ付いたりして、グロテスクな景になった。

「う．．．．．！！．．．．．ううう！！」

実夏が耐え切れず、地面に嘔吐する。だが俺は、そんな気配はなかった。理由はわからない、でもなぜか、そんな気配は一切なかった。

マツチヨサピ星人の体はふらつきながら地面に倒れ、首からは血が絶える事なく溢れ出てきていた。

「大丈夫？」

実夏にそんな言葉を掛け、背中を優しくさすった。

「．．．お前はなんで大丈夫なんだよ．．．」

「ん？」

「なんか、気持ち悪くなったりしないのかよ．．．」

「さあ、なんでかな．．．そんな気はまったくくない．．．」

「なんか．．．変わってんな．．．お前．．．」

俺はリーダーを取り出し、残りの星人の居場所を確認した。

「敵は・・・残り2匹なのか？」

リーダーはかなり大雑把に敵味方の居場所を知らせていたが、サラリーマンが居たところに1点、そこから少し離れた所にもう1点があった。

「まずは、サラリーマン達がいる所に戻るか・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「課長、帰らないんですか？」

早く帰りたい部下、なんとか武器を取り上げようとした課長、双方の意見が分かれていた。

「馬鹿者！ あいつらから武器を取り上げないと」

「いいじゃないすか！ 自分達にあれ使った訳じゃないんですから！ ほっときましょう」

「そんな事できるか！ 奴等があれを誰かに使ったら大変な事になるのかも知れんだぞ！」

眉間にしわが寄り、見るからにストレスが溜まっていた。

「きゃ~~~~~!!」

OLの一人がいきなり悲鳴をあげた。

「どうしたのだ!？」

サラリーマンの課長や部下がそれに気づき、すぐさまOLのもとに駆け寄った。するとそこには2体のマッチョサピ星人が腕を組んで立っていた。

「な・・・なんだ・・・奴らは・・・」

マッチョサピ星人は少しずつ距離を縮めてきた。

「課長!ど・・・どうするんですか？」

「ま・・・待て、あわてるな・・・まずは話し合いだ・・・」

1体のマッチョサピ星人が課長の前でピタリと止まった。課長は少々ビビリながらも話しかけ始めた。

「あの・・・」

「お前らより私のほうが上腕にとつ筋があるな・・・」

課長はいきなりの質問に戸惑い、ずっと黙っていた。するとマッチョサピ星人は不快に思ったのか、傲慢であるう右手で素早く課長

の顎を叩いた。

バチャ・・・・・・・・

課長の顎は粉碎し、千切れ、大量の血が噴出し始め、課長はあまりの痛みのため、顎を抑えながら地面に倒れこんだ。

「あああ・・・・があああつあ・・・・」

そしてあまりの痛みのためか、課長は気絶してしまった。そしてその光景を見ていたサラリーマンとOL5人は震えだし、マツチヨサピ星人と逆方向に逃げ始めた。

「む・・・・・・・・」

マツチヨサピ星人はその行動が気に入らなかったのか、2体の星人は5人に襲い始めた。

「ひいひいひい〜〜助けてくれ〜〜」

サラリーマンとOLは全力で逃げるが、簡単にマツチヨサピ星人に追いつかれ、2人のサラリーマンが攻撃を受け絶命する・・・、それを3人は恐怖で泣きながらただただ走り続けた。

「あー！！向こうにさっきの人たちが居ますよ！！」

一人のOLが希望の光を見たかの様な声で言いそこに向かって走り出した、そしてそこには公と実夏が星人目指して走って来ていた。

4話 黒服の狩人

「おい・・・前から来てるのって・・・」

「ああ、星人がサラリーマン達を追いかけてるな・・・」

「公、あいつらをなんとかして助けようぜ！このままじゃ全員奴らに殺されちゃう！！」

「ああ・・・、やれるだけやる・・・」

公は一回ショットガンをコッキングすると、実夏と一緒にマツチヨサピ星人に向けて撃ち始めた。

ギョーンギョーンギョーン

「前を走ってるサラリーマンとOLが邪魔だぜ！当てにくい！」

「接近して撃てば当たるかもしれない・・・」

公は走り出した、そして走ってくるサラリーマンとOLを抜いた後、マツチヨサピ星人と正面对峙した。

「くらいやがれ！」

ギョーン

公が近距離でマッチョサピ星人に撃った・・・が、それは運悪く避けられてしまい、公はマッチョサピ星人にアッパーをくらい、実夏のいる場所まで飛ばされた。

「があ！！」

「あああ！公！」

公は地面に叩きつけられた、それを心配した実夏はすぐさま公に駆け寄り、倒れている公の顔を覗いた。

「おい！公！大丈夫か！？」

「あ・・・ああ、痛く・・・ない」

「は・・・なんで？意味分らない・・・」

実夏はかなりぼかんとした顔をしていた。無理もない、実夏はまだこのスーツの能力を知らないからだ・・・。

「星人は・・・破壊力も素早さもあるけど・・・大丈夫・・・なんとか勝てる」

公は何事もない様に立ち上がった。それを見た実夏やサラリーマン、OLはかなり驚いていた。

公はショットガンを構えた。そして接近してくるマッチョサピ星

人に標準を合わせるとトリガーを引いた。

ギョーン

もちろん星人は公のこの攻撃を避けた。だが、公は例え避けられても落ち着いて対処し、マッチョサピ星人の頭に向かってトリガーを引いた。

ババン！

1体目は頭部に被弾、星人は死に、地面に倒れた。そして公は走りながらショットガンをコッキングすると接近してくる、もう1体のマッチョサピ星人に発射した。

ギョーン ババン！

これは腕に被弾、腕は吹っ飛び、マッチョサピ星人は苦しみ始めた。

「はぁ・・・はぁ・・・よし！」

ショットガンをマッチョサピ星人の頭部に向けた。星人は俺を恨めしげな目で睨んできた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ」

ギョーン・・・

もう1体のマッチョサピ星人の頭部が破裂した。

「よし・・・勝った・・・」

その時、サラリーマンとOLの3人が大声をあげて喜んだ。

「生き残りは・・・サラリーマンが1人、OLが2人か・・・
残りはどこ行っただ？」

俺の近くにいたOLの1人に聞いてみた。

「課長も・・・先輩達も・・・みんな星人にやられました・・・」

「3人家族やコック服のやつもか？」

「え・・・いえ、違います、星人に会う前に皆散らばって帰っちゃいました」

「それは・・・まずいな・・・」

「どうしたんだよ・・・なにがまずいんだよ、公・・・」

俺は少し暗い顔をした後、口を開いた。

「このリーダーを見てくれ、この中に四角く区切られた線があるだろ、俺達はこの中で戦闘しているんだが、ここから出たら殺されるらしい」

『！！！』

みんなが驚いた顔をした。

「だったらこれを早くみんなに知らせねーと!!」

「分かつてる・・・探しに行こう・・・」

「居場所は分かるのか?リーダーには3箇所点があるけどよ」

「敵か味方かは分からない、だから2手に分けて探そう・・・俺チームと実夏チームで・・・」

「私がリーダーなのか!?ちょっと待てよ、男がするべきじゃないのか?」

「いや、スーツを着てる実夏はそこにいるサラリーマンより遥かに強い、だから実夏がリーダーの方がいい・・・」

「ふん・・・、んじゃ私はどの点に向かえばいいんだ?」

「1点は俺達、もう1点は他の人間、そしてもう1点は星人だ・・・」

「運悪きや星人か・・・よし、どっちの点に向かうかは公が決めてくれ、星人にあたってたって文句言わねーから・・・」

「うん・・・じゃあこの一向に動かない点は怪しいから俺が行く、もう1点に行ってくれ」

「おっく」

「実夏、このリーダーを渡しておく、それと相手が星人だった時、

戦おうなんて思っなよ」

「分かってるって・・・」

実夏はそう言つとレーダーを見ながら一目散に走り出し、サラリーマンとOLはそれに付いていく感じになった。俺はそれを数秒見た後、もう1点があつた方向に走り出した。

「確か、あっちだよな・・・」

実夏達が心配だが、今はそんな事気にしている暇はない。

「レーダーだと300m位走つた所に点があつたが・・・」

俺は走りながら周りをよく見渡し、星人を必死に探した。

「ん？」

俺は何かに気づき、足を止めた。

「今、結構早く走つてなかったか？俺・・・」

疑問に思い、俺はまた走り始め、全力を出す。

「おお！！速い！速い！！」

足に力を入れて走ると、足が膨張し、道路のアスファルトを破壊しながら俺はとてつもないスピードで走行していた。

「やばい・・・このスーツすげー」

俺は走りながら調子にのり、おもいきり腕に力を籠めた。

キユイイイイイイ・・・・メリメリメリ・・・・

スーツが機能している効果音と共に腕が膨張始めた。俺は試しにすぐ近くにある標識の鉄棒に手を合わせ、手に力を籠めた。すると鈍く、捻じ曲がる音と共に鉄棒を握りしめる事ができた。

「すっげ・・・・防御に優れてるだけでなく筋力強化もあるのか・・・・万能だな・・・・」

このスーツの魅力に俺は惚れながらも、目的というものを思い出した。

「やべ・・・・行かねーと・・・・」

俺は再び走り出し、星人を探し始めた。

「そろそろ300m位走ったと思うんだが・・・・星人が見当たらないな・・・・」

星人の姿、居そうな場所、気配すら感じ取れなかった。

「ちょっと・・・・どうするのよ!」

どこからか声が聞こえた、俺は耳を澄ませ、その会話が聞こえる場所に向かった。

「あなたどうする？あの人死んじやったわ！」

「なんでだ？死因が・・・」

「ママゝ変な音楽が聞こえなくなったよ」

「とにかく、もうここから先には行かないほうがいいのかも・・・」

公は3人の親子とコック服を着た女性を見つける事ができた。そしてその4人がいるその先には、部屋にいたホームレスだろうか、頭がない状態で倒れていた。

「部屋にいた奴ら・・・」

俺はその時、急に体が震えだし、嫌な予感がした。

「実夏達、星人のいる場所に向かつてる・・・やばいぞ」

「あれ・・・貴方は、あの部屋にいた人・・・」

コック服の女が俺にそう言った。だが、俺は返事せずその言葉を無視して4人に忠告をした。

「あんたら、そっから先行ったらあのホームレスみたいになるから行くなよ・・・」

「え・・・あ・・・はい・・・」

「あと、そっから動くなよ!!」

俺はそう言々とすぐさま実夏達の方に向かって走り出した。

[illegible]

実夏は一刻も早く、部屋にいた人達を見つけるべく、全力疾走で住宅街を走り抜けていた。

「そろそろか？なんかウロチョロ動いてっけど・・・」

遙か後ろからは3人が追いかけてくるが、実夏はそれを無視して先に走っていた。

「リーダーが大雑把すぎるぜ……この辺りのはずなんだけどな……」

実夏は小さな工場の前に足を止めた。

「この中だよな……うん、この工場の中にいる」

実夏は工場の建物の大きな扉を開けて中に入り、すぐさま人を探し始めた。

「こんなところに人がいるのか……？いるとは思えなーな……」

「人・・・一人の・・・ここに来た・・・」

「!!! この声・・・星人!？」

実夏はすぐさまショットガンを両手に持ち、声のした方向に向いた。するとそこにはさっきのマッチョサピ星人よりさらに大きいマッチョサピ星人がいた。

「お前より私の方が上腕にとう筋あるな・・・」

大マッチョサピ星人は笑みを浮かべ、腕を数回振り廻すとリズムをとるように戦闘モードに入った。

「・・・・こいつが親玉か・・・」

と、その時、追いついてきた3人が工場内に入ってきた。

「いましたか?」

「お・・・お前ら!こっち来んな!星人がいる!!」

実夏が大声でそう言った。すると3人は驚いたのか、すぐさま工場から出て行った。

「仕様がねえ・・・やるか・・・」

実夏がショットガンをコッキングし、大マッチョサピ星人に向けた。

「いける！」

ギョーン

実夏がショットガンを撃った。だが、大マッチョサピ星人はそれを軽々しく避けると、一気に実夏との距離を縮めた。

「は・・・早い!!」

大マッチョサピ星人が実夏の腹部を思い切り殴った。そして実夏は吹っ飛び、工場の壁を突き破ると工場の敷地外まで吹っ飛んだ。

「くはっ!!くっそ・・・って痛くない・・・」

実夏は痛くない事を不思議に思いながらも、体を起こした。

「ガアアアアアアア!!」

ダン!!!!

大マッチョサピ星人が空高くジャンプし、吹っ飛んだ実夏の近くに着地した。そして実夏に近寄ると、腕を大きく上げるとその手を実夏に叩きつけた。

ドン!!

実夏は地面にめり込んだ。

「くっそ・・・なんだよ・・・」

実夏は立ち上がった走り出そうとした。だが大マツチヨサピ星人がそれをさせるはずもなく、またも上げた腕を実夏に下ろした。

ドン！！

実夏は再び地面に叩きつけられると、大マツチヨサピ星人はさらに実夏に攻撃を加えた。

ドン！ドン！ドン！ドン！

実夏は大マツチヨサピ星人に殴られるたびに地面にめり込んでいき、実夏は必死にその攻撃に耐えた。

「くっそ！やられっぱなしは、気に・・・くわねえ！」

実夏は倒れた状態から一瞬の隙について星人の頬を殴った。すると、大マツチヨサピ星人は後ろに体制を崩し、殴られた頬を押さえた。実夏はその隙に素早く立ち上がると、星人と距離をとり、ショットガンを向けた。

「はぁ・・・はぁ・・・、よくもやってくれたな！」

実夏はショットガンを星人に連射し始めた。

ギョーン　ギョーン　ギョーン

だが、星人はそれを次々に避けていった。

「あたれっ！！！」

実夏はさらにショットガンを撃ちまくる。

ギョーン ギョーン ギョーン ギョーン……

左肩に被弾、星人の動きが止まった。実夏は大マツチヨサピ星人にすぐさまとどめを刺そうとした、だが、星人はまたも速く動き出すと実夏との距離が大幅に縮んだ、そして大マツチヨサピ星人は右腕で実夏の腹部をおもいきり殴り、空高く飛ばした。

そして吹っ飛んだ実夏は工場近くの家の屋根に叩きつけられた。

「うう……強いけど……まだ……」

キュウウウウ……

「な……なんだ!？」

実夏は自分が着ているスーツになにか異変が起きた事に気づいた。

「なんだよ……この液体……なんなんだ……」

どうやら実夏が着ているスーツに複数付いてる端末らしき物が壊れ、ドロツとした液体が流れでてきていた。

実夏は手に持っているショットガンがズシリと重たくなるなつた事に気づいた時、直感でスーツが壊れたと察知した。

「壊れたのか……?なら……かなりやばい……」

ダン！！！！

大マツチヨサピ星人が実夏の乗っている屋根の上に着地した。

「やべ．．．やばいぞ．．．」

実夏はあまりの恐ろしさに動けなかった。

その時だった、大マツチヨサピ星人に向かって公が飛び蹴りをくらわせたのである。大マツチヨサピ星人は屋根の上から吹っ飛び、道路にたたきつけられた。

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．実夏、無事か．．．」

「あ．．．ああ．．．なんとか．．．」

実夏は涙目になって公を見上げた。

「よく．．．ここだって分かったな．．．」

「お前が屋根の上から．．．いなかったら俺は気づいてなかったかもしれない．．．」

「は．．．ありがと．．．」

「ウガアアアア！！！！！！」

道路から大マツチヨサピ星人の叫びが聞こえた。

「んじゃ・・・行ってくる」

公は屋根から大マツチヨサピ星人の所に向かって飛んだ。そしてショットガンを両手で構えると、空中から星人に射撃した。

ギョーン ギョーン ギョーン

公は数回撃つと地面に着地した。すると公の攻撃が当たっていたのか、大マツチヨサピ星人の右手、右足に被弾、星人はバランスをとる事が出来ず、地面に倒れこんだ。

「ふう・・・・・・・・最後だ」

俺は大マツチヨサピ星人の頭部にショットガンを向けるとトリガーを引いた。

ギョーン・・・・・・・・

ババン！！

頭部が破裂すると、大マツチヨサピ星人は身動きしなくなり、動くことはなかった。

4話 黒服の狩人（後書き）

勝手にリーダーの性能を決めてしまいました。ご了承ください・・・。

5話 黒球の探点

「はぁ．．．はぁ．．．終わったのか？．．．．．転送は？」

そう思いながら待機していると、自分の転送が開始されていた。

ジジジジジ．．．．．

「お．．．．あの部屋だ．．．．」

黒い球の部屋の景色が映し出されていく、そして一番最初に俺の目に入ったのは、実夏の顔だった。

「よう．．．．お帰り．．．．」

「おう．．．．」

実夏に返事をした後、俺は部屋を見回してみると、サラリーマン1人、OL2人、親子3人、シェフ1人、実夏と俺2人、計9人が部屋にいた。

「課長は？課長が帰ってきていないですよ？」

OLの1人が俺に尋ねてきた。

「ここに帰ってこれるのは生きてる人間だけなんだ……」

「そんな……」

チーン

それでは採点をはじめ

変な効果音と共に黒い球にはそう映った。

「なんだよ、採点って……」

「星人倒した分だけ、黒い球から得点が貰えるらしい、今からそれを採点……」

「ふん……」

スウ……

黒い球に写真、名前、得点などが映し出された。

チキンサラリ

0てん TOTAL0てん

女おいてにげすぎ

「これ、俺・・・なんですか・・・」

「確かに私達置いて逃げすぎですよ・・・」

おゝえる A

0てん TOTAL0てん

星人にビビリすぎて逃げすぎ

「この絵って、私・・・」

おゝえる B

0てん TOTAL0てん

一回戦ってみましょう

「・・・・・・・・・・」

シェフ（ミナライ）

0てん TOTAL0てん

悩んでないでなんかしろ

「何様のつもり・・・？」

おつかさん

0てん TOTAL0てん

キョウイクをしっかりと！

おっとさん

0てん TOTAL0てん

つかえん、しっかり！

ドコモ（笑）

0てん TOTAL0てん

タタカイマシヨウ

ペチャパイ

0てん TOTAL0てん

ぴんちになって涙ナガシスギ

「この絵は実夏だよな……」

「ペチャパイって……すげーム力つく……」

こうちゃん

16てん TOTAL16てん

あと84てんで終わり

「お……16てん!」

「おお……公すげーな……って、あと84てんで終わりってなんだ?」

「うーん、やっぱり100いった時点でなんかあるんじゃないかな・
・・・・」

「わっかんねーのか・・・まあ、しょうがないか・・・」

黒い球の画面が消えた。

「黒い球の画面が消えたけど、これからどうなるんだ？」

「もう自由のはずだよ・・・だから、玄関が開くのかな・・・？」

公がそう発言すると、みんなの顔がぱあと明るくなり、急いで玄関に向かって行った。

「公、お前は帰らないのかよ・・・」

「ああ、俺はもうちょっとこの部屋を調べたいから・・・」

俺はとりあえず、近くにあるドアを開けようとした。

「公、そのドアは開けられないぞ・・・・・」

「どれかが開くはず・・・・・」

俺は黒い球の後ろにある開くか分からないドアを開けてみた。

ガチャ・・・・・

「開いた!!」

「マジで！そこは私が開けようとしたけど触れられなかった所なんだぜ」

「なんか、黒い球が開いた時に、このドアも開くらしいんだ」

俺と実夏はドアの開いた部屋に入った。するとそこには、一輪のデカイバイク2台に、刀の柄の部分だけが地面に数個放置されていた。

「すげ．．．．一輪バイクじゃん」

実夏がバイクに乗っているいろいろいじり始めた。俺は柄を拾って調べてみた。

「ボタンが2つ．．．」

片方のボタンを押してみた、すると柄からは立派な刃が出てきて、確りとした「刀」になった。

「すっげ．．．刀．．．」

俺は刀の刃を数分観察したらもう1つのボタンを押して刃をしまい、それを持って部屋から出て行った。

「帰るのか．．．．？」

実夏がバイクから降りて、俺の後をついてきた。そして俺は玄関に向かうと、服を着始めた。そして俺は着終わると黒い球のある部屋に戻ると、実夏が廊下で着替え終わるのを待った。

そして数分後、実夏が部屋に戻ってきて着終わった事を知ると、早々に実夏と一緒に玄関に向かい、外に出た。

「おお！外だ外だ！自由だ〜！」

外にでるや実夏が大声でそう叫んだ。

「おい・・・近所迷惑だぞ・・・」

「いいんだよ、私達は自由になったんだから！」

「まあ、今は自由だけど・・・な・・・」

「うん？　どどういう意味だよ・・・」

「一カ月後か、一週間後か、またあの部屋に呼ばれるんだ」

「マジかよ・・・じゃあ皆に教えておけばよかったじゃん・・・」

「どちらにしたって強制召集されるし・・・変わんないと思うよ・・・」

そう言つと俺は歩き出し、帰還する事にした。

そういえば今気づいたが、俺達が今まで居た部屋は高層マンションの一室らしい。だから部屋に居た時、テラスからはなんかの大きな建物が見えたし・・・。

とりあえず、俺はマンションの一階に降りると、土地名がはつきりとわかった。

「さいたま市か・・・じゃあ、あの大きな建物はさいたま新都心ビル・・・・・・・・」

「さいたま市！？それマジかよ！くっそ〜やべ〜」

実夏が悲しそうな声をあげながら地面に膝をついた、俺は何事かとそれをただ見ていた。

「時間も時間だし、帰る電車賃・・・絶対母さんに怒られる・・・最悪・・・最悪だよチクショウ・・・」

・・・ん？喋り方からして、ちょっとした不良娘かと思ったのに、意外と・・・いや、・・・まあ、とりあえず可哀想だな・・・それしか思えなかった。

「実夏さ・・・歩いて帰ればいいじゃん」

「金の無駄使いより、夜遅くに家帰る方が怖いっつーの」

「ああ〜なるほどね、母に勘違いされる可能性があるな」

実夏の顔がぱあっと明るくなる。そして俺は1000円を彼女に渡した。

「まあ・・・とりあえず、帰りますか・・・、公ばいばい」

実夏は諦めるように財布を取り出すと、金を数えながら駅に向かっていった。

「実夏・・・可哀そうに、俺が給料日前じゃなかったら貸してあげられたのに」

俺は眠る際に着ていた服から財布を出していなかったなので、運良く財布はあった。なので、俺も駅に向かうと電車に乗った。

そして俺は電車に揺られながらふと思った事があった。

・・・そう、今さっきまで殺し合いしてたんだよな・・・うん、それが今だと嘘のような感じだ・・・。

なんとなく平和のありがたさを実感しながらも、故郷の駅に到着した。そして電車から降りると、いつも歩いている地元の道が広がった。そして俺は自分のアパートを目指した。

「はあ・・・眠むい・・・帰ったら寝るかな」

眠たさに目を擦りながらもゆっくり歩いていると、どこからか煙が流れてきて、それを吸った俺は咳きこんだ。

「ゴホッ！ゴホッ！なんだ！煙臭い・・・」

帰る道を進むたびに煙は増していき、自分のアパートに着いたときには、眠気は吹っ飛び、目を疑った。

「なんで、アパートが燃えてんの？」

消防車が1台止まっていて、燃えるアパートに向かって水を大量

に噴射している。だが、それは効かないかのようにアパートはさらに火を増していつていた。俺はただ、ボーゼンとアパートを見ているしかなかった。

「・・・・・・・・!!」

どこから聞き覚えのある、懐かしい声が自分の耳にとどいた。俺はフリ向き、顔をキョロキョロさせていると、どのくらい会っていないだろうか、懐かしき母がそこに立っていた。

「母さん・・・・・・・・」

俺は思わず、声に出してそう言った。すると母さんは俺のほうに向かって走り出し、力強く俺を抱きしめた。

「え・・・・・・・・ちょ・・・・・・・・ちょっと・・・・・・・・」

俺はちよつといきなりな事で少々戸惑いつつも、泣いて喜んでいる母さんを見て、俺は言葉がでなくなり、それどころか俺の頬にも涙が流れていた。

「アパートが火事って聞いて・・・・・・・・よかった・・・・・・・・よかった・・・・・・・・!!」

久しぶりの感覚だった・・・・・・・・欲しい感覚だった・・・・・・・・生きてる事に、幸せを感じる瞬間だった・・・・・・・・。

5話

黒球の探点（後書き）

公は母に愛されています。

6話

望んだ世界（前書き）

暖かい目で見てやってくだせえ・・・。

6話 望んだ世界

ジリリリリ・・・

「うゝるゝせゝゝ・・・」

リリリ・・・バシッ

中学生の頃、散々世話になったもの凄くうるさい目覚まし時計で俺は無理やり目を覚まされた。そして俺は起き上がってベッドの上で座った状態になると、「はぁ・・・」と息をついた後、俺は小さく笑った。

そう、帰ってきたのだ、親の暮らす家に。

昨日、母に抱きつかれた後、俺は親の住む実家に帰った。そして玄関の敷居をまたぐと、家族全員が速やかに不安な顔で集まってきた。そして俺を見て無事を確認すると皆は笑顔になり、暖かく俺をむかい入れてくれた。

俺は家族と少し一緒にいたら、疲れている事を知らせ、2階の自分の部屋のベッドで寝た・・・。

「……………今、すげー幸せ……………だよな……………俺」

あまりにも嬉しかったのか、目からは涙が溢れだし、最高に気分が清々しかった。でも、そんな自分には、もう必要としない現実が瞳に映った。

「黒い機械の服と刀……………」

今の自分はすごく幸せだ。でも、考えてみれば昨日俺は死んで、生き返って、意味不明な星人と戦い、殺し、喜んだ。

……………殺さねば殺されるとゆう理由で……………。

それに、昨日の俺は考えてみると残酷な事したよな、人が死んでもなんとも思えなかったし、星人を殺す事を当たり前くらいに思っ
てしまっていた。

……………そうになると、なんとなく自分が怖く思えた。またあの部屋
に行ったら自分はああ思ってしまうのだろうか……………。

「……………んん……………やめよう……………考えすぎだな」

俺はとりあえず立ち階段を降りて一階に行くと、風呂に入るために洗面所に向かった。

そして洗面所前で服を脱いでいると、母さんが廊下を通った。

「あら、公おはよう。お風呂入るの？お湯沸かしてないけど……………」

たまたま通りかかった母さんが笑みで挨拶をしてきた。

「いいよ・・・シャワーで済ませるから・・・」

そう言つと俺はさっそく風呂に入り、湯を満喫した。

30分位入った後、俺はリビングに向かい、家族共同のPCを起動させ、黒い球の部屋のホームページを開き、更新されているかを確認したが、やはり昨日と同じでネギ星人編が最後で更新はされていないかった。

そして俺はなんとなく思った、このページを運営している人はやつぱりこの黒い球の部屋の住人なんだろうかと、ネギ星人編の次の戦いでどうしたのかと・・・。

考えて答えが出る事ではないというのはよく分かっていた。だが、知りたいのが正直な気持ちだし、誰でもそう思うと思う。

「あ・・・時間がない、会社に行かないと」

気づけば時間は7時を上回っていた。俺は急いで母によって準備された朝食を食べると、勤めてる会社に行くための準備を始めた。

「公、ご飯はゆっくり食べなさい・・・、でも遅刻しちゃうから早く食べちゃいなさい」

・・・母がなにやら矛盾を堂々とはき、俺を急がせた。

そして俺は自分の部屋に戻ると、何を思ったか服の下の黒いスーツ着た、そして鞆の中に刀を入れると早々に家をでた。

30分自転車で走ると職場に着く。そして8時になって仕事が始まると、今まで辛く背負って運んでいた荷物が嘘の様に軽かった。きっと発泡スチロールより軽いかもしれないな。

余裕に午前の仕事が終わると昼休みなり、俺は疲れてない身体を休息させた。なんだか癖になりそうな感覚だ。

昼飯を適当に食べるて社会の先輩と話をする、すぐに仕事が始まった。

「うん・・・マジ余裕～～」って思えばすでに仕事は終わっていた。楽しい時間は短いものだ・・・。

社会の先輩たちに挨拶をすると、早々に会社をでて、家に帰宅した。

「ただいま・・・」

「おかえりなさい」

家に着くと、母さんが俺を優しく迎えてくれた。

「これから学校？」

「うん、早く行かないと遅刻だよ・・・」

そう言つとすぐさま準備を始めた。

鞆に筆箱と教科書、ノートを追加してそれで終わり、俺は家を出た。

家からどのくらい自転車ではしるだろうか・・・？、30分後にはいつも通っている学校に着いた。

駐輪場に自転車を止め、教室に向かった。その時だった、なんの運命か、黒い球の部屋で出会った実夏と駐輪場出入り口で会った。

「あ・・・・・・・・」

「あ・・・黒い球の部屋の・・・こ・・・公！昨日ぶり！」

まさかの出会いで言葉をだそうもだせない俺・・・。

「お前この学校の生徒なのか！」

「ああ、そうけど・・・」

「定時制か」

「ああそうだよ、これから授業がある」

「だよな〜定時制だもんな〜、私はこれからバイトよ!!」

なにやらバイトをするという事を誇らしげに言っているが、俺もさつき仕事を終えてって・・・いや、なにも言うまい・・・。

「昨日私、無駄使いしたじゃん？そしたら母に怒られてさ・・・、
バイトしろって・・・」

バイト・・・、母の怒り、・・・生活苦か？学費が大変なのか？。

「じゃあ、公も勉強頑張つてな～あばよ～～」

出会ったと思えば、バイトですぐに行ってしまった。もうちょつと黒い球について話したかったけどな・・・。

それから俺は教室に入ると、すぐに授業が始まった。

だが、先生の話俺はまったく聞かなかった、聞く必要がない。
習つてゐる所が小学生レベルつてもあるけど、それより、なにより
黒い球の事を考えていたからだ。

考えてゐる事は単純で、次部屋によばれてたとき、どのような星
人がでてくるんだろうとか、どのように戦うかとか、チームワーク、
武器、頭の中でシュミレーションを練った。

星人との戦闘では先手必勝に超したことはないな、相手が本気を
出す前に殺る・・・。そして常に、全力で星人に立ち向かい、時に
は退き、隙があれば一気に叩く。だが、敵に隙は与えてはいけな
い。だろ？、嫌でも隙はできてしまふだろうけど、できる限りは・・・
絶対に作らない。

存在を知られる前に・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

．．．．．キーン コーン カーン コーン

「!？」

あれ．．．？授業．．．終わった．．．？1時限、終わりか．．．
．．。

．．．．みんな帰り始めてる．．．え？、マジッ！？学校終わ
った!？

時計を見ると9時になっていた。

「おおー川和ー考え事の結論でたー？」

クラスの1人の女子が俺に問いかけてきた。そして俺が考え事を
してる事が何気にばれていた．．。

「全然．．．結論は実戦がないと」

「何々？実戦って？もしかしてあっちの方向で妄想でもしてたの
？」

「あっちの方向？妄想？．．．ああ、下はないな．．．．」

「つまないねー、彼女でもできたのかと思ったー」

「できたらいいな．．．」

「おお！じゃあ私が彼女になってあげるよ！」

「お前彼氏いんだろーが・・・」

「冗談通じないねーそこは笑って、マジ！？って言うところでしょう」

「はは・・・空気よめなくてすみません」

そう言うと、俺は席を立ち、帰宅をし始めた。

そして校門を通ろうとしたら、誰かが立っている事に気づいた、暗い中よく見えなかったので、通り過ぎようとしたら「おい！」と、大声で呼ばれた。

「その声は、実夏か？」

「そうだよ・・・普通スルーするか？」

「見えなかったし・・・ってか、バイトは？」

「んなもん一時間前に終わったよ！」

「ふーん・・・で？なんでここにいるの？」

「察せよ・・・お前待ってたんだろーが・・・」

「なんだ・・・おい、萌えるじゃねーか・・・、・・・でなんか聞きたい事か、話したいことがあるのか？」

「ああ、黒い球の部屋についてなんだけどな、公はその黒い球の部屋の事をネットで知ったって言ってたよな、だけど私じゃ見つけれなくてな……教えてもらおうと……」

「ふうん……いいよ、家来る？」

「え……いいのか？こんな夜遅くに行つて……親とか、迷惑じゃないか？」

「定時制は人によるかもしれないけど、夜遊ぶのが普通なんだよ、ちよつとただけだけど……親は大丈夫」

「ふうん……じゃあ、お邪魔しようかな……」

俺と実夏はそれぞれ自転車に乗り、俺の家に向かった。

会話がほとんど無い中家に着くと、実夏を家に入れた。親はかなり驚いていた、まあ無理もない、女子を家に入れるのは初めてだからだ。

俺の部屋に実夏をいれ、リビングから移動させたPCをカチカチとパソコンをいじり始めた、実夏はなにか珍しそうに部屋をきよろきよろと見渡していた。

「なんか……地味な部屋だな」もうちよつとカラフルにした方がいいんじゃない？」

「まあ、この部屋いたの中学生までだったしな」

「ん？一人暮らしとか・・・してたのか？」

「うん、高校になってから一人暮らししてたけど、ほら、俺死んだじゃん？死因が火事だったんだよ・・・それで昨日から自宅住み」

「ふうん・・・火事の原因は？」

「知らない・・・、でも寝てるうちに死んだ」

「いくら寝てるからって煙で咳き込めば目は覚めるんじゃないか？」

「でも記憶がないからな・・・ってか、そんな事追求したって意味ないだろ・・・それより、黒い球の部屋のサイト見るんだろ？」

「あ・・・そうだった」

実夏が微かに笑いながら俺の方に近寄ってきてPC画面を見た。

「これだよ・・・」

黒い球の部屋

このページの内容は自分の体験した事実のみを記すものである

一切のフィクション・虚言・妄想は含まれていない

その部屋には黒い球があった

「すげ．．．．．私たちの体験した事と同じ事してんな．．．」

「だろ、俺は部屋に行く前、このサイトを見たから生き残れた様なものだな」

「ふーん．．．、じゃあ部屋に居た人の誰かが部屋の事知ってたりするのかな？」

「それはないと思うよ．．．あの人中であの部屋で生きていける様なオーラツつか技術持つてる奴はいないと思う」

「経験者はいないって事か．．．じゃあこのサイトの運営者は死んだって事になるな．．．」

「うん、そうだろうな．．．いや、それが部屋から解放されたか．．．」

「解放？なにかやれば解放されんの？」

「うん、今朝このサイトを見て調べたら、ミッション後の採点で100点を取ると3つの選択肢の1つ選ぶと言われるんだ、その一

「つが解放」

「解放・・・他には？」

「3つ、1が解放・・・」

2が新しい武器・・・

3がメモリーの中から1人再生・・・らしいな」

「ふん・・・」

「俺は2番が魅力的だな・・・、解放と引き換えなんだからそれに強い武器が手に入るんだろう・・・」

「え・・・マジで言ってるの？私はそれだけはないって思った・・・」

・・・改めて純粋なんだな・・・そう思った。

「・・・2番は捨てがたいって・・・、より強力な武器が手に入れば、勝機も増えるし、なにより人を守る事だってできる・・・」

「・・・そうだけどなくやっぱり解放が私的には1番が魅力的だな・・・本来死んだ私を生き返らしてくれて、100点とれば解放してくれるんだぜ？」

「まあ・・・そうだよな」

俺は心で笑った。なんか、そういう考えもあるんだなって感じに・

・・。

生き返らしてくれて・・・か・・・。

「まあ、そうだな・・・。」

実夏の発言に納得した。そして今の俺の発言がまったく聞こえていなかったのか、実夏はサイトを見ることに熱中していた。

「なあ、なあ・・・こいつ・・・珍しい名前してるよな・・・。」

「ん？」

画面を見ながら実夏がなにかを指さした。

「クロノ・・・ケイ・・・スーツの重要性に気づき・・・カトウ・
・マサル・・・偽善者・・・キシモト・・・。」

「クロノ・・・ケイ・・・か・・・うん、こいつは確かに変わった名前だな・・・。」

だが、もしかしたら死んだのかもしれない・・・、部屋にそれらしき人が居なかったし。

それから実夏はサイトの日記を読み始めた。俺は小説を取り出して読み始め、チラリとたまに実夏を見たりしていた・・・。意識すると言うやつだ、1部屋に男女1人づつ、実夏は可愛いし・・・普通は意識するなという方が無理なんだ・・・。

そして時間はどのくらい経っただろうか、時計をみると「10時30分」になっていた。まだまだサイトの小説に夢中な実夏に俺は帰った方がいいのではないかと心配し、声をかけた。

「おい、もう10時半だぞ、帰らなくていいのか？」

「うん・・・待って・・・今いい所なんだよ・・・」

「・・・おい・・・、親に怒られないのか・・・？」

「怒られるよ・・・でもできる限り知識がほしいからな・・・死と隣り合わせだし・・・」

「家でもパソコンできるんじゃないのか？」

「学校でテスト近いからパソコン禁止令がでてるんだよ・・・だからここで溜め込むしか・・・」

「・・・そうなんだ・・・」

「・・・納得をした、まあいいか・・・」

結局サイトを読み終わったのは11時30分だった。実夏は俺に帰ると言うと、帰る準備を始めた。もちろん俺は実夏を家まで送ることにし、暗い夜道を実夏と二人で歩きはじめた。

俺は昼間の仕事と夜の学校でかなり眠く、いたる所であくびをしながら歩いた。その時、実夏が俺に話をかけてきた。

「次のミッションも生き残りたいよね．．．」

「ああ．．．次生き残れるか分からないしね．．．」

「できるだけ協力して、みんなと生き残って自由になる．．．夢みたいなお話だけど、それは叶えたいよね．．．」

うん、その通りだ、１００点を取ったら２番を選びたい、そんな俺もいるけど、実際は１番を選びたいんだ、家族と平和に過ごす日々、黒い球がそれを叶えてくれたがそれは完璧じゃない。

黒い球から解放されたとき、その時が自分の本当に望んだ世界なんだ。

7話 召集の時

実夏が俺の部屋のパソコンで黒い球の部屋のサイトを観覧した日から1週間が経とうとしていた。

俺はと言うと、いつもと変わらない普通の日常をひたすらにすごしていた。そしていつか召集する、黒い球に少なからず脅えながらも、楽しみにしながらもすごしていた。

そういえば最近、テレビで変わったニュースがやっていた、羅鼎院という寺院で謎の崩壊があったらしい。テロと騒がれているが、原因はわからないみたいだ・・・。

まあ、そんな事はどうでもいい事だが・・・、俺は今、学校の喫煙所でみんなと世間話やら、流行なんたらかんたらをだらだらと話している。

もちろん俺はタバコを吸わないが、喫煙所にはとにかく人が集まる、1限目の始まる前とか休み時間は絶対に人がいる、いない方がおかしいくらいだ。

かと言って本来俺は喫煙所でたむろって話す方ではなく教室で本をよんでいる方が好きだ、だが、そこにいるのには理由がある。

簡単に言えば、教室に行く必要がないからだ、なぜなら今日は身体測定で体育館に向かうのだけれど、喫煙所は体育館に近いからそ

ここに待機しているのだ。

身体測定は体育館とグラウンドで決行される。俺はまず屋内からやろうと思ひ、わざわざそこに居るのだ。

しばらくすると、先生が体育館の鍵を開け、俺は入場し、身体測定の握力検査を始めた。

測定不可能・・・

面白半分でスーツを着たまま（もちろんみんなには内緒で）測定をしたら、計りきれなかった。と言うか本気で力をいれたら握力計を握り潰せそうだった。

そして俺は屋内だとこれ以上記録が異常な結果にできるやつはない気がしたので、さっそうとグラウンドでやっている測定をやりに行った。すると外では50m走、ボール投げ、幅跳び、持久走が行われていた。

50m走ではタイム5秒（軽く走って）をたたきだし、全生徒の注目をあびた。もちろん他の競技でも軽くやっただけでこの学校の新記録になった。幅跳びは気をつけないと3m飛んでしまいそうだし、ボール投げは力めばボールを持つてゐる感覚がないしで逆に抑えるのが大変だった。学校の先生からは将来競技選手になれると興奮しながら言われたが、全力でそれを断った。

そして次は持久走。

これもスーツの力があれば新記録は出せそうだけど、なんとなく自分の中で持久走だけは真剣にやりたいという思いがあった。なので先生に「ちょっとトイレ」と言うと、喫煙所近くの個室トイレに入ってスーツを脱ごうとした。

ゾクゾクツ．．．．．

「!？」

．．．なんだ、さっきの寒気は．．．。

いきなり俺の首筋に寒気が走った。俺は黒い球に関連している事かもしれないと思い、俺はすぐさま個室トイレからでて喫煙所近くに置いてある鞆を手にとった。

ピキンッ！

「な．．．んだ．．．身体が動かねえ．．．」

ジジジジジジ．．．．．

今までいた学校の喫煙所の景色が消え始め、消えたと思えば違う景色、黒い球のある景色へと変わった。

「あ……お久しぶりです……」

前のミツシヨンで助けたOL、黒い球が言うにOLAが俺に挨拶をしてきた。

そして俺は黒い球の部屋に転送された事を理解した。

部屋には実夏と家族3人組以外はすでに揃っていた。俺は実夏を待つためにテラス側まで歩き、腰をおろすとさっきのOLAが俺の方に近づいてきて話をかけてきた。

「あの……前は助けていただいてありがとうございます……」

「……いや、べつに……」

このOLAは比較的美人だったため、俺は頬を赤くしながら言い返した。

「お名前、教えてもらっていいですか？」

「……名前？……名前は川和 公」

「私の名前は北町^{きたまち} 愛^{あい}です、この前はお礼を言えず、すみませんでした」

「べつにいいですよ……その分点数もらいましたし……」

俺の発言に少しキョトンとしながらも、許しを得た事が喜ばしかったのか、笑顔で俺を見ていた。そしてその笑顔視線に少し萌えて

いる間に実夏が転送されてきた。

「おう、公久しぶり！」

「よう実夏ひさしぶり・・・」

「実夏さんって言うんですか、お久しぶりです・・・それとこの間私を援護してくれてありがとうございました」

「え・・・いや、べつにいいですよ！」

実夏が突然のお礼に焦って言い返した。

さーいたまはるゆたかーなところー
でもいがいとなにもないー
でもいがいとーなにかあるー

黒い球から絶対誰も聞いた事がないような歌が流れ始めた。

「あれ？ 3人家族が出てこないぞ・・・」

「口外したのか・・・」

実夏と俺は知識を知っている分暗くなった。

「新しい人は・・・来ないのか・・・」

「経験者のみでのミッションってか」

実夏がそう言った数秒後に星人の写真と共に情報が映った。

あなたは今から
この方をやっつけに行ってください

つる花星人

特徴

長い弦

お花

好きな物

ミツバチ 雌しべ

特技

蔓をノばす

ヒカル事

写真を見ると、花の付いたつるが塊になって人の形になっている状態で映っていた。

「つる花星人、今度は植物が相手なのか・・・」

「みんなで協力して勝とうぜ・・・」

黒い球の扉が3箇所を開かれ、武器とケースが姿をみせた。

皆は前回の事もあり、進んでケースに手をのばし、各個人廊下で着替え始めた。

俺は黒い球のある部屋で服だけを脱ぎ、黒服だけの状態になった。そしてみんなが着替えてる間に黒い球からX型ショットガンを手に持ち、元から持っていた「刀」の柄を左足ホルスターに付け、レーダーを腕につけて準備を終わらせた。

皆がスーツを着終わり、なれぬ手で武器を取り始めた。

俺以外はみんな小刻みに震えていた。無理もない、俺は前の戦闘で少しなれたけど、皆は初心者・・・十分なくらい素人だ。

「俺が先頭に立って戦わなきゃいけないんだよな・・・」

みんなが準備できたか周りを見回すと、実夏が黒い球の近くにある部屋（刀やバイクが置いてある部屋）に入っていくのが見えた、ので俺は吸い込まれるように部屋に入った。

するとそこには、バイクの運転席に座った実夏と後部座席には愛さんが座っていた。

「乗ってればこのバイク、戦闘で使えるんだろ？」

実夏が俺に質問をしてきた。

「・・・使えなきゃ置いてある意味がないだろ」

後部座席からクスクスと愛さんの笑い声が聞こえてくる。

ジジジジジ・・・

「・・・転送が始まったぞ!!」

俺は大きな声をあげてみんなに知らせると、みんなは緊張した様な顔になって続々と転送されていった。そして数分後、俺の転送が開始され始め、黒い球の部屋の景色が変わり、住宅街に転送された。

「ここは・・・?」

「電柱に載ってるだろ、ここは・・・秩父市だな!」

「なるほど・・・どうりで周りが山だらけな訳だ・・・」

俺はリーダーを取り出し、敵の位置を調べてみた。するとここから200m位の放れた山林の中に1点反応があった。

「ここから走ればすぐだな、敵は数匹でかたまってるか、1体しかないのか・・・どちらかな」

「1体だったらいけどな」

「そつだな・・・、すぐに終わらせよう・・・」

全員まとめて行動を開始を始めた。バイクに乗って運転している実夏と後部席に乗っている愛さんはゆっくりと走行し、足で走っている俺、サラリーマン、OLB、女シェフはバイクについていきながら星人を目指した。

住宅街から離れ森林の中に進入すると、公は大声で皆に叫んだ。

「気をぬくな！先制攻撃されるかも知れない事を頭に入れてよく見分けて行動しろ！」

・・・敵の位置が近い、が・・・夜で光がないから見通しが利かないな・・・戦いにくいだろう・・・。

「おい！まだ星人が見えねーけどまだ着かないのか？」

実夏がそう言う俺はリーダーで確かめてみた。

「敵にかなり接近してるはずだ！周りをよく見て確かめてくれ！」
みんなが周りを見渡し始めた。周りは完全に緑の木々に囲まれていた。

「あれ・・・？」

女シェフが何かに気づいたのか、小言で皆に知らせた。

「その・・・近くにいるの違うんですか・・・？」

シェフ女が指をさした方向をみんなが振り向いた。

するとそこには黒い球に映っていたつる花星人の写真とまったく同じの小さな蔓の塊、花のたくさん付いた人型生物がそこにいた。

「・・・こいつがつる花星人か？」

俺は手に持っているショットガンを星人に向けた。すると少しだが反応があり、腕の部分のつるがうねうねと動き始めた。

攻撃される前に、そう思った公はつる花星人に向かってトリガーを引いた。

ギョーン・・・・・・・・

胸腹部に銃の光線が反射する。

・・・・・・・・ババン！！

タイムラグでつる花星人の身体が粉々に吹っ飛んだ。

「・・・・・・・・倒した・・・、これで終わりか？」

そう思った時だった、ザワザワと木々が強く風に揺れる様な音と共に俺たちのいる周りの木々が発光し始め、昼間の様に明るくなった。

「眩しッ・・・なんなんだ！」

「やべーぞ！公！囲まれてるー！！」

俺達を囲んでいるつる花星人の発光はさらに段々と強くなっていき、敵味方がどこに居るのかわからないくらいの明るさになった。

「くっそ！なにも見えねえ！！なんなんだ！これ！」

実夏が混乱し始め、みんなも敵に襲われるかもしれないという恐怖から混乱し始めた。

「公！！どうしたらいいんだ！！」

「全員おちつけ！！これは蒸発現象だ！！それぞれで光の外に出ろ！！」

ヒューイイイイイイイイ・・・

・・・バイクの発車音が聴こえた、実夏はバイクで強行突破し始めたか・・・。

俺も光でよく見えない中必死に目を凝らした。だが、敵に襲われるかもしれないという恐怖心は俺も皆と同じだったので、1人誰か分からぬ腕を掴むと、足に思い切り力を籠めて空高くジャンプして、つる花星人を飛び越えようとした。

「誰！？私の腕掴むのはってきやあああああつあああ
！！！！」

空高くジャンプしたことにより、女の叫び声が大きく上がった。そして俺は声はだしてはならないものの、あまりにも高くジャンプしてしまったので内心着地に失敗したら死ぬのではないかと心配だったが地面に近づくと靴からはなにか空氣的なものが噴出され、自分に

負担がないまま着地に成功した。

「はぁ・・・死ぬかと思いました・・・・・・・・」

「はぁ・・・俺も同じだ・・・」

どうやら俺が腕を掴んでいたのは女シェフとゆう事がわかった。そして俺は振り向き、さっきまでいたつる花星人の方向をみた。すると明らかに10、15mは超えるであろう巨大なつる花星人が、直視して見れないほど強く発光していた。

そして俺の心の中には不安がただよってきていた。

誰かが心配とかそういうのではない、はたして自分が生き残れるのか・・・それが一番の不安だった。だってそうだと、あんなデカイ敵・・・前のミッションとは明らかに違うスケール・・・今の装備で・・・勝てるのか？

「・・・・・・・・勝たなきゃ・・・・・・・・いけないんだよな・・・・・・・・」

7話 召集の時（後書き）

公にお礼を言った女性

北町 愛 （きたまち あい）

??歳 OL、どうかのID企業につとめてる・・・

8話

迫る数に挑む力（前書き）

意味の分からない所があったら知らせてください。直します。

8話 迫る数に挑む力

ヒュイイイイイイイイイイ．．．．．

「愛さん！大丈夫っ？落ちてないよね？」

「は．．．はい！大丈夫ですよ！つかりと座れてます！！」

「そっか．．．．．よかった．．．．．さっきは明るすぎて乗ってるか不安だったんだよね．．．」

実夏と愛の乗った一輪バイクは森林をぬけきり、住宅街を走行していた。

「どうする？今から引き返して、遠目から狙撃するっ？光ってるから目立つし」

「はっ．．．はい！銃術に自信はないですけど、いいと思います．．．」

「んじゃ〜決まりだな！Ｕターンするから落ちないでね！」

そう言つと実夏は左へ一輪バイクの車体を倒し、勢いよくＵターンすると見事１８０ 後ろを向いた。

「ふう．．．、にしても公は大丈夫なのか．．．？生きてるよな．．

・・・」

実夏はそう不安げに走行していると、前からなにかが来るのに気がついた。

「なにか来るぞ!!」

実夏はバイクを停止させ、降りるとショットガンを構え始めた。

「せ・・・星人ですか?」

「ああ、光ながら近寄ってくる・・・」

愛はバイクから降りて、敵を確認した。するとそこにはさつき公が倒した人型で花が沢山ついているつる花星人20体以上がこちらに向かってゆっくりと近づいてきていた。

「・・・・・・・・光ってるからのにしやすいな・・・速攻でいくぞ!!」

「は・・・・・・・・はい!!」

愛さんが返事をする、2人同時に銃を星人に向かって連射し始めた。

ギョーン ギョーン ギョーン ギョーン

実夏達が撃ち始めるとつる花星人は走り出して襲ってきた。

ババンッ ババンッ!!

タイムラグで4匹が破裂した。だがそれでもつる花星人は怯む事無く突撃してきた。

実夏は更に連射の速度を上げ、近づいてくるつる花星人を撃った。

「余裕余裕ゝあんまり強くないよこいつら!!」

実夏はそう言つと愛さんの方を向いた。すると愛さんは刀でつる花星人を一体つつ切り刻んでいた。

「は…………やるじゃん…………剣道でもやってたんか？」

「…………高校生の頃ちよつと…………補欠ですし…………まったく強くないんですけど…………」

「いやいや…………その位できれば十分強いって」

「は…………ありがとうございます…………」

そんな感じで会話をしているうちに、つる花星人は全滅していた。実夏と愛は目が合うと、2人同時に微かに笑った。

……

「あなたの…………名前は？」

女シェフが俺にそう言ってきた。俺は自分の名前を言っと、「あなたは？」と聞き返した。

「あたしは真美^{まみ}……よろしく……。それとさっき助けてくれてありがとね」

「いや……べつに……。それより、お前戦えるか？俺は今からもどって奴らと戦ってみようと思ってるんだけど……」

「あんなデカイのと戦うつもりなの？無理でしょう、それよりまず仲間と合流するのが先じゃないかな？」

「そのデカイのがいる所に2人いるんだ、それに仲間と合流してもみんなが戦えるか分からない……」

「……女ばかりですからね……。じゃああたしだけ仲間と合流します」

「そうか、わかった……。じゃあこれを持っていっていいぞ……」

俺はリーダーを女シェフ……。真美に渡した。

「使い方わかるか？」

「いじくつてれば大体はわかるでしょう……。ありがと」

そう言つと真美はリーダーを見ながら住宅街に向かって走り出した。

俺はそれを見届けると、あの巨大つる花星人の所に向かって走り出した。ショットガンを片手に刀を取り出すとそれを2m位の長さまで伸ばした。

「さつきほどは光ってない、できる・・・」

巨大つる花星人の少し離れた場所で足を止め、ショットガンを数回撃った。

ギョーンギョーンギョーン

巨大つる花星人のつるの一部破裂し、長いつるが地面に大きな音をたてて倒れていった。

そうすると、つる花星人は俺の存在に気づき、長いつる数本を俺に向かって伸ばしてきた。俺はショットガンを地面に置くと刀を両手にしっかりと持ち、正面から伸びてくる1本目のつるを右に避けると刀を上には振り上げ、つるを切り捨てた。

するとすぐさま次の2本目のつるが左から伸びてきた。俺は上げていた刀を振り下ろし2本目のつるを切り離すとまたも次の3、4本目が俺を襲ってきた。

「本体を見るとまだつるが何十本もあるな・・・つけ根いくか」

俺は前に向かって転がるように3、4本目のつるを避け、つるが伸びているつけ根に向かって走り出した。

走り進んでいると3、4本目の他のつるまで伸びてきて俺を襲い始めた。それをうまく避け、避けきれないと思えば切り捨て、少しずつ前へと進んだ。

「そろそろいけるか……」

そう言うのと刀を後ろに回し伸ばし始めた。そして10m位に伸ばすと左から右え回すようにつる花星人のつけ根を斬りつけた。

太さ的には3mはあるだろう、だがそんな太さなど意味のないかのように刀が通過すると何十本もあるつるが地面に倒れていった。

ズズズン……

「ふう……よし、倒せた……」

そう言う俺は一休みしながら2人を探し始めた。すると人型のつる花星人数十体が向かってきて、斬られた巨大つる花星人のつけ根を乗り越えて向かって来た。

「……小さいのだったら何匹いようと同じだ……」

刀を両手に持ち直し、構え、敵の動きを待った。するとつる花星人の動きが急に早くなり、俺に向かって襲い始めた。俺は向かってきたつる花星人を振り返り討ちにするために刀を振り始めた。

……

ヒュイイイイイイイイ・・・

「公はどの辺にいそう？」

「公さんかどうかは分かりませんが1点がこちらに向かって来ます」
バイクに乗って実夏と愛は公を探していた。

「この道の・・・すぐその曲り角付近で停止しました・・・」

街灯が道を照らしていたために道はかなり見通しがよく、レーダーに反応のある曲り角からは少しながら影が出ていた。

「敵かな？・・・とりあえずバイク降りるか・・・」

実夏は道路の端にバイクを停止させると、ショットガンを構えて曲り角に接近した。と、その時、曲り角から急に真美がX型小銃を実夏に向けて出現した。

実夏・真美『あれ！？』

声を合わせてそう言うのと、双方は銃口を下ろした。

「なんだ・・・えっと・・・シェフの方・・・・・・無事だったか・・・」

「なんですか・・・シェフの方って・・・、あたしは真美です・・・

それと、見つけられてよかった・・・それで全員ですか？」

「・・・2人しかないけど・・・、公は？公にあったりとかしてないのか？」

「さっきまで一緒だったんですけど、星人のいる場所に残ってる2人を助けに行きました」

「そっか・・・じゃあすぐに向かおう！ 真美さん、公の所まで案内お願いします！！」

「はい、いいですけど・・・あたしもバイクに乗せてもらえませんか？ さっきまで走ってたんで疲れちゃって・・・」

「2人乗りバイクだから・・・運転席に2人乗ってみるか・・・？」

実夏はそう言った後バイクに乗ると、前につめて、重なって座るよう真美に言い、座らせると実夏はすぐにバイクを発進させた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「はあ・・・はあ・・・ふう、人型の奴はこれで全部か？」

全部で何体いたのか、地面がつるだらけになるくらいつる花星人の死体で埋め尽くされていた。

「巨大つる花星人は残り2体か？ 囲まれていた時は3本あったしな．．．」

周りを見回してみると、それらしきまとまったつるが2体いたが、まずは別れた2人の生死を確かめようと俺は移動し始めた。

「囲まれていた場所にはいないのか．．．脱出したのか？」

グググググッ．．．．．

巨大つる花星人が俺の存在に気づいたのか、つるを俺の方に伸ばしてきた。

「くるか．．．」

俺は正面から向かって来たつるを避け、刀で切りつけ始めた。

そして1体が気づくともう1体も気づき、俺に向かってつるを伸ばし始めた。

「2体はちよつと苦戦しそうだな．．．」

公は2体の巨大つる花星人の攻撃を避けつづけた。だが、避けるのに必死で反撃は一切できなかった。

バシッ！ バシッ！

「はあはあ・・・」

さっきの戦闘の疲れがまだ残っていたためか、つる花星人の攻撃があたり始めた。公はスーツの耐久力を気にしながら必死に疲れを抑え、避け続けた。

「くっそ・・・、やっぱり捨て身が必要なのか・・・」

このまま避け続けていても、いつかは疲れが限界に達し、巨大つる花星人の攻撃をもろに受けるだろう事を考え、捨て身をするかどうか考えていた。

どうする・・・やるか・・・やるしかないか・・・2、3回攻撃くらっても大丈夫だよ・・・大丈夫なはずだ。

俺はスーツにダメージをくらう事を恐れつつも、捨て身の覚悟で反撃する事にした。

俺はまず、両足をしっかりと地面に密着させ、刀を伸ばし、思い切り振ろうと腕に力を入れた。腕が膨張し始め、スーツからの効果音が響き渡る。

キウイイイイイイイイイ・・・ミキミキミキ・・・

避ける動作を見せずにいるため、巨大つる花星人の攻撃を正面から数発受け始めた。だが、その攻撃に怯む事無く耐え、異様に膨ら

んだ腕の拳が握っている刀を俺に攻撃するつるに向かって思い切り振った。

その一撃でつるの半分が切り落とされた。俺は勢いに乗り、さらに刀を振り続けた。振り続けていたら数秒で残りのつるも斬り終えていた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・あとは・・・本体だけだ!!」

最後の力を振り絞り、太いつるの本体を斬りつけた。

ズザザザンッ!!

ズズズ・・・ザザアアアン・・・

・

太いつるが地面に倒れる音が響き渡った。そして俺は今、巨大つる花星人をすべて倒した。

「ふう・・・ふう・・・ふう・・・終わったか・・・」

長く伸びた刀を短くし1.2mの長さにし、その場で休憩を始めた。

「転送・・・・・・・・・・転送は・・・・・・・・・・まだなのか・・・?」

その場で数分立ち尽くしたが、一向に転送が始まる気配はなかった。

「つる花星人がまだうろついてるって事もありえるか・・・」

その可能性を考え、俺はゆっくり歩きながら辺りをキョロキョロ見回した。だが、星人の姿はまったくなかった。

「レーダーがないから探しようがないな……」

俺は動いても意味ないだろうと思い、つる花星人の死体が大量に転がった広場の中央で休息を取り始めた。

グリユ……グリユ……ギユリュ……

「なんだ？ この音は？」

なにか大きな生物が動くような音が俺の周りに響いた。

「なんだ……何かいるのか……!?」

俺は不安になり、その場から離れようとした。がその時、公の周り四方から巨大つる花星人に匹敵するほどの太く長いつる……いや、真つ白な根が姿を現した。

「根！？ 星人が土の中にいたのか……!?」

公は刀を構え始めた。そして四方の根が一斉に公めがけて襲いかかる。公はすぐさま足に力を入れると、ジャンプしてそれを避けた。

そして落ち着いて空高くから1本の根を斬ろうと公は刀を振り下ろした。だが、それは根の素早い動きで避けられてしまった。

「くっ！さっきのつるより速いな・・・」

再び根が公めがけて伸びてきた。公は伸びてきた根を転がって避けた。そうして避けた後、刀を下から振り上げて根に攻撃をした。だが、それはまたも避けられてしまう。

公は再び避け続ける事になった。

地面からは次々に根が生えてきて公を襲い始める。そうなるともう反撃はできなかった。

「だめだ・・・速すぎるし・・・多すぎる・・・」

心の中で捨て身を何度も考える、だがそれは無駄に終わる可能性が高いためにできなかった。

またも疲れが身体を襲い始め、公の避ける動きが段々と遅くなっていた。

バシッ・・・

「ああ！！」

持っていた刀を根に弾き飛ばされしまった、公の心の中に焦りが見え始めた。

そして公は心の中で脱出を試みる。少しずつ、少しずつその場から離れようと根の攻撃を避けながら移動を始めた。

だが、根が俺の脱出を妨害し、思うように脱出ができなかった。そして、さすがにもう体力が限界に達していた身体は、もう足も手も小刻みに震えだすくらいになっていた。

「はぁ！はぁ！はぁ！くっそ！もう・・・だめだ！！」

そう言ったとき、公の背後から根が伸びてきて公を捕らえた。一本の根に捕まると他の根も公に向かって伸び始め、身動きができない状況になってしまった。

圧縮され始め、スーツの耐える効果音が響き渡る。

キユイイイイイイ・・・

「くっう！くそ・・・くそ・・・ッ」

スーツを着ていても、効果を発揮しても脱出できない、その時、俺の心の中にかつてない恐怖が襲い始めた。

きつと怖いんだ、死ぬのが・・・とてつもなく・・・。

涙目になりながら必死に周りに叫んで助けを求めようにも、それは夢のような話だった。

「嫌だ！嫌だ！！誰か！！誰か助けてくれ！！！！」

8話 迫る数に挑む力（後書き）

公が助けた女性、女シェフ

森田 真美（もりた まみ）

19歳 パティシエの見習い

9話

女奮闘記

愛さんがレーダーを見ながら敵の位置を把握している。

「点が3点に分かれてます、・・・1点が私たちで・・・他の2点の恐らくどちらかが公さんでしょう」

「でも、愛さんの同僚って事もありえるんじゃないのか？」

実夏が言い返した。

「そうだといいんですけど・・・その希望は薄って感じだと私は思います・・・」

「・・・まあ、とりあえず星人のいる森林広場以外にある点に向かってみよう」

実夏がそう言うつと愛は実夏に道を教え始めた。

「森林広場以外でしたら、近くに1点あります・・・その道まがった所の・・・どこか家の庭ですね」

実夏はそれを聞くと、バイクを止めた。

「ここから歩いていこう、いつでも戦闘できるようにしといてね・
」

愛と真美は頷いてバイクから降りた。そして愛が刀をもって先頭を歩き、その後ろを実夏がショットガンを構えて歩き、一番後ろの真美はリーダーを見ながら、指示をだしながら前進していった。

「実夏さん、愛さん、そろそろ点が一致します・・・恐らく、その家に」

真美がいたって普通の家、一軒家を見上げた。そして一致すると聞いて先頭にいる愛は一段と気を引き締めた。

「どうしますか？・・・塀が高いので邪魔で中が見えないです・・・

」

「星人の可能性もあるしな・・・向かいの家の屋根に私が乗る、そっから指示ですから」

実夏が足に力を溜め、向かいの一軒家にジャンプした。

そして家の屋根に着地すると、目的の一軒家をみた。

「あれは・・・愛さんの同僚のサラリーマンとOLじゃん・・・」

少し実夏は安心した。そして愛達に味方と知らせようとした時、実夏の乗っている屋根が急に爆発し始めた。

ドン！ ドドン！！

実夏は爆発の破片で姿が隠れる状態になった。それを見ていた愛と真美は何か異変が起きた事を理解した。

「実夏さん！　なにがあつたんですか！？」

下から心配の声が上がる、だが実夏さえもなにが起こってるのかは不明だったのになにも言い返せなかった。

「なんだ！？　なにが起こつたんだッ！！」

すると、誰かが塀を越え実夏のいる屋根に飛んでいき、持っている刀で実夏にそれを振り下ろした。

バシッ！！！！

実夏はそれに気づいてはいたが、混乱状態だったので避ける事はできなかった。そして攻撃直撃後、実夏は顔を上げて刀を振り下ろした者を見上げた。

「……………あんたか……………なんのつもりだよ……………」

見上げたそこには、部屋にいた名の知らないサラリーマンが立っていた。

「殺すつもりだよ……………」

「殺すって……………なんで……………」

「なんで？決まってるだろ……お前らだけ逃げて……置いていかれた俺らは、星人の餌食だ……。俺がさつき居た家の庭を見ってみろ、なにがあると思う？」

サラリーマンが指を庭に指した。実夏は向けられた指を辿っていると、そこには口から血を垂らしているOLが寝転がっていた。遠くから見ても分かる、身体の変形具合、きつと内臓はボロボロだろう。微かに息をしてるように見えるが、そう長くは絶対に持たないだろう。

「分かるか……？もうすぐあいつは死ぬ……きつと5分も持たない……。だから俺は決めたんだ……。お前らを殺してやるって……あいつと同じ状況にしてやるって……」

サラリーマンの目からは涙が流れてきていた。なんとなくだが女への想いが伝わってくる。そして持つてる刀を実夏に向けた。

「待つて！その今向ける刀を私に向けるより、星人に向けた方がいい……。そうすれば部屋に戻ったとき、5体満足の状態になってあの人は……」

一瞬サラリーマンが驚きの顔を見せた。だが、すぐ何かに気づいたのか、実夏に質問をしてきた。

「でも……。死んだら戻ってこれないんだろ……。五体どころか……。命さえも……」

実夏はそれに関して言い返せなかった、だが、他で言える事はあった。

「たとえ・・・たとえ死んだとしても、生き返らせることができる、あの黒い球で100点を取れば、生き返らせることが・・・」

「・・・星人を倒した分だけ・・・だろ？無理だよ・・・あの星人には勝てない・・・星人から逃げるとき、それが嫌でもわかったよ・・・」

「なんでだよ・・・正面から戦ってみなきゃ分かんないだろ！」

「いや、分かる・・・だって奴らの本体は絶対に地中だし・・・」

「本体が、地中？それが分かっているなら・・・」

「無理だね・・・無理無理・・・2次元でそこにいるのが分かっても、3次元じゃ分からない・・・どのくらいの深さにいるんだ？この銃で殺せるのか？俺が考えるに絶対無理だな・・・」

「・・・あなたが無理と思っても、できる奴がいるかもしれない・・・」

「はっ！あの男か！？あのモヤシ野郎か！？それかそこにいる女共か！？」

「誰とか・・・個人じゃない・・・みんな・・・皆だよ・・・協力すれば・・・絶対にできる・・・」

「協力・・・？無理だね・・・、協力どころか足手まといだよお前ら・・・」

「・・・それでもいい、私はみんなと協力する、なにもしない

で諦めて、足手まといだから諦めて・・・そんなのは嫌だ・・・」

「ははは！ー！じゃあ、それを見せてみるよ、俺相手でさ・・・」

「！ー！ー！」

サラリーマンは手に持っていた刀で実夏を斬りつけた。だが、実夏はそれを予想していたのか、ジャンプして避けた。

実夏は愛や真美のいる道路に着地すると、すぐさま今の状況を説明した。

「愛さん、真美さん！あのサラリーマンと戦闘します！気をつけて！ー！」

愛と真美さんはもう分かっているかのように、銃や刀を構え始めた。

空からサラリーマンが刀を振り下ろしてきた。皆はそれを避けると、すぐさま攻勢に乗り出した。

愛が刀でサラリーマンの首に向かって刀を振るった、サラリーマンはその攻撃を刀でガードをすると身体を愛に接近させ、斬りつけようとした。だが、愛は刀の柄でサラリーマンを押し殴り、それをさせなかった。

「はっ・・・！くっそ・・・なんだ・・・てめえ・・・同僚だから同情してくれんのかと思ったのにな・・・」

「今の現状を理解していただかない限り、それはできません・・・」

ドン！！ ドン！！

サラリーマンの足元が爆発し始めた。屋根の上に乗った実夏が狙撃をしていたのだ。

「くっそ！！ くっそ！！」

サラリーマンが右往左往して攻撃を避けながら狙撃主を探し始めた。だが見つかるはずもなかった、実夏は事前にレーダーを調べており、姿を消して（ステルスモード）いたのだ。

耐え切れず、サラリーマンは闘争を始め、戦っていた1本道を全力で走り始めた。

「はぁ・・・くっそ！ここで死んでたまつかよ！」

速く走ってるサラリーマンに追いつくことができなかった3人は、遠くから狙撃を始めた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・！」

サラリーマンは道を曲がり、旨く狙撃から回避した。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・くっそ！！あとで・・・あとでやり返しに・・・覚えてろ・・・くそ・・・」

サラリーマンは3人の追撃を恐れ、ただただ走り続けた。

その時だった、ある道を1本曲がったとき、車が接近している事

に気づいた。サラリーマンはそれを避けようとしたが、その時には遅かった、車は容赦なくサラリーマンに突撃してきた。

バン！！

鈍い音が響いた、だが、サラリーマンは車に轢かれても無傷だった。

「いって・・・痛くないな・・・ってスーツ着てるしな・・・」

キュウウウウウ・・・

「あ！？　なんだ！？」

スーツから液体が流れ始めた。それと同時に身体からは力が抜けるような感じがした。

「あ・・・・・・？」

実夏の狙撃と車に轢かれた事により、スーツが壊れたのだ。

実夏がリーダーを見ながらサラリーマンの近くに着地した。それに驚いたサラリーマンはすぐに実夏に武器を向けようとした。

「はあ・・・ああ・・・武器が・・・ない・・・くそ・・・」

さつき車に轢かれた時に落としたのか、武器がなくなっていた。

実夏がサラリーマンにショットガンを向けた。するとサラリーマンは額から汗が流れ始めたが、あくまで平然を装った。

「・・・はあ・・・それで俺を殺すのか？人殺しになるぞ・・・」

「1つ約束すれば、私はあなたを殺しません」

「はっ・・・なんだよ・・・約束って・・・」

「あなたの辛い気持ちは理解します、ですがあなたの行動は理解できません、だからもう近寄らないでください」

「近寄るな・・・が約束か・・・いいだろう・・・してやるよ・・・」

実夏は銃口を下ろすと、背を向けサラリーマンから離れていった。

「はっ！誰が守るかよ・・・んな約束・・・」

サラリーマンは立ち上がると実夏とは逆方向に歩き出した。

ピンポロパンポン・・・ピンポロパンポン・・・ピンポロパンポン・・・

「あ？　なんだ？」

いきなり流れ始めた音楽に少々疑問に思いながらもサラリーマンは前進し続けた。

「どんどん大きくなる・・・うるせえな・・・」

そしてある見えない1線を超えた。

「いい加減にしろよ・・・ほんとうるせえ・・・」

バン！！！！

爆発音と共に周囲に血しぶきと肉片が飛び散った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「藤本さん^{ふじもと}・・・どうしたんですか？」

愛が戻ってきた実夏に対してそう尋ねた。

「藤本・・・？さっきのサラリーマンの事が・・・約束を引き換えに、許したよ・・・」

「そうですか・・・それはよかった・・・」

愛は胸を撫で下ろした。さすがに人殺しは嫌なようだ。

「んじゃ、そろそろ公のいる場所にいかないとな・・・」

「そうですね・・・公さんは恐らく今も星人と1人で戦っているでしょうし・・・」

3人の女達はバイクに乗り、公の元に走り出した。

9話 女奮闘記（後書き）

サラリーマン

藤本 琢也（ふじもと たくや）

??歳 実夏と同じ職場

OLBに好意を抱いてた。

10話

崩れる勇気（前書き）

10話行きました。読んでくれる方々、ありがとうございます。

では、これからも俺の小説を温かい目で見てやってください。。。

10話

崩れる勇気

キユイイイイイイ．．．．．ミキミキ．．．ミキ．．．

スーツの耐える音と共に、公がなんとか脱出しようとする叫びが響き渡っていた。

「ううう．．．くそっ！くそ！やばい！！」

ミキミキミキ．．．．．

公のスーツが根の圧縮に対して更なる力をだそうとして、膨張していった。それと同時に根の圧縮が強まる。

ブチッ．．．ブチブチ．．．ブチッ．．．

なにかの千切れるような音が聞こえた。公は一瞬自分の身体に何かあったのと思ったが、そうではなく根が千切れたしている音だった。だからと言って根の圧縮に勝っているという状況にはならなかった。

「．．．．．勝てる．．．のか．．．？」

公は最後の力を振り絞り、さらに身体に力を籠めて脱出を試みた。

その時、急に根は圧縮する力を緩め、公は根から解放された。そして公は解放されると共に一目散に走り出し、落ちている刀を拾い、根から距離をとった。

「はぁ！はぁ！はぁ！ここからだ届かないか・・・」

公は更に距離をとると刀をホルスターにしまうと、ショットガンを拾い、遠くから根に発砲した。

ギョーンギョーンギョーン

遠くからの発砲により根は次々に破裂し、地面に倒れていった。もちろん根は数回避ける動作を見せたが、それは意味無く終わった。

ヒュイイイイイイ・・・

・・・どこからか、バイクの走る音が聞こえてくる・・・実夏達
が来たのか・・・？。

振り返ると、明らかに無理してバイクに乗っている実夏、愛、真
美さんを見て、少し吹きそうになった。

バイクが公の前に止まると実夏はバイクから降り、公に声をかけ
た。

「よっ！・・・星人はあと、どれくらいいるんだ？」

「さぁ・・・どのくらいとかは・・・多分１体かも・・・地中に・・・

・1体か・・・」

「地中か・・・藤本さん・・・も言ってたな・・・」

「どうやって倒したらいいと思う？」

「遠くから地中に向かって狙撃するか、なんとか進んで近距離で地中を撃破するか、どちらかで倒すのはどうですか？」

愛さんが提案をした。

「近距離戦はかなり危ない・・・知らないだろうけど、根はつるより早く動く事ができるし・・・、まだ地中には根が数本はいるだろう・・・」

「・・・じゃあ・・・遠距離からの狙撃しかないですね・・・」

「それが無難ってか・・・」

それぞれが銃を取り出し、星人のいるであろう地中に向かって銃口を向けた。

「銃にスキャン（透視）できる機能があるから、それで地面を覗いてみる」

4人は銃のスキャン画面を覗いて星人を探した。

「どうだ？みえるか？」

「地中に障害物がありますが、見えないことはありません」

「地中深くにはいねーな・・・地上と近いぜ・・・」

「じゃあ、いけるな・・・」

公は銃のトリガーを引いた。

ギョーン・・・

ドドン！

地面が爆発し、土が飛び散った。

「・・・なんだ・・・土を優先したのか？ 星人に当たらない」

「ロックオンしたら当たるかもしれない、みんな！ロックオンしろ
！！」

実夏が大声でみんなに言い、4人はロックオンを開始した。

と、その時だった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

「・・・何ですか・・・？ 地震・・・!？」

「スキャンで見てみる・・・根が地中を進んできてる・・・」

ボコンッ・・・

「!？」

公の足が膝あたりまで地中に沈んだ。

「やばいぞ!!ここにいたら星人の餌食だ!!移動しろ!」

公がそう言うのと、皆は移動を始めた。だが、公は地面に足が埋まって動けずにいた。

「足が・・・足が抜けないッ」

必死に足を動かしたり、力んで抜こうとするが、全く抜ける気配はなかった。それどころか公は地中に埋もれていった。

公は何か足に巻きついていてる事に気づくと、ショットガンを地中に向けて発射した。

ギョーンギョーンギョーン ドン!!ドドン!!!!

足に巻きついていてる根には当たらずに地面が爆発し、土が飛び散った。すると公はさらに地中に引きずり込まれ、腰まで地中に埋まり、焦りの汗が流れ始めた。

「実夏さん 公さんが危ないです、助けに行かないと!!」

実夏達3人は公から少し離れた場所にいた。そして愛さんは実夏にそう言った。

「バイクで助けに行ってくる」

実夏はすぐさまバイクに乗ると、発進させ公の元に走り出した。

ヒュイイイイイイイイイ・・・・

「くっ、うう・・・・くそ・・・・」

公は胸元まで地中に埋まっていたが、諦めずに脱出しようとしていた。

「公！！掴まれ！！」

実夏がバイクに乗りながら公に手を差し伸べた。それに気づいた公は迷う事無く実夏の手を握った。それと同時に実夏はアクセルを回し、バイクを加速させて公を引っ張りだそうとした。

ギュルルルルル・・・・

抜けない公にバイクのタイヤが滑り出した。でも、なんとか沈むのは停止した。

ドン！！ドン！！

遠くから愛や真美が地中に向かって狙撃を始めた。だが、公を捕まえている根には当たらずに土ばかりが破裂した。

ボコンッ！

バイクが地面に沈み始め、実夏にも焦りの汗が流れ始めた。

「見えました・・・」

公と実夏が焦るなか、愛と真美は落ち着いて地面を打ち続け、ついに地中で公の足に絡まつて根を出現させた。

「公さんを撃たないように・・・根を・・・」

ギョーンギョーン

愛が小さく呟きながらX型小銃のトリガーをひく。

ギョーンギョーンギョーン

ドン！ドン！ドン！ドン！

ドン！！

威力がショットガンと比べれば小さいものの、確実に根にダメージを与え続けていた。

ヒューイイイイイ！！！！

バイクが急前進し始めた、根が破壊され束縛が解けたからだ。公は実夏によってひっぱり出され、バイクで走る所まで走った。

「よかった・・・公さんが解放されました」

愛は真美にそう伝えると胸を撫で下ろした。

「愛さん・・・」

「はい？」

愛がホットした直後に真美は愛を呼んだ。

「・・・なんですか？」

「この銃の性能なんですが、ここに回せるつまみがあります・・・
これで破裂させる距離を調整できるかも知れませんよ」

「これですか？」

愛は銃に付いているつまみを回し、スキャン画面を覗いてみた。
すると、さっきまで映っていたものとは違う画面になっていて、直
に地中にいる根の本体の球根が見えた。

「・・・球根が見えます、・・・勝てるかも・・・」

「あたしも見えました・・・これでトリガーを引けば・・・」

愛と真美は迷う事無くトリガーを引いた。

ギョーンギョーンギョーンギョーンギョーンギョーン
・・・

「終わって、終わってください!!」

「終われ・・・終われ・・・!!」

遠目から公と実夏が成功を祈ってそれを見守っていた。

愛と真美は撃つのを止め、しばらく様子を見始めた。そしてちょっとしたタイムラグ後、地中で爆発する様な振動が伝わった。と、その時またもさっきと同じような地震が始まった。あまりの震えにより、実夏が乗っているバイクが倒れそうになった。

「なんだ・・・苦しんでるのか？」

公がそう言った後、多少震えが収まると公達と愛達を挟んだ真ん中に数本の根が出現した。公は心で（来るか・・・）と思いながら手に持つてるショットガンを根に向けた。

「ん・・・あ！！なんだ!？」

根が出現した直後に球根が地中から出ようと土を盛り上げていた。そして根がまたも数本出現した後に本体、球根が出現した。その球根は家一軒に匹敵する太さで、大きさだった。

震えながらも公はすかさずトリガーを引き、球根を攻撃した。そして公が攻撃を始めると続くように実夏、愛、真美が銃で攻撃を始めた。

ギョーンギョーンギョーンギョーン・・・

球根は俺達の攻撃を根で防ぎはするが、反撃の動きはなかった。なのでここぞとばかりに銃を連射した。

バババン！！バババン！！ババン！！

タイムラグで爆発し始め、根が地面に倒れ始めた。俺達は撃つのをやめる事無く星人を撃ち続けた。

地面からまたも根が出現した、だが怯む事無く打ち続けた結果に根はすぐに倒すことができ、球根への攻撃をし始めることができた。

そして俺達の連射で球根の半分が粉々に吹っ飛んだ。

「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・終わったのか？」

公が呟いた。

「転送は・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・」

公と違う場所にいる愛はリーダーを取り出し、画面をみた。

「まだ、星人は死んでない様ですね・・・・・・・・・・反応があります・・・・・・・・・・」

「ここまでされてまだ・・・・・・・・・・死んでない・・・・・・・・・・」

ポコン！！

「！！！！！！！！」

急に地面が沈下し、愛がその沈下した穴に沈むように落ちた。すると落ちたと同時に地中壁から数本の細い根が出現し、落ちた愛を襲い始めた。

「きゃっ！・・・きゃあああああ！！！！」

根が愛の手足に巻きつき、4方にひっぱりだした。

「あ！！やつやばいです！！」

真美が大声でそう叫んだ。そして近くにいた真美は迷う事無く銃を根に向けて発射し始めた。

ギョーンギョーンギョーン・・・

キユイイイイイ・・・

愛のスーツの耐える音が響き渡る。真美は泣きながら必死に諦めずに根に連射を続ける。だが、その努力は虚しく、愛は根に包まれ、姿は見えなくなった。

「あ・・・ああ・・・愛さん・・・」

微かに聞こえるスーツの耐える音が気持ち悪く聴こえた。真美は聞きたくないと言わんばかりに耳を塞ぎ、地面にうずくまった。

そしてしばらくすると根の塊からは、数本の根が抜き出てきた。その時でてきた液体が

真美に降りかかる。

「あああああああああつあ！！！！！！」

どこからか大声で叫ぶ声が聞こえた。真美の方に誰かが走って向かってくる。

ギョーンギョーンギョーン・・・

真美は震えながら辺りを見回すと、ショットガンを連射しながら向かってくる実夏の姿があった。

「あああああつあああつあああ！！！！！！」

実夏の叫びには悲しみがある事は真美は十分に理解ができた。そしてその顔を見ると多量の涙が流れていた。

ギョーンギョーンギョーン・・・

だが、連射する実夏の攻撃は虚しく、根に捕まってしまった。実夏はショットガンを投げ捨て、力任せに根を殴りまくった、だがそれは無駄の如く数秒後には実夏は根に包まれ、締め付けられた。

「はああああ・・・くそ・・・愛さんを・・・返・・・せ・・・」

キュイイイイイ・・・

真美はただ震えて見てるしかなかった、手も足も力が出なかった

からだ。

キュウウウウウウ・・・

実夏のスーツの壊れる音がした。以外に早く終わった耐久力は、藤本の攻撃が数発当たっていた事を物語る。

そして実夏の生身は根に締め付けられ、骨の折れる音が響き渡った。

その時に、実夏に追いついてきた公がさかさ刀で実夏を包んで根のつけ根を斬りつけた。つけ根はすべて一気に斬れ、根の塊が地面に落ちた。

公は恐る恐る根をどかすと実夏を発見できた。顔をみると悲しそうな顔で涙を流しながら息絶えていた。

・・・だが、公はなぜか涙がでなかった。

愛さんや実夏が死に、悲しいはずなのに、こらえられないほどの怒りがあるはずなのに、涙がでなかった。どうでもいいなんて絶対に思っていない、大切にしたい・・・そう思ったはずだ・・・なのに、涙がでない。

こんな状況で・・・仲間が死んだのに泣かない自分をなにかしら疑いながらも、呆然と星人を見た。

刀を片手にショットガンを構え、星人に連射を始めた。

ギョーンギョーンギョーンギョーン……

そう撃っている、地中からまたも数本の根が出現し、公に向かい始めた。その向かってくる根は、明らかに深い傷を負っていた、所々に破裂した跡があり、残りの数本だろうと思えた。

公は銃を根に向かって撃ってはいるが、放心状態だった。なんと
も力が籠っていないかった。

根が素早い動きで公に鞭打ちをくらわせた、公は避ける動作は一切見せずくらうがままに吹っ飛んだ。公は立っていた場所から20mは飛び、思いきり地面に叩きつけられた。

キュウウウウウウウ……

根の一撃でスーツの効果が終わった。公は寝転がったまま空を見上げていた。

「はぁ……もう疲れた……帰ってえ……」

公はそう愚痴ると目を閉じ、寝てる様に動かなかった。

その頃真美は、やっと身体が動くようになったのか、ゆっくりと立ち上がり、実夏の落としたショットガンを拾い、根に向けた。

「残り……3本……倒せば……」

真美は目の前にいる根に向かって銃を撃ち始めた。すると一番最

初に撃った根は破裂し、一撃で倒れた。残りの2本も1本目と同様に撃つと簡単に地面に倒れた。

「……ははは……倒せちゃった……あとは、球根だけ……か……」

真美は泣きながら星人と戦っていたが、根との戦いの勝利により、微かに笑い始めた。そしてショットガンを球根に向け、撃とうとした。

その時、球根が動きを見せ始めた、グリユグリユと音をさせながら何かを始めようとしていた。真美はその動きに恐怖を隠せなかったが、早く倒そうとトリガーを引こうとした。

バシューーーーーー!!!!!!

突如球根が何らかの気体を噴出した、それが真美の周囲を漂う。

「……な……なに……?……!!!!!!」

真美はすぐに自分の異変に気づいた。さっきまで力が入っていた手首に力が入らないのだ。

「うそ……ちょっとツ……トリガーが……引けない!!」

そして今度は手首どころか身体全体が動かなくなり、真美は成す術もなく地面に倒れこんだ。

「そんな・・・あと・・・ちょっとだったのに・・・」

球根が噴出した気体の効果なのか、痺れの外に殺傷効果があるようにで真美は口からは血を吐き始めた。

「ゴプツ・・・ゴフツ・・・やだ・・・いやだ・・・死にたくない・・・お母さん・・・ゴプツ・・・お父・・・さ・・・」

真美はなき始め、絶命することを嫌がった。だが、それは無理な夢となり、ゆっくりとそして確実に死へと近づき、そうつと目を瞑った。

真美の死に顔は、悲壮に満ちた顔だった。

10話

崩れる勇気（後書き）

これからもよろしくお願いします。

11話

遂げた人（前書き）

どうぞ温かい目で見てやってくだせえ・・・。

11話 遂げた人

公は重いまぶたを開いた、そして上体を起こすと今まで戦っていた球根を見た。

「・・・・・・・・・・」

いつそ夢であってほしいと心に思っていたが、それが叶う事は無かった。

公はゆっくりと立ち上がると球根にショットガンを向けた。その時、公はさっきまで皆と居た時の事を思い出し、目を細めた。

それは今となつては儚くなつてしまふのだ・・・、公は込み上げる気持ちを抑えながら、球根の核の部分だろうか、そこを集中的にトリガーを引き始めた。

ギョーンギョーンギョーンギョーンギョーン・・・・・・

撃つたびににやら球根は気体のような物を噴出し始めた。だが、そんな事など気にせず俺はショットガンのトリガーを続けた。

そして公は球根を木っ端微塵に粉碎し、殺した。

そして、たとえなにも動きを見せなくても公はショットガンを粉砕している球根に打ち続けた。

そしてショットガンの銃口を下ろした時には球根は液体の様に地面に流れていた。

ジジジジジ・・・・・

転送が始まった、景色が変わり、黒い球が前方に見えた。

00:02:17

制限時間内、・・・俺は生き残った・・・。

公は手に持っているショットガンを地面に置き、採点が始まるのを待った。

「・・・・・誰か・・・生き残ってくれてたらいいのにな・・・」

チツ　ジジジジジ・・・・・

「・・・！？誰か・・・生き残って・・・！！」

俺は立ち上がり、その生き残った人の目の前に立った。

「・・・あれ？・・・公さん・・・？球根は・・・あれ？どうなっているんでしょうか？」

俺の目の前には、死んだかと思っていた愛さんが姿を見せた。

「愛さん？どうやって・・・生き残って・・・」

どうやって生き残ったかは分からないが奇跡の生還に俺はその時、初めて涙を流した。

「ふっ・・・ううう・・・どうやって・・・ふ・・・よかった・・・よかった・・・！！」

「公さん！？あの・・・ちよつと・・・」

愛は泣いた俺に少々戸惑っていたが、釣られてか愛もなき始めた。

「公さん・・・生き残ってよかったですね・・・」

「本当・・・本当・・・よかった・・・」

チーン

それぢは採点をはじめ

「私と公さん以外・・・皆・・・死んだんですか・・・」

愛が悲しい顔をしながらも、黒い球を見た。

公ちゃん

116てん

TOTAL116てん

100てんメニューから選んでください

「あ・・・」

「すごい・・・100点・・・」

俺は目を一度擦り、もう一度しっかりと黒い球を見た。

「すげ・・・やった・・・俺・・・」

スウ・・・・・・・・

「あ、画面が変わります・・・」

100てんメニュー

1 記憶を消されて解放される

2 より強力な武器を与えられる

3 MEMORYの中から人間を再生できる

「3番だったら、実夏さんを再生できるらしいですね・・・公さん・・・どうします？」

「・・・・・・・・・・」

俺は考えていた、実夏の言った事、俺の望み、愛さんの一言・・・。

「解放が私的には1番が魅力的だな・・・本来死んだ私を生き返らしてくれて、100点とれば解放してくれるんだぜ」

「より強力な武器が手に入れば、勝機も増えるし、なにより人を守る事だってできる・・・」

「実夏さんをできるらしい・・・」

「・・・うん、決めた・・・」

愛さんは優しく俺を見つめていた。

「2番・・・新しい武器をくれ」

公ちゃん

16てん TOTAL16てん

「・・・公さん、これからも生き残りましょう・・・」
愛さんが優しく微笑んだ。

テニスの愛ちゃん

26てん TOTAL26てん

「26てん・・・まだまだですね・・・」

「いや、すごい事ですよ・・・」

しばらくすると黒い球の画面が消えた。俺は帰らずに、部屋内のどこかにあるだろう、新しい武器を探し始めた。

黒い球近くのドアを開けると、すぐに見つけることができた。俺はその新しい武器を拾った。

H型の新しい武器、実に変わった形の銃はずしりと重く、恐らくスーツを着ていなかったら片手では持てないだろうと思えた。

「これが・・・新しい武器・・・」

「ショットガンとどれくらい威力が違うんでしょうかね・・・」

愛さんが部屋に入ってくるとその質問を俺にしてきた。

「これも、破裂的な攻撃性能なんですかね・・・強そうですね・・・」

「・・・やっぱり使ってみない事にはなにも分かりませんね・・・」

俺と愛さんは廊下に置いてある服を着ると、マンションの一室から出た。階段を降り、マンションから出ると愛さんが俺に話をかけてきた。

「・・・ちょっと思ったんですが、次部屋に呼ばれる前に少し

訓練をしておきませんか？」

「訓練？ああ・・・いいですね・・・」

。 実の所、俺は1人でしようと思っていた、その方が効率がいいと思えたからだ。でも誘われたことだし、2人するのもいいな・・・。

「銃やレーダーの性能をしっかりと知る必要がありますしね、訓練やりますよ？いつします？」

「明日土曜で休みなんでどうですか？」

「分かりました、いいですよ」

「じゃあ、訓練場所は・・・荒川なんてどうです？誰も来ないいい場所が沢山ありますよ」

「了承しました・・・」

待ち合わせ場所を適当に決めると、解散し帰宅を始めた。

電車や徒歩などで数時間歩き家に帰還すると俺はすぐさまベットに横になった。そして今日の戦闘での事を思い出し、悔い思いが心を支配した。

「・・・皆が死んだのは、考えると俺の責任だよ・・・俺の・・・」

俺がもっと慎重になって星人に挑んでいれば・・・、実夏が死ん

だのは俺が早く助けなかったから・・・、真美さんも・・・どうやって死んだかは分からないけど、俺が助けられたはずだし・・・、愛さんもあんな危険にさらして・・・、勝ったからよかったけど、あまりにも犠牲の多い勝利だった・・・。

「俺がもつと強ければ・・・もつと・・・皆を守るはず・・・」

こんな事思つて・・・人は俺をなんて思うだろう・・・、死んだのはお前の責任じゃないとも言っただろうか・・・、例えば人がそう言つたとしても俺は、皆が死んだのは俺の責任と俺は言うだろう。

だつてそうだろ？俺には皆を助けられる力があつたはずだ、今回の戦闘で唯一対抗できる力を持っていたんだ・・・知識を持っていたんだ・・・なのに・・・俺はそれを活かさないばかりか余裕と思つて星人と戦つたりなんかして・・・結局負けて・・・馬鹿だろ・・・俺・・・。

俺はもつと皆を守れた・・・。

だけど本当に人を守る力が自分にあるかは分からない、次の星人との戦闘では活かせないかもしれない。でも、俺は守ってみせる・・・俺に本当にあるか分からない力で人を守るのは偽善的な事だと思つけど、それでいい・・・人が死ぬのを見るのよりはマシだ。

なんでだろう・・・この時、実夏の顔が頭に浮かんだ。

「・・・俺、実夏の事・・・好きなんだな・・・」

ベットの横に置いてある100点武器、H型の銃を見ながら俺はなにかを誓っていた。

12話

理解と訓練

そして次の日、俺はさんさんに照る太陽の眩しさに目を覚ました。

時は11時、愛さんとの約束時刻10時の1時間プラスだ。時計を見ながら俺は今自分がどんな状況なのかを考えた。

唸る携帯、ぼさぼさの髪、ペコペコの腹、そしてちよつと匂う体。昨日風呂に入っておけばよかったとちよつと後悔しながらベットを飛び出すと、風呂に入りながらご飯を食べ始めた。

そして風呂から出ると髪をセットしながら愛さんに謝罪のメールを着た分だけ送り返し、スーツを急いで着ると、デカイスーツバツクに100点武器のH型銃を詰めると親に「おはよう！」の挨拶をする間もなく家を飛び出し、全力疾走で待ち合わせ場所に向かった。

そして向かっている途中、愛さんから返信のメールが届くと、走りながら携帯を覗いた。

「なにになに？・・・大丈夫ですよ、昨日の戦闘できつと疲れたんでしょからゆっくり向かってください・・・私は近くのコンビニに居ますんで・・・」

このメールをみて俺は思わず足を止めてしまった。そして大声で空に叫ぶ。

「なんていい人なんや〜〜〜〜!!!!!!」

誰もが思うだろう気持ちの聲が天高く響き渡った。

それから俺は30分位かけて待ち合わせ場所の荒川の土手に到着すると、迷う事無くどこか近場にあるだろうコンビニを探した。すると、土手から少し離れた所にコンビニを確認できた。

走ってコンビニに向かうと、駐車場前に見覚えのある顔があった。

右手には200円くらいするだろう大きな豚マン、左手には暖めてる途中だろうか100円の安いカップ麺を持っていた。俺は豚マンを何気なく頬張っている愛さんに近づくと、話をかけた。

「愛さん・・・あの、遅れてすいません・・・」

声をかけるまで気づかなかったのか、驚いたらしく口に入っている豚マンを吹きそうになった。

「あ・・・ほうはん・・・おはよおほはいまふ・・・」

口の中に豚マンがあるにもかかわらず話そうとして、なんて言ってるか全く理解できなかった。

愛さんは急いで朝ごはんであろう豚マンとカップ麺を急いで食べ始めた。無論、俺は落ち着いて食べるよう諫めた。そして俺は食べ終わるのを待つと愛さんと荒川の草原を目指した。

そして愛さんの誘導のもと草原の奥に着くと愛さんは背中に背負っているデカイバックを地面に置いた。

「部屋からXガンとXショットガンとレーダーを持ってきました、
これらの性能を調べましょう」

「Xガン・・・？」

「ああ、恥ずかしいんですが銃には名前があつたほうがいいと思ひまして・・・Xガンと私は言ってます」

「Xガン・・・良いかもしれませんね・・・俺もそうやって呼ばせていただきます」

愛さんは少し恥ずかしそうにしていたが、数回呼んでいるとそんな様子はなくなった。

「じゃあこれはHガンですね・・・」

そう言うとき公はスポーツバックからH型の銃を取り出した。

「いいですね、Hガン・・・カッコいいです」

俺も照れた。

「じゃあまずは小銃のXガンを調べてみますか」

愛はXガンを持つとレントゲンを覗きながら岩に向けた。そして数回撃つたり調整したり、愛さんは俺を無視に必死に調べた。

「このXガンは狙った標的に撃つて的中させれば破裂させる性能を持つていて、2つあるトリガーの上だけ引くとロックオン、同時に押せば発射・・・あとはXガンの横についてるつまみを回せば破裂させる距離を調整できます」

「なるほど・・・よく研究したんですね・・・」

「いえ、この性能を発見したのは真美さんでした・・・私は教わっただけです」

「そうなんですか・・・」

「じゃあ次いきます、次はXショットガンこれはXガンとほぼ性能は同じですね・・・ただ、破裂の威力が違うらしく、Xガンより強いです・・・」

「あと、一応一回コッキングできますよね・・・」 玉込め的な？、ガチャンって音がする。

「次はYガンです、これは・・・使った事がないですね・・・撃つてみますか」

愛さんは近場の岩に向かってトリガーを引いた。

バシユン！！ キューーーーン

Yガンからは3角形の光線に繋がれた弾が発射された。そしてそれは岩に近づくや、3角形が拡大し、岩に巻きつくと、3個の弾は地面に突っ込み、動きは見せなかった。

「これで・・・終わりですかね？」

「捕獲用なのか・・・？もう一回トリガーを引いてみては？それでまた弾が出るようでしたらそれが性能なんでしょう・・・」

愛はもう一度トリガーを引いた。

ギョーン・・・

ジジジジ・・・

光線に捕まっている岩の上部から順々に消え始めた。

「岩から光線が上に伸びた・・・」

「どこかに転送されたんでしょうか・・・？」

「上に行ったとしか言えませんね・・・」

「まあ、とりあえずこれは一応ロックオン機能もあるようですね・・・」

愛さんはYガンを地面に置くと、今度はレーダーを取り出した。

「次はこのレーダーですね、これは一見見れば地図をあらわす物だけと思うかもしれませんが、他にも機能があるようですね・・・」

「制限時間ですよね・・・」

「それもそうですが他にもあります、それは実夏さんから聞いたのですが、ステルスモードがあるようです」

「ステルスモード？それってもしかして透明になれるって事ですか・・・？」

「はい、一回やってみますね・・・」

愛さんはそう言うとリーダーに付いているボタンを力チ力チ押し始めた。

スウ・・・

「おお！！消えた！？」

俺は消えた愛さんを見て驚いた。

「これで公さんは見えないんですよ・・・私も昨日家でやって鏡を見たときは驚きました」

バチバチツバツチン・・・

愛さんが再び姿を現した。その時も俺は驚いた。

「ステルスモードがあれば無敵ですね・・・」

「意外とそうでもないですよ・・・姿は消せても音が消せませんし・・・」

「あゝもし耳のいい星人と戦ったら意味無いですね」

「はい・・・そういう事になりますね・・・、まあとりあえず次の

説明いきます・・・次は刀です、これは刃が出なければ柄になりますね、この柄には2つのボタンがあつて、この内1つを押すと柄からは刃が出てきます、どこまで伸びるかは分かりませんがかなり伸びますね・・・、そしてもう1つのボタンを押すと刀は縮みます、そして最終的には柄にする事ができます・・・」

「不思議な武器だ・・・四次元ポケットみたい・・・」

俺がそう言うと、愛さんは私もそう思ったみたいな顔をした。そして愛さんは説明する事がなくなつたために、今度は俺の持つているHガンを見つめた。

「公さん、あなたの持つてる銃の説明・・・できますか？」

「使つた事がないから説明できませんね・・・使つてみますか？」

愛は少し迷つた仕草をとつた、でも恐らく武器の性能を知りたかつたのだらう一方に指を向けた。

「あそこの・・・あそこの木に向かつて撃つたらどうですか？」

俺と愛さんからは少し離れた所にある木、俺は愛さんの言われた通りにその木に向かつてHガンを向けた。手元はXガン、シヨットガンに似ているために扱いは大体は分かつた。

「えっと・・・撃ちますよ・・・」

手に汗が流れ始めた、使うのが初めてなだけに緊張しているようだ・・・。

指に力を入れると「キュイイイ……」と効果音が流れ始めた。そしてトリガーをゆつくりと引くとXガンと同じ発射音が流れた。

ギョーン……

タイムラグ以上に時間が流れた気がした。

ドドン！！

Hガンの攻撃は上から円形のなにかが、的を圧縮するものだった。そして攻撃が発動された時、俺も愛さんも目を疑った、その威力が半端なく強烈に思えたからだ。

さっきまで小さいながらもまっすぐ立っていた木が跡形も無く圧縮されているどころか、50cm位地面が沈んでいた。それに圧縮する速さといったら気づいたら、という感じだった。

「すげえ……怖え……強え……」

「なんか……すごいです……凄過ぎです……」

少なからず俺の手がぶるぶる震えていた、なんて言うか性能のすごさとかそういう震えではなく、生き残る確立が増えた、次100となる可能性が増えた……その喜びの震えだった。

「……なんか、町の方が騒がしくなった気がします……ここから離れましょう……」

「え．．．あ．．．確かに．．．見つかったら頭バン！ですからね．．．」

俺と愛さんはリーダーでステルスモードになると、荷物を早々にしまい荒川の草原を後にした。

その後俺と愛さんはレストランを探し始めた。そしてちょっとした騒ぎになっている町に着くと人気の無いところでステルスモードを解除し、町の中心にある駅ビルに入ってしまった。そして飲食店の多く並んでいる階に着くと適当なレストランに入った。

「．．．大体は性能分かりましたか？」

「はい、分かりやすかったです．．．」

「でも、これが全部じゃないと思うんです．．．なにか分かった事があつたら知らせてくださいね．．．」

「はい．．．．．と、それより俺、愛さんに聞きたいことがあるんですが．．．いいですか？」

「何でしょう？」

「つる花星人の時なんですけど、愛さんは最後穴に落ちて根に襲われたとき、死んだと思ってました．．．、どうして生きてたんですか？」

「私にもよく訳が分からないですよ．．．手足を引っ張られて耐えていて．．．手足がブチブチ引きちぎれる音がして．．．地面に落ちて．．．4体がなくなつたと思えばあつて．．．」

「スーツだけ持ってかれたんですね・・・」

「そうだと思います・・・引きちぎられて穴の更に奥に落ちた時に上を見たらビクビクいつてる手がありました・・・」

「引きちぎられた後もスーツが機能してたんですね・・・」

俺がそう言つと愛さんは「そうですね」と納得した。

「なにか食べますか？」

愛さんが何気なく俺に聞いてきた。

「もちろん、食べます」

俺はメニューを取り、開くとすぐに食べるものを決めた。

「から揚げ定食で・・・」

「和が好きなんです、私も和は好きですよ・・・なので刺身定食で・・・」

ウェイトレスを呼んで注文をすると俺と愛さんはまた会話を再会した。

「そういえばずっと思ってたんですが、あの黒い球の部屋って私たちの知ってる部屋以外にあるんでしょうか・・・」

「俺的にはあると思います、家で調べたんですが・・・東京にある

んじゃないかって・・・」

「東京？その根拠はなんですか？」

「一軒家の壁の崩壊、アパート全壊、羅鼎院の崩壊これは東京の人たちがやっただんじゃないかってあるサイトで載ってました」

「そんなサイトがあるんですか・・・他には・・・他にはないんですか？」

「一応そうじゃないかって噂はあります・・・まずは熊本・・・田んぼに円形のミステリーワールド・・・」

「Hガンツ！！」

「円形のミステリーワールドは他に広島、群馬・・・神奈川・・・栃木・・・皆ネット上で騒がれたりしてます・・・、それに俺のHガンで埼玉・・・」

「日本中に黒い球の部屋があるかもしれないって事ですネ・・・」

「もしかしたらですけどね・・・確信はやっぱり持てません・・・」

「いや、私たちは持てますよ・・・それくらいの情報があれば・・・」

「そうですかね・・・？」

「そうですよ、経験した私たちは・・・もてます・・・」

愛さんのその言葉に俺は同情したのかどうなのか・・・少なくとも信じてみても悪くない・・・。

「お待たせしました」

ウェイトレスが2人の定食を持って登場した、その後も愛さんの会話は続き、愛さんや俺の世話話しが定食を食べ終わるまで続いた。

13話

一般の終わり（前書き）

今回は新人が・・・ね。

どうぞ、暖かい目で見てください・・・。

13話 一般の終わり

どこかの中学校のある教室で、笑う者もいれば泣く者がいた。

「お前マジ死んで・・・キモいんだよ・・・」

その言葉を誰が放ったのか、聞けば確かに女の声だった。

その声をたどり、行き着けば3人の女が机に座っている1人の女に暴言をひたすらにかけていて、1人女はその暴言に耐えている光景だった。

「とりあえず今日はお前の顔見たくないからさ・・・もう帰って・・・」

「そうそう・・・今日はもう帰って、明日から来なくていいからさ・・・」

いじめられている事から解放されたいのか、1人の女はゆっくりと荷物をまとめると、教室から出た。

「本当にもう来なくていいから」

「ばいばい!! さよなら」

教室内に笑いが起こる、それは3人に限らず、教室内ほぼ全員が笑っていた。1人の女は絶望に苦痛に耐えながら下駄箱で靴を履き替えると早々に学校を後にした。

だからといって家には帰れなかった。家には母がいて帰れば叱られると思っていたからだ。

1人の女は学校からしばらく歩くとある、草原地帯にやってきた。そこは四方八方木に囲まれていて、中心部は草がこれでもかと沢山生えていた。

さらにその中心に向かえば小さいながらもしっかりとしている小屋があり、1人の少女はそこに入っていた。小屋の内装は木製でできた椅子とテーブル以外これといった物はなく、埃っぽい部屋だった。

「はぁ・・・落ち着く・・・ここはまるで天国だな・・・」

そう独り言を言う1人の女の名前は風波^{かぜなみ} 春魅^{はるみ} 中学2年生、身長は低めで髪は肩にかかるほどの長さ、顔は整っている方である。

その春魅はいかにも解放された幸せな顔だった。小屋の壁に背を掛けて、うとうとしながら眠気が春魅を襲い、ゆっくりと睡眠した。

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・ん・・・」

睡眠してからどのくらい眠ったのか・・・外は少し薄暗くなっていた。

春魅はそれに驚くと早々に小屋から出ると走って母のいる家に走り始めた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

一応運動部に所属している春魅は多少走ったくらいでは足を止めなかった、なのでどんどん家に近づいて行った。

パパーーーー！！！！！！

「！！はっ！！」

横断歩道を渡った時、春魅は車が近づいている事に気がついた。その車はライトを点けていなかった、だから走る事に集中していた春魅は気づく事ができなかったのだ。

バン！！！！！！

車体の上を転がるように乗り越えていく・・・、そして地面に落ちた頃にはもう息はもうできなかったが意識は微かにあった。

「あ・・・なに・・・が起こって・・・って・・・そっか・・・車・・・」

春魅は薄暗くなった空しか見えなかった。そして空に1つだけ浮かぶ星が春魅の目に映った時、涙が溢れてきた。

「やだ・・・死ぬのは・・・やだ・・・生きていたい・・・」

涙で空も見えなくなった時、春魅は恐怖に襲われながらも必死に抗った。

「怖い・・・寒い・・・病院に・・・早くつれっ・・・でも、まあ・・・いっか・・・」

春魅の恐怖は無くなったのか、諦めたのか・・・表情をなくし、静かに息をひきとった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「あなたの将来の夢は何ですか？」

品も質もいい大学の、ある教室で女の先生が1人の男生徒に質問をした。

「俺は自衛隊に入隊したいです、そこで自分をもっと成長させたいです・・・」

先生のその質問に答える男の名前は深沢 ふかさわ 昌哉 しゅじや、通っている大学では常に上位の成績をのこす優等生だ。性格面でも正義の心があり、イケ面、これ上のない完璧な人間と言える位の容姿だった。

「自衛隊ですか・・・本気でそれを望んでるのなら応援させていただけます、ですが今のあなたの能力なら大企業にだって入社できますよ・・・」

「いいんです・・・それが夢ですから・・・」

「・・・分かりました」

話しが終わると昌哉は教室を後にし、早々に家へと帰還した。そ

して玄関をくぐるとすぐさま自分の部屋に入り、机に座って本を読み始めた。

本の内容は自衛隊の機器、生活の様子、活動の様子、訓練の様子を描いてるものだった。

「大学卒業してからでも自衛隊の学校に通うのは遅くないよな・・・」

「

ペラペラとページをめくって読んでいく、知識を頭に蓄えていった。

だが、部屋の内装や思考は、軍オタとは違う様であった。人を守りたい、人の為に何かしたい、自分にできる事を・・・そういう思考で昌哉は必死に勉強をしていた。

どんな理由で自衛隊に入隊したかったのか、それは本人のみが知る事であり親、友の誰もそれを知るものはいなかった。

「ん・・・そろそろ夜ご飯か・・・？」

いつも自衛隊の本を読み始めると、気づく間も無く夜になっている。故に今は6時近い時間帯になっていた、夢に向かって勉強することが好きみたいだ。

昌哉は部屋から出るとリビングに向かった。するとテーブルの上には美味しそうな食べ物と並んでいた。

「あら昌哉、今呼ばうと思ってたところよ」

「あれ？父さんはまだ帰ってきてないんだね・・・」

「うん、会社が倒産近いからね・・・毎日残業よ」

「不景気だもんね・・・苦しい時だ・・・」

「まあ、そんな事より昌哉、大学卒業したら何になるか決めた？」

「うん、昔からの夢で、自衛隊に・・・」

「そう、いい夢だわ・・・お母さんも鼻が高いわ」

母さんはにこりと笑い昌哉を褒めた。昌哉はそれを見て喜んだ。

「それにしてもお母さんやお父さんみたいな頭の悪い親からよくあなたの様な天才が生まれたわね」

「・・・俺の夢を許して努力を支えてくれた母さんが天才なんだよ・・・」

「まあ・・・」

昌哉とその母はご飯を食べ始めた。

「・・・ん？なんだ・・・？この匂い・・・」

どこかで嗅いだ事がある様な匂いがした・・・。

「ガスかしら・・・ちょっと台所見てくるわ、漏れてるかもしれない・・・」

「あ……うん……」

母さんが台所に向かうとコンロ下の扉を開けた。

「ここじゃないみたいね……でも匂いはするわ……」

「俺が見てみるよ……」

昌哉が扉の中を覗く、確かに壊れてる感じはしないがガスの匂いがした。

「業者に頼んだ方がいい、とりあえずここは危ないから非難……」

昌哉が身体を持ち上げると、早々に気化されている安全な場所に向かうと歩き出した時、自分の身体に何かにがぶつかり地面に何かが落ちていった。

「フライ……パン……」

2枚重なったフライパンが地面に向かって落ちて行き、床でぶつかり合い火花を散らした。

「あああ——！！！！！！」

昌哉が悲鳴をあげる、それに母が気づいて振り返るとそこには服が燃えてあがいている昌哉の姿があった。

「ああ！！あつつ！！ああああ！！」

それを見た母は驚き、無我夢中に昌哉の燃えている服を消し始めた。だが燃える服の火を消すどころか更に火は燃え上がり、火柱が立つ勢いになっていた。母はガスがそれを助けてる事はすっかり忘れてその場で火を消そうとしていた。

もちろん昌哉もパニックだった、無我夢中で自分についている火を消そうとしていた。

だがその時、昌哉はある事に気づいた、母である。

燃えた昌哉の火を消そうと必死に身を挺している姿を見たのである。自分に燃え移るかもしれない、母は承知の上だった。だが、昌哉はそれはいけないと思ったのか、火を必死に消す母を突き飛ばし、母は床に倒れこんだ。

そうすると昌哉はおちついていて、ゆっくりと歩き出し確実に台所の蛇口から水をだすと頭を突っ込んだ。

「・・・・・・冷てえ・・・・・・こんなに気持ちいいの初めてだ・・・・・・」

朦朧とする意識の中、小さくそんな事を呟いた。そしてどんどんなくなる意識に何も思ふ暇もなく、昌哉は動かなくなった。

・・・・・・

ある高校の休み時間、2人の高校1年生が机に座って話していた。

「おい！このサイト見てみるよ！面しれーぞ！！」

俺に話をかけてくるこのボウスでギョロ目の名前は品本しなもと 龍運動りゅうは異常にできるくせにどこの運動部にも所属してない生意気な野郎だ。

まあ、仲良しなのは変わらない、いつも一緒に帰ってるし・・・。

そう言う俺の名前は高橋たかはし 哲也てつや勉強はまるッきしできないけど運動は・・・まあ、みんなと比べればできる方なんだろう。

そして今、俺はこいつの、龍がいきなり見せてきたこの変なサイトを見せられていた。

「あ？なんだよこれ・・・黒い球の部屋？」

「そう、なんか厨房が運営してるサイトらしいんだけど、なかなか面白いぜ！」

「面白いのは分かった・・・主の内容はなんなんだ？」

「まあ、主は小説かな・・・荒唐無稽な・・・SF小説・・・」

「へーガンダムみたいな感じの機械が戦うのか？」

「違う・・・違うつて！なんか死んだ人がさ1つの部屋に集められて地球上に潜む宇宙人を退治させるって話だな」

「へー・・・いかにも厨房が考えそうな内容だな・・・」

「そんな事言つてゝ・・・このサイト見てる奴らはこれが実際に起こつてゐる事だつて言つてゐるんだぜ・・・？」

「そいつらも含めて皆中二病だよ・・・そんなの起こつてゐるはずないし、まず証拠がないだろ・・・」

「証拠になるか分からんけど、写真なら結構あるよ・・・ほら」

「なにこれ・・・どこかの川か・・・？」

「そうそう、すぐその荒川の、円形のミステリーサークルの写真だよ・・・もしかしたらこれは部屋の住人がやったのかもしれないつて言われてゐる・・・」

「ふーん・・・暇な奴もいるもんだな・・・」

「まだ信じないのか・・・信じろつてゝ、これは埼玉だけじゃないんだぜ、全国だよ！・・・いや、世界だな！！」

「世界・・・？急に話しが大きくなつたな・・・」

「俺の親父に外国人の友達がいるんだけどよ・・・日本語ペラペラの、その人に黒い球の部屋のサイト見せたら外国にも同じようなサイトがあるつて言うじゃん？それで俺は完璧信じたぜ・・・」

「お前と仲良くなりたくて話合わせてくれたんだろうが・・・」

「またかよ・・・まあ、後にそれは嫌でも信じる事になるかもな・・・」

「は？どうして？なにか起きるのか？」

「K a t a s t r o p h e . . . 」

「カタストロフィ．．．えーッと、倒すって意味だったよな．．．それ」

「違う違う．．．ギリシア語ね．．．、意味は破局や悲劇的結末だから．．．」

「なんでギリシア語？ツてユーかそれってノストラダムスの大予言みたいなのか？」

「まあ．．．予言は間違いないけど、そんなパチ野郎と一緒にするのはどうだろう．．．これを調べてる人の間では何かしら根拠があるって噂だしな．．．」

「根拠？それは何？なにが起こるん？」

「知らない」

「．．．知らないツて」

「情報には限界があるもんだよ」

「．．．ちょっと興味が出てきたと思った所で裏切られたぜ．．．」

キーンコーンカーンコーン．．．．．

「お・・・チャイムか、じゃあ哲也、放課後にまたな！」

「ちょッ・・・放課後は無理なんだ、用事があるからさ・・・」

「おゝそつか・・・それは残念だな・・・じゃあ今日は1人でゲーセンか・・・」

「ごめんな・・・」

龍は自分の教室に戻っていくと、すぐに教室には教員が入ってきた。

「はい授業を始めますゝ席についてゝ」

そして授業は始まった。そして俺は放課後まで龍に会う事無くすべての授業が終わった。

授業がすべて終わって俺のする事は決まっていた。すぐさま学校のトイレの個室に入ると、ポケットから何回も読んだような1枚の手紙を取り出して、読み始めた。

「いやゝ今時手紙で告白する女子はうちの学校では絶滅的だからなゝかわいいもんだ・・・何々？放課後、話したい事があるので、学校裏の森林近くで待ってます・・・」

なにやら哲也は不適な笑いを浮かべながら学校の裏の森林まで歩き出した。

そして少なからず頬が赤くなりながらもその場で立ち尽くしてい

ると、遠方100m先から女子が走ってくるのが見えた。そうなる
ともう、心臓バクバクで息がまともにできなかった。

走ってくる女子の顔にかかっている長い髪が風に靡いて顔がチラ
チラと見える、それはとんでもないほどの美人だったので、俺の心
臓の鼓動はさらに早まった。

と、その時、チラリと女が手に何かを持っている物に気づく事が
できた。

「あれ・・・って・・・ナイフ!?」

逃げようとした、だがもう手遅れだった。

ドスッ!!!!!!

「あ・・・?」

走ってきた女子は足を止める事無く俺の胸に飛び込んできた。そ
して異様な物が俺の腹に差し込まれ、ジワリジワリと今まで感じた
事のない苦痛が俺を襲った。

「な・・・んだ・・・どう・・・ツなっで・・・」

俺は地面に倒れこむと、手紙を渡してきた女子を見上げる状態に
なった。

「は・・・はは・・・これで・・・」

女子が笑い始めた。俺は今の自分の状況と彼女の思惑を想定して考えたが、痛みのせいで思うようにいかなかった。

ズシヤツ・・・

女子は俺の腹部に刺さった凶器を抜き取った。すると間もなく女子は自分の首に凶器を指すと地面に倒れていった。

遠のく意識の中、疑問を抱える哲也にはこの女子の行動はまったく持って理解できなかった。

「なんか・・・意味分かんねえ・・・なにが・・・なにやら・・・」

プツッ!!

14話

不明な生還（前書き）

皆さん俺のssを読んでくれてありがとうございます。書き方をもっとうまくなるようちよつと勉強してます……。成果はでるか否か……。

どうぞ温かい目で見てやってくだせえ……。

14話 不明な生還

ジジジジ・・・・・・・・・・

「あれ？俺一番か・・・」

公が黒い球の部屋に転送された。テラスに寄りかかって次の人の転送者を待っていると言愛さんが転送されて来ていた。

ジジジジ・・・・・・・・・・

「・・・公さん、お久しぶりです、1週間ぶりですね」

前のミッションから1ヶ月半は経っていた。そして愛さんとはその1ヶ月半の中で毎週土曜日には会って訓練を繰り返していた。

ジジジジ・・・・・・・・・・

黒い球から光線が発射され始めた。公と愛は新人が来たんだと思いい、その転送されてきた人の目の前に立った。

「・・・男か・・・、高校生か？」

「公さんと年が近そうですね・・・」

その高校生らしき男性は部屋の床に寝転がったまま停止していたが、黒い球からの光線が途切れるとその男性は目をすぐさま開いて

飛び起きた。

「な・・・なんだよ・・・この部屋、ってか・・・お前等誰だ？」

その質問をされると愛はその高校生の近くに座るとその質問に答えた。

「・・・えっと、ここは黒い球の部屋・・・ですね」

「黒い球の部屋・・・って・・・嘘だろッ」

黒い球の部屋に転送されていたのは哲也だった。そして哲也はここが黒い球の部屋と聞いたとき心の中でかなり驚いていた。

哲也は立ち上がると愛や公に隠れて見えなかった黒い球を見つける事ができた。それで哲也は確信した、龍の言っていた事は本当に俺が今まで思っていた事が嘘だと言う事に・・・。

「・・・あんたらはこの部屋の住人なのか？」

「住人ではない・・・ってか、お前この部屋の事知ってるのか？」

「この部屋に前から居たのかって聞いてんだよ！」

「ああ・・・、前にこの部屋に呼ばれた事はあるぞ・・・」

公は哲也の言い方が少し気に食わなかったのか、不機嫌な顔になった。

「なんだ・・・なんなんだよ・・・黒い球の部屋って・・・俺死ん

だのか？」

チツ ジジジジ・・・・・

黒い球から光線が出始め、人間が転送されてきた。

「今度は・・・女か」

公は出てきた女の顔を覗いた。女の転送が完了すると女はすぐ起き上がり、周囲を見渡した。

「え・・・あれ・・・？」

「あれ・・・こいつ確か・・・あの時走ってた・・・」

哲也はその女子に殺された事は忘れていた。と言いか記憶になかった。

「手に持ってるのって、ナイフか？」

公が疑問に思ってその女子に聞いてみた。だが、その女子は公の質問を無視してナイフを人のいない所に投げ捨てると、すぐさま廊下に向かって行き、玄関から外に出ようとした。

だが、触れられるはずもなかった。

「なんで！！なんで開かないの!？」

女子は、触れられない事に理解ができなかったが、とりあえず開けられない事が確かな事だと理解した。そしてその女は玄関の土足場所にうずくまり、部屋に戻ろうとしなかった。

ジジジジ・・・・・・・・

「まだ出てくるようですね・・・」

なにかに驚いている動作で転送されてくるのは女だった。

「この制服はきつと中学生ですね・・・容姿がまだ幼い感じがします」

愛さんが断言した。それは公も哲也も納得できる事だった。

「ツキやああ!!」

ドタンッ!!

次部屋に転送されてきたのは春魅だった。そして転送が終わると床に倒れた。

「・・・・・・・・・・へ？」

春魅はキョトンとしながら3人の顔を見上げた。

ジジジジ・・・・・・・・

春魅が出てきた後すぐに新しい光線が発射されて、誰かが転送されてきた。

「な・・・なんですか・・・？これは・・・人が・・・」

春魅が驚きを隠せないでいた。そして次ぎ出てきた人は昌哉だった。

「あれ？なんで俺は・・・ここに・・・あ？」

もちろん昌哉にはなにが起こってるか分からなかった。昌哉は部屋に居る人の顔を見渡し、少し考えた後に一番近くに居た公に質問をぶつけた。

「ここはどこなんだ？」

質問を受けた公はすんなりと答えた。

「黒い球の部屋だよ」

「なんだ・・・それは・・・意味分らない・・・、俺がここに居る理由は？」

「死ぬ直前の記憶はあるか？」

「死ぬ直前？俺は死んだのか？じゃあここは天国か・・・」

「違う俺達は生きてる・・・生き返らせてもらった、あそこにある黒い球に・・・」

公は指を黒い球に向けた。

「あの黒い球が・・・一回死んだ俺を生き返らせた・・・実感がわかねーな」

「まあ・・・最初はそうだろうな・・・俺達もそうだったし・・・」

昌哉は俯いて今の状況を必死に理解しようとした。だが、理解しがたいものが多すぎて、悩んでいるようだった。

「死ぬ直前って・・・よく意味が分からないんだけど」

「コピーって思えばいいのかな・・・実際自分は死んでないけど・・・俺だった・・・本体が死んだ・・・偽者であって本物・・・」

「本物が死ぬ直前に俺が作られて、本物が死んで俺が本物に・・・」

昌哉はまだ俯いて悩んでいたが、もう質問はしてこなかった。

さーいたまは「ゆたかーな」ところー
でもいがいとなにもないー
でもいがいとーなにかあるー」

黒い球が歌いだし、人の注目が球に集まった。

「今度は黒い球から音楽が……」

「始まりの合図だな……」

「これから何かが始まるのかよ……」

昌哉は恐る恐る公に質問をした。

「見れば分かる……」

あなた達の命は
亡くなりました

新しい命を
どう使おうが
私の勝手です

という理屈なのです

昌哉や哲也はその文章を読んでみたが、その思いを言葉にはできなかった。

「この文章の通りで、俺らの命は黒い球のままに使われる」

「俺らが星人退治すんのかよッ……」

哲也が公に質問をした。

「部屋の事……本当に知ってるのか？……まあその通りだ、俺達はこれからこの黒い球の命令で星人を倒しに行く……」

「……龍の言った通り……かよ……くそッ」

哲也は下を俯きながら焦っていた。それは星人との戦争で生き残れるかどうかの考えだった。

あなたは今は今から

この方をやっつけに行って下さい

コバトン星人

特徴

まん丸な目

以外と早い

好きなもの

コバトンパン

埼玉県民

口癖

埼玉県民じゃない！非県民だ！！

黒い球にこれから倒しに行く星人が映された。それを皆が見始めるが、空気に笑える人は誰一人いなかった。

「こいつは・・・こいつはッ・・・強いのかッ？どうなんだよ！！」

哲也が焦りながらそんな事を公に聞く、だがそんなのは戦闘が始まらないと分かるはずもなく、公は返事こそはするが何も言えなかった。

「コバトンってさ・・・埼玉県のキャラクターだよ・・・」

「ゆる玉応援団ってなんか結成されてる・・・団長って聞いた事が・・・」

今まで黙っていた中学生の春魅が喋り始めた。

「・・・中学の勉強で少し調べた事があります」

「団か・・・星人が1体って限らないな・・・」

ガシャンッ！！

黒い球の扉が3箇所を開いた。いきなりの事で新人は少し驚いて

いたが、公と愛は驚く事無く近づいて行き、黒い球の後ろに廻ってケースと全部取り出した。

「この部屋にいる奴、このケースに入ってる黒いスーツを着てくれッ！」

公のその言葉に哲也は疑う事無く（てつやくん）と書いてあるケースを取ると、着替えるために廊下に向かった。

「おい、ちょっと待ってくれ・・・」

公が哲也を呼び止めた。すると哲也にもう1つのケースを渡した。

「中学生って書いてあるのはあの女で・・・昌哉くんって書いてるのはあのイケメンさん・・・、じゃあこのヤンデレって書いてるのは多分廊下行ったあの女のだろうから、ついでに渡してきてくれ・・・それと着替えるように・・・」

「・・・あ、ああ・・・分かったよ」

哲也はその（ヤンデレ）と書いてあるケースを預かって廊下に向かうと、玄関ドア近くの隅っこに蹲っている女に近づいた。

「おい・・・あの、このケースお前のらしいから・・・」

女はまさか哲也が声を掛けて来るとは思わなかったので震えながら更に蹲った。そして口から「許して・・・許してください」と申し訳なさそうに言っていた。

「・・・何言ってるかよく分からないんだけど・・・とりあえずこ

のケース持つて黒い球のある部屋に戻ってくれないかな・・・着替えたんだけど」

「・・・・・・・・・・？」

哲也のその発言に女は驚きを隠せずにいた。

「お・・・憶えてないんですか？私がした事・・・」

「・・・なにが？お前が俺になにかしたのか？」

「・・・・・・・・・・いや、なんでもありません」

女はケースを貰うと走って黒い球の部屋に戻った。

「さて・・・早く着替えないと・・・」

哲也は急いでケースを開けると中に入っていた黒いスーツを着始めた。

「おい、なんでこの服を着なきゃいけないんだ？なにがあるって言うんだ？」

昌哉が公に質問していた。

「信じられないかもしれないけど、それを着れば超人的な能力を発揮できるんだ、筋力がアップするのは勿論の事、それは星人の攻撃から身を守ってくれる鎧みたいな役割もあるんだ」

「こんな薄い服に・・・信じられんな・・・、でも着ても損はないだろう、上から服着てもいいんだろ？」

「もちろんッ」

昌哉はそれを聞くや、今哲也が着替えている廊下に向かって歩き始めた。

14話

不明な生還（後書き）

ありがとうございます。

15話

栞の謎と大宮

私の名前は守富^{もりとみ} 栞^{しおり}、全日高校の1年生、身長が低い・・・髪が長い・・・運動できない、勉強できない。

いい所がない私は自分が招いた事件のせいで、今、黒い球の部屋に居る。そして今、それより驚いてる事がある。

「・・・・・・・・なんで哲也さんは私が刺して殺した事を覚えてないんだろう・・・・・・・・」

って事。

私が哲也さんを刺して殺した理由はただの私の自分勝手・・・・。

いつだったか、高校入学したての時、私は具合が悪くなって廊下で座っていた時があった。その時たまたま通りかかった哲也さんに助けてもらって、私は哲也さんが好きになった・・・・。

初めて好きになった人だった。

普通に告白すればよかったのかもしれないけど、okしてくれるか分からなくて、不安でどこまでも不安で・・・・、答えが返ってくる前について感じて・・・・、あんな事して・・・・。

私が仕出かした事の重大さは哲也さんを刺した後気づいて・・・・気づく前は、私が殺せば哲也さんは私の物になるって思ってた・・・・。そんなはずなのに・・・・、だから私は自殺しようと決めて・・・・。

・・。

自分の首にナイフを指した時に意識がなくなって・・・。

栞は首筋を触ってみると、少し血が付いている事に気づいた。

「どうかしたんですか？ 顔色が優れてませんね・・・」

愛は部屋の隅に座っていた栞が気になったのか、声を掛けた。

「あ・・・いや、なんでもないです・・・なんでも」

「悩みの相談ならのりますよ？」

「本当になんでもないんで・・・すいません・・・」

「そうですか・・・まあ、何か悩み事があつたらいつでも相談してください」

愛はそう言つと栞から離れていった。

「なんだ・・・かなりピツピツだな・・・中に下着も着れないとは・・・」

「これが本当に身を守ってくれるのか？」

スーツに着替えた昌哉と哲也が部屋に戻ってきた。昌哉はスーツの上に服を着ているが、哲也はスーツだけの状態で戻ってきた。

「じゃあ次は女が着替えてきてくれ」

愛が栞や春魅に声を掛けて廊下でスーツに着替えるように言った。そして女3人が廊下で着替え始めると、公は黒い球の近くで服を脱ぎ始めた。

「お前は最初から服の下にスーツ着てたのか・・・」

「まあ・・・ね・・・」

公は服をすべて脱ぎ終わってスーツだけの状態になると俺の近くにあるHガンを拾うと、黒い球に近づいていった。

「ショットガン、Yガン、レーダー、刀・・・でいいか」

公は一通り武器を全部持った。

「なんだ・・・この武器・・・外国に売ってるオモチャみたいだな・・・」

さり気なく昌哉はショットガンを手にとってそんな事を呟いた。

「これ・・・本当に武器なのか？銃口に穴も開いてないぞ・・・」

「目には見えない何かが星人に当たるんだ・・・当たったらそこが破裂する」

「ふん・・・近未来兵器だな・・・」

「お前のその持つてるデカイ武器は？他にあるのか？」

哲也が公に質問した。

「これは・・・1回俺が100点取って、貰った武器だから俺の持つてるこれしかない」

「100点？」

「ああ・・・、そうそう・・・星人を倒すと貰える点数の事、100点貯めて選択次第でこの武器が貰える」

「選択肢は？」

「部屋からの解放、新しい武器、死んだ人間再生・・・」

「あんたはいつこの部屋に来てからのくらいで100取ったんだ？」

「・・・この部屋に来たのはこれで3回目、2回目の時に1回クリア」

「2回の戦闘・・・、ふーん・・・100点って簡単に貯まるんだな・・・」

「いや、それは絶対じゃない!!」

公は哲也のその発言を全力で否定した。哲也はそれに驚いて後ろに下がった。

「そのたった2回の戦闘で100点は取ったけど、その分の犠牲があっただ・．．その分の戦いがあっただ・．．その分の悲しみがあっただ・．．」

「なんか言い方・．．悪かったな・．．すみません・．．」

哲也のその謝罪に公は熱くなつてた事に気づき、公も哲也に謝罪した。

「．．．そうそう、今はあの扉は開くから・．．、そこには刀とバイクがあるから持っていきたかったら好きに取ってきて・．．」

それを聞くや昌哉と哲也はドアを開けて部屋に入っていた。そしてそれと同時に廊下からはスーツを着た女達が戻ってきた。

「公さんお待たせしました・．．」

「とりあえず全員スーツは着たな・．．」

ジジジジ・．．・．．

愛から転送され始めて、公の転送も開始され始めた。

「転送が始まった・．．」

次の転送先はどこなのか、星人は強いのか、沢山の不安を公は抱えながら転送されて行った。

そして転送先に愛と公が送られると、2人の目の前には大量の人だかりにのまれた。

「な・・・なんだッこの人の量は・・・」

「危な！なッ・・・なんなんでしょうか・・・？」

公と愛はその場からちよつと移動した人のいない場所に来た。

「ここつて・・・駅だよな・・・」

ちよつと見覚えのある都会的な駅。

「大宮駅・・・大宮駅の西口の外・・・橋歩道の上に居るのか・・・」

「あれ？ここは・・・？」

春魅が転送されてきた。そして他のメンバーも続々と転送されてくると、皆一箇所に集まり、リーダーを見ながら話し始めた。

「お・・・おい、俺等この格好で・・・ハズくねえか？」

「通行人には見えないんですよ・・・なぜか・・・」

「まあ・・・とにかく、今回星人は散らばってる・・・、各個撃破して行こう」

「いや、公さん・・・チームを2つに分けましょう、制限時間は1時間しかありませんし、星人が散らばっているとすると、そっちの方が効率がいいですよ」

「でも・・・」

「大丈夫ですよ、チームの分け方によっては絶対効率がいいです」

公は俯くとそれが正しいのか間違ってるのかを考えた。・・・だがそんなのは結果を見てみないと分かるはずもなく、公は愛の言った通りにした。

チームのリーダーはもちろん経験者の公と愛で、春魅は公に付いて行き、残りは愛に付いて行く事に決まった。

「戦闘になれてないでしょうから、男は女を守るか自分を守るかに専念してください」

「・・・だからこういうチーム分けなのか」

昌哉が納得して頷いていた。

「星人が近くにいる・・・俺は行くな・・・」

公がリーダーを見ながら散らばっている星人目指して走り始めた。後ろからは春魅が追いかけて行く。

「私たちも行きましょう・・・」

愛もリーダーを見ながら星人目指して走り始めた。それに昌哉、哲也、栞がついて行った。

公と春魅は街道を走っていた。そこは所せましに居酒屋やビルなどが建っていて、更には時間的には帰宅時間で、大勢の人で賑わっていた。

俺と春魅はその人達に当たらないように通過すると1つのビルの前に着いた。

「・・・中に居るのか？」

俺はHガンをビルに向けた。だが、すぐにそれは下ろし、春魅にHガンを渡すと刀とXガンを持ってビルに入ってしまった。中に人が居るかもしれない・・・そう思ったからだ。

「お前はそこで待っててくれ、星人を倒してくる」

ビルの内部は明かりは1つも点いてないが、微かに入ってくる外の明かりで少しは前が見えた。

「事務所があるし・・・廃墟ではないな、こんな所に本当に星人がいるのか？」

用心のため、リーダーでステルスモードになると、まずは1階を探ってみた。近くにあるドアを開け、部屋内を見てみた。だがそこは何もなく、空室だった。

「・・・・・・倉庫に居そうな感じ・・・・・・だよな」

俺はビルの入り口前でそれを調べると地下にいる、という事が分かった。

確認が終わると階段を降り、地下廊下を走って1つのドアを開け、確かめてみる。するとそこはダンボールが沢山積み重り、れっきとした倉庫だった。

「ここにいるのか？」

倉庫内の電気を点けると、かなり埃っぽい事が分かる。だがいたる場所は最近できたような足跡や生活跡があった。

Xガンの透視画面で箱を透かして星人の居場所を探すと部屋の片隅に何かが蹲っているのが確認できた。

俺は刀を星人に、すぐに刀を振り下ろせる状態で接近した。

ガサ・・・・ゴソ・・・・ガサガサ

今の物音で星人に何らかの動きがある事に気づいた。

「ふう・・・・ふう・・・・雰囲気的に怖いぜ・・・・」

ダンボール越しに星人に接近した。Xガンの透視を近距離で見ると正面は円形、その天辺には鐘をぶら下げる建物的な物が乗っ

ていた。

星人は俺を敵と思っ
てないのか、攻撃をする様子はないようだ、
相手が俺が今してる事を気づかれる前に・・・
そう思って刀を持っている
手に力を入れると容赦なく星人に刀を振り下ろした。

ザシュッ!!!

目前にあるダンボールごと星人を真つ二つに斬り下ろした。手に
伝わってくる斬った感触も倒したと確信をもてる一撃。

ダンボールをどかして星人の生死を確かめた。するとなにやら芋
の着ぐるみを着たような、意外とカワイイ顔をした星人が真つ二つ
に横たわっていた。

「これは川越の・・・ときもって聞いた事が・・・」

ときも星人を倒した公はすぐにその場を後にしようとした。

コーン・・・コーン・・・コーン・・・

鐘の音が倉庫内に響き渡る。俺は驚いてすぐさま振り向いてさっ
き倒したときも星人を見てみると、そこにはさっきまで1体だと思
っていたときも星人が2体立っていた。

「さっき倒したときも星人の遺体が・・・ない」

俺はXガンをときも星人に向けてトリガーを引いた。

ギョーン

「な・・・！いない！？」

Xガンを1回撃ったとき、そこにはときも星人はいなかった。辺りを見回すと異常な速度で倉庫内の床、壁を走っていた。

俺は追いかけるようにXガンでときも星人を撃つがその速度には追いつく事ができなかった。

Xガンを捨て、刀を両手に持ち直すときも星人を斬りつけ始めた。

壁を走る1体のときも星人をジャンプして壁に着地すると、ときも星人を真つ二つに切り刻んだ。

するるときも星人のバランスは分裂すると、地面に落ちていった。

「ふう・・・・・・1体やったか」

そう思った時、さっき聴いた鐘の音が響いた。

コーン・・・コーン・・・コーン・・・

俺はその音を聴きながらときも星人を見ていた。するとさっき刀で2つに斬った、遺体は片方片方、高速に細胞分裂を繰り返し、ときも星人が2体に増えると、またもやその星人は高速に走り出し、霧中に走り始めた。

「なんだよ・・・こいつら・・・」

俺はときも星人のこの異常能力に息を呑んだ。

すると、ときも星人の動きが変わった。高速に動いていた3体ときも星人が一時的に止まったと思うと、こちらを向くや俺に突進をしてきた。

3体一気の高速突進ではあったが、俺は愛さんとの訓練のおかげで思ったより冷静にときも星人の動きが理解できた。

俺は左に転がって避けると、ときも星人の動きを見ながら落としXガンを拾いに走った。

「刀は駄目だ・・・なら、Xガンなら・・・」

走ってる途中背後からの突進に気づく、それを一瞬見て相手の動きを理解するとすぐさま回避のジャンプをした。

「読める・・・行動パターンが単純だな・・・」

着地すると再びXガンに向かって走り始めた。そしてXガンを拾うと早々に構え、星人を狙い始めた。

「方向転換の時が勝負だ・・・その時、一時的に止まる・・・」

その一瞬を公は狙って、ときも星人の突進攻撃を解け続ける事を決めた。

正面に抜け、反転してきたときも星人が3方から突進してきた。公は真ん中のときも星人を蹴り飛ばし、吹っ飛ばすと公は加重移動を利用して中央を抜けるとすぐさま銃を星人に向けた。

ときも星人は壁を目前にすると動きを止め、方向転換を始めた。
その時、公の手に力が入り、トリガーが引かれた。

ギョーンギョーンギョーンギョーン・・・

ババババン！！！！

ときも星人2体が粉々に破裂した、そしてさっきは鳴った鐘の音がする事はない。

「よし・・・倒した・・・」

公の背後から残り1体のときも星人が突進してきた。公は読んでいたかのように左に避けた。ときも星人はそのままのスピードで過ぎ去ると方向転換の為に動きを止めた。

もちろん公はさっきと同様それを逃す手はなかった。狙いを定め、トリガーを引いた。

ギョーンギョーンギョーン・・・

バババン！！！！

最後のときも星人が粉々に弾けとんだ。この時、公が戦った倉庫内はときも星人の血肉で黄色く染まっていた。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・強かったな・・・でも、つるほどじゃない・・・」

公は戦闘を終えるとリーダーで星人の生死を確認した。そこには戦闘前はあった点はなくなっていた。

16話

愛が指揮ってる

愛一行は駅構内に入って星人を探していた。

駅構内は外よりも窮屈な状態で満足に行動はできなかった。愛はリーダーを頼りに、なるべく人のいない場所を好んで進んだ。

「リーダーは本当にアバウトですね・・・下り線辺りにいる事は分かるんですが、下りのどこなのかはまったく分かりませんね・・・」

「そこからまた手分けして探せばいいんじゃないか？」

昌哉が提案をした。

「・・・チームをまた2つに分けましょう、もし星人が見つかり次第大声でもうチームを呼んでください」

チーム分けは愛の思考の下分けられ、愛と昌哉、哲也と栞のチームに決まった。

「では、健闘を祈ります・・・」

愛は昌哉を連れて下り線階段を降りていった。

「はあ．．．．．あまりッ．．．無理な戦闘は避けようぜ．．．えーッと、栞だッけ？」

「．．．．．はい、そうです．．．哲也さん」

哲也と栞はゆっくりと移動を開始した。少なからず哲也は星人に震え、栞は哲也に震えていた。

階段を降りきった愛と昌哉はホームで星人搜索を開始した。レーダーは頼りにならない。

「なにか星人らしい生物はいますか．．．？」

「まったくだ．．．．．って、あれは．．．違うのか？」

「あれ？あれってなんですか？」

「あそこの．．．．．不自然だろ、ホームの端に壺って．．．」

「あれ．．．は、確かに不自然ですね．．．」

ホームの端、電車が入ってくる進路に明らか不自然な壺が放置されていた。

愛は何も言わずにショットガンを壺に向けると透視画面で確認した。

「壺の中に星人がいます、間違いありません．．．」

「・・・こんなのが、星人・・・？」

昌哉は少し自分の考えていた星人とは違ったのか、驚きを隠せない様子だった。

愛は驚く事はなく、ショットガンをコッキングすると壺の急所を探し始めた。

「心臓とか・・・脳の急所・・・」

だが臓器もスキャンしてしまうのか、星人の骨しか映らなかった。

ギョーン・・・

愛が適当に撃ち始めると、同時に昌哉もそれに続いた。連射で早く片付けてしまおうと思ったのである。

ギョーンギョーンギョーン・・・

タイムラグがきて壺内で破裂の音が微かながら聞こえてくる。

ポコン・・・

壺の蓋が微かに動いた。中から何かが出てきそうだ・・・。

コロン・・・コロロン・・・

蓋がゆっくり持ち上がり地面に落ちた。すると中からゆっくりと

ドロドロのなにかが出てきた。

バチャツ・・・ボチャツン・・・バシャバシャ・・・ド
スン・・・

愛は目を疑った、壺内には数発は撃ったにもかかわらず、中からはドロドロな星人が頭を出し、破裂してる様子は一切なかった。

星人の方角から酸っぱい匂いが漂い、梅干臭だと言うことが嗅いで分かった。

星人は壺から腰だけ出した状態になると、顔にべったりと付いている赤い液体を振り払うと見た目とは裏腹の女らしくカワイイ顔が出現した。

「・・・俺が昔住んでた町のキャラクターだろ・・・これ、確かうめりんって名前だったな」

「うめりん星人・・・とにかく先手必勝です、射撃してください！」

愛と昌哉は銃をうめりん星人に向けて撃とうとしたが、その時に星人に急激な動きがあった。

(う~~~~う~~~~・・・)

何かを訴える様な声をあげた後、壺の中から手を抜き出し、その手には小さな塊が何個も集まった1つの玉を持っていた。

ギョーンギョーンギョーンギョーン・・・

愛と昌哉は星人がどんな行動を見せても無視してXガンやシヨットガンを撃ち続けた。

ババババン！！！！

タイムラグがきてうめりん星人の身体のおちこちが破裂し始めた、だが星人が硬いからか、大きさが普通の成人人間の大きさであつても大したダメージは与えられなかった。

うめりん星人が塊を投げ始めた。愛はそれを落ち着いて避けた。昌哉は自衛隊志望だけあつてか、落ち着いて物事を判断していて、とっさの事であっても避ける事ができた。

そのうめりん星人によつて投げられた塊は白線の向こうの線路に落ちていった。と、落ちた時にその塊は散らばつて周囲に散乱し、2派がきた。

愛はその2派に気づく事ができ、すぐさまホームの地面に伏せた。だが昌哉は気づく事ができなかったが、愛が伏せながら昌哉の足を蹴つたので倒れこみ、うめりん星人の攻撃を避ける事ができた。

ジュジュジュウウウウ・・・・・・

うめりん星人が投げ、散らばつた梅は壁、鉄柱、窓ガラスなど、なんでも溶かし始めた。

「・・・・おつかねえな」

「きやあああああ！！！！」

「な．．．なんだ！！！！」

「いや！痛い痛いッ！！！」

ホームで電車を待っている一般人に梅が当たったか、死傷者が始めた。一般人はパニックを起こし、耳がどうにかなくなってしまいうなほどの悲鳴を上げ始めた。

愛はそれを見て驚いた様な悲しい様な顔を浮かべたが、すぐにクツと毅然とし、星人に立ち向かっていった。

連続でどんどん壺から塊をだすと星人は投げ続けた。愛はショットガンを撃ちながら、塊を避けながら少しずつ少しずつ距離を縮めていった。

ショットガンのタイムラグでうめりん星人が破裂した。だがやはりさっきと一緒に大したダメージは与えてなかった。

「銃は．．．駄目ですね．．．」

愛はショットガンを地面に置くと、ホルスターからYガンを取り出すと星人に発射した。

バシユッ！

光線で繋がれた3角形の弾は星人に向かって飛んでいく。そして

敵の大きさを把握したのか広がっていくとうめりん星人を包んでいた。

キュンキュンキュン……シュゴー

‘ 交線 ‘ の弾が地面に刺さり、星人の捕獲に成功した。

カチツ……ギョーン……ジジジ……

転送が開始され始めた。と思った時だった、急遽うめりん星人の口から噴出された液体によって光線が切断されてしまい、転送は途中で終わってしまった……。

だがうめりん星人は頭を抑えながら苦しんでもいた。少なからずダメージは与えられた事を愛は理解した。

愛はもう一回と思い、Yガンで星人に撃った。

バシュツ バシュツ バシュツ！

数発、連続発射して完全にうめりん星人の動きを牽制しようとした。

だがそれはまたもうめりん星人が口から液体を噴出し、失敗に終わった。

ショットガンはダメ……、Yガンもダメ……、愛は悩んだ末にYガンホルスターに戻すともう一方のホルスターから刀を取り出し、刃を出した後につめりん星人に向かって走り始めた。

うめりん星人は接近させまいと壺から塊を次々に取り出し愛に容赦なく投げた。

それによつて愛は接近が難しくなり次々に来る塊を避け続けた。

ババン！！ ババン！！

遠目から昌哉がうめりん星人の手に持っている塊に狙撃していた。

「倒せんのかよ・・・あれ・・・」

だからと言つて全ての塊を打ち壊す事はできなかった、打ち落とす前に投げられる事もあった。

投げられた塊は相変わらずに散らばり、ホームに居る人たちを襲つていて、パニックを生んでいた。

愛は昌哉の援護もあり、なんとか星人の近辺に近づく事ができた。そして伸ばしている刀を後ろに引くと勢いを付けて振り下ろした。

だがそれはうめりん星人の硬さによつて斬れる事はなかった。

「やっぱり斬れないか・・・」

斬れない事は愛はすでに読めていた、だがやってみた方がいいという事もあった。

グラッ・・・

刀で斬りつけた時に壺は傾き、倒れそうになった。そうなれば愛

のやる事は少なからず決まった。

うめりん星人が近距離から愛に塊を投げる。愛はそれを素早く星人の後ろに避けると、力一杯うめりん星人を蹴飛ばし、ホームから電車の通る線路上に落とした。

うめりん星人は横向きで線路上に叩きつけられると、身動きできない状態になった。

壺の中から塊がどんどんこぼれていく。塊を手にとって投げただけあるのか、頭にかかっても溶ける様子は全くなかった。

と、その時ホームに音声の流れ、うめりん星人が倒れている線路に電車が通ると放送があつた。

線路に塊や液体が垂れ流れても、溶ける様子はない・・・だった。電車にそれが付いても溶ける事はないだろう、愛はそう思った。

ゴーーーー・・・・・・

電車の走ってくる音がホームに響き渡る。

いくら停止するといっても、スピードは尋常になく速かった。そしてうめりん星人はその電車の接近に気づいたのか、壺から抜け出すと急いで隣線路に移動を始めた。

だが、それはもう遅く、うめりん星人は電車に弾き飛ばされた。

電車に飛ばされた後、屋根に叩きつけられ、落ちれば動いてる電車にまたも当たり、うめりん星人が結局落ちた場所は愛と昌哉のい

る電車の向こう側だった。

「・・・・・・・・おい、あれってさ・・・・・・・・人・・・・・・・・なのか？」

遠目から愛と昌哉が戦っている姿を見ていた哲也と栞は、恐る恐る星人に近づいて行った。

うめりん星人は止まっている電車の隣の線路の上でぐったりとしていて、哲也達はそれを見下した。

じっくりとみるとうめりん星人は呼吸をしていた。それで哲也はこいつは人間じゃないと理解すると、ショットガンを向けた。

「星人は・・・・殺して良いんだよな・・・・」

哲也に汗が流れ、栞がそれを見ていた。

ギョーン・・・・

ババン！！

「な、なんだ！？表面しか破裂しねえ・・・・」

哲也は更にトリガーを引き、星人に命中させた。

バババン！！！！

どのくらいトリガーを引いたか、連発で撃つと破裂して死んだ。

「……………死んだよな……………」

栞に聞いてみた。だが栞は何も喋らずに分からないと首を横にふった。

電車を愛と昌哉が乗り越えてきた、そして哲也達の近くに着地した。

「星人…………倒したのですね」

「あ…………なんか横取りしたみたいで…………すいません」

「いえ…………いいんです、気にしないでください」

愛は喜ばずにレーダーを取り出すと、すぐさま星人を確認した。

「近い…………というより、私達に近づいてきます……………」

その発言に皆は周りを見渡した。そして星人が近づいてくる事に少なからず襲ってくるという事を理解した。

「星人はもう近くに居る筈…………周りに…………いませんね……………」

「上とか…………屋根の上……………」

バキン！！

昌哉がその発言すると、予想通り屋根の上から星人が屋根を破つて愛達の居る場所の中心に着地した。

その星人は巨体で人間の1／5倍ほどの身長があり、筋力的には昔戦ったマツチヨサブ星人以上はあるだろう事を思わせた。

「久喜市・・・・・・・・パン鬼・・・・・・・・」

昌哉は驚きながらそう言った。

17話

春魅が守られてる

「近くに星人がいるな・・・」

公はビル地下の星人を倒した後、大宮駅西口の近くにある公園に星人反応があつた。公は春魅と合流するとすぐさまその反応のある公園に向かった。

「あの、怪我は大丈夫ですか？」

「あ？ああ・・・大丈夫・・・無傷だよ」

春魅は公を心配していたが公の一言に安心した。

そして大宮駅から100mほど離れた地点で公は公園を確認した。星人の姿を求めて周辺を見渡すと所々木々が立っている場所にさり気なく黄色くて真ん中に割れ目がある卵が放置されていた。

「あ・・・あれって星人なんですか？」

「うん、そうだよ・・・Hガンかして・・・」

春魅の膝が震えていた。それはXガン握ってる手も同じだが、星人を始めて見るからだろうと思った。

公は春魅からHガンを返してもらうと、遠目から星人を狙った。

「あれって……テレビ局……のだよな……テレビで見たことがある……」

テレ玉、埼玉のテレビ局のキャラクター。

キュイイイイ……

Hガンから音が流れ始める、なぜ流れるかは知らないが、とりあえずテレ玉星人に向かってトリガーを引くために指先に力を籠めた。

ギョーン

ドドンー！

地面がプレスされた、そして円形に大きな穴が公園の真ん中に開いていた。

「ふう……やったか？」

公がゆっくりと星人に近づいていく、春魅の公の影からゆっくりとついていく。

「嘘だろ……死んでないのか？」

公は星人を潰し、殺したものだと思っていた。だがテレ玉星人は土に埋もれながらも確かに生きて、動いていた。

「公……って言いましたよね……公さん……星人はどうなんですか？」

「生きてる、離れてて……」

公はHガンの威力をくらいながら生きてる星人に恐れを抱き、汗が流れた。

ピキッ！ グリユユ……

真ん中の割れの上殻と共にテレ玉星人は地上に顔を出した。顔は不明な液体でよく見えないが、何かをしようと埋まってるからの中でグルグルと廻っていた。

俺はさせまいとショットガンを星人に向け、発射する。

ギョーンギョーンギョーン

パパン！！

頭の上に乗っている殻が破裂した。するとテレ玉星人は俺達の居場所を把握したのか、こっちに向かって明かりを照らし始めた。そしてテレ玉星人から音が流れ始めた。

ピーーーーー……

その音を聞いて公は撃つのをやめると、すぐさま春魅に駆け寄って抱くと、すぐさまその場から横に移動をした。

ビュウンー!!

星人の顔からレーザー光線が発射された。そしてそれは俺達が避けた後、木に当たると苦も無く倒れた。

「やっぱりか……」

公は少なからず警戒し、油断していなかった。テレ玉星人の攻撃方法を予測していたようだ。

「今回はいままでの星人と違って打撃系だけじゃないのもある……」

ビュウンッ!!

公に隙が無いままテレ玉星人は光線を発射した。そして公はその攻撃をさっきと同様に右に避けるとそのままテレ玉星人を中心に周りを走り始めた。

ビュウンッ!ビュウンッ!ビュウンッ!

星人が俺を追うように何度と光線を発射した。それを俺が避けると公園近くのビルにそれが直撃し、周囲の一般人は何事かと振り向

いた。

公はショットガンを捨てるとHガンを左手に持ち、右腕に春魅を担いで走りながらトリガーを引いた。

ギョーン・・・

ドンッ！

テレ玉星人がプレスされた。だが公は星人が死んでとは思わずに、更にHガンのトリガーを引き続けた。

ギョーンギョーンギョーン

ドンドンドンッ！！

テレ玉星人が光線を発射する前に公によってプレスされるせいで星人は発射できずにどんだん地中に埋もれていった。

Hガンを撃ち続けて数十発、公は撃つのをやめるとやっと足を止めた。

そしてその時にやっと公は春魅を放し、解放した。少しだが春魅は少し顔が赤くなっていた。無理もない、公は逃げて抱えてる時、胸が密着していたからだ。

だが公はそんな事は気にしないでショットガンを拾うと、Hガンで開けた穴に近づいて行ってショットガンを穴の中のテレ玉星人に

向けた。

さすがにHガンを連続で受けただけあって殻はあちこちにヒビが入っていた。

ピーーーー・・・

「これだけされてまだ生きて・・・、まだ反撃しようとしてるとか・・・」

ビュウンー！

光線が公に発射された。だが、公は少し身体を傾けると苦も無く避けた。

公は無表情でショットガンのトリガーを引いた。

ギョーンギョーンギョーン・・・

タイムラグがくるとテレ玉星人は地中で殻の中身が破裂し、息絶えた。

「ふう・・・2体目・・・」

「こッ・・・公さんッ！！あッ・・・あれッ！！あれは何ですかッ！！」

なにやら春魅が空を見ながら公を呼んだ。公は呼ばれて振り向き、春魅が空を見ながら言ってる事を理解すると空を見上げた。

「あッ．．．．．あれはッ．．．な．．．んだッ．．．？」

公は目を疑った。

2体の鯉こいが空を飛んでいる．．．。

体長10m位、身体の色は2体違く、青い色とピンク色の鯉のぼりで、空を飛んでいるにしても、もちろん翼などなく、なにか噴出されて飛んでる訳でもなく、重力無視の空中飛行であつた。

「加須市．．．．こいのぼりん1世、2世．．．」

春魅は知っていたのか、それを公に言うように発言すると同時に、春魅は公の顔を見た。すると公の顔は闘志を燃やす顔をしていった。

「怖く．．．ないのかなッ．．．」

公は驚いただけで怖じてはなく、空に舞う鯉1世と2世をしっかりと見据えていた。

「来るぞッ．．．」

「ヘッ？」

公の言葉に春魅は空を見た。すると鯉星人2体が一齐にこっちに向かって大きな口を開けながら突っ込んで来ていた。

「ひゃッ・・・ひゃあああッ!!」

春魅は突っ込んでくる星人に驚き、走って逃げ始めた。だが明らかに逃げ切れる足の速さではなかった。

その時、逃げた春魅に追いついて来た公が後ろから春魅を抱くと地面に倒れこんだ。そして鯉星人2体は公と春魅の上を通り過ぎると空高く上昇した。

「あ・・・ありがとうございます」

「目立たないように、伏せながら移動して、どこか隅に避難して・・・」

公はそう言うのと立ち上がり、星人の気を引くように春魅から距離をとった。

公は空高く泳いでいる鯉星人2体にショットガンを向けると早々にトリガーを引いた。

ギョーンギョーンギョーン

公は心の中でHガンを使って星人を倒そうと考えていたが、性能的に向かないと思い、さらにさっき開けたHガンの大穴のせいで人が異様に集まっていて、撃てば巻き込む恐れがあったからだ。

公は春魅からどんどん距離をとると、車が多々走る隣の歩道で足を止めた。

「さあ・・・来い・・・」

公は膝をついてHガンを地面に置くと、その状態でショットガンをコッキングした。

そしてそこで待機していると、空をユラユラ泳いでいた鯉星人2体は公に突っ込んできた。

正面から2体一気の接近、公はピンク色の鯉、2世に狙いを定めると、トリガーを引いた。

ギョーン

1回撃つと公は鯉の速さに避ける動作に移った。そして公は足に力を入れてジャンプすると、跳び箱の様にピンクの背中に手を付いて越えた。

ババン！

狙いが甘かったか、鯉2世は下唇しか破裂しなかった。

公は振り向くとすぐさまショットガンを星人に向けて撃とうとした。だがすでに星人は空高く上がっていて、狙うにはあまりにも難しかった。なので公はその場にまた膝を付くとコッキングして星人がまた向かってくるのを待った。

だが、俺が被弾させた1発によって警戒しているのか、突っ込んでくる様子はなかった。

「くッ・・・こっちから行くしかないのか・・・」

公はHガンを拾うと走りながら星人にショットガンを連射した。

ギョーンギョーンギョーン・・・

もちろん当たるはずも無く、公はどうやって倒したものかと悩んだ。

「何とか接近したいよな・・・、するには・・・。」

公はそう言うのと近くに沢山建っているビルを見上げた。

公は星人を気にしながら春魅の所に戻っていった。そして公園の春魅と別れた場所に着くと搜索を開始した。

「いない・・・どこに隠れたんだ？」

辺りを見回すが春魅の姿がどこにも見当たらない。大穴に集まっている人々に紛れてるのかと思ったが、そうでもなかった。

「遠くに逃げたのか・・・？」

リーダーを取り出して調べようとした時、俺を呼ぶ声が聞こえた。

「公さーん・・・。」

呼ばれた方向を向いてみたが、そこにもいない・・・、公は謎に思った。

ザザァン・・・ザザァン・・・

「えいや！」

ドサンッ！

公の目の前に春魅が出現し、着地した後地面に倒れこんだ。そして公は春魅が隠れていた場所を理解した。

「いたた・・・って痛くない・・・」

「・・・・・・・・木の上か・・・、普通そこ隠れるかッ？」

春魅は赤ら顔で立ち上がると、降りた時に落としたXガンを拾った。

「・・・で、星人は倒したんですか？」

「いや、まだ・・・あそこにまだ飛んでる・・・」

「私も戦いますか？役に立つかわかりませんが・・・」

春魅はそう言うのと震えながらXガンを両手で強く握った。

「いや、お前探しにきたのは移動したいから、あの低いビルあるでしょう？あそこの屋上に行こうと思う・・・」

「でもあのビル閉まっていますし、階段は上れないと思いますよ・・・」

「

「うん、分かッてる……」

公はそう言うと、春魅の腕を自分の首にまわすとしっかりつかまるよう指示した後、Hガンとショットガンを強く握り締めると、強く踏み込む様に走り出した。

ギョングョングョン！！

力強く前に進もうと思いつながら走るとスーツは膨張し、地を砕きながら高速で走っていった。

「よしッ、ジャンプするぞッ！！」

ドン！！

ジャンプした時、地面が発砲スチロールみたいに脆く思え、担いでる春魅の体重は少しばかりも感じられなかった。

「……………！！！！！！」

春魅は驚いてるのか、怖いのか、目をつぶってるのか、悲鳴は少しも上げなかった。そして公は乗ろうとしていたビルより高く、2倍近く飛んでいた。

ビョオオオオオ……………

なんとなく大宮の夜景を見て得した気分には公は思っているが、一瞬の出来事で、ビルに降下し始めた時、つる戦で経験があるといっても恐怖は本能的にあった。

バシューツ・・・

靴からの逆噴射で無事ビル屋上に着地、公は星人を確認した。

相変わらず上空でユラユラと泳いでいた。それに俺達の存在は忘れてる様だ。

「もつと上るぞ・・・、今度は自分でジャンプできるか？」

「この服の使い方がまだよく分らないです・・・力んでもなんか強化されてる感じしませんし・・・」

公はしょうがない・・・、とそんな感じの顔を見ると春魅を担いでまた他のビルにジャンプし、上っていった。

バシューツ！

一番最初に乗ったビルより、高さ的にはあまり変わらないが、周辺では一番高いビルに到達した。

春魅を下ろし、星人を確認するとショットガンを両手に持って狙いを定めた。

「気づくなよ・・・」

「わ・・・私も撃ちます・・・」

春魅が公の隣にいくるとXガンを構えた。もちろん断る理由はない、2人で星人に狙いを定め、トリガーを引いた。

ギョーンギョーンギョーン・・・

ババン！

ピンクの鯉、2世に数発当たり、破裂・・・鯉2世は地面に落ちて行った。青い鯉、1世は1発も当たらなかったのか、落ちる事は無く、それどころか此方の居場所がばれてしまい、鯉1世は2世の仇の為に決死の突進をしてきた。

「ちッ！バレタか！」

公は鯉1世の接近に、させまいとショットガンのトリガーを連続で引いた。

ギョーンギョーン

だが、公がトリガーを引いてる事に気づいたのか、鯉1世は右往左往してその攻撃を避けた。

そして鯉1世は公の攻撃を避けきると、大きな口を開けて公を飲み込もうとした。

公はそれを転がって鯉1世の攻撃を避けようとした。だが地面すれすれだったので公は避けきれずに鯉1世の大口に捕獲されてしまった。

片腕が口の中に入っていて、閉じられたら開ける様子は無かった。
そして公は鯉1世と共に遙か上空に上っていった。

「ふうッ・・・腕が・・・」

「ああ！公さ〜んッ！！」

春魅は捕まった公を見てそう大声で叫んだ。

18話

皆頑張ってる(前書き)

「ねえTさん、Tさんってさ、この小説サイトで小説書いてるでしょ?」

「・・・え?」

「GANTZ埼玉書くのなんてTさんくらいだと思っただよね」

(なんてこった・・・全部ばれやんけ・・・)

と、まあ友達にバレマシタ。

どうぞ、温かい目で見てやってくだせえ・・・。

18話

皆頑張ってる

コキッ・・・コキッ・・・

愛達は屋根を破って来たパン鬼に対して恐れを抱いていた。

「ふッ・・・ウオオオ!!」

哲也がショットガンをパン鬼に向け、トリガーを引いた。

ギョーン

だがそれは軽々と避けられると、哲也はパン鬼に肘で腹部を攻撃され、遙か遠くのホームまで飛ばされた。

「なんだッ・・・こいつ・・・」

昌哉に汗が流れた。と、その時、ショットガンを地面に捨てた愛がホルスターから刀を抜いて伸ばすとパン鬼の首めがけて刀を振るった。

だがそれも軽々避けられてしまう。そしてその愛の行動を見ていた昌哉はXガンをパン鬼に向けてトリガーを引いた。

ギョーン

昌哉の攻撃は当たらなかった。撃つ寸前にパン鬼が昌哉の腕の上に持ち上げて回避したからだ。

愛は避けられて上がった腕、刀をそのままパン鬼に振り下ろす。それもパン鬼の素早さによって避けられる。

そして今度はパン鬼の反撃に移る。パン鬼が愛の刀を避けた後、回し蹴りの要領で足を振り上げ、愛を天井に飛ばした。

「キャッ!」

愛は天井にめり込むように突っ込んだ。そしてゆっくりホームに落下するところぞとばかりにパン鬼は愛にパンチを繰り出し、吹っ飛ばした。

愛は哲也とは逆方向に吹っ飛ばされた。

それを見た昌哉はパン鬼の倒し方を練り、考えた。

「銃を当てるのは難しい……ッて事は愛さんの様に刀か……」

昌哉はXガンを捨てると、部屋から持ってきた刀をホルスターから外して伸ばすと、早々にパン鬼の腹部に刀を振るった。

「とりあえず当てる事だ……、当たッて怯まないわけは無い」

パン鬼は昌哉の攻撃をしゃがんで避けるとアッパーを繰り出した。昌哉は後ろに仰け反ってそれを避けると、ジャンプして1回転し、

少し離れた場所に着地すると、パン鬼と対峙した。

「よしッ・・・スーツの性能は予想通りだな」

昌哉はニヤリと笑うと一瞬の行動で刀をパン鬼の首に突きを繰り出した。

だが惜しくもそれは左側首をかするだけで貫けはしなかった。

「まだまだッ!!」

昌哉はそのまま刀を横に傾けると横に振り、パン鬼の首を斬ろうとした。

「なッ！これも避けるのかッ!!」

一瞬の出来事にもかかわらず、パン鬼はしゃがんで避けると、余裕の笑みを浮かべていた。それを見た昌哉は相手が悪いかもしれないという不安な顔を浮かべた。

パン鬼がストレートを繰り出した。昌哉は避けようと反応はしたが体がついていけず、ストレートをくらって吹っ飛んだ。

「くっそ・・・速い・・・」

パン鬼は昌哉をふっ飛ばした後、残った棊に目をやった。

「誰か・・・誰か・・・やだよ・・・ッ」

栞の足が小刻みに震えていた。だが、その気持ちに負けまいと栞は手に持つてるXガンをパン鬼に向けた。

「がぁぁあつぁあつぁあ！！！！」

バキンッ！！！！

突如現れた哲也がパン鬼に飛び蹴りをくらわせた。そしてそれをくらつとパン鬼は倒れこんだ。

ギョーングョーングョーン・・・

哲也がショットガンをパン鬼に連射する。それをパン鬼はすぐ立ち上がると避け始めた。

「さつさと倒れるやつ！！」

容赦なく撃つ哲也にパン鬼は真顔になると腰にぶら下げていた、金棒を手に持つとパン鬼自慢の素早さで哲也と一気に距離を縮めた。

「くッ！！」

哲也はパン鬼の急接近に驚き早々にショットガンを捨てるとアッパーを繰り出した。

だがそれは身体を反られ、避けられてしまう。そしてパン鬼は体勢をそのままに蹴りをくらわそうとした。

だがその時、パン鬼はいきなり蹴りの動作をやめると金棒を哲也とは違う方向に振り回した。

ジャキイーン！！

鉄と鉄が当たるような音が響いた。哲也がその方向を見てみると浮いてパン鬼と競り合ってる愛の姿があった。

バシューッ！

吹っ飛ばされた昌哉が近辺に着地した。

「哲也さん、刀か銃を持ってください」

愛の一言に哲也はホルスターから刀を取り出し、伸ばすと愛や昌哉の様に構えた。

「三方向一気に攻撃を仕掛けます、気を引き締めてください・・・」

哲也、昌哉が頷くと愛は速攻の攻撃をパン鬼に仕掛けた。

愛が刀を振り下ろすと、パン鬼はそれを金棒でガードをした。

ザシューン！！

昌哉が足を切り刻み、哲也が愛と競り合ってる腕を切り落とした。それで完全にバランスを失ったパン鬼は地面に倒れこんだ。その顔は負けた事を悔しがる顔だった。

ギョーンギョーン

愛はショットガンを拾うとパン鬼に向かってトリガーを引いた。

ババン！！

頭部が破裂した。

「ふう・・・やりましたね・・・」

愛が微笑んで喜んでいた。

「ふッ・・・協力の結果・・・か・・・」

「頑張れば1人でもできた気がするけどなッ」

協力をして、すぐに星人を倒せた事に皆は喜んだ。そして哲也はそう余裕な感じに言っていた。

皆が喜ぶ中、ただ、喜びを見出せなかった栞は、俯いていた。心底戦闘に貢献できなかった事を悔いていた。

「ここら辺には、もう星人はいませんね・・・」

愛はリーダーでそれを知ると皆を呼んで知らせた。

「公達方面に3点、そっちに向かいますよッ」

「残り3体なのか？」

ブチッ・・・ブチッブチブチッ・・・

えら内の肉を千切って破り、あるであろう脳に手を進めていった。すると破っていった先には、なにやら塊を発見する事ができた。

ブチッ・・・ブチブチッブシュウ！・・・ブチュ・・・

塊を握りつぶすと鯉1世は痙攣を起こし、暴れ始めた。

「おッ・・・落ちてる！！」

鯉1世の重力無視飛行は尽き、上空から落下し始めた。公は鯉1世の顎から手を放すと余裕をもって地面に着地した。

「ふう・・・梃子摺ったな・・・、だが戦い方は単純だという事が分かった」

ゴオオオー！！

鯉2世が公に向かって大きな口を開けながら急接近していた。公はすぐに星人の方を向くと、接近する鯉2世に、タイミングを見計らって、アッパーを繰り出した。

バキンッ！！

公の攻撃はくらい、鯉2世は振り返って上昇すると、背中から地面に落ちて行った。

ズズズウウ・・・

刀を取り出し、伸ばすと胸元から真つ二つに切り裂いた。しばらくは痙攣を起こしていたが、すぐに止み、動く事は無かった。

「公さ〜〜ん!!」

春魅は今居るビルから大きく手を振っていた。公の無事を喜んで
いるようだった。

俺はビルに向かって走り出すと、そのビルから降りようとする春
魅の姿が見え、その両手には、Hガンとショットガンがあった。

「それッ!!」

ブシューッ!!

何気に完璧な着地を俺の前で披露した。さっき俺がジャンプした
り着地するのをよく見て、記憶した事を思わせる。

「やればできるんだな・・・」

「運動神経は少し自身があるんです」

「ふ〜ん・・・さすがだな」

公はHガンを春魅から受け取ると次の星人を目指そうとした。そ
してリーダーを見ると、公は目指す必要がない事を理解した。

（世界イサンはどこですか？）

（古墳群！古墳群！！）

見た目は弥生時代を思わせる服装で、髪を両側束ねていて、手元には文字が入ってる剣を持ち、奇妙な会話をしている星人2体がゆつくりと公と春魅に近づいて来ていた。

「ニニギン、コノハちゃん・・・行田市のです」

「埼玉のキャラばかりだな・・・」

そう言つと公はHガンを構えると周囲に人間が居ない事を確認すると、歩きよつて来るニニギン、コノハちゃんに向かってトリガーを引いた。

ドドンッ！！

2体の星人は避けた、だが片方のコノハちゃんは避けきる事ができず、足をプレスされ地面に倒れこんだ。

「まだまだ！」

公は地面に倒れこんだコノハちゃんにトリガーを引いてプレスすると、コノハちゃんは絶命、圧縮が強すぎるために肉片は液体状に変化していた。

（古墳群！古墳群！！）

ニニギンが公に接近、剣を公の腕に振るった。

「アツぶねッ!!」

なんとか避けたが、スーツと皮膚を通過するのを公は感じていた。

「腕のスーツが斬れたッ・・・どうしてッ？スーツが効かないのかッ？」

公はニニギンの持つ剣の切れ味に驚き、防衛の構えをみせた。

（古墳群！古墳群！！）

ニニギンが公に剣を振り下ろす。公はその攻撃をすれすれで避けると、ジャンプしてニニギンと距離をとった。

「これで決まりだッ！」

ギョーン

ドンッ!!

公がニニギンにHガンを連射し、必死にプレスしようとした。

「くうッそッ！はええッ!!」

ニギンは円形プレスを軽々しく避けると公と距離を縮めようとした。対し公は接近されまいとジャンプして距離を広げた。

ギョーン

ドンッ！！

空中にいる間に追いかけてくるニギンにトリガーを引いた。だが、それもぎりぎりに避けられてしまった。

「くッ！！」

公は避けるニギンに苛つきながらも、なんとか被害を与えようと更にトリガーを引き続けた。

ギョーンギョーンギョーン・・・

ドンドンドン！！！！

整備された道に次々と円形の穴が開いていく。それでも避けるニギンに公は更にトリガーを引いた。

「当ッたれや！！くそ！！」

ドンッドンッドンッ！！

「なんだ？地震か？さっきからどんどんうるさいな・・・」

「うッわ！あそこ地盤沈下してるッ・・・」

「なに？大宮どうなってんの？駅の方もなんかパニックしてるし・・・」

何が起きてるのか分からない一般人が公のプレスの音を聞いて続々と集結してきた。

「Hガン・・・使いにくいな・・・刀でいくしかないか・・・」

集まってきた人に対して公はHガンを使いづらかった。なのでHガンを地面に置いてホルスターから刀を取り出すと、ニニギンと対峙した。

「大丈夫・・・勝てる・・・愛さんに教わったじゃないか・・・剣道！！」

表情を変えないニニギンに公の額から汗が流れ始める。そして深呼吸を繰り返して、自分なりにリズムをとってペースを自分の物にした。

（古墳群！！！！）

ニニギンの突き、先制攻撃、それは公の胸目掛けて向かって来た。

ジャキンッ！！

公は攻撃を刀で防いだ。そして刀と剣がぶつかり合った時、火花が散った。

「思い出せ、愛さんに教わった事を……………」

19話

愛のあいであるものか（前書き）

どうも、Tさんです。

なんか最近BAMP OF CHICKENの「バトルクライ」が、なんか玄野っぱい歌に聞こえてきたような気がします。余談でしたね・・・。

どうぞ、温かい目でみてやってくだせえ・・・。

19話

愛のあいであるものか

「もうすぐ公さん達の場所に付きますが、星人が周りにいるかも知れないということを忘れないでください・・・」

「はい・・・それより、なんなんだ、ずいぶん人が大勢集まってるな・・・」

愛達は西口の橋歩道を走りながら周りを警戒して、公達の場所に向かっていた。そして昌哉がボソリと呟くと皆は足を止めて同感して首を縦に振っていた。

「確かにそうだな・・・、皆どこかに向かつて歩いてる・・・」

哲也の言ってる事は確かで、一般人はある所に向かいながら、噂をしながら向かっていた。

「リーダーの反応がある所に向かつてますね・・・公さんが何かしたからかも」

「なにかッて？」

昌哉が疑問に思い、聞いてみた。

「Hガンを敵に撃った可能性・・・」

「Hガン？あのデカイ武器か？100点の・・・」

「はい、あの武器は円形に的をプレスする武器なんですが・・・」

「プレス・・・？破裂はしない、より強力な武器・・・」

「とにかく早く公ッて奴と合流しようぜッ！」

哲也が愛と昌哉に声を掛け、急かした。

「そッそつですね・・・急ぎましようッ！」

愛達は橋歩道を降りると、人を掻き分けながら公を目指した。

「マジだつてッ！！あッちに円形のデッケエ穴が開いてんのッ！！しかも深いッ！」

「うわーあぶねーなー、沈下してやがる・・・人が落ちなくてよかったな・・・」

「こんな綺麗に沈下するんだねーもしかしてヤラセ？」

愛達は一般人を避けて通ると、沈下した大きな円形の穴を見つけた。

「本当に公は撃ったのかッ？」

昌哉がその円形の穴をみて驚愕していた。

「おい、あそこで戦ってるのは公、だよな？」

キンッキンッジャキィッ！キンッキンッ！！！

もの凄い音を立てながら刀を振る公と剣を振る二二ギン星人の姿だった。

ジャキンッ！！

公と二二ギンの刀が接触、そのまま鏖り合いが行われた。

「スーッとタメ張るって、どんだけの力だ、よッ！」

公は力むと一気に二二ギンを押し弾いた。そして二二ギンはその反動で剣を落としてしまった。

「最後だッ！！」

公は刀を横に振り、勝負を決めようとした。だが流石の速さ、それは惜しくも避けられてしまった。

ニニギンが公と距離をとって剣を拾いに走り出した。

「させるかッ!!」

公がニニギンを追い、走り出した。そして走ってる途中、刀を伸ばし、ニニギンに突きを繰り出した。

ドスッ!

背後を見ていなかったのか、ニニギンの背中に太刀先が刺さり、貫通した。

(こ・・・墳ぐ・・・ん・・・)

ズズ・・・ズズ・・・ズズ・・・ドシュッ・・・

公の刺した太刀先は刺さったにも関わらず、ニニギンは前進したため、刀が抜け、地面に倒れこんだ。

ズルズル・・・

地べたに寝転がりながら必死に剣目指して前進していた。

「痛覚はあるのか、じゃあもう終わりだ」

公は刀を振り上げ、両手で持ってニニギンに狙いを定めた。

カシャンッ・・・

ニギンが剣を拾い、公に向けて威嚇を始めた。公はそれに耳をかさずに上げた刀をニギンに振り下ろした。その公の腕はスーツの力によって膨張していた。

（古墳群！！！！）

振り下ろされた刀をニギンは剣でガードをしようとした。

バキンッ！！

剣は刀によって真っ二つに折れると、ニギンも真っ二つに切断された。その切れ味はすごく、分離したときに一瞬内臓や骨、脳が綺麗に見えた。

ドチャドシャツ・・・・・・・・

ニギン星人は絶命した。

「なんだ・・・あいつスゲー・・・」

哲也は公の強さに感無量だった。もちろんそれは哲也に限った事ではなく、今まで一緒に戦闘してきた愛でさえも感じていた。

「公さんはあんなに強かったんですね・・・それに、すごい太刀捌き・・・私が教えた事の範疇を越えてます・・・」

「なるほど・・・イメージトレーニングが得意なのか・・・」

昌哉が小さな声でそう呟いた。

「ふう・・・」

公は刀をホルスターにしまい、Hガンを拾うと、公の近くに春魅が近寄ってきた。

「公さん、本当強いですねッ！私感激しましたッ！」

「ああ・・・、ありがとう・・・」

公は春魅の強い言葉に戸惑っていたが、軽く微笑んだ。

「公さんッ!!」

愛達が公達と合流した。

「愛さん・・・、無事でなによりです」

「公さんも無事で喜ばしい事です・・・、それにさっきの戦闘は見事なものでした」

「照れますよ、ありがとうございます」

愛はリーダーを取り出すと残りの星人の居場所を確認した。

「私達と他に残り1点、あと少しで終わりですッ」

バサッ！バサッ！バサッ！・・・・・・

「もしかしたらボスかもッ・・・気を引き締めて行きましょうッ！」

愛が皆を激励した。そして愛はリーダーを見ながら星人の所に向かおうとした。

「ちょ・・・ちょっとツ、皆さん、待ってください・・・星人が迫ってます・・・」

「せ・・・迫ってる！？そのわりには周りにはそんな姿はないですけど・・・」

メンバー全員が周囲を確認したが星人らしき姿はどこにもなかった。

「・・・・・・空？」

レーダーを見ていた愛が空を見上げた。

「み・・・皆さん！！伏せて！！」

急に愛がそう叫んだが、俺達はその言葉をよく理解できずに、伏せようとはしなかった。

「なッ何かあるんですか？」

「なんでもいいですッ！早くッ伏せてッ！」

皆はもう意味はよくよく分かってなかったが、とりあえず伏せる、というより、しゃがんで状況を理解しようとする周囲を見渡した。

キーーーーー

高速で何かが動いている音が聞こえた。その音で公は空に何かか飛んでいるのではと思い、空を見上げた。

しゃがみ遅れた栞が皆がしゃがんでいるのを見て早々にしゃがもうと身を下ろそうとする。

ドンッ・・・

栞が近寄ってきた愛によって押され、背中から地面に倒れこんだ。

バヒュンッ！！

その時、なにが起こったのか、公は理解ができなかった。

ドサッ

地面に愛さんが倒れるのを確認できるはずだが、愛さんと確信的に言える部分がなくなっていた。そしてその部分は自分より数m離れた地に転がっていて、いつか見た事のある液体が散乱していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ？」

公の口からは自然とそう声が出た。

バシャッ・・・・・・・・バチャッ・・・・・・・・

「い・・・・・・・・いや~~~~~~~~!!!!!!」

栞が叫び、泣き始める。そしてその隣では哲也が嘔吐に襲われ、地面に崩れた。

「愛さんが・・・・・・・・、死んだ？」

地面に倒れる愛は動く事も、喋る事もなかった。当たり前な事だが、公にとってはそれは認めたくはない事だった。

しかし、公はいつかの戦闘の時の様に悲しみの感情に支配される事はなかった。

なにも感じなかった。感じれなかった。涙もでてこない……。逆流してくる怒りもない。だからと言ってどうでもいいとは思っていないが、公はまたもこの感情がきた事に気持ち悪さを感じていた。

「なんで？どうしてだ？周りではメンバーが泣いたり、叫んだりしているのに、どうして俺にはそれが無い？」

公の心に知れぬ怒りが立ち込めてきた。もちろんそれは愛さんを殺した者に対するものではない、自分自身に対しての怒りだった。

公はさつき通過した者の姿を遥か上空で見つけることができた。そしてそいつを睨むと

誰にも聴こえないほど小さな声で呟いた。

「俺のこの感情の結果が分からない……」

空に飛んでいたのは黒い球に映っていて、見覚えのある星人、コバトンが空を飛んでいた。外見はなにかの鳥がモチーフなのか、立派な翼を左右にそろえ、丸くパツチリした目、大きさは一般人の大きさと対して変わらないが翼によって横は長かった。

ダッ！

公は走り出した、そして上空を飛ぶコバトンにショットガンを連射しながらひたすら走った。

ギョーンギョーンギョーン……

当たらない、避ける動作もない、だがそれでも公は当たるまでシ

ショットガンのトリガーを撃ち続けた。

キーーーーーン……

コバトンが公に向かって飛んでくる、それを見て公はショットガンもHガンも捨てるとホルスターから刀を取り出して接近するコバトンに刀を振り下ろした。

ギャキーーンッ！！

左翼に刀が当たった。

見た目的には普通の翼に見えるが、刀を当てて分かった、両翼どちらも鋼のような硬さを秘めていた。

公はスーツの力でコバトンを押し、力勝ちしようとした。だが、その時公の攻撃を受けていない右翼が公に向かって攻撃を与えようとしていた。

「あッぶねッ！！」

しゃがんで攻撃を回避した。だが、しゃがんだ時に加えていた力が解放されたために公はコバトンの左翼に押し飛ばされ、春魅達を越えた車が多々通るアスファルトに叩きつけられた。

車が公に接近、公は足を頭に持っていくと転がって道路の真ん中に立った。

「俺が……俺がッ！！」

哲也がショットガンを構え、コバトンにトリガーを引いた。

ギョーン

だが引いた時にはコバトンはすでに空高く羽ばたいており、哲也の攻撃は当たらなかった。だが、それでも哲也は空に羽ばたくコバトンにトリガーを引いてなんとかダメージを与えようとした。

ギョーンギョーン

破裂しない事から哲也の攻撃は外れた事を思わせる。

ドンッ！！

コバトンが哲也の目の前に着地、右翼を振り、哲也目掛けて振るわれた。

「あッぶねッ！」

驚いた哲也は、すれすれながらそれをしゃがんで避けると、コバトンの腹部を蹴り飛ばし、蹴り倒そうとした。

だが蹴ったにも関わらずコバトンは一切動く事無く、それどころか哲也は押し返され、バランスを崩して倒れこんだ。

「や・・・やベッ・・・」

倒れた哲也はコバトンに見下され、恐怖を感じた。それで早々に立ち上がって逃げようとした。

だが逃げる哲也を追いつめない手は無い、コバトンは両翼を羽ばたかせて哲也に接近して行った。そして右翼を振ると、難なくスーッは斬れ哲也は地面に倒れこんだ。

「あッああッ！くっそ！痛って・・・ああッ・・・あ・・・」

哲也は足は腿から下がなかった。血も次々に出る事から哲也の戦意はもうすでになく、痛みには耐えながら体をずって、コバトンから逃げようとしていた。

ギョーンギョーンギョーン・・・

昌哉が逃げる哲也にXガンで援護射撃をして、栞が哲也に近寄り、抱くとコバトンから距離をとった。

コバトンは昌哉の射撃に空に飛び上がると、標的を哲也から昌哉に変えた。

「落ち着いて・・・落ち着いて対処しろ・・・俺ならできる・・・」

昌哉は落ち着いて空飛ぶコバトンにトリガーを引き続けていた。当たっている様子はまったく無かったが、昌哉はそれでもトリガーを引き続けた。

「接近戦の事も考えなくては・・・」

昌哉はホルスターから刀を取り出すと伸ばしに伸ばし、その長さは10mはあった。

そして昌哉にコバトンが接近してくると、刀を振り上げて撃退しようとした。だが、それはやはり翼に防がれてしまった。

でもそれはそれで有効的なものだった。接近に対して先制攻撃を仕掛けたのでコバトンの攻撃が昌哉に来る事がなかったからである。

昌哉はそれを繰り返してコバトンを疲れさせ、隙あらば止めをさそうとしていた。

刀をガードしたコバトンにXガンを放つ、だがそれは避けられるとまた上空に上っていった。

「何回でも来い・・・そのたびに阻止し、攻撃を加えてやる」

そのころ、栞は哲也を物陰に避難させると、どうにか切断された足を治療しようとしていた。

「こ・・・こんな時はどうすれば・・・と、とりあえず止血しないと・・・」

どんどん顔色を悪くする哲也に栞は急いで止血する物を探し出した。

「なにか・・・紐か、布切れ・・・」

辺りを探すも、そんな物はどこにもなかった。そのせいで栞の顔に焦りが見え始める。

「ど……どうしょ……なにか……なにかないの？なんでもいいの……」

その時、栞の目に入っただのは木が立っている添え木から紐を採取する事が出来た。そしてそれを急いで哲也の足に巻きつけると、力強く縛った。

「あああああああああああああああ！！！！！」

哲也の悲鳴が栞の耳に届く。でもここで止血をやめれば哲也の命は潰れてしまう。そんな事を栞は思っていたが、本当はとも栞がそんな事を言える立場ではないのはよく分かっていた。だから、やるしかなかった。

それから哲也の悲鳴が響き渡るが、栞はなんとか治療を終わらせる事ができた。

「て……哲也さん……大丈夫ですか？」

「う……うう……ううう……」

なんとか生きていた、でもそれもあまり長くは無い、栞はそう直感していた。

そしたらどうすればいい？そんなの決まってる。星人に立ち向かおう、私はそう決めた。

栞はXガンを手にとって、星人の所に歩き出そうとした、その時に、誰かが栞の肩に手を掛けてきた。

「だ・・・誰？」

それは公だった。そして行くなと言っように栞の行動を止めると、刀を右手に星人の所に歩いていった。

「あいつを殺るのは俺だ、200点、200点が必要なんだ・・・」

19話

愛のあいであるものか（後書き）

ありがとうございました。

20話

200点を望んで（前書き）

坂田師匠は、ヒルクライムに似ている……。知ってるか……。

それととうとう20話に到達しました。

読んでくれている方々、真にありがとうございます。

これからもGANTZ 埼玉をよろしくおねがいします。

以上、Tさんでした……。では、本編をどうぞ。

温かい目で……。。

20話

200点を望んで

ギョーンギョーンギョーン・・・

昌哉が上空を飛ぶコバトンにトリガーを引き続けていた。だが、あれ以来上空から降りてくることはなく、俺達の様子を窺っているように思えた。

「まあ、そんな都合よく物事が進むわけ無いか・・・」

遠すぎて当たる事が無い、そう思った昌哉は撃つのを止め、敵の動きを見ることにした。

その時、昌哉が撃たない事を理解したのか、空高く両翼を大きく広げると、連続でその両翼を前後に動かしまくっていた。もちろんそれは昌哉は理解ができなかった。

「なんだ？なにしてんだ？」

そうやって見上げていると、何かがこっちに向かって落ちてくる物に気がついた。そしてそれは自分に当たる、そう思ったのでその場を移動するとさつき居たところにコバトンの翼に付いていた鋼の羽が高速で落ちてきた。

「くっそ・・・奴も遠距離攻撃できるのか・・・」

スーツが効かない翼だ、なら羽が突き刺さる可能性はあるだろう、昌哉はそう思っていた。

ギョーンギョーンギョーン・・・

「・・・なんだ？」

銃の発射音を疑問に思った昌哉は、辺りを見渡した。

すると近くに居た春魅がXガンで上空のコバトンを狙って撃っていた。それを見た昌哉は参戦せんと上に銃を向けると、春魅と一緒にコバトンを狙い、トリガーを引き始めた。

だがその連射はすぐにやめる事となる。それはコバトンが放った鋼の羽が雨の様に降って来たからである。

「くっ・・・あぶねえ!!」

昌哉はその鋼の羽の雨を避け始めた。と、それと同時に春魅が心配になり、降り続く羽の雨の中、隙あらば春魅の様子を見た。

そしてその様子を見たとき、昌哉は目を疑った。

地面に倒れる春魅、だが無傷である。そしてその前には公が刀を持って降り注ぐ羽の雨を弾き飛ばして守っていた。

そして羽の雨が止むと、地面には羽の餌食になった一般人の死体と、多量の鋼の羽が散らばっていた。

「ふう・・・」

公は刀をホルスターにしまうと、地に落ちているHガンとショットガンを拾うと、空飛ぶコバトンの行動を見計らっていた。

「なんなんだ・・・この公って男は・・・・・・・・」

昌哉は羽の雨が降り注いでいる時、避けるという選択を選んだ。普通なら、絶対に刀で弾くなんて選択は人はしないだろう、それは弾く時の技術が必要な事は勿論な事にして、リスクが多いという事があるからだ。

それなのに、この公って男は弾く選択をして、そしてそれをやってのけた。

どこの三国志だよ・・・、飛んでくる物を避けずに弾くなんて・・・、人間技じゃねえ。

つか・・・本当に俺より年下なのかよ・・・？考えられねえ・・・。

「公さん、また助けて頂いて、ありがとうございます」

「気にするな・・・それよりどこか物陰で俺の援護をしてくれないか？このミッションを終わらせる・・・」

「はいッ喜んで！」

春魅は移動を開始、近場にある公が開けた大穴に入ると、しゃが

んで様子を窺った。

「俺は・・・、なにかするか・・・？手伝える事、あるか？」

昌哉が公にそう聞いた。それを聞いた公は、年上なのにと一瞬思ったが、自分はこのチームのリーダー的存在という事、唯一の経験者という事を自覚し直した。

「じゃあ・・・春魅と同じで・・・援護を・・・」

「ああ、分かッたよ・・・」

昌哉が移動を開始、春魅とは逆の方向に歩き出すと、適当な草原に入るとしゃがんで様子を窺った。

「ふう・・・さあ、倒すぞ・・・待ッてろ、実夏、愛さん・・・」

公はショットガンを地に置き、ホルスターからまたも刀を取り出して伸ばすと、空を見上げてコバトンにHガンを構えた。

もちろんすぐトリガーは引かない。コバトンが接近した時の為の警戒であり、引く時のための準備である。

上空でコバトンが停止し、両翼を前後に動かしてさっきの遠距離攻撃の鋼の羽を降り注がせようとした。

その時に公は上空に飛ぶコバトンにトリガーを引いた。

ギョーン

すると公がトリガーを引いた事に気づいたのか、回避移動を開始した。

そしてどこかでプレスされた音が響き、公にもそれは伝わった。

「……………くっそ……………」

公は思わずHガンを下げて、俯いて後悔した。

その姿を見たコバトンは接近を開始、公に攻撃を加えんとした。

キーーーーーン……………

その時に公の口元には不敵な笑みが浮かんだ。

そして手に持っている刀で接近するコバトンに素早く突きを繰り出すと、串刺しにしようとした。

コバトンが公の刀をガードしようと腹部を向け、その腹部を右翼で包みガードをした。

ジャキンッ！！

翼に刀の先端が当たり、鉄と鉄の接触音が響いた。

パキ……………パキンッ……………バキッ……………

「よしッ・・・いけるッ！俺は勝てるッ！」

鋼の羽が少なくなった翼を突き抜け、刀が腹部に貫通、ついにコバトンの体に直接攻撃に成功した。

「よし・・・終わるッ終わらせるッ！」

コバトンは痛み苦しみからジタバタと暴れるが、公が刀を抑えている為に自由が利かなかった。

「埼玉県民じゃない！！非県民だ！！」

コバトンが叫ぶ、痛みに耐えながらもまだ諦めていないようだ。公は手に持つてるHガンのコバトンに向けると、早々にトリガーを引いた。

ギョーン

その時、コバトンが動き始め、その場からの脱出を試みようとした。むろん俺はそれを阻止しようと、手首に力を籠めた。

ドンッ！！

タイミングよくコバトンはプレスされ、地に大きな円形の穴が開いた。穴の中はコバトンの血だろうか、チャプチャプと液体と液体が波打つ音が聞こえてくる。

「・・・終わつたのか？・・・転送は？」

リーダーを取り出し、生死を確認する。

「なんだこいつ・・・まだ死んでないのか？」

リーダーにはまだ反応があり、生きている事を表していた。

「さい・・・玉・・・け・・・ん民・・・じゃ・・・」

血の海の中からコバトンが出現した、だがその姿はボロボロで、立っているのがやっとという感じだった。

両翼は公のHガンによって骨は折れ、羽は粉々に割れて翼に深く刺さり、全身の所々から骨が飛び出し血が流れ出ていて、もう長くない事を表していた。

「・・・ク・・・埼・・・たま・・・」

ボロボロの体を引きずって俺から逃れようと、少しずつ少しずつ距離をとっていった。

「春魅や昌哉さんの援護は・・・要らなかつたな・・・」

ショットガンを拾い、コバトンの頭部に向けてトリガー引いた。

ババンッ！

コバトンの頭部が破裂、息絶えた。

「これでツ終わりのはず・・・」

公の近辺に春魅と昌哉が近づいてきてコバトンの遺体を見つめた。

「公さん、終わっただんですか？もう星人はいないんですか？」

「レーダーには反応が無い、恐らくッもうそろそろ転送が始まる・・・はず・・・」

•

シ
シ
シ
シ

●
●
●
●
●
●
●
●
●
●

「あああッ！ヤべって……って……あれ？」

部屋にある黒い球から光線が発射され、部屋内に哲也が映し出された。

公の転送が開始されていた。

ジジジジ・・・・・・・・

公の目の前に哲也の姿がある。

「あ・・・・・・・・あ、公・・・・・・・・さん・・・・」

「・・・・・・・・今回も、生き残れた・・・・」

哲也を横切り、黒い球の前で膝について皆の生還を待った。

ジジジジ・・・・・・・・

栞が転送されてきた。

「・・・・・・・・哲也さん・・・・・・・・足なんて治って・・・・」

栞はそう言ったが、大体理解したのか口を閉じた。

そして残りの春魅と昌哉が順番で転送されてくると何も言わずに部屋で立ち尽くした。

00:13:27

「時間内か・・・そろそろ採点が始まる・・・」

チーン

それでは採点をはじめる

この時、少なからず皆は緊張していた。

哲也くん

10てん

TOTAL10てん

あと残り90てんで終わり

「10点・・・って俺か？」

哲也が微笑しながらその採点をみていた。

自衛隊員（しばう）

0てん

その道はまだまだ険しいんじゃない？
期待してたのに」

「これは・・・俺なのか・・・間違っではないいな・・・」

昌哉は普通に笑みも浮かべずに真顔でそれを見ていた。

殺人鬼

0てん

哲也を殺す前に
しっかりと星人も殺しなさい

黒い球に映るその画像に誰もが驚いた。

「これって朧だよな！？」

哲也が朧を見て疑いの目を持ち始めた。

「なんでこの部屋に着たのかちょっと謎だったけど、お前だったのか……？」

「え……いや……あの……」

栞は何も言えなく、涙目で廊下に向かって走っていった。

「私が、悪いんだもん……どうすればいいのか……」

ハルミ

0てん

公に守られてキュンときすぎ
ってか、見つめすぎ

「え……？ええ！？なにこれ！！ええ！？」

春魅の顔が時間と共に赤みが増していき、心拍数が早くなっていた。
った。

「まじで？え？いやいや、犯罪だよ……」

公が場の空気を読まぬ発言をしたため、春魅を追いつめてしまい、
赤ら顔で俯いてしまった。

公ちゃん

68てん

TOTAL84てん

あと16てんで終わり

「お・・・おお！おッし、あと、16点でッ！」

思わず公はガッツポーズをしていた。そしてその顔はもうすでにやり遂げたような顔をしていた。

「すごい・・・さすがは・・・公さん・・・」

春魅は赤ら顔ながら小声でそう呟いた。

そして黒い球の画面が消えると昌哉が公に質問をぶつけた。

「画面が消えたが、これからどうなるんだ？帰れるのか・・・？」

「ああ、帰れる・・・ますよ、ドアはもう開くはずですよ・・・」

それを聞くや、昌哉は玄関に続く廊下に向かったが、その前に哲也が昌哉を追い越して廊下に向かって行った。

「おい、栞ッ」

哲也が廊下の隅で蹲ってる栞に声を掛けたが、栞は返事をせずにとただ震えていた。

「おい、栞ッ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・べつに気にしてねーって、なんか喋れよッ」

「ごめんなさい・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・・私が・・・・・・・・あなたを・・・・・・・・」

「殺したのか・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・はい、ごめんなさい」

「・・・・・・・・謝って許されるのかよく分からないけど、こうして生きる訳だし・・・・・・・・そんな落ち込むなって・・・・・・・・気分が悪いぜ・・・・・・・・」

「私は許されない事をしたんです・・・・・・・・許されない事を・・・・・・・・」

「・・・・・・・・俺は生きてる・・・・・・・・だからそのくらい許してやるよ・・・・・・・・それに、思い出したんだけどさ、ミッション中お前俺を治療してくれただろ？それでチャラでいいよッ」

「私が貴方を殺さなければそんな目には・・・・・・・・」

「俺が許すって言ったなら許す！そしたらお前は黙って笑えよ！黙って気持ちを切り替えるよ！」

「・・・・・・・・う・・・・・・・・うん、あ・・・・・・・・ありがとう」

哲也の発言に驚いている様だったが、俯きながら栞は微かに笑った。

（・・・いま、俺たちは青春の１ページを見ているのか・・・）

（昌哉さん・・・趣味悪いっすよ・・・）

（公さんも見てるじゃないですか・・・って私もか・・・）

「・・・なに覗いてんだよ、悪趣味野郎達だな・・・」

（昌哉さん、ちょっと俺奴に２、３発お見舞いしてきます、先輩への口の聞き方ってやつを教えてやらないと・・・）

（ダメですよ〜公さん・・・）

廊下の壁越しに公が必死に哲也を殴りに向かおうとするが、それを昌哉と春魅が必死に抑えていた。

（やめる公！奴はスーツを着ているんだぞ！殴っても痛くないだろ！）

春魅と昌哉が抑え、言葉で諫めたために、公はやっと怒りを治めた。

「はぁ・・・まぁ・・・いつか・・・」

公はそつため息をつくと部屋にある服に黙つて着替えて帰路に着いた。

21話

思考解明

皆が皆で着替え、マンション前の広場まで歩くと昌哉が皆をひきとめた。

「皆、少し時間はないか？あるならどこかに寄って話さないか？」

公は察して部屋の事を聞きたいのだと思いを承、哲也と栞はよく分かっていなかったが一応了承、春魅は一時は断ろうとしていたが流れで行く事になった。

そして一行はマンションの近場にあったファミリーレストランに入場すると適当にテーブルを挟んで座った。

「で、なんですかね？なにか聞きたい事があるんですか？」

公が理由を昌哉に尋ねた。

「出来る限りあの黒い球の部屋の情報が欲しいからな、公の言える範囲で全てを俺達に教えてくれないか？」

公は断る理由が無いから普通に引き受けた。

「でもなにから話せばいいのかな・・・何か質問ぶつけてくれよ」

4人が互いの顔を見合う、とりあえず皆を集めた昌哉から質問をする事になった。

「うん・・・じゃあ、お前が昔経験したミッションを俺達に話してくれないか？」

「はい・・・いいですよ・・・」

その後俺は皆に今まであった2ミッションの事を覚えてる限り全てを話した。

「なるほど・・・最初のミッションはマッチョサプ星人で2回目がつる花星人・・・」

「最初のミッションは楽に終了に持ってけたんですけど、2回目はない知識の中という事もあってほとんどの仲間が死にましたよ・・・」

「ふッ・・・なるほどね・・・で、その中で生き残ってきたと・・・」

「まあそうですね、皆で協力しあってなんとか・・・」

哲也と栞、春魅はその話を聞いて暗くなった・・・が昌哉は真顔でそれを受け止めた。

「次の質問いいか？」

早々に昌哉が次の質問にうつり、公も了承した。

「愚問だらうけど、俺は生きてるのか？」

「ああ、生きてる・・・死ぬ前の自分通りだ・・・」

「そうか・・・」

昌哉の眼から涙が溢れてきて拭う行為を数回繰り返した。

「おい・・・あの・・・」

哲也が公に声を掛けた。

「質問いいか・・・？」

「ああ、好きに・・・」

「K a t a s t r o p h e っ て なん なんだ・・・？」

「・・・・・・」

カタストロフィと言えば確かあの「黒い球の部屋」のサイトである。いろいろ書かれていた・・・、本当なのかどうなのか怪しいものだ・・・。

「今この日々は常に運命の日に向かって進んでいる・・・K a t a s t r o p h e、それは真実」

「まったく分かんないんだけど・・・結局なにが起こるんだ？」

「分からない・・・知らない・・・」

「なんだよ、龍と同じかよッ・・・」

哲也のその発言に公は顔を歪めたが我慢して次の質問を受け付けた。そしてその時に春魅が質問をぶつけた。

「あの黒い球には名前とかないんですか？」

その質問に公は一瞬固まったがすぐ我を戻しテーブルにある氷水を飲んだ。

「うん、まああるにはあるけど・・・その質問がくるか・・・」

「俺が友に見せてもらったサイトだと『GANTZ』って言ったよな・・・」

哲也が横からそう喋った。

「そうだな・・・他のチームはそう呼んでる・・・けど、俺達のいる黒い球の部屋にはないな・・・」

「これから付けますか・・・？」

春魅のその発言に黒い球に名前をつける空気になった。

「GANTZでよかねーか？」

哲也がそう発言すると栞は首を縦に振って賛成した。だが公は首

を横に振って異議を唱えた。

「それじゃそのチームの真似だからやだな・・・独特感のある名前がいい・・・」

「私に意見がありますッ!」

春魅が立ち上がり皆の注目を集め、一番に発案した。

「ももちゃんがいいですッ!」

「ももちゃんッ?なんでそんな名前に・・・」

公が理由を春魅に聞いた。

「採点の点数が1000だった時点でなにかあるんでしょう?だったら黒いとか球とか無視してももちゃんで行きましょう、ももは百とも言いますし」

納得しているのか皆の口からは声がでなかった。心底独特感是十分にあるが、ありすぎて可愛いって所に言葉が出ないんだろう。

「・・・いいんじゃないかな、ももちゃん・・・」

「ああ、いいのかな・・・いいと思う」

公と昌哉は静かながら賛同した。だがその名前に不満を抱く奴はいるもので哲也の眉の真中にはしわが寄っていた。

「ダメだってッ!カッコよさが無いッてッ!もっとカッコいい名前

「がいいだろっツ！」

「ももくん……………」

哲也が真面目に反意を唱えている時に春魅が何気なくそんな一言を言い放った。そしてそれにより、哲也は一時停止して諦めるように席にゆっくりと座った。

「もういいや……もちゃん……くんでいいや……」

だったらお前だけガンツと呼ばばいいのにと公は心の中で思っていたが、仲間心が強い奴なんだろっ……そう思うことにした。

「ん…………9時回るぞ……」

昌哉がポツリとそう呟くと同席の春魅を見てまたも呟いた。

「お前中学生だよな……大丈夫なのか……？明日学校とかないのか……」

「あ……そうですね……それじゃ私は御暇します……」

「一人で帰れるのか？誰か送った方がいいよな？」

公が提案、それを聞いた残りはどうするかと悩み首を傾げた。すると昌哉待ってましたと思わんばかりに公を見た。

「公が送ってやれよ……」

「え……でもあれじゃないですか？質問受けれるの俺だけですよ・

・・・？」

「いいさ、今日で全部を聞く必要はないだろうし、お開きって事にしようぜ」

昌哉の発言で公と春魅は早々にレストランを後にする。そして哲也と栞が席を立つと黙ってレストランを出ようとした。が、それを昌哉は引き止めた。

「おい、お前らはもう少しここに残ってくれないか？話したい事がある」

「ああ？なんでッ・・・お開き・・・」

哲也は言いかけたが少し考えると、何かに気づいたのか黙って再び席に着いた。無論栞はつられるように席に着いた。

「で・・・昌哉さん、なんですか話して？」

栞が横目で2人のやり取りを見ている。

「話しと言つのは前からあの部屋で戦っている公という奴の事だ・・・」

「公・・・そいつがなにか？」

昌哉が鼻元で軽く笑った。

「簡単だ・・・奴をみてどう思う？」

「は……？別にどうとも……なんで質問を？」

「いいからお前の思ったことを言え」

「……なんでしょうね、普通ですよ……別に性格が特別良くも悪くもないと思いますが……あ、戦闘はハンパなく強いですよ、剣を持つてる星人と互角以上で勝ちましたからね……」

「そうだ……奴は強い、とんでもなくな……だが奴の強さはそれだけじゃないはずだ……ただ強いだけじゃない……」

「何か特別な強さを持つてると言うんですか？」

「その通り、そして俺はその強さに今回のミッションで気づけたものと思う……」

哲也はなにも言わないで昌哉の話を聞いた。

「その強さは我が強いとは違う、なにか精神の強さだな……悲しみに潰されずにやるべき事を前にした時に、何気なくそれを優先する……」

「なんすか……それ……特質ってやつすか？」

「わ……私、それを少し思いました……あの愛さんて言う人が死んでしまった時にあの公という人は気に掛ける事無く、星人と戦闘を開始しました……」

栞が少し俯きながら小声でそう言った。

「そうだろう・・・？奴はそんな事をしたんだ」

「それってさ、最低な性格ってやつなんじゃないの？今の日本ならそうやって誰も気に掛けない奴は沢山いる・・・」

「いや、奴はそうじゃない・・・春魅を迷う事無く守っていた」

哲也は黙り込んでしまった。よく分からなくなってしまったのだろう。

「普通はいままで戦ってきた仲間や家族が目の前で死んだ時は、思わず目が行ってその真実を見届けようとして敵に背中を見せてしまふもの・・・だが奴はそれをしない、いや出来ない」

「出来ない・・・？」

「悪魔で考えだが、奴は昔なにか辛い思いでもしてたんじゃないか？」

「それと出来ないのどんな関係が・・・？」

「よく無いようである話したが・・・過去に辛い思いをした人間は人間不信に陥る奴がいるだろう？・・・うん、たとえ話をしよう・・・過去に学校で酷いいじめにあったとする、そうすると大体の人間は人間不信に陥る事がある、そうすると人間と話すたびに警戒し、信じて良いのかダメなのかを意識しなくても考えるようになる。さらには感情移入を意識しないで怖がっていて、意識では信用しているが心奥底では少なからず完全に信じたりはしない・・・裏切られても辛くないように・・・」

「つて事は公は昔に辛い思いをした可能性がある・・・つて事か？」

「まあな・・・感情移入が少なければ仲間でも、死んでも辛くないし・・・」

「それつて・・・結局は最低な人間じゃないか・・・」

「ふッ・・・考える・・・意識では善の行ないをするのは当たり前と根付いている・・・いや、奴は進んで善の行ないをするだろう・・・分かるか・・・？」

「分かったような分からないような・・・」

哲也は首を傾げていたが頭には残しておこうと思った。

「・・・他の考えはとかはあるのかよ？」

「勿論・・・」

哲也が教えてくれと言わんばかりにそわそわし始めた。

「他の考えはさっきと似てるんだが、辛い思いをし続けて慣れた・・・もしくはこれから来る辛さに目を背けた・・・もしくはただ普通に悪い奴なんじゃねーの？愛は利用されていた・・・しようとしていた・・・みたいなの？」

「ああ・・・昌哉さんつてブラックですね・・・仲間にその言いようつてか、なんかよくみてますね・・・」

「ふッ・・・奴に興味が湧いたんだ・・・あんな奴が本当に世の中

にいるんだなって・・・」

「公の行動をみてこれから答えをみつけるんですか？」

「そのつもりだ・・・実際、奴から学べるものは沢山あるしな・・・見て損はないだろう」

昌哉が小さく微笑んだ。その目は公の何かを吸収しようという学の目だった。

哲也はその目を見てポカンとしていたが、深く考えずに公はこういう人間なのでは？と言ってみた。

「つまり・・・ちょっと変わった良い人ですね・・・」

その発言に昌哉は何も喋らずに考えていたが、「まあ、その通りだろう」という顔をした。

「それは間違っていないだろうが、ほとんどの他の人も当てはまるぞ・・・」

大雑把にまとめたなと昌哉は目で伝えていたが、哲也は気にしないでいた。

「で、話してそれだけですか？」

「ああ、それだけだ・・・公という男がどういう存在か、俺の考えだがそれを伝えておきたかったんだ・・・」

「なんのために・・・」

「お前が公と接する時に何かしら意識するのを望んだからだ・・・
うん、・・・じゃあな、公の事でなにか気づいた事があつたら次俺
に合うときに知らせてくれ・・・」

昌哉はそう言い残すとレストランを静かに後にした。

「それだけ・・・かよッ！・・・公の事なんて考えてる暇・・・な
いよ、はつきり言つて・・・自分でいっぱいいっぱいだつて・・・」

哲也はゆっくり席を立つと、レストランを後にしようと思ったが
俺はすぐに席につくと栞方面を向き小さく相談した。

「栞・・・なんか、飲み物でも飲んでいこう・・・」

「え・・・いいですけど・・・なんでです？」

「店員の目が痛てえ・・・」

レジの側にいる店員は万遍の笑みを浮かべながら立っていた。だ
が、哲也はなにかしらオーラを感じたのだろう、故にその提案を栞
にした。

「じゃあ・・・私は葡萄ジュースで・・・」

・・・

どこぞの駅か、そこは埼玉県内である事は確か・・・そしてそこからは電車から降りてきた公と春魅が出てきていた。

「へ・・・俺の家と1kmと離れてないのか・・・遠いような近いような、それにしても春魅が通ってる中学は俺も昔は通ってたぞ・・・」

「本当ですかッ！すごい偶然ですね・・・」

「まあそうだな・・・近いよな・・・家・・・」

公がそう言っていると春魅は足を止めた。

「ここからだともう家近いんで大丈夫ですよ？それじゃあお休みなさい・・・」

春魅が公から距離をとって自身の家に向かって走っていく、それを公は何気なく見ていた。そして公も家に帰ろうと思った時、春魅の足が止まって公に向かって振り向いた。

そして公に聞こえる位の声で遠くから喋り始めた。

「あの・・・これから100を取るまでの部屋に呼ばれるんですよね・・・」

その通り、公は首を縦に振った。

「じゃあこれから・・・次のミッションもよろしくお願いしますねッ！・・・」

「ああ・・・うん・・・よろしく・・・」

公の返事は明らかに春魅には届いてなかったが、手で返事をしたためか春魅はお辞儀をすると振り返ってまたも走り出し、暗い夜道に消えていった。

「次のミッションよろしく・・・次も守ってくださいってか？・・・
なわけねーか・・・」

公は「ああそういえば今日は学校じゃないか」と思っていたが、
「まあ今日はミッションがあつたし、どうでもいいか・・・今日だけ特別・・・」と思いながら満天の星空を眺めながら家に歩いていった。

・・・

哲也や栞と分かれた昌哉はひたすらに家に向かって走っていた。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・俺はッ生きてるッ・・・家に帰れる・・・」

荒い息づかいで歩いて休むという動作は一切見せずにただただ走り続けていた。

「母さん・・・怪我してないかなッ・・・無事だとッいいなッ」

昌哉の家はどうやら部屋からはそうは遠くはないようだ、だから電車にもタクシーにも乗らずにいる。

そして走り続けて数十分、昌哉は自分の実家に到着する事が出来た。

家はどうかやら何事もない、ガスが漏れて燃えていたのだから全焼は覚悟して帰ってきていたのだ、だから嬉しさの心を感じたいが覚えて堪えて、門を通り過ぎると玄関のドアをゆっくりと開いた。

ガチャツ・・・

鍵は掛かっていたいなかった。ゆっくりと全開に開くと俺は靴を脱ぎ、とりあえず俺が死んだ場所、台所に足を進めた。

台所の80%は真つ黒に染まっていた。そして少しだがリビングも黒く焦げている所があった。そして台所の黒い焦げの上には白く消化液が多量に噴出された跡があり、誰かが消化をしたと思わせた。

水道の蛇口近くに焦げ跡があり、俺がどのように死んだかを明確に思い出させる。

「母さんは・・・どこだ・・・？」

はつきり言ってそんな焦げ跡より、母さんの安否が心配だった。無事なのだろうか、否か・・・とりあえずこの家にはいない、それは空気の流れて大体は予想できた。

病院行ったのかな・・・？それしか可能性がない、どんなに軽傷

でも病院行かないのはありえないと思ったからだ・・・。

「ん・・・・・・・・？あれ？なんかおかしい気がするな・・・」

母の事ではない、自分の事でなにやら納得いかない部分があったからだ。

「俺は母さんの目の前で息絶えた・・・・・・・・だとすると俺が無傷の状態で帰ってくるのはなんかおかしい・・・・気がする・・・・」

納得がいかない・・・・。

なにか府におちない・・・・。

もし俺が無傷の状態で母さんの目の前に出現したらどうなる？と思う？俺だったら確実におかしいって思うだろう、きっと他の人も同じだ・・・母さんは俺が燃えたと認めなくとも、それが真実・・・認めざるを得ない・・・・。

それに公は死んだら遺体は恐らく回収されると言っていた・・・・。だが俺は俺が燃えて苦しんでいるところを母さんが見ている・・・・。

だとしたら・・・・・・・・だとしたら・・・・真実と俺は矛盾しているじゃないかッ・・・・。

確か公は言っていた・・・「部屋の事は誰にも言わない方がいい、もし黒い球の部屋の事が近い人間が信じる事があれば頭に搭載された爆弾が起動する・・・」

俺は不安に心を支配されていた。誰でもなるさ、理に合わない・・・

・この結果は・・・。

ガチャンッ・・・・・・・・

玄関のドアが開く音が聴こえた。そして廊下を誰かが歩いてこちらに向かってきていた。

（ど・・・どうするッ？ここにいるかッ？どうする・・・どうする・・・ッ！）

体はすでに動いていて、台所近くの裏口玄関の戸を開けると靴を履いてない状態で外に飛び出していた。

「あれ？今誰かいなかったか？」

「あほかよ・・・この家には今は誰もいないだろうが」

聞き覚えのない声がさつきいた台所から聞こえてきた。

「あゝあ・・・ガス栓完璧に逝かれてるわ・・・どうやったらかうなるんだ？」

「いじったんだろ・・・栓を閉めようと手入れして、中途半端になつて悪化・・・そんなところだろう・・・」

どうやら俺の知っている人物ではない、それに会話を聞くにどこ

その専門の人か、警察だろう・・・だが、ここからはどんな格好をしているのかは確認が難しい、下手すれば見つかってしまう。

なので、俺はしばらくその2人の会話を盗み聞く事にした。

「にしてもよ・・・災難だったよな・・・この家・・・息子さんは重症だつて話じゃないか・・・」

「母親の方も腕全般が火傷だつてさ・・・母子そろって入院だよ・・・」

言葉が出なかった・・・息子さんは重症？どういう事だよ・・・。

意味が分からない・・・なんで・・・？誰か他の人が・・・いや、一人っ子だ・・・じゃあ誰だ・・・？俺以外に誰が同じ思いをしたんだ・・・。

母子そろって入院・・・。

寒気がする・・・いままで感じた事の無い不安が・・・俺を・・・俺を・・・。

「俺は2人いるのか・・・？」

なぜ？どうして？理解し難い・・・。

もし、俺が・・・生きて・・・いたならば・・・。

話は・・・通る・・・。

俺の考えが・・・考えが正しければ・・・。

俺は作り出された人間・・・。

公が言つてた事とは異なる。

生き返らせてもらったじゃない・・・。

俺は新たに作られたんだ・・・。

死ぬ前に・・・。

コピーだ・・・。

俺は・・・俺じゃない・・・俺とは他人だ・・・。

しばらくそんな絶望を考えて、俺はその場で立ち尽くした。どのくらい立ち尽くしたのかは分からない・・・ただ分かるのは・・・いやッ！そうであってたまるかッ！たまるもんか！！俺は生きている、偽者じゃない、病院に運ばれたのは俺じゃない他人だッ！！

「。。。病院に運ばれたってさ・・・あそこは・・・・・・・・」

病院名を2人のどちらかが発言すれば俺は無我夢中で走り始めていた。

真実を確かめに・・・・・・・・。。。

目の前が歪んでろくに前も見えないのに昌哉はただ・・・ただ・・・。

22話

休息の終わり

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・ッ！」

目から溢れ出てくる水を拭っても拭ってもきりが無い。

そして走り続けて幾数分、家に向かっていた時の速度より比べものにならない速さで病院に向かっていった。

「俺はッ！認めないッ・・・俺はッ・・・」

乾いた呼吸の中、体はもう走るなと足に痙攣で知らせる。だがそれを無視してただ真実を求めて、止まる事はなかった。

時間帯はすでに11時を上回っていた。そして、昌哉はふらつきながらも目的地の病院に到着した。

「はあ・・・はあ・・・ここか・・・？」

とりあえず深呼吸を繰り返して自分を落ち着かせた。そして震える体を抑えつつ、ゆっくりと病院の敷地内に足を踏み入れた。

と、その時、病院から誰かが出て来た事に気がつき、俺は悩まずに自然と敷地内に止まっていた車の影に隠れ、出てきた人を確認した。

「あ……………」

俺の…………母さん…………だ…………。

両腕に包帯をグルグルに巻かれていて、顔、胸に薬品やバンソウコウを貼った母さんが病院内から泣きながら出てきて、止まっているタクシーに乗り込むと病院を後にした。

なんとなくだけど、母さんが無事であった事に喜びを見出せた。心が少しだけ軽くなった気がする…………。

「あとは…………俺の…………確認か？」

やりたくない事だが、やらなきゃいけない…………いずれは嫌でも知る事だから…………だったら今知っておこう、今知るしかないんだ…………。

病院内に入り、病室を片っ端から覗いて俺の有るか分からない存在を探した。偽かどうかを確かめる存在を…………。

何室も覗いた…………、こいつは俺じゃない…………それを確認できるたびに俺の心は軽くなっていく、だがその度に呼吸が荒くなっていた。

「いない…………俺は…………いないッ！」

そう確信が持てようとしていた時に、俺はある廊下を通過しようとしていた。

ガラス張りの壁、その向こうには医療機器が大量に並んだ部屋があった。

そしてその部屋を覗くと数台ベットが並んでいて、その上には数体の人間が乗っている。

そのとき、俺はその中の一体の人間に目が行った。

どこかで見たことがある・・・布が掛かっていて体は見えない、顔は包帯でグルグル巻きになっていたが、その人間の口元は見れた。そしてその口元を確認するとなにやら見覚えがある事に気づいた・・・。

『シュコー・・・シュコー・・・シュコー・・・』

酸素を吸い吐きしている事が微かながら聴こえる・・・その呼吸の音もどこか自分に似ている気がした。いや、完璧だろう・・・あれは俺だ・・・。

いつの日も鏡をみれば、写真をみれば確認できた顔・・・それと同じ顔の口元があるだから・・・。

もう涙はでなかった・・・。

あまりショックも感じない・・・。

そんな事より自分はこれからどうすればいいのか、という考えが

生まれた。

だが、目の前にしている自分を見ているとそれはまったく浮かばなかった。どうしようもない・・・と言わべきなのだろうか、とりあえずこの病院から出ることを決めた。

そして病院から出ようと歩き始めた。・・・途中看護婦やら患者とすれ違ったが気には一切とめなかった、今は考えなきゃいけない事が多すぎるからだ・・・。

病院の門の前に到着、その時に俺は何気無く振り返って病院を眺めていた。みて何か思ったとかそういうのは全然無かった・・・。ただ振り向いて見ただけ。

門を越え、誰も通らない真つ暗な夜道を歩き始めた。

「もう・・・どうしようもない・・・なるようになるだけだ・・・」

そしてとぼとぼと適当にそこらを歩いていると、なにかポケットに入っている事に気がついた。それはあの黒い球の部屋から持ってきたものだ・・・。

「公は・・・レーダーとか、言ってたな・・・」

そのコントローラーの機能は昌哉は知っていた。もちろん、それは公から聞いた事だが・・・。

・・・

公がベットに横たわる。そしてなにやら独り言をぶつぶつと言っていた。

「今回は新人が来たけど・・・愛さんが死んだ・・・」

涙が溢れてきた・・・毎回だ・・・ミッション中はなにか感じたり涙を流したりはしないのに、ミッションが終わって時間が経ってからだと実感が湧いてくる。

なんでこんな・・・今なんだよ・・・遅いだろ・・・。

部屋に居たときは黒い球が再生してくれる・・・そう思ってたけど、家に帰るとなんか現実味が湧いてくる・・・まあ、あっちも現実だけだね・・・。

「1回目の100点クリアの時に実夏を再生しとくんだったかな・・・」

いや、ないな・・・今回はその100点で手に入れた武器のおかげで生き残ってるのが少なからずあったはずだ・・・多分。

ってか、実夏再生しても、また死なれたりとか・・・そういうのがあったら意味ないしな・・・。自分が強くなってから、強い武器を手に入れてから再生した方がいいよな。

まあ、実際俺にそんな余裕があるわけじゃないけど、少なからずの望みだよ・・・手に入れようと思った者のみを手に入れられる・・・

・誰かが持っていたとしても、気づかなきゃ意味が無い・・・。

公は、起き上がり手を上に向けると呟いた。

「頑張るぜ・・・俺、実夏も愛さんも・・・待っててくれよ・・・」

ん？ちよつと恥ずかしいかも・・・いや、気にしない・・・。

・・・

暮れて暗くなっていた空が明るくなり、太陽が山々から顔をみせた。そう、朝になったのだ。

鳴り響く目覚ましにベットで寝てる誰かは手を必死に伸ばしてその騒音を黙らせようとしていた。

「あ・・・朝ですか・・・残酷な・・・目覚ましです」

どうやら寝ていたのは春魅らしく、長い髪はぼさぼさでベットの上でしばらく機能を停止していた。そして時計の針は6時を指していた。

「・・・ツは、いけない・・・髪をセットして、朝ご飯食べて・・・グウ・・・」

座った状態での睡眠、春魅はこれから20分程度そのまま眠る事になる。

「こらッ！春魅ッ！いいかげん起きたらどうなの！？学校遅刻するよッ！」

その20分後に春魅の姉が本来ある怒りを抑えながら起こしにきた。

「今いきまゝす・・・はいはい・・・」

さっきの20分で少しは目が覚めたのか、難なく一階に降りた。

そして1階のリビングに到着すると早々に朝ごはんを食べ始めた。そして何気なくテレビに映っているニュースを見ると、昨日戦闘があつた大宮の出来事が報道されていた。

「昨日午後7時、大宮、大宮駅西口にて謎の現象が次々に起こりました。」

近隣の公園の急な地盤沈下

駅周辺の多量殺害 死傷者 12人・・・

駅構内でも死傷者 3人

警察によつて今だ調査は続けられていますが、これといった証拠は見つか・・・」

え・・・なにこれ？昨日の事・・・だ。

本当に経験してたんだ・・・戦闘・・・。

寝起きで昨日の事はちよつとばかり忘れていた春魅は今、しっかりと思い出した。

「なんだつたんだろ・・・あの戦闘は」

「こら、春魅学校遅刻するよ」

またも姉から急ぐよう注意をされ、慌てた春魅は早々にご飯を食べ、身支度を整えると急いで家を出ていき、学校に走り出した。

本当は学校には行きたくないと心底思っているが、昨日体験したあの出来事と比べればなんともくだらない事である。

なにがいじめだ。なにが辛いだ。人をいじめて楽しんでいる人達は、なんとくだらないことをして楽しんでいる人達だろうか。人であるなら、人を助けて楽しまないとだね。人をいじめれば自分を殺してる。人を救えば自分を生かしている事になる。ふふ・・・私の答え。

っとそんな事をほのぼの考えている暇はなかった、急いで学校に向かわないと。

春魅は走るペースを上げると、学校に急いだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

時は昼がすぎ、昼食がすんだ頃、とある高校の廊下で、だらだらしながら地面に座り込む龍に、哲也はその近くで立ちながら質問をぶつけていた。

「おい、龍、昨日お前が俺に見せてきたサイトを見せてくれよ」

「なんだよ・・・哲也。昨日はまったく言っていないほど興味を示さなかったのに、今頃になってどうしてそんなことを聞いて来るんだ？」

「きよ・・・興味が湧いてきたからだよ」

「えゝでもなー今日PC持ってきてないんだよなー残念な事に。つてか、なんで急にそんな興味をもったんだ？」

「えつと・・・えーと・・・そう！ 今日朝に大宮で障害事件あっただろ？ それがなにかそのサイトと関係性があるんじゃないかなーと思っただからだよ」

「へー・・・。それは俺も思ったけどさ、朝にPC覗いたら・・・とくに情報はなかった。皆たいして興味示していなかった様子」

「・・・でも、今はそんなの別にいいんだよ！ 見たいんだよ！
・・・じゃあ、とりあえずそのサイトのことを教えてくれ！」

「なんだろう。やだ」

「・・・おい！ ふざけんなよ！ 笑い事じゃねーんだよ！」

「は・・・？ なんで？ 大宮で知り合いが被害にでもあったのか？」

「いや・・・ああ、そ・・・そうだよ！ 親戚の友達・・・が」

「おもいつきり他人じゃねーかよ・・・。普通興味は抱かないだろ、そういうのには・・・」

くっそ・・・龍はこういうときだけはなんかケチになりやがる。昨日公に聞いとくんだったな・・・。

「もういいよ・・・。自分で調べる・・・」

教室に戻り、荷物をまとめると、家に帰るために歩き始めた。

「おいおい、わかったよ。ごめんごめん、学校途中だけど、今から漫喫いくッ？」

「・・・ああ。行く・・・。金は出す」

2人して学校を出て行くと、漫画喫茶に向けて歩き出した。

・・・

哲也と龍が学校を後にした事を何も知らないで、机に体を突っ伏して考え事をしている栞がいた。

「哲也さん・・・良い人だ」

思わず気持ちを口にだして言うてしまった。伏してある体を起こして周りをキョロキョロ見渡すと、誰か聞いている人がいなかったかを確認した。

まあ、いてもいなくても、どうしようも出来ないんですけどね。

それにしても、よく哲也さんは私がした事を許してくれたな・・・
・なんでだろう？ やっぱり、自分は生きているって事が理由なのかな？ でも、普通許したりしないよね。だって、生きているにせよ、1回死んであの変な部屋に行かされたわけだし・・・。ただの善意で許してくれたってことですよ・・・それ以外ありませんね・・・。

にしても、哲也さんに会いたいな・・・今休み時間だから、会に行こうかな？ でもな、恥ずかしいからな・・・やめとこうかな？ やめとこ・・・会っても顔がすっかり見れなさそうですからね・・・。

体を再び突っ伏し、腕で顔を覆いながら哲也のことを想っている栞であった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「龍、結構騒がれてるじゃん・・・ほら」

哲也がPCの画面を龍に見せた。

「マジか・・・皆、実際に大宮行ってみて、写真取ってきてんだな。これは、時間と共に、話が大きくなっていくぜ・・・」

「だろうな・・・」

黒い球の部屋のサイトには、それぞれが撮ってきた大宮の写真が数枚載せられていた。もちろんその数ある写真は、昨日見た大宮の景色と同じものだった。

「大宮の事件もやっぱり、部屋の住人がやったと言われてるな。俺もそう思ってるけどな・・・」

「なあ、龍・・・」

「・・・あ？　なんだよ？」

「もし、この黒い球の部屋に行けるとしたら・・・お前行きたいか？　そして星人と戦いたいか？」

「唐突だな・・・。まあ・・・、行けるんなら、行きたいかもな・・・
・ どういう所か、どんな星人が出てくるのか、興味があるからな・・・

」・

「なるほど・・・」

「なんでそんな事聞くんだよ？　なんか今日のお前は可笑し過ぎるぞ？」

「いや、なんでもねえーよ・・・ってか、もう知る事知ったんだし、もう出ようぜ・・・」

「・・・ああ。いいよ・・・」

哲也が前を歩いてレジを目指す。その後ろの龍は、その哲也を見ながら笑みを浮かべていた。

（哲也・・・。読めたぜ・・・。お前・・・なにかあったな・・・）

・・・

ゾクゾク・・・！！

「ああ・・・？」

公は、自分の首筋に寒気がした事に気づいた。

「嘘だろ・・・？　ミッションは、昨日あっただろう？」

仕事の終わっていない公は、急いで上司に早退を告げると、スーツの入ったバックを持って会社のトイレに駆け込んだ。

「連続かよ・・・生き残れるのか？ 俺・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

その寒気はもちろん哲也も気がついた。

「は？ 首筋・・・ミッション前の・・・」

「どうした？ 哲也？」

龍が哲也に質問を投げかける。だが、哲也はその質問には答えな
いで、レジに金を適当に置いた。

「龍・・・わりい、トイレ行ってくる。さき帰っててくれ」

「は？ トイレ？ 待ってるから・・・行ってこいよ・・・」

「いや、待つてなくていいからッ、さき帰っててくれ！」

哲也はそう龍に言い残すとトイレに走りだした。そして、急いで
個室に駆け込むと、便器に座って転送が始まるのを待った。

ピキンッ・・・・・・・・

「金縛り・・・転送、来るか？」

その時だった。誰かが個室の壁を越えて、俺の目の前に着地したのだ。

「よう、哲也。大をする時は・・・ズボンを脱ぐもんだぜ？」

「りゅ・・・龍！？ なにしてんだよ、お前！」

「別に・・・ってか、金縛りってなんなんだよ？」

哲也は何も言えなかった。動けもしない。もし、転送が始まって龍に見られたときに、黒い球にないをされるか、不安の為に、額に汗が流れ始めた。

「動けないって事は・・・これから何かあるのか？　おい、哲也？」

龍が哲也の肩に触れた。そしてその時に、龍がピクリとも動けなくなつた。

「うッ・・・金縛り・・・」

ジジジジジ・・・・・・・・

哲也は龍の頭が消えている事に気づいた。

「転送が・・・始まった・・・」

「なんだ？・・・ここは、どこだ？」

哲也、龍。その2人が部屋にゆっくりと映し出された。

龍はその黒い球のある部屋を見たとき、謎めていた顔から万遍の笑みに切り替わった。

「マジかよ・・・黒い球・・・。 G A N T Z・・・本当にあったんだな・・・」

部屋には公など、今までのメンツと共に、新人が数人部屋にはすでにいた。

「きた・・・俺は・・・俺は、部屋に来る事ができたッ！」

龍はそう高らかに叫んだ。

23話

言葉の優しさ

「・・・はあ、腹へった・・・」

どこぞも知れぬ公園のベンチにて、昌哉はそう呟いていた。

だが、そう呟いても腹は膨れるはずもなく、食べ物が手に入るわけでもなく、これから先、いったいどうすれば良いのか、頭を悩ませていた。

「食べ物・・・欲しいけど、金は・・・ない」

家に帰って自分の財布を取ってこようか・・・でも、勇気がでない。

じゃあ働こうかと思うけど、働けるわけもない。どうすればいいのか、今もっているものは着ている衣服とスーツ、あとはこのレーダーとかコントローラだかの機械。

適当に町から町へ目的もなく歩き続けた。

すると、道端の小さな電気ショップにて、テレビが速報でニュースをしていた。

昌哉は、昨日の大宮の事だと思い見ていたが、内容はまったく異

なつたものだった。

「新宿大虐殺・・・死傷者387人・・・テロ・・・
黒人男性・・・」

「な・・・んだ、これ・・・」

昌哉はこのニュースをみたが、とくに思うことはただ人が死んだ、
無差別殺害事件が起きた・・・そうとは思えなかった。関係ない
ことだから・・・。

テレビから目を逸らし、また目的もなく町を歩き始めた。だが、
あまりの空腹の為か、食を求める欲求は薄れていき、それどころか
気持ち悪さが昌哉を襲った。

「うつ・・・気持ち悪い・・・吐き気がする・・・」

2、3食抜くと、こんな事になるのか・・・。昌哉にとっては、
初めての事だった。

何かを食べなくては、このままでは、俺は餓死する・・・。それ
だけは、嫌だ。

気づくと、レーダーを片手にステルスモードを設定して、スーパ
ーの食べ物が多々並ぶ商品棚の前に立っていた。

「食わなきゃ死ぬ。 そんなのは、子供でも分かる」

だが、それをする為には、俺は、悪い事をしなければならぬ。悪い事、それは単純に俺が人間の定めた法を破って罪人になる行為だ。生きる為に、食べ物盗む。

許される事だ、俺はやりたくてやるわけではないのだから。ももの自分勝手に俺は振り回されたんだから、当然の事。

適当に、お握りを一個だけ手に持って店の外にでた。すると、昌哉は罪悪感に包まれた。だが、そんな感情より今は自分の心配の方が勝っていた。

昌哉は、スーパーから少し離れた場所で、そこらの家の塀に寄りかかって腰を下ろすと、何も喋らないでお握りを食べはじめた。

旨くない筈はない。旨すぎる。旨すぎて涙が出てくる。

「はッ・・・なんだこれ、意味分かんね。　ってか、もう、俺には初めての事が多すぎて意味がわからねえな・・・何が悪い事なのか正しい事なのか、考えれば考えるほど分からない・・・」

ゾクゾクッ・・・・・・・・

「寒気・・・ミッションか・・・」

お握りを食べ終えた昌哉は、動かないで転送を待った。そして金縛りによって動けなくなると、転送が開始された。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「どこだよこゝろ……マジどこ？」

「車運転してて……正面衝突……だよな？」

「なんで帰れねーの？ 意味不なんだけど……」

「あの黒い球……なんなの？」

新人4人が部屋の隅でブツブツ呟いている。メンバーは、それを無視して哲也に目を向けていた。

「哲也と一緒に……誰か、でてきた……」

公が疑問に思った。

「龍……お前……なんのつもりだよ」

「やべーよ……部屋！ 黒い球の部屋！！ GANTZ！！！！」

哲也の言葉を完璧無視して龍はそう叫んだ。そして龍は哲也から離れて黒い球に近づいて触れると、近くにいた公に話をかけた。

「その人。これ、黒い球は開かないのか？」

「まだ、音楽鳴ってない………。哲也……こいつはなん

なんだ？」

龍が「ふん」と頷くと、黒い球を見渡した後で部屋内を調べ始めた。

「あいつは・・・俺に部屋の事を教えてくれた奴・・・です。なんの手違いか、連れてきた形になってしまいました」

「連れてきた？　なんだ？　ももは・・・なんでもアリか？」

公は不思議に思っていたが、とりあえず龍は部屋の住人になったという答えで終わらせた。

ジジジジジ・・・

昌哉が部屋に転送されてきた。

「昌哉さん、暗い顔して・・・どうか、したんですか？」

「いろいろ・・・あった。公、話を聞いてくれ・・・廊下で話そう」

公は了承。廊下に歩き始めた昌哉さんに着いていき、到着すると、昌哉さんは俺の目をしっかりと見て話し始めた。

「公、お前に聞きたい。前ミッションが終わり、俺は生きて帰れる事になんとも言えぬ喜びを感じた。だが、家に到着するや、俺は死んでいないという真実を突きつけられ、絶望を感じた。・・・

なぜなんだ？　なぜ俺が生きている？　俺は死んだからここに来たはずなのに……」

「……本体が、生きていた……？」

そういう事は、サイトにてオリジナルがどうか……GANTZはいい加減な所があり……とか、そういうのが記されていた事は知っている……。だけど、それがまさか昌哉さんにふりかかるなんて……。

「俺はなんなんだ？　俺は……俺なのか？　偽者……なのか？」

分からない、でも、言うしかないのだ。

「昌哉さん……本物とか、偽者とか……失礼ですけど、俺からはそんなのはどうでも良いことです。この部屋にいる人間は貴方が本物以外なにも思いませんし、偽者だったら……だから何？　つてものですよ。昌哉さんは昌哉さんです。貴方に心があったら……それは……本物ですよ、きつと」

なにきざつたらしい事を言っているんだ、俺は。でも、それは俺が心から思ったことだし……間違つてない事を祈る。

昌哉の暗い顔はそれで治ることはなかった。だが、ふと、何か思ったのか、昌哉は公に質問をぶつけた。

「公……俺はこれからどうすればいいと思う？」

俺はその質問がきた時、どう答えれば良いか、すぐには思いつかなかった。だけど、1つは考えなくても言える。

「生きればいいと思います。辛くても、例え人に避難されるような事をして、生きていれば、生きていればそれは償える・・・と思います。そして、この部屋に居る、住人達と一緒に生き延びましょう」

俺はそう発言。そのときに、昌哉は部屋にきて、初めて笑った。

「ふっ・・・公、お前なら・・・そう言うと思ったぜ」

いつもの昌哉さんに戻った、俺はそう思った。

昌哉さんが微笑を浮かべながら部屋に戻っていく、と、部屋に入る前に、一度足止めると、振り返って俺に言いかける。

「話してて思ったが、俺と公は、なんか似てるような所があるように思える。だが、真逆のようにも思える・・・なんとなくだが、俺はそう思ったな・・・」

「似てる・・・？ 真逆？ 矛盾な気が・・・。よく意味が・・・分からないんですけど」

公の言葉を見殺して、昌哉は部屋に戻っていく。公も追うように部屋に戻ると、昌哉さんはさっそく行動を起こしていた。

「すでにスーツを持っている者は着替えはじめてくれ」

経験者にそう言うと、昌哉は新たに部屋に来た4人に近づいていた。その4人は男女2人ずつの成人だろうと昌哉は思った。

「あ？　なんだお前・・・？　ってか、ここどこなの？」

背が昌哉と変わらない茶髪の男が昌哉に尋ねた。

「お前らは、死ぬ直前の記憶があるだろう？　実際は死んだが、その黒い球によって俺達は生き返らせられた。だから、これからお前達は黒い球の命令で星人を退治しに行かなければならない」

「俺ら死んだのか？　なんか実感わかねーし、お前の言ってる事も意味分からねーんだけど・・・」

「あとで意味が分かるときがくる・・・それまで、俺達の言うとおりにしてくれ」

「まーじで、なんなんだか・・・」

昌哉はその場で、できる限り情報を新人に伝えたはじめた。

「あと少しで黒い球が歌いだす・・・」

遠目から、その景を見ている公は、昌哉が誰かに似ているような気がした。誰だったか・・・愛さんかな？　多分愛さん。なんで似てるのか・・・よく分からないけど、なぜか似ていると思った。

なぜなのか？　そう顎に手を当てて考えていると、春魅が笑顔で俺に近づいてきた。

「公さん、こんにちは・・・こんばんは？　かな？」

「おお・・・春魅。　おはよう」

しまった。つい、定時の癖で「おはよう」とか言ってしまった。
春魅、なんか理解出来ていない顔をしている……。俺の思考では
当たり前的事なのに。

「ああ、間違えた。こんばんは、春魅」

「公さん、今回のミッションも生き残りましょうッ！」

「当たり前だ……。生き残って、家に帰ろう」

公と春魅がそんな会話をしていると、その隣で部屋内を観察して
いた龍がある人物の存在に気がついた。

「あれ？ お前……。同じ学校の奴だよな？ 名前は……」

「栞ですが？」

「栞……。なんでここにいる？」

「過去に、たまたま一緒に帰り道で事故に遭ったからだよ」

哲也が横から口出した。

「なるほどね〜で、お前ら付き合ってたの？」

「龍、どういう解釈でそうなるんだ？ その類たぐいの会話はしてないだ
ろっ」

「勘だよ、勘。男の勘」

「信用薄だな・・・」

さーいたまはーゆたかーなーところー
でもいがいとないー
でもいがいとないー

始まりの合図、黒い球から音楽が流れ始めた。そして、その音楽を聴いて部屋内の人間は黒い球に注目した。

「黒い球が歌いきったら文字が現れるから・・・」

昌哉が新人にそう伝える。

あなた達の命は
亡くなりました

新しい命を
どう使おうが
私の勝手です

という理屈なのです

「あなた達の命は亡くなりました・・・という理屈なのです・・・」

「あたし等、マジで星人と戦争すんの？」

「そうだ、この黒い球には逆らえないからな・・・」

「お・・・おお、画面が変わってく・・・」

あなた達はこれから

この方をやつつけに行ってください

目ダカ星人

特徴

目がデカイ

手と足が生えてる

気にしている事

泳げない事

ヒレ キモい

特技

イガイな理解力

画像を見るに、それはどこその漫画で、1度は見た事があるだろう星人が映っていた。

「なにこいつ・・・キモ・・・」

新人の1人である、髪を盛って顎ヒゲを生やしている男がそう言った。

「こいつを俺達はこれから倒しに行くんだ」

「どのくらい強い・・・？ 分からないのか？」

ボウズで筋肉質の男が昌哉に質問をした。

「分からない。だから皆で協力していかなきゃ行けないんだ・・・」

その時に、黒い機械のスーツに身を包んだ公、哲也が廊下から部屋に戻ってきた。

そして、そのピチピチな黒タイツのような衣服を着ている所を見た新人の1人の茶長髪ストレートの肌黒の女がボソリと呟いた。

「キモい・・・ってか、あたし等もあれ着るの？ ハズイだろ・・・」

それを聞いた公は、（あゝ実夏も言ってた言ってた・・・）などと心で思うと、なにも聞いてなかったかの様に振る舞った。

「でも、なんかカッコいいと思うのはあただけ？」

まさかの褒め言葉が、銀髪ショートのカールな女の口から発された。

ガシャンッ！！

黒い球が開扉かいひされた。そしてそれと同時に、経験者達は黒い球に近づいていき、女達は黒い球の背後からケースを取り出すと、廊下に向かつて着替え始め、男達はすでにスーツを着ていたので黒い球から武器を取り出して装備した。

「お前らもこれを着てくれ」

昌哉が黒い球から新人のケースを取り出してきて渡すと、着替えしてくるよう言った。

「マジで・・・？ マジでかよ・・・」

「着なきゃいけないってか・・・？」

「なにこの箱に書いてある名前・・・ガンゲロタマゴ。マジム力つくんですけど」

「私は・・・銀さんだって・・・」

はつきり言つて着たくない。それは新人だつたら一度は誰もが思うことであろう。でも、着なきやいけない、昌哉はそれを新人に必死に訴えていた。

23話

言葉の優しさ（後書き）

田中 たなか

雷武 らいむ

茶髪の男

小川 おがわ

修治 しゅうじ

筋肉質の男

小林 こはやし

加絵 かえ

茶長髪ストレートの肌黒・・・女

坂口 さかくち

嬰南 えいな

銀髪ショートのカールな女

24話

陰なきコロシウム（前書き）

どうも、Tさんです。

今回は結構色々変えている所があります。

HガンⅡZガン

的な感じで・・・色々あるか分かりませんが・・・。

それと俺は、GANTZマイナスを読んだ事ありません。どんな書き方をしているんだろうか、気になります。金がないために・・・。

それでは、どうぞGANTZ埼玉を温かい目で見てください。
・・・。

活動報告を見てください。

24話

陰なきコロシム

「マジ・・・キシヨス・・・」

「なんの意味があるんだよ・・・」

ケースを受け取った雷武らいむや修治しゅうじが、スーツを取り出してそう呟つぶいている。そのなかで、坂口 嬰南えいなんと小林 加絵かえは廊下に向かうと、着替え始めた。

もちろん廊下では栞しるしや春魅はるみが着替えていて、突然やって来た2人にびっくりしていた。

『え・・・えッ!?　だ・・・誰ッ?』

「大丈夫大丈夫・・・おんな女。　着替えに來ただけだから・・・」

嬰南は落ち着いて説明すると、服を脱いで着替え始めた。

「すごいすごい・・・ピツタだよ、ってかキツイ・・・」

「あの、私達は着替え終わったんで、部屋に戻りますね・・・」

栞が2人にそう告げて部屋に戻っていった。すると、2人は見つめ合っただけに言いたげに笑っていた。

「マジでツ上から服着ないで戻って行っただよ！ 裸と変わらないじゃん！」

「ここだと当たり前なのかな・・・それとも天然？」

爆笑の加絵に、微笑の嬰南、2人はそう笑っていたが、着替えた後に上から服を着るかどうかわからない事になるのだった。

キッチンのある部屋にて、龍がスーツを着おえると黒い球に近づいていき、ショットガンを取り出した。

「これで星人を殺すのか・・・」

さらに黒い球からXガンとコントローラーを取り出すと、ガンはホルスターへ、コントローラーはリストバンドにて手首に装着した。

装着が終わると、横目で公や春魅、哲也が黒い球近くのドアに入っていくのが見えたため、龍はつられてその部屋に入っていた。

「おーすげ・・・でけえ、一輪バイク・・・」

その一輪バイクの巨大なホイールの内側には、公がZガンをバイクに寄りかからせた状態で座っていて、バイクの後のダンデムシートには春魅がショットガンをもって搭乗していた。

その近くで哲也が柄を拾ってホルスターに装備している。龍はそ

の柄が気になり、拾うと、哲也に質問をぶつけた。

「哲也、これ、何？」

「ああ？ それは刀・・・グリップ部分の近くにスイッチがあるだろ？ それ押すと、刃が出てくる」

「スイッチ・・・これか」

龍はグリップ近くのスイッチを押した。すると、当たり前のように刃が出てきて、感銘を受けた、そして刃を閉まった後に柄をホルスターに格納すると、公達が乗っているバイクとは別の、もう一台のバイクの運転席に搭乗した。

「おい、哲也、後ろに乗れよ！ 2人乗れるんだぜ？」

「いや、俺はいい。 走るからさ」

テンションが最高潮になっている龍に哲也は微笑しながらそれを断った。そしてなにも言わずにその部屋を後にした。

「ねえ、どうして服着ないんですか？」

黒い球のある部屋で黒い姿の加絵が昌哉に質問をした。そしてその質問を受けて昌哉は考える間も無く答えた。

「服着てると動きにくいから・・・かな？ 他に理由があるとするなら、公が着てないからだと思っぜ」

「公？ あの若い子？」

「ああ、そうだ。 あいつは見た目は若いが、この部屋に居る人間のなかじゃ一番の戦闘力を持ってて、リーダー的存在だな」

「うッそ、あんたの方が年上なのに・・・」

「リーダーは年齢じゃ決まらない、それに部屋に來たのは俺の方が後だ」

「経験の差があるって事か・・・あと知識？」

「その通り・・・それに、リーダーに縛られる必要はない。 リーダー以外にしかできない事もある」

「へっカツコいい言い方だね」

加絵が昌哉を称賛した。そしてその後すぐに、廊下に着替えに行っていた雷武と修治が部屋に戻ってきた。

「うっへー・・・マジキチィ・・・本当にこんなのが体守られるのかよ？」

「意外と動きやすいな・・・伸縮性がパネエ・・・」

そして昌哉の言いつけで黒い球から適当に武器を取り出すと、転送開始を待った。

「絶対に・・・生き残ろう・・・。生きて、家に帰ろう」

別室の公が近辺にしか聞こえないようにそう告げた。それに呼応して、春魅と哲也は小さく頷いて、呟くと、深呼吸を繰り返して転送を待った。

ジジジジジ……

公と春魅が乗っているバイクの頂上の転送が開始された。その時に公は皆に聞こえるように大声で転送開始を告げた。

「転送が始まったぞ!!」

黒い球の部屋にいる昌哉達が反応。黒い球を見ると、1時間分のカウントダウンが開始され始めていた。

行ってください

00:59:38

転送先に公と春魅が姿を現し始め、その場で公は場所を確認しようとした。

「じじは……」

「田んぼが・・・いっぱいです・・・」

四方八方が田んぼで、その田んぼの範囲はゆうに1キロはあったと考えられた。

「今回は、隠られる場所がない・・・か。辛いミッションになりそうだな・・・」

「レーダーに星人の反応が多数・・・点は5箇所以上はあると思います・・・」

コントローラーで確認した春魅がそれを公に伝えた。公はバイクを発進させると、春魅の指示の下ハンドルをきった。

次に転送されてきたのはバイクに跨った龍。公と春魅がすでに動き始めているのを見て、自らレーダーで確認すると、公達とは逆方向にいる星人を目指した。

「ん・・・田んぼばかりだな・・・栞、隠れる場所ないから、気をつける・・・」

「あ・・・うん。ありがとう」

次に転送されてきたのは落ち着いた様子の哲也と、なぜか顔を赤めている栞だった。

「皆、もう動き始めてるな・・・一応、皆の転送が済むまで待機しておこう」

栞は頷いた。そして、次々に転送されてくるメンバーが映し出さ

れ始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「皆、待たなくてよかったんですね・・・？」

春魅が公にそう質問をした。

「日はまだ完全には落ちてない・・・だから皆すぐに見つけられるよ。それに、日が完全に落ちたら、電灯がないから・・・なにも見えなくなるし・・・早く片付けないと・・・」

「確かに・・・星人が強いのか弱いのか、それ以前に日が落ちたら、こっちとしては面倒ですね・・・」

春魅がそういった後、公はバイクを停止させた。そしてバイクを傾けて降車すると、公はZガンを構えだした。春魅も後席から降りると、公越しに星人がいる事に気づいた。

田んぼに挟まれたアスファルト、そこをペタペタと足音を立てながら此方に近づいてくる不思議な生物。その姿は黒い球に映っていた写真と同じだった。

大きさは一般人と変わりなく、メダカのような黄色い体、人間のよくな手足、それは人間から見れば変態以外の何物でもない生物だった。

「いける・・・」

公はZガンのトリガーを引いた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふう・・・ふう・・・ふう・・・本当に・・・星人・・・殺す・・・」

逆方向を進んだ龍は黒い球で見た、外見完璧なメダカ星人発見し、見て、興奮していた。そして、ショットガンをその星人に向けていつでも撃つ準備は出来ている、が、それでもトリガーを引かないのは手の振るえとその星人をもう少し見ておきたいと思う好奇心からだった。

《ギョギョツ?》

メダカ星人が、龍を見てそう言った。

「はッ・・・こいつ、何マンガで聞いたことのあるような・・・いや、どうでもいいか・・・」

龍はショットガンのトリガーを引いた。

カチッ・・・・・・・・

「あ? どうなってんだ? 撃てたのか? これ? ああ!？」

龍は、引き金部分を除くと何がいけなかったのかを確認した。

「トリガーが2つ・・・、同時に引けばいいのか？」

再度、龍がショットガンのトリガーを引いた。

ギョーン

効果音が出たことにより、龍は発射できた事に確信を持った。

「よしッよしッ！ 撃てたろう・・・実感がある・・・」

ババンッ！！

メダカ星人の頭身が破裂。血飛沫ちしぶきが地に広がった。そしてそれを見た龍はさらに興奮。思わず、口から笑いが漏れた。

「は・・・ははッ・・・ざまあ・・・。地球にいたお前の責任だよ・・・せいぜい悔め」

龍の口からさらにかん高い笑いが上がる。

《ギョギョッ！？》

「！？」

メダカ星人を倒したすぐに、さっきと同じ声が響いた。

「さっき・・・倒したのに・・・もう一匹、いるのか？」

ショットガンをコッキングした後、辺りをきょろきょろと見回し

た。だが、声がしたにも関わらず星人の姿は見当たらなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ドドンッ！！！！！

Ｚガンのプレスでメダカ星人の姿は一瞬にして粉々になり、円形の穴の中で静かに血の波がうたれていた。

「油断するな・・・これから星人が沢山出てくる可能性が・・・」

《ギョギョッ！？》

公の予想通り、姿は見えないものの、近場で星人の声が聞こえた。もちろん警戒心は最大限発動しており、公と春魅は背中合わせで道路に立っていた。

「姿が見えない・・・田んぼ内に隠れているかも知れないな」

「はい、私も・・・そう思いました・・・」

春魅がタイミングをとって深呼吸しているのを公は感じていた。そしてそれに呼応するかのように公も深呼吸を繰り返した。

《ギョギョッ！？》 《ギョギョッ！？》

《ギョギョッ！？》 《ギョギョッ！？》

《ギョギョツ!?!》 《ギョギョツ!?!》

まるで2人を囲むように道路を挟んで、その声が響きはじめる。
それから感情を予想すれば、まるで怒りの音声に聞こえる。

ジャブン・・・ジャプジャプツ・・・

田んぼの水が波打ちはじめた。公はそれを聞き逃さなかった。そして春魅を小突いてそれを知らせると、春魅は小さく「分かっています」と返事をした。

「来るぞツ!!」

公がそう断言。それと同時に囲む2方からメダカ星人6匹が2人を襲い始めた。

公はZガンを地に捨てると、ホルスターから刀を外してすぐさま伸ばし、公に向かってくる、2体のメダカ星人に向かって刀を横に振るい始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「公と春魅、龍の姿がない・・・」

転送されてきた昌哉がそう呟いた。

「すでに3人はもう、戦い始めてるんだろ・・・俺達も早々に戦い始めよう」

昌哉がチームメンバー6人を集合させ、指揮を執り始めた。

「リーダーに星人の反応が多数ある。各個撃破していききたいと思う。だからチームを俺と哲也の2つに分けて行動する」

「お、俺がリーダー!?」

「しょうがないだろ・・・経験者少ないんだから・・・」

「ああ・・・まあいつか・・・」

チーム分けは哲也、栞、修治、嬰南と、昌哉、加絵、雷武の4、3人に分けた。

「昌哉さん・・・こっちの方が人数多いすよ・・・」

「大丈夫だろ・・・地形が地形で見渡せるし・・・。いざとなったら逃げる」

「はぁ・・・分かりました」

「それじゃ、前後で分かれて戦っている、メンバー援護、共闘を尽くしてくれ・・・」

そう言った後、昌哉チームと哲也チームは前後分かれて行動を始めた。

2チームの行き先としては、昌哉チームは龍方面。哲也チームは公、春魅方面に向かっていた。

「リーダーみたい・・・ってか、軍師的なもの？」

小さく、加絵が昌哉を見て、そう呟いていた。

25話

水好き動物達の変態

「うつらぁッ！」

公が刀を振るいきった時、2体のメダカ星人は真つ二つに切断されていた。そして肉弾が転がるように公を通り過ぎると、振り向いて春魅の安否を確かめた。

すると、春魅はすぐに反応できてなかったのか、攻撃を受けて地面に倒れてしまっていて、持っていたショットガンを手放してしまっていた。

《ギョギョ〜〜ッ！！》

2体のメダカ星人がその倒れた春魅に襲い掛かっていった。そこで公が助けに行こうと向かうが、もう2体のメダカ星人が公の前に立ちふさがり戦闘を余儀なくされた。

「くっそッ！ 邪魔だッ！」

メダカ星人の1体が春魅の上に押し掛かった。そして両腕で春魅の髪を掴むと、力いっぱい引っ張りはじめた。

「イタタタッ！！！」

春魅は押し掛かっているメダカ星人を退かそうと腕で力強く押すが、痛みの為に、思うように発揮出来なかった。

その時に、人間の防衛本能が働いたのか、春魅はメダカ星人の頬部分を考えなく殴っていた。

《ギャワンッ!!》

メダカ星人は怯み、春魅から手を離れた。そして痛みから解放されたて余裕を少しもてた春魅はホルスターからXガンを取り出すと、頬を抑えて痛がっているメダカ星人の顎にトリガーを引いた。

ギョーン

その時には、公は刀で2体のメダカ星人を斬り捨てて完了。春魅に近づいていき、押し掛かっている星人を刀で斬り捨てようとしたが、春魅のタイムラグでメダカ星人は破裂して終わった。

ババンッ!

「公さん・・・私は大丈夫です、残りの星人を・・・」

公は頷き、残り1体のメダカ星人と対峙した。・・・が。

《ギョギョギョギョ~~~~~・・・》

公に背中を見せて逃走を開始。田んぼに突っ込んでうつ伏せ状態になると、手と足を器用に使って素早く泳ぎ始めた。

だが、いくらそこで泳ぐのが速いにせよ、普通の人間が走るより

遅い為に、公と春魅は首を傾げながらその逃げていく星人を見ていた。

「春魅・・・撃ってみろ・・・」

「は・・・はい」

春魅がXガンの透視画面を覗いて狙いを定めた。

「上トリガーでロックオン、下トリガーを引けば撃てる・・・」

分かっているだろうが、公は春魅にそう説明した。

カチッ

春魅が星人をロックオン、透視画面が停止した。

「もう、星人がどこに逃げようが、お前がトリガーを引いたら破裂する・・・」

「凄い性能ですね・・・」

ギョーン

ババンッ！

メダカ星人は、必死に逃げていたのも無駄に終わり、田んぼの上で息絶えた。

「一応最初の1体と後からの6体、全部倒し終わったが・・・他に

も星人はいるのか？」

「レーダーだと、まだまだ地中に居そうですね・・・」

「よし、分かった」

公はZガンを拾うと、田んぼに向けてトリガーを連続で引きはじめた。

ギョーンギョーンギョーンギョーン

ドンッドンッドンッ・・・

大音を響かせながら円穴が開いてゆく。だが、星人が地上に出てくることはなく・・・でも、それでも公は田んぼに向けてトリガーを引き続け、出てくるのを待ち続けた。

・・・

「ッほオオオッッッ!!」

ギョーンギョーン

龍は10体はいるだろうメダカ星人と交戦していた。だが、数で劣勢にも関わらず、龍は怯えるどころかむしろ楽しんでた。故に、楽しそうに声を上げながらショットガンを連射しているのだ。

「死ね死ねッ!」

ババンツバンツ！！

3体が破裂、地面に倒れた。龍はショットガンを投げ捨てると、ホルスターから刀を取り出して伸ばし、正面から向かってくるメダカ星人に勢い良く振り下ろした。

ザンツ！

真つ二つに切断されてメダカ星人がばれて倒れた。そしてその後すぐに向かって来る、残りのメダカ星人6体が一斉に龍に飛び掛かった。

「バーツカ！ 雑魚いんだよッ！ 無駄なんだよッ！」

下げていた刀を振り上げて、1体のメダカ星人を斬りつけた。そしてその後に、回すように刀を後ろに下げると、またも星人に刀を振り上げて斬りつけた。

普通ならば、刀を横に振るえば飛んだ星人6体を一気に倒せるが、そこは龍の遊び心で、わざとそんな攻撃方法を選んでいた。

残り4体。飛んでくる星人を龍は、落ち着いて見定めると、前転してそれを避けた。

着地したメダカ星人4体は、すぐさま振り向くと龍に拳を振るった。

「遅い・・・遅い・・・。 そんなんじゃ、人間に勝つのも無理だぞ」

伏せて、逸らして、抑えて、それを駆使して龍は笑いながら避け続けた。そして飽きが出てきた頃に反撃の行動を開始した。

「うらッ！」

メダカ星人の殴る攻撃に対して、同じ攻撃を繰り出し、拳と拳がぶつかり合った。メダカ星人は龍に力負けし、拳が碎ける音と共に地に倒れこみ、痛みによって苦しみ始めた。

すぐに次のメダカ星人が攻撃を仕掛けてきた。龍は、刀をしっかりと持ち直すと、向かってくるメダカ星人の拳を避けた後、腕を斬り捨てた。

《ギョッギョギョッ！》

腕を切断されたメダカ星人は痛がってはいるが、力を振り絞って龍への攻撃を再開、もう一方の手で殴ろうとした。

だが、またもそれを龍が避けた。メダカ星人はもう一度の攻撃を試みるが、龍の刀によって腹部から2つに切断されて無に終わった。

「弱ええ・・・マジないな・・・」

《ギョギョー！！》

《ギョギョー！！》

2体のメダカ星人が龍に向かって撃破をしようと接近。だが、目に見えている結果で龍の刀の一振りで星人2体は崩れていった。

《ギョ……ギョギョツ……》

最後、龍は地面に倒れて、拳を負傷して倒れているメダカ星人にとどめをさすと、その場にいた星人の駆除を完了した。

「なんだ？ GANTZのミッションはこんなに楽なのか？ でもま、暇つぶしにはなるか……」

刀をホルスターに戻し、ショットガンを拾った。すると、後から転送されてきた昌哉達が龍の所にたどり着いた。

「遠目からも見えていたが……強いな。スーツの使い方を知っているのか？」

昌哉が賞賛の意を示した。だが龍はそれを聞いても笑うことなく平然と答えた。

「こんなのスーツなしでも楽勝、それに、俺は部屋に来る前から部屋の事は知ってたし」

「……公と同じ事を言うのな。まあいい、これから一緒に星人を殲滅させるから、協力してくれ」

「は？ 寝言言つなよ、点数が少なくなるじゃん……俺は1人で戦う……」

龍は、バイクに乗ると、リーダーに見ながら星人を求めてアクセスルを回してバイクを発進させた。

ヒウイイイイイ……

「なににあいつく高校生のくせに生意氣く協力しようって言うてんのに……」

昌哉の隣にいた加絵がブスツとしながらそう言った。

「ほっときゃーいーじゃん、別に……」

雷武が真顔でそう2人に伝えたが、昌哉は賛成の表情をする事はなかった。

「らいむ……と言ったか、あんたは俺より年上らしいが、そういう事は言うもんじゃないぞ。威厳が損なわれて、いつか自分を苦しめる原因になる……」

昌哉にそう言われた雷武は、ムツとしながら言い返す。

「なに生意気な事言ってるんだ？ 年上相手によ……」

「認められる人間は年齢じゃ決まらないぞ？ 常に己の行いで決まる」

「知らねーよ、とりあえずお前は道理に反してるだろ」

「お前もだ。それに、道理なんてここじゃ通用しない。殺すも生かすも、自分しだいだからだ」

首を傾げて、雷武は言葉を発さなくなった。めんどくさい、そう思ったのだろう。

「・・・とりあえず、龍を追うぞ。　せめて背後支援をしよう」

昌哉がレーダーを覗いたあとに龍を追い始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「おい、公は・・・なにしてるんだ？」

田んぼにZガンを連発して撃っている公に、哲也達是不思議に思っていた。だが、それはすぐ理解する事になる。

「春魅、来るぞ・・・」

春魅が拾ったショットガンを田んぼに向けて待機、田んぼからは30体は超えるメダカ星人が出現、その更に後ろには5mは越える大きさのカエルの様な星人が公達の前に出現した。

公はその数、大きさに躊躇しなかった。Zガンを構えてトリガーを引くと、狩人となって星人を倒し始めた。

もちろん、星人の攻撃も始まり、星人たちは公達を囲むように襲い始めた。

「お・・・俺達も行くぞッ星人を倒せッ！」

哲也が混戦になっている公達の所にショットガンを撃ちながら走り出した。その後ろには栞がXガンを構えて哲也を追いかけていく。

「お前は・・・どうする？ 行くのか？ 星人を倒しに・・・」

修治が嬰南に質問をした。

「このショットガンで、遠距離攻撃する・・・怖いから・・・」

「ふん・・・じゃ、俺は見物してよ・・・あいつらと、お前・・・」

嬰南がしゃがんでショットガンのスコープを覗いて星人に狙いを定めた。

「これって・・・スナイパーライフルみたいに撃てるんだね・・・あと、フォアグリップをスライドさせれば・・・撃てる？」

ガシャンッ

「あいつら・・・スライドさせないで撃ってるじゃん？ 意味あんの、それ」

「意味がないなら付けないでしょ・・・グリップなんて・・・」

カチッ

「あれ？ 撃てない・・・」

「トリガーを2つ同時に引くと撃てるって・・・言ってた」

「そう・・・あれ？ なにこれ・・・画面が固定されてる・・・」

スコープの画面が固定されている事に嬰南は不思議に思っていたが、上トリガーを離すと嬰南はなにかに気づいたらしく、再び星人に狙いを定めて上トリガーを引くと、違う星人に向けてまたと上トリガーを引いた。そしてその動作が5回に亘ると、上トリガーを押さえたまま下トリガーを引いた。

ギョーン

ババババンツッ！

嬰南にロックオンを掛けられたメダカ星人5体が破裂した。

「やべえ、私強いかも・・・」

ギョーンギョーンギョーン

「あ・・・あまり強くないッ・・・」

春魅は、そう言いながらひたすらに向かってくる星人にトリガーを引き続けていた。その隣だと公が華麗に星人の攻撃を避けて、Zガンでプレスしたり刀で切り刻んだりなどで、確実に星人を倒していた。

「春魅ッ・・・大丈夫かッ？」

「大丈夫ですッ、なんとか、なんとか倒せてますッ！」

ギョーンギョーンギョーン

哲也達の中距離射撃によって、完全な優勢になった。そして、哲也達が来た事を知った公は、小笑いして喜んだ。

「来たなあ……………」

その時に、公の目の前には地に着地する大きな音と共に体長5mを超える大きなカエル星人が姿を見せた。

このカエル星人も、メダカ星人と同様に手足は人間の様なものが生えていて、更に大きな口からは伸縮自在の舌が公に狙いを定めていた。

「……………こい、勝つてやるよ」

公のその言葉に反応するように、カエル星人は口から舌を更に出して伸ばし、準備を始めた。むろん公は先制を競ってZガンを構えると、速攻にトリガーを引いた。

ギョーン

タイムラグ来る前にカエル星人が移動を開始、右横にそれて避けられると星人が元居た場所が圧潰された。

「ちツ……………避けられたッ」

公はZガンの銃口をカエル星人に向けようと追うが、口から出た舌が真っ直ぐ自分に向かってきている事に気づき、射撃は断念して避ける事にした。

「まだまだ・・・今までの星人と比べたら全然遅い・・・」

避けながら公は策を練っていた。

周りに助けを求めなくとも、1人でこのカエル星人を倒せる、が、協力すればさらに楽に倒せる事は必然。だが、メンバーは多数のメダカ星人との戦闘中だ。じゃあ、やっぱり1人で・・・。

縦横無尽に行き交う舌を落ち着きながら避けていくと、Zガンのトリガーを引いた。

ドドンッ！

地面が圧潰されるが、そこにはカエル星人の姿はなく、攻撃に失敗した公にまたも攻撃を再開した。

「チックシヨッ！ 中途半端な素早さだな・・・Zガンが惜しいところで避けられる、今までの星人を見てくると遅いが、こうなったら刀でいくか」

Zガンは片手に持ったまま、もう一方の手で刀を取り出した。そして、カエル星人の動きを見計らうと、刀をより高く上げて、カエル星人に振り下ろした。

だが、星人は右に移動。その事により、それは惜しくもすれすれで避けられてしまった。だが、それで終わらせない公は下ろした刀を右振、カエル星人の足元を狙って刀を振るった。

《ゲコゲーコッ！》

カエル星人が空高くジャンプして公の攻撃を避けた。

「これは・・・いけるかもッ！」

この時に公はZガンを構えてカエル星人に狙いを定めた。そして星人が地に着地する前にトリガーを引くとタイムラグは意外と早く反応、カエル星人が田んぼに大きな水音を立てて着地したときに圧潰された。

ドドンッ！

「ふう・・・ふう・・・倒した・・・」

公はZガンの銃口を下ろした。そしてメダカ星人と戦っている春魅の方向を向くと、哲也達の参戦あつてか、メダカ星人は全滅。完勝を果たしていた。

「公さん・・・でかいカエルと戦ってましたが、無事でしたか？」

近寄ってきた春魅が公にそう話しかけてきた。

「ああ、無事だ・・・春魅は、哲也達はどうかんだ？」

哲也はくつと引き締まった顔で「全員大丈夫だよ」と告げると、チームのリーダーとして全員に軽く声をかけ始めた。

「今回のミッションは、死者なしで部屋に戻れそうですね・・・」

「ああ、だが、星人を全部倒し終わるまで、転送が始めるまで油断

するな」

分かってたのか、春魅は真顔で頷いた。

《ゲロゲー・・・ロ・・・》

「この声・・・嘘だろ!？」

公は圧潰した円穴を確認すると、そこからは衝撃に耐えて少し弱っているが、損傷があまり無い状態のカエル星人が公達の前に姿を現した。

「そうか・・・田んぼだからな、プレスが軽減されるのか・・・」

公は再びZガンを構えた。すると、周りのメンバーもそれぞれの武器をカエル星人に向けて発射準備を完了させると、皆公を見て気を引き締めた。

「皆で部屋に戻る。今回は、死人無しだ」

26話

協力の重要性（前書き）

いつも、GANTZ埼玉を見ていただき、ありがとうございます。
書き方に関して、意見をお聞かせいただけただけならうれしいです。
なんでもいいです。携帯版が読みにくいとか、なんでも。

では、温かい目で見てあげてください・・・。

26話

協力の重要性

龍は、レーダーで点の反応のあった場所に到着すると、バイクを降りてショットガンを田んぼに向けて構えると、スコープ越しに地面を透視した。

「とりあえず、ここらにはいる・・・はずだ」

再びレーダーを確認して確信をもつと、ショットガンのトリガーを適当に、地面に引こうと指先に力を込めると、完全にトリガーを引く前に星人の動きがはじまり、地のちよつとした揺れに龍は反応した。

「来る・・・来る・・・」

ジャポジャポと音をたてながら田んぼからゆっくりと土を掻き分けて星人が姿を見せた。そして、体についた土を振り掃うと、大きな目が開かれて、龍をその鋭い目で睨むように見つめた。

田んぼから長い体が次々に引きずり出され、全長20mはいくほどの長さを確認、そしてメダカ星人と同様に、手足はやっぱり人間のようなものだった。

「なんだ・・・尻尾だけで15mはあるのか？それにこいつ、さっきのメダカのような奴とは違って、今度はトカゲってか・・・相手に不足は、ないかもだな・・・」

龍は右手で刀を取り出して刃を出現させると、それを後方にまわしてショットガンを前方に、その銃口をトカゲ星人に向けた。

「速攻・・・・・・・・・・」

その時に、星人の尻尾が動いた。龍は、その星人の尻尾の動きに反応、しゃがむと、また体を起こした。すると、龍の髪は少し短くなっていた。

「マジか・・・こいつ、尻尾がハンパねえ・・・早すぎるだろ」

今回は俺だから反応出来たようなもんか？あの尻尾、やばいぜ・・・スーツ着てる人間の髪を切り落とすほどの切れ味をもってる・・・。

避けきれなかったら、スーツごと逝かれてたかもな・・・。

「油断はここまでだ。やってやるぜ・・・・・・・・殺してやる・・・」

息が荒くなり、深呼吸を繰り返す。そして武器を持ち直すと尻尾攻撃に備えて体制を低く保った。

「先制権をやるよ・・・さあ、こい。攻撃後の隙をやってやる」

龍は動きを見せないで、頬を通過する汗に気を取られないで、ただ星人の攻撃を待った。

そしてトカゲ星人は、龍が手を出してこないのを悟り、長い尻尾を動かし始めた。龍はクツと目を凝らしてその動きを追う、そしてその尻尾は龍から見て右から腹部に向かって動いた。

「なッ腹部はねーだろッ！」

しゃがむには低すぎる、ジャンプして避けるには高すぎて早すぎる。龍がとった行動は、刀でもって防ぐ事だった。

刀に尻尾が接触した時、いとも容易く尻尾は斬れて龍の体に巻きついた。そして斬れた尻尾は、まるで意思があるかのように刀をもった龍の腕と足に絡みつくと、龍の自由を奪った。

「なッ！ マジかよッ！」

先制を譲るという龍の油断の結果であった。そして当たり前の様にトカゲ星人の、次の尻尾攻撃が龍に向かっていった。

龍は青ざめ、自由の利かない体を無理やりに動かしてその攻撃を避けようと努力をした。

「やっベッ！」

体を反らすと、尻尾はさっきのガードでの事もあって距離が胴体に届かず、体を通り過ぎようとしたが、瞬間注意力欠けてか、刀を持っていた右手を切断されてしまった。

「がッああああッ！」

大きな悲鳴をあげて、アスファルトに仰向けで龍は倒れた。そして、トカゲ星人の次の攻撃が、またと龍を襲おうとしていた。

龍は体をつきぬける痛みには耐えながら、その行動を見ていた。

だが、気づけても動けない体に、恐怖を感じないはずはなかった。当たり前のように震えが龍を襲い、それで体は硬直、悲鳴を大きく上げて、誰しにも助けを求め始めた。

「誰かッ誰か近くにいないのかッ！ 誰か助けにッ——」

言葉届かず、目の前でトカゲ星人の長い尻尾が龍に振り下ろされた。龍は死を覚悟、諦めによってもはや悲鳴すらあげず、恐怖から目を背けようと、目を瞑って最後を迎えようとした。

……それから数秒の時が流れ、龍は自分が死んだのかどうなのか分からずに目をゆっくりと開けると、どうやらまだ生きている事を自覚した。

理由はなぜかを確認すれば、すぐにそれは分かった。トカゲ星人の尻尾が、根元から切断されいたからだ。

「どうなって……誰か……やったのか？」

不思議に辺りを見渡した時、龍の隣では、切断されて血が流れ出ている腕を止血しようと、加絵がしぶしぶ治療をはじめていた。

「マジ……運がいい。 昌哉、優しくてよかったね」

加絵が龍の右手に適当な布を巻きつけると、力いっぱい血がでな

いように縛り付けた。龍はそこで大きな声で悲鳴をあげると、涙を流しながら痛みに耐え続けた。

バチバチツ・・・

誰もいなかった風景から、昌哉が出現した。

ステルスモードを解除したのだ。そして、片手には刀があり、トカゲ星人の尻尾を切断したのは昌哉と確定できた。

「加絵、龍を適当に避難させてくれ。俺は、このトカゲを殺る」

加絵は「はい」と龍を引きずろうとしたが、意外な軽さに気づいて驚き、軽々龍を持ち上げると、走って龍を避難させる事ができた。

「へーこれがこの黒い服の力か。すげー・・・・・・・・」

昌哉は離れて避難していく加絵を確認すると、トカゲ星人を見据えた。すると、昌哉の目の色が変わり、なにやら驚きを隠せずにいた。

「斬りおとした尻尾・・・、生えてきているだろ？」

根元から切断して、すでに半分がこの短時間で再生されようとしていた。

完璧に生え変わるまで……。それを思っただけで昌哉がショットガンを構えると、トカゲ星人は反応して移動を開始した。

「逃げて、時間を稼いで、尻尾の再生を待つつもりか」

トリガーを引くと、トカゲ星人のすれすれでそれは外れてしまった。むろん、追うように銃口を動かすと、連続でトリガーを引き続けて、星人に攻撃を加えるついでに、牽制も果たそうとした。

すると、たったそれだけの行動時間で、尻尾は元の長さに伸び戻り、昌哉への攻撃を再開しようと機会を窺っている様子だった。

昌哉はそれを見て、龍の敗れた事を思いだしながら、どうにかしなければという考えが頭を過った。とりあえず、とりあえずは落ちて着いて冷静に行動して、敵の弱みを見つけることに決めた。

「弱みと言ったら・・・、尻尾を振る際の体のコントロールか。龍が攻撃を避けたり、受けたりした時は、胴体は動かなかった・・・気がする」

いけるとふんで、昌哉は口元で微笑んだ。

それからの行動で、昌哉は田んぼに入り込むと、銃口を地にむけてトリガーを数回引いた。そしてタイムラグで昌哉の周りが爆発。土と水が飛び散って、昌哉の姿も行動も完璧に分からなくなった。

《・・・・・・・・・・ペロ》

トカゲ星人は、その飛び散った霧の中に、尻尾を伸ばして横に振ると、手応えがないように通過した。そして、水と土が地に落ち戻ると、そこに昌哉の姿はなく、静かに田んぼの水がチャプチャプと波打っている音しか聞こえなかった。

《ペロペロ・・・・・・・・》

トカゲ星人いは、以外と知能がある。故に、昌哉をステルスモードで消えたと決め付け、田んぼの波打ち方でどこにいるのかを探ろうとした。

だが、相変わらず波揺れは静かで、水平になろうとしていた。

その時、田の中から空泡がボコボコと音をたてながら浮上。それと同時に田の中から刀の刃が出現。高速でトカゲ星人の首元にむかって伸びていった。

《ペ・・・・・・・・》

見事、それは首元に突き刺さり、トカゲ星人の行動は完璧に止まった。そして、ゆっくりと田んぼの中からは昌哉が出現、呼吸を我慢をしていた為「ぜえぜえ」と息を荒くしていた。

「捕まえた・・・・・・・・。さあ、覚悟しろ」

足を前に進めて、刀を下ろしていく。そうやって、確実にトカゲ星人の体を切断していき、顔から下の胴体は真つ二つに切断し、トカゲ星人は機能を停止した。

「ふう・・・・・・・・。この勝ち方は、ちょっと・・・嫌だな。本当」

体中についた土汚れを払いながら呟いた。そして、道路上にくると、被害を受けた龍に近づいていき、様子を聞いた。

「・・・・・・・・龍。痛みはどうだ？　って、痛いかな」

体を動かすと痛みがはしるのか、龍は目だけ昌哉にむけて「ああ・・・・・・・・」と小さく頷いた。

「バーカツ、昌哉が居てよかったな。　この馬鹿が」

加絵がそうやって龍に暴言を浴びせると、頬を引きつらせて昌哉が「ははは・・・・・・・・」と笑った。

「まあ・・・・・・・・とりあえず。　龍をこれから動かせば、色々危険性が高まるから、動かすわけにはいかない、誰かに龍の守りをしてくれ・・・・・・・・」

「はいはい、俺がつくから・・・・・・・・。　2人でどっかいっちゃまえ」

事終えるのを近場で見ていた雷武が近づいて来ると、そう言った。

「・・・・・・・・じゃあ、お願いします。　雷武さん。」

そついい残すと、昌哉と加絵は走り出した。行き先は決まってい
て、昌哉の提案である、公達のところだ。そこで合流をして、ちよ
うど良く人を割いたら戻ってくる事を考えていたからである。

・・・・・・・・・・・・・・・・

その頃公達は、カエル星人との戦闘をすでに開始していた。

1 撃目は、公によるZガンでの射撃からはじまったが、それは今までと同様に避けられた。だが、避け方は前と違い、ショットガンを構えて撃とうとしているメンバーに対して突っ込んできた。

『うわぁッ！。マジかッ！。こっちにきますッ！』

それぞれがそう皆に伝えるように叫ぶと、近づいてくる星人にトリガーを引きはじめた。だが、時すでに遅し。人間のような手で、公を平手で弾き飛ばすその他のメンバーを地面に殴りつけるように腕を振るった。

公は吹飛び、田んぼに仰向けで突っ込んだ。春魅や哲也達は、カエル星人の攻撃をなんとか避けようと、阻止しようとしたが、勢いについていけず、ただやられるしかなかった。

「な、なんとか脱出して距離をとるか、この場でこいつを抑えろッ！」

哲也が大いに叫ぶと、刀を取り出してカエル星人に振り下ろした。

《ゲロゲーロッ！》

頭を狙ったの攻撃であったが、それは惜しくも腕によってガードされてしまった。しかも振る力が足りなかったり、焦って瞬間的に振ったものだから、腕を斬りおとす事適わず、刀が抜けずにカエル星人が腕を動かすと奪われるように持つていかれてしまった。

「くそッ！ 刀が・・・」

再びショットガンを持ち、射撃を開始。勇んで立ち向かい、逃げる動作は一切見せなかった。

「て、哲也・・・さん」

栞はその哲也の行動を見て、自身も哲也に協力する事を望み、Xガンでカエル星人を撃ちはじめた。

「チクシヨ・・・あのカエル。動いてて全然狙いが定まらねー」

遠めでショットガンを構えている嬰南が、スコープを覗きながら狙撃しているが、適わない攻撃に苛つきをみせていた。

「俺も・・・行つてこようかな・・・あいつら、大変そうだし・・・」

「

修治が準備体操をはじめ、柔軟性を高める。その隣にいた嬰南は撃つのを中止、修治の方をむいた。

「あいつらより強い自信あるの？ 足手まといになるんじゃない？」

「バツカ。オメー、やってみなきゃ分からないっての。それに、女も戦つてるしな・・・」

男として。それを修治は思っていたのだろう。そして、ホルスタからXガンを取り出すと、ゆっくり歩いてカエル星人に近づいていった。

「栞は下がって狙撃してくれッ！ 俺は囷になって注意をひくッ」

迫り来るカエル星人の長い舌を必死に避けながら、哲也は栞にその命令を下した。

「ウオオオツツ！！」

吹っ飛ばされた公が戻ってきた。そしてカエル星人向けて走り迫ると、高くジャンプ、刀の刃を下向きに構え、カエル星人の頭部の天辺に突き刺し、そこに着地。刀をグリグリ動かして苦しみを誘った。

《ゲロゲーロツ！》

痛みは感じているだろうが、足掻^{あが}いて暴れだした。その程度の高さに、公はカエル星人の頭部から落下、哲也達の近くに着地した。

それからカエル星人は、無我夢中に暴れまわった。

哲也と公は、落ち着いてその暴れの攻撃を避けていくが、予測できない行動に反撃は難しかった。

その時に、カエル星人の、体の各所が破裂しはじめ、その原因は栞、春魅、歩きながら撃つ修治によるものだった。

破壊力は十分にあり、カエル星人は苦しみながら田んぼに倒れていった。

「やっとか・・・手こずったな・・・」

公はそう言うと、額の汗を拭った。メンバーは気を緩ませ、一息ついた。

「で、誰がこいつを殺るんだ？ まだ、死んでないぜ・・・こいつ」

哲也がそう公に聞くと、公は首をかしげて考えた。

「俺も点数は欲しいけど・・・これは、哲也でいいんじゃないか？」

「私もそれでいいと思います。 哲也さん、すごく頑張っているし」

春魅が賛成した。そして、それを聞いた皆は「確かに・・・」と頷いたので、哲也は後髪を撫でながらショットガンで止めをさした。

ギョーン

頭部が破裂。カエル星人は動く事はなかった。

「終わりか？ レーダーで確認してくれ」

公の言葉に春魅が反応、レーダーを確認した。

「5点あった内、2点はなくなり・・・ですが、まだここらへんに星人がいますね・・・」

「まだいるのか・・・」

辺りから、ジャプジャプと田んぼの水が揺れる音が流れた。メンバーは一度は緩ませた気をまたと引き締め、星人に備えた。

「唇音が聞こえてくる・・・それに、少しずつ大きくなってきてる」

公は、倒したカエル星人の、頭部から刀を引っこ抜くと、刀に付いた血を振り払うと、Zガンを拾った。

そして、田んぼの土が盛り上り、メンバーを挟むように星人は姿を見せた。

「またカエル星人か・・・しかも2体・・・」

27話

単独の速攻性

「お前、なにすんだよ・・・」

雷武は、龍を担ぐと、バイクにむけて歩み寄った。そして、後席に龍を搭乗させて運転席には雷武が乗るとアクセルを回してバイクを発進させた。

「おいッ！ 傷が痛むッ・・・バイクを止めやがれッ！」

雷武は完全に龍の言葉を無視。バイクの走行速度はさらに上昇していった。

「どこッ、向かってんだよ、そんならい言えよッ」

「俺らは俺らで星人探して、そいつを殺る。そしてあの昌哉つてやつを見返してやる」

「・・・・・・・・負けず嫌いなのか？ 余計な事・・・」

「・・・・・・・・ただやつを見下したいだけだ」

龍の目からは運転しながら馴れない手つきでコントローラーを弄っている雷武が見えていた。そしてレーダーを発見して確認すると、

どこか一点に向かってハンドルをきった。

龍は気が気ではなかった。雷武という人間を知らないのも理由の1つであるが、なにより雷武を自分より弱いと決め付けていたからである。

スポーツで負けるという経験をあまり体験した事のない龍がそう思っただけでも仕方なかった。

「ふざけんなよ・・・星人が強かったらどうすんだよ・・・」

小さく呟いたが、雷武には聞こえなかった。

しばらくすると、雷武がバイクを停止させた。どうやらレーダーの反応場所に着いたようだ。

「お前はバイクに乗っててくれ・・・星人は1人でやるから」

そう言っただけで戦えると言ったが、龍は信用せずに後席から痛みを我慢しながら降りると、ホルスターに付いているXガンを取り出した。

「ッざッけんなッ。余裕こいてんな、不安でしょうがねえ・・・」

膝をついて座ると、辺りをキョロキョロと頻繁に見回して、星人が迫っていないかとかを確認した。今のところはまだないが、不安はやっぱり取り除かれずにいた。

「前まで楽勝宣言してたくせに・・・」

雷武はそう呟くと、辺りの田んぼから出現しようとしている音がした。龍はそれにビビリつて過剰に反応、雷武は田んぼから出てこようとする星人にショットガンを向けながら出現を待った。

「ふう……ふう……くっそッ、腕があれば……痛みがなければ……」

出血もあつた龍が満足に動けない事を自身知っていた。

そして田んぼから星人は頭をだし姿を顕にした。

「なんだ、メダ力でもトカゲでもない……人間？」

雷武の目には普通の人間しか見えなかった。胴体が変わっているでもなく、素っ裸の普通の成人男性。

この星人が田んぼからでてアスファルトの道路の上に立ったとき、目を据えて雷武を見つめた。

「人間……こいつ、倒していいのか？」

ショットガンの銃口をむけた雷武はそう言った。すると、人間星人は手の平を雷武にみせてやめるような仕草をした。

《やめ……やめてくれ……》

「なんだ、こいつ。喋れるのか？」

雷武は驚きを隠せずに呟くと、人間星人は手を下ろして喋りはじめた。

《や・・・やめてくれ・・・もうこれ以上・・・仲間を殺すのは・・・やめてくれ。 君たちとは戦争したくない・・・》

「なに言ってるんだ、こいつ」

《邪魔だったならすぐにでていこう・・・だからもうやめてくれ。 家族にもやめるよう言っよ》

「やめる事なんてできないだろ・・・」

《・・・強制されているのかい？ 誰か仲間に・・・無理矢理・・・》

「しらねーよ、俺も訳が分からないんだよ・・・」

《理由がないの？ だったら許して・・・残り短い命を継続させて・・・》

「知るかよ・・・どうせなくなるなら、今なくなっても同じだろ？」

雷武はショットガンのトリガーを引くと、ギョーンと効果音がながれた。そのときに人間星人は項垂れると諦めたように最後に一言雷武にむけて喋った。

《天変地異・・・君は知ってる？ 計画のこと・・・》

「は？ 計画・・・？ 興味ねーよバーカ」

ババンッ！

あつけなく人間星人の上半身が破裂、下半身は地に倒れると動く事はなかった。

雷武は人間星人を倒したものの、なんか納得のいかなかった。最後に星人が言った『計画』が謎に思ったからであつた。すると、バイク近くにいた龍が雷武の近づいてきた。

「天変地異・・・とか、計画とか・・・きっとそれはカタストロフィを指すんだろうな・・・」

「・・・意味が分からない。　なんだよ、それは・・・」

だが、雷武は龍からその疑問を聞くことはできなかった。

ふと、どこから物音が聞こえたように思えた。龍は過剰に反応し、2人の目の前には、3体のトカゲ星人が出現した。そして、戦うことを余儀なくされた。

・・・・・・

2体のカエル星人に挟まれた公達は、背中合わせで対峙していた。

「公・・・さん。　どうしますか？　どうやってこいつらと遣り合いますか？」

「俺が1体やるから哲也は仲間と協力してもう1体をやってくれ」

哲也の問いに公はそう答えると、ひたすらに刀を伸ばして戦闘準備をしていた。

「公さん、勝てますかね・・・1体でもあんなに手こずったのに」

春魅は不安を口にしたが公は答えなかった。

カエル星人とメンバーが一齐に動きだして戦闘開始、公は単独力エル星人に突っ込んで行き、哲也は槩に声をかけてもう1体のカエル星人に挑みはじめた。

突っ込んだ公は、Zガンを手放して刀を横にして水平を保つと、同じく突っ込んでくるカエル星人の腹部に刀を振った。すると、一瞬にしてカエル星人を真つ二つに切断することができた。

公に斬られたカエル星人は、何もできずに水飛沫をたてながら倒れていった。

《ゲロ・・・ゲロゲ・・・・・・・・》

「公・・・さん・・・凄い・・・。一撃で・・・・・・・・」

公を支援しようとしていた春魅はそう呟いて賞賛した。

ホルスターからXガンを取り出した公は、カエル星人に止めを刺すためトリガーを2、3度引き、破裂するのを確認すると、公の勝利が決まった。

そのころ哲也と槩はカエル星人とはまだ戦闘をしていた。哲也はショットガンを連射してなんとか倒そうとしていたが、カエル星人

の大きな拳の前に劣勢をしいられていて、それを栞がなんとか援護しようと努力するが、Xガンであるために、あまりダメージは感じられないようだった。

そのときに、突如としてカエル星人の頭部が大幅に破裂。大きな音をたてて倒れていった。

「よし、私やつぱり強いじゃん．．．」

カエル星人を倒したのは、遠くから狙撃していた嬰南であった。それを哲也と栞などが気づくと、手を振って感謝を示した。

「これも、公さんと狙撃をしてくれた人のお陰ですね」

春魅がまたと褒め称えた。

「勝った．．．．．で、残りの星人はあと何体なんだ？」

春魅はすでにレーダーで確認していた。

「点は1つ。もしかしたら残り1体かもですね」

「よし、すぐに向かおう。速攻で終わらせるぞ」

その時に、不安にしていた事が現実になろうとしていた。公は星人の所に向かいながらそれを考えていたが、遠目に見える山々の景色が少しずつ暗くなってきたのを見て、不安はさらに高まった。

「太陽が沈む．．．．．完全に沈む．．．」

今はまだ薄らと見える、それは俺たちの救いだ。これから辺りはもっと暗くなっていくだろう、その時にはもしかしたらこっちは劣勢に立たされるかもしれないな・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「速攻でそいつを殺れッ俺が援護してやつからッ！」

龍が怯えながらXガンを早々にトカゲ星人に発射した。だが、攻撃を読んでいるようにそれを避けられると、トカゲ星人雷武に向けて走りはじめた。

「や・・・やってやるよ。俺ならッやれるッ！」

持っているショットガンで正面からくる3体のトカゲ星人に撃ちはじめた。

バンッ！

特に努力もなく1体のトカゲ星人の口が破裂。だが、トカゲ星人は怯む様子はなく、雷武への突進を続けた。

「ま・・・まだまだいけるッ！ 撃ちまくって塵カスにしてやるぜッ」

雷武がさらにトリガーを連続で引き続けたが、隣にいた龍は一緒に雷武と撃たないでまさかの逃走を始めた。

「なッ・・・龍、どこいくんたッ！　一緒に撃てよッ」

「ふざけるなッ尻尾にやられんたろうがッ」

雷武の目の前で停止したトカゲ星人は尻尾を雷武に振るうと、避ける動作をする前に雷武は腹部から真つ二つに斬られて倒れていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・なんだ・・・・・・・・これ・・・・・・・・？」

腹部から血を噴出しながら雷武はそう呟いた。どうやら痛みによって痛みと感^じずにいるようだった。

龍は、逃げながら振り向いて雷武の死を目にしたとき、死への恐怖に駆られてさらなる速さで逃走をした。

「やば・・・・・・・・やばい――」

無理に動きすぎて腕から血が大量に流れはじめた。そして背中に寒^さを感じながら遠くに、遠くにいる仲間に助けを求めた。

その時に、逃げる龍の背後から追いかけてくるトカゲ星人の周囲が、爆発して土煙があがった。

「龍ッ早く逃げるんだッ！」

「なんであたしが・・・・。あいつを助けなきゃいけないんだ」

2人の移動を知って、戻り、追ってきた昌哉と加絵が遠方から龍

を援護射撃をしていた。

トカゲ星人の移動速度は鈍くなり、龍は余裕をもって距離をとる事ができた。

「星人は俺たちがやるぞ。公達の救援を待つてる時間はない」

「時間ってなに？ この戦闘には制限時間とかあるの？」

「制限はあるが・・・今は、その時間より、いつまでこの明るさが続くかだ」

「日のこと？ そういえば、ミッション始まりより暗くなってきてるし、はつきりと近くもみえない・・・」

加絵がそう言う隣で昌哉はショットガンを撃ちながら前進をはじめた。

だが星人にあたらずに避けられると、田んぼの中に潜られて姿が見えなくなってしまった。

不安に思った昌哉は田んぼに連射を繰り返した。

「昌哉、多分星人は深くまで潜ってるから、利かないと思うよ」

「分かってる・・・。それより、走るぞ」

昌哉が加絵の手を引いて田んぼの爆発と同時に走り出した。昌哉の行動を察するに、自分達が走って移動する際に足音をかき消そうとしたのだ。

そしてしばらく距離走ると加絵に停止を伝えて、ちよつとの音も出さないように言いつけた。

「動くな・・・もしかしたら、奴らはこっちの居場所が分からないかも知れない」

「なんで分かるんだよ、そんな訳ないだろ・・・」

「聞いとけ・・・もし、頭を田んぼから出したら居場所は分からない。田の中で動き続けるようであれば、こっちの居場所は分かってる・・・賭け事だな。もし分かってたら、こっちは損しまくり」

「分かるだろ・・・ずっと田の中で過ごしてきたんだから・・・」

「ふッ・・・もし知っていたなら、メダ力星人がやられた時に、不意打ちは簡単だったはずだ・・・」

「あ・・・確かに・・・。　　だったら、普通に動いて音出しても平気じゃないか？」

「俺だつて怖い・・・。　　念のためつてやつだ」

加絵は納得しざるをえなかった。加絵も当たり前前に怖いのだ。

「いいか、頭をだしたら遠慮なく撃て。　　奴らも俺らも、死ぬのは怖い、本気で殺しに来るぞ・・・」

「分かつてる・・・分かつてる・・・」

昌哉は冷静に音を聞き分けて目で追っていたが、加絵はちょっとした動揺で冷静さを失っていた。

その時に田んぼから勢いよくトカゲ星人が飛び出してきた。だが、2人がいる所とは少し離れている場所からの出現だったので、襲われる心配性はなかった。

すぐさまショットガンで出てきたトカゲ星人に向けてトリガーを引いた。だが、早い行動力の前にそれは外れてしまった。

「よし、移動するぞッ！ 急げッ！」

「え・・・？ な、なんで？」

「1回見られたんだ、そうなれば危険度は高いッ」

「お・・・おうッ」

当たらなかつたらやり直し。違う場所に移動して、倒すまでそれを繰り返すしかなかった。

昌哉は考えていた、公ならどう行動するかという事を。刀を伸ばして接近戦に出るのか、それとも田に隠れる星人がまた出てくるのを待つて倒すのか。

「どちらにしても、公ならやり通しそうだ・・・、例えば星人が2体でも、それ以上でも・・・」

いや、俺ならできる、奴の弱点を知っているだろう。動いている間は強力な攻撃の尻尾は使えない、動いている時の攻撃であるなら、

勝機は確かにある。

あ．．．それだ．．．．．。動いてる時は、接近戦が可能。

28話

奇跡は努力の末に

「そうだ、簡単なことなんだ。 2人ならできる」

トカゲ星人が地に潜って姿が見えなくなったとき、動かしていた足を止めて昌哉は加絵のほうを向いた。

「加絵さん、これをもって。 出てきた星人を適当に撃つてください」

「え……はあ……」

昌哉はショットガンを渡した。そして自らは刀を取り出すと、星人を倒す説明をはじめた。

「加絵さんは田から出てきた星人をそれで撃ちながら逃げてください。足を止めちゃ駄目ですよ、走り続けて撃ち続ける事が今ある必勝法です」

「ひ……必勝法!？」

「時間がありません。俺は奴らと接近戦しますので、貴方は俺が言った事をやり遂げてください」

「なッ・・・」

昌哉は走り始め、振動を感じながら星人の出てくる場所を特定した。そして加絵も、とりあえず適当に走り始めた。

地中を進む１体のトカゲ星人は地上の振るえを感じてようがなからうが、今の昌哉の考えの前ではどうでもよかった。地中から出てきたときが勝負だからだ。

たとえ地中で勢い良く尻尾を振ろうが、その威力は知れてる。

「勝てる・・・今の俺なら勝てる」

今の昌哉には確かに勢いがあった。

それからしばらく、トカゲ星人が地上に勢い良く飛び出した。

昌哉はそのチャンスを逃す事はなかった。星人が出現した場所は少し離れているものの、刀を伸ばせば届かないことはなかった。

刀身20m。それをトカゲ星人の首根っこ目掛けて刀を振るう。

光の無い夜空の下の良く見えない中、それは確実にトカゲ星人の首目掛けて向かっていた。

そして、首と刀が接触。昌哉は綺麗にトカゲ星人の首と胴の切断することに成功した。

「よしッ！俺の勝ちだッ！」

大きな音をたてながら田にトカゲ星人は倒れた。そして暇なく昌

哉は、残り1体の星人求めて再び走り出した。

だが、その時に昌哉は何かにつまずいて、田んぼに倒れた。

「くっそ・・・なんだ」

恐らく田んぼの境界線の積んである土に躓いたのだろう。それだけの事。

だが、昌哉はそれが不安で仕方なかった。そう、それにつまずく位に暗く、周りを見通せなかったからだ。

運悪く月灯りもない。本当に真っ暗。遠目に見える町の照明がちよつと見えるくらいだ。

昌哉は立ち上がり、また走り始めた。もちろん周りを見ようが見えるはずは無い。ゆっくり走りながら微かに聞こえる加絵の足音と地中をめぐる星人の音と振るえを感じ分けるしかなかった。

だがやっぱり、それには限界があつて、場所の特定は困難を極めた。

「加絵さん、今どこにいますかッ！」

まずは加絵の居場所を把握しようと叫んでみた。

「こつち、居るッ・・・・・・・・走り続けてるよッ」

ただ無我夢中で走っているらしく、息が荒かった。そして無事という事は確認できた。落ち着いて音を聞き分ければ、どの辺りに居

るのかも多少はわかった。

「そのまま走り続けてくださいッ！」

あとは星人の場所特定のみ……。震音は、この辺りはまったく感じない、深く潜っているか、離れすぎているかのどっちかだろう。

気配をしつかりと感じろ、今どの辺りにいるかが分からないと勝機はない。

そうやってなんとか感じとろうとしていたが、感じる所か、なお更分からなくなってきた。

その時、急な振動が昌哉に伝わった。

「な、まさか……」

トカゲ星人が昌哉の真下から出現し、昌哉の首元を両手をで掴んで持ち上げた。

「ぐッ……かは……」

首を締め付けられる為、昌哉は苦しんだ。その時にスーツが効果を発揮、首元の筋力が膨張してトカゲ星人の加える力に反抗した。

それと同時に苦しさを我慢しながら、掴むトカゲ星人の手首を掴むと、力いっぱい握り潰しはじめた。

ミキミキと音を出しながら手首が膨張していく。星人はそれに負けじと更に力を加えていくが、力差はスーツの方が上で、ゴキーンッ

とトカゲ星人の骨が碎ける音がした。

《ペ・・・ペロ・・・》

トカゲ星人の手首から開放され、昌哉は落ち着いて地に着地しようとしたが、それを拒まんとトカゲ星人は昌哉に噛み付いて、またも持ち上げてなんとか殺そうとした。

スーツに負荷が掛かってキュウウウと耐える効果音が響く。昌哉は口の中に手を入れて、力いっぱい口を開かせて脱出を試みるが、敵も必死をみせてうまく行かなかった。

「マジか・・・ここまでなのか・・・？」

諦めは・・・死だ。それは・・・やっぱり、嫌だ・・・。

昌哉は今一度努力して腕に力を籠めた。そして少し口が開いてきたと思えたとき、周囲からなにやら声が聞こえてくるのに気づいた。

「オツケ。俺がやる・・・。」

昌哉の目からは暗闇でよく見えなかったが、声は公だと確信できた。

ドドンッ!!

Zガンによる圧潰がトカゲ星人の胴体に当たり、噛んでいるトカゲ星人の顔と噛まれている昌哉を残して落下していった。

「・・・・・・・・助かった・・・・・・・・だよな。・・・俺」

解放されて立ち上がった昌哉がそう呟いた。

「昌哉さん、無事で・・・よかったです」

暗闇でどの辺りにいるのかよく分からなかったが、礼を述べた。

「ありがとう・・・公。助かったぜ・・・」

「いいんですよ。助け合わなきゃ生きてはいけませんから、気にしないでください」

昌哉はいい終えると、ふと不思議に思ったことがあった。

「そういえば、公はなんで俺の居場所が分かったんだ？ この暗闇の中見つけるの大変だったろう」

「大体はレーダーを頼りに・・・後は、星人が近いと警戒して進んでいたら、昌哉さんが星人に捕まっている所で・・・」

「・・・なるほど。俺が星人に捕まったのは無駄じゃなかったな」

そう言い合っている間に転送がはじまり、昌哉の頭が消え始めた。

「お・・・転送だ。皆、お先に」

それを聞いたメンバーは、笑って喜んだ。

昌哉は部屋に生還した。だが、どうやら先客がいたようで、そこは昌哉だけではなく、呆然と映し出される昌哉を見ている、雷武だった。

「お．．．．．生きてたか．．．」

「なんだよ．．．俺死んだのか？　生きてないのか？」

「いや、生きてる．．．。　よかったですね、雷武さん」

「なんだし、その上から目線の言い方．．．」

どうやら切断された後の記憶が無いらしい。公から聞いて知っていたが、とにかく、生きて帰ってきたのは喜ばしいことだ。

昌哉の後から続々と部屋にメンバーが帰還してくる。そして部屋に全員が戻ってきたとき、公は思わず皆が思っていることを口にした。

「今回のミッション、死人は．．．無し」

春魅と哲也、栞と昌哉が喜び、時には泣く動作も見せた。

00:22:03

「余裕の時間内・・・」

公はこれでさらに喜びをかみしめた。

黒い球からトライアングルを叩くような高い音が部屋内に響く。
メンバーは黒い球に近づいて集まると、採点を待った。

それでは採点をはじめろ

黒い球に映し出されたその文字を見たときに、誰もが自分は何点なのかを知りたかったが、一番楽しみにしていたのは恐らく公なのかも知れない。

哲也くん

15てん

TOTAL25てん

あと75てんで終わり

「15・・・結構倒したのに・・・倒した個々の得点が低いからか？」

だが、哲也は当たり前前の様に喜んでいた。

自衛隊員（しばう）

8てん TOTAL8てん

あと92てんで終わり

「ふう・・・こんなもんだろう」

昌哉は今回の戦闘で自分はあまり役に立っていないと思っていた。

ギョロメドラゴン

12てん TOTAL12てん

あと88てんで終わり

「これ、俺か・・・？」

反応したのは龍だった。

そして、モモちゃんが付けた名前が気に入らない様子で、ブスッと黒い球を睨みつけていた。どうやら気にしていることが名前部分にあったようだ。

栞ちゃん

2てん

TOTAL2てん

あと98てんで終わり

栞「あ……名前変わってる……やった」

ハルミ

4てん

TOTAL4てん

あと96てんで終わり

春魅「メダカは1体2点で2体……ですか」

ガングロタマゴ

0てん

TOTAL0てん

あと100てんで終わり

化粧してブスに

なりました〜（笑）

「はっ……お前にファッションの何が分かるし……」

加絵が黒い球の中の人間にそう言った。

ライム

1てん

TOTAL1てん

あと99てんで終わり

チョーシのってんな

死ね

「ちょっと待てよ・・・今までの流れだと、点数を手に入れた人間はこう文句は言われないんじゃないのか・・・？」

皆はなにも分からないので、公に視線を集めてなぜかを聞こうとした。

「いや、俺も分からない。異例だよ・・・」

「なんで俺だけ・・・」

修治くん

0てん

TOTAL0てん

あと100てんで終わり

影薄すぎ

ついでにもう1回影薄すぎ

修治「……………くっそ。 否定できない気がする」

銀さん

28てん

TOTAL28てん

あと72てんで終わり

「おーやったー……今のところ一番じゃん、私」

嬰南の喜びの隣でメンバー全員が驚いていた。

「た……確かに、狙撃で星人を倒してたし……」

栞がそう皆に説明する。そしてそれで嬰南はさらに鼻を高くした。

「まあ、私の才能……的な？」

公ちゃん

108てん

TOTAL108てん

100てんメニューから選んでください。

「……まじか。俺、またやったぜ。100とった……」

待っていたという感じに映し出されたそれは、確かに黒い球に100という数字があり、思わず公の目からは涙が溢れていた。

「公さんッおめでとうございますッ!!」

春魅が万遍の笑みで公を祝った。周りにいる人達も同じで、拍手が公に送られた。

100てんメニュー

1 記憶を消されて解放される

2 より強力な武器を与えられる

3 MEMORYの中から人間を再生できる

黒い球のその3つの選択肢を見たとき、さらに涙が溢れてきていた。

「ふッ……あれ？ 今まで、こんなの……感じなかったはず……もつと後で……感じたはずなのに……」

どんどん溢れ出てくる涙を拭くと、迷うことなく三択の内から1

つを選んだ。

「3番。 3番だ・・・」

周りにいるメンバーは黙ってそれを見ていた。そして、誰もが「なんで1番を選ばないのか」と思ったことだろう。

「み・・・実・・・」

言い止めた。実夏と言おうとしたときに、なぜかいい止めてしまった。

そうだ、愛さんを再生した方がとか、そういうのを思ってるんだ。実夏を再生したい気持ちはもちろん一番だが、先の先を考えたら・・・愛さんがいいかも・・・。

勢いを持って戦闘に参加してくれて、俺が好きな子と思った実夏か、それとも指導に長け、人をまとめることにも長けている愛さんか・・・。

考えた。公はひたすらに考えた。だからなかなか結論は出なかった。そして、考えた末に結論をだすことにした。

「決めた・・・じゃあ・・・」

メンバーが公を見つめてその結論に息を呑む。

「愛さんを・・・再生してください」

28話

奇跡は努力の末に（後書き）

採点で半分とは、読者の皆さん、申し訳ありません。

あと、公が2回目のクリアですが、100点の価値が落ちると言われても仕方ないと思っっています。

黒い球に写っている公の得点の108から10が消され、8のみが残ると、「あと92でんで終わり」と表示された。

「本当に愛さんは生き返るのか？」

公は疑問に思ったが、その時に黒い球から光線が発射されて、人が映し出された。

「愛さん・・・だよな、生き返ってる・・・んだよな」

おもむろに映し出される愛さんは、啞然としながら立ち尽くしていた。そして、メンバー全員を見渡すと訳も分からないまま公の顔を見た。

「人が・・・増えてますね。　どうなってるんですか？　公さん」

公は自然と微笑んでいて、ゆっくり立ち上がって愛さんの前に立つと、までも出てきていた涙を拭くと、しっかりと愛さんの顔を見ながら喋りはじめた。

「愛さんは、前のミッションで死んだんです。　そして、今回のミ

ツシヨンで俺は愛さんを再生しました」

「私が死んだ？ そんな記憶は・・・ありませんけど・・・」

愛はそう呟いたが、首を横にふって気持ちを整理すると、微笑んで公に言った。

「3番ですよ、公さん。ありがとうございます」

そう公に感謝を述べたが、愛は、公に疑問に思ったことを聞いた。

「公さんは、なんで私を再生したんですか？ 実夏さんを再生すればよかったのに」

公は眉をひそめながら言った。

「確かに、実夏は生き返らせたかったです、先の先を考えたら、愛さんは有力ですよ・・・やっぱり」

「有力・・・ですか。 私には分かりませんが、これからもっと全力を注ぎますよ、絶対」

「力の素質ある人間より、知恵あつて分け与えられる人間を・・・優先って感じですか・・・ね」

今回初ツシヨンのメンバーは、愛さんを珍しそうに見つめているが、公とその他メンバーは懐かしさや、生き返った喜びに浸っていた。

すると、龍が皆より一歩前に出ると、愛を含め、皆に聞くように

質問をした。

「愛さんって・・・どういう人間？　なにに対して使えるの？」

その質問に公は「失礼じゃないか？」と呟いてたが、龍の質問も、もつとも。それを知らなかったら、次のミッションにどう臨めばいいかわからないからだ。

「私は・・・・・・。経験者という利点のみと、皆さんよりちょっと知識があるくらいですよ。もつとも、戦闘には貢献できるかはまったく言っていないほどないと思いますが」

「知識か・・・・・・。訓練とかには役に立つかもってか」

「そうですね」

「じゃあどのくらい知識を・・・・・・」

「龍。もうやめろ・・・公さんが決めた事だし、結局は皆協力しなきゃいけないんだから、後々に分かるよ」

哲也がそう発言をした。それを聞いた龍は「ああ・・・」と俯いて言つと、引き下がった。

「なあ、いつになったら帰れるんだ？　帰りたいんだけど」

雷武が横からわって発言した。それに対して、愛さんが「もう帰ってもいい」と伝えるが、とりあえず、まだこの部屋には止まるよと言った。

「次の戦闘に備えて、訓練をしましょう。日にちは休日で、出来たら全員が参加した方がいいでしょう。皆さん、参加できますか？」

愛の発案に公は何も考えず首を縦に振った。

その周りのメンバーで、昌哉、哲也、栞、春魅もすぐに訓練参加に賛成、ほかのメンバーは遅れてから参加を宣言した。

「全員参加か……」

公の発言に続くように愛さんが喋りだす。

「訓練日時は、後日、皆にお伝えしますので……」

皆はそれを聞くと、早々に部屋を後にした。

俺は途中で愛さん呼び止めた。

「どうしたんですか、公さん」

「実は、影で新人の龍から聞いたんですが……」

「私が居なかった時になにかあったんですか？」

「ええ。どうやら、今回のミッションで日本語を話す星人と対面したそうで、その星人は『天変地異、計画』とか、質問を受けたりしています」

「計画……。それは一体なんなんですか……」

「もしかしたら・・・なんですけど、それはカタストロフィなんじゃないでしょうか？」

「カタストロフィ・・・。謎が多すぎますね・・・。」

「黒い球の部屋のサイトに、日々は常に終焉に向かっているとも言ってたし・・・。」

「終わりが・・・始まるんでしょうか・・・。」

愛さんにそれを伝えると、俺は帰り道が一緒の春魅と共に帰路に着いた。

・・・

「ねえ、ちよつと昌哉くん」

加絵がマンションの階段を降りていく昌哉に話をかけた。昌哉は何事かと振り向いた。

「加絵さん、どうかしたんですか？」

「なあ、暇あったらちよつとそこでメシ食わないかな？ 行こうよ」

「・・・いいですけど、金ないですよ？ 俺」

「あたしが奢ってあげるって・・・。ちよつとだけちよつとだけ」

「・・・・・・・・・・いいでしょう」

昌哉は加絵に続いて、数十分歩いた末に、凄くオシャレな飲食店に到着した。

いつもは入る事がない店だけあって、昌哉は緊張していたが、加絵は当たり前な顔をして席に着いた。

謎の恐怖に、というか、不安に包まれた昌哉は、静かに加絵に話しかけた。

「ずいぶんオシャレな・・・店で。俺は普段来ない様な店なので・・・緊張が・・・」

「カッコいい顔して何言ってるの？彼女とかと一緒にこういう店に言ったりしてるでしょ・・・」

「彼女、いないですし・・・」

「はぁッ！？男前な顔と性格してるのにっ!？」

「関係ないと思いますが・・・」

「まあ、とにかく、ゆっくりしてても大丈夫だよ・・・ここは、私が働いてる所だから」

「はぁ・・・・・・・・」

と、言われても、ゆっくり出来るはずなかった。

同僚なんだろう、店員のニヤケ笑いに、加絵を知っている常客のニヤケ笑い。視線を無視するのは困難です。

そう考えながら俯いていると、ふと、気になった事があったので、加絵さんに尋ねてみた。

「そういえば、雷武さんとか、修治さんとは、どんな関係で・・・？」

「ん？ ああ、高校同じだっただけ。あの部屋に行ったのも、同窓会の足として免許もってる雷武の車乗ったら事故りやがったからだし・・・勘違いするな、付き合ったりとかは絶対無いから」

「そうなんですか・・・」

「お前は？ 昌哉はなにがあってあの部屋に？」

急な質問だった。それには、あまり答えなくなかったが、聞いた身だし、教える事にする。

「俺は・・・焼死なんですが・・・。黒い球の勘違いあって、部屋に・・・」

「・・・？ 勘違いって、何？」

「俺は生きてて、生き返らされた・・・そんな感じですね」

「どういう意味？ 自分がもう1人いるって事であってるう？」

「それです。だから、今は帰る家はありませんし……」

「ふうん、辛い立場なんだね……」

加絵はそう言うと、ちよつと考えた後に赤ら顔の小さな声で、呟くように昌哉に言った。

「あたし、1人暮らしなんだけど、寝床くらいだつたら貸すよ？
戦闘で色々アドバイスくれた感謝の気持ちで……」

「え……」

真顔で俯いていた昌哉は、思わず顔を上げて加絵の顔をみた。

「あたしだって人間だし、助け合いは……ね？」

「俺は……お願いするしか、ないんだよな……」

悲顔のなかの小さな笑顔。それは、感謝仕切れないほどの、思いなのかもしれない。

・・・

「龍、お前は馬鹿だよ。あの部屋にはさ、望んでいくもんじゃないぞ」

帰り道、哲也は龍にそう語った。哲也の少し後ろを歩いている栞は、それを黙ってみていた。

「そうでもないぜ。あの部屋には、俺にとって希望が溢れている」

「あの部屋にいる人間はッ、皆自由になりたいんだッ！部屋にいる限り、希望なんてない……」

哲也の強い発言に龍は反応した。

「……でもさ、未来の未来を考えたら、あの部屋は希望だぜ？ カタストロフィは近い。分からないけど、なんとなく俺はそう思う」

「……めんどくせえ。なんだよそのカタストロフィって」

「クリアの度に2番を選択して、強力な武器を沢山。なんとかして間に合わせないとな」

「自由を望んでいる俺と、強力を望んでいる龍。友達なのに、こつとも思考が違うなんてな」

哲也がそう発言すると、後ろにいた栞がなにか思ったのか、喋りはじめた。

「自由になると、記憶は消されるんですね……私は、なんか、それは嫌な感じがします。皆と戦って勝利した思いが……」

「確かに嫌だけど、それが辛ってもんじゃないかな……」

話が纏まらない。皆は皆で、譲れないものがあつて、望むものがある。

龍は力を欲して、来るべき運命に・・・・・・・・。

哲也は自由を欲して、努力を・・・・・・・・。

栞は継続を欲して、悪道を・・・・・・・・。

「なんかさ、カタストロフィが本当にあつたなら、俺の選択は逃げるってことなのかな・・・」

哲也が2人に聞いた。

「怖いしな、普通は逃げたい気持ちは当たり前だろ・・・」

龍がそう呟くなか、栞は考に耽つて呟いた。

「モモちゃんは、悪なの？ それとも善？ どっちもかな？ 少なくとも、一度死んだ私達には、救い以外のなにものでもないか・・・」

・・・

「公さんと愛さん、訓練のコツを教えてください。家で予習とこうと思ってるんですが」

公と愛と一緒に帰る春魅は、2人に聞くように質問した。

「コ……コツ？ それは……想像力によるんじゃないか？ もし、強い星人が出てきたとして、その星人にはどう勝てばいいのか。それを考えたときの、イメージトレーニング……」

「なるほど。 無限のイメージをつて感じてですね……」

春魅が首を縦に振って納得していた。

「私は、素振りなど、ガン扱い慣れの為の訓練ですかね。 とりあえず体動かしとけて感じて……」

「なるほど。 単純に体動かせと……」

『……』

2人は、『これはアドバイスじゃないな』と、思いつつ、誰でも考える事だと思いつつ、腕を組んで『アドバイス』助言』を考えてこれでいいのかと考えまくった。

「……私、正直、不安でしょうがないんです。 今までのミッションは、全て公さんが居てこそ私は生き残っていて……。 もしも守ってくれる人がいなくなったら、きっと私はすぐに……。 そう思うと不安で……」

「不安があるから強くなろうとしてるんだろ？ なら、それでいいじゃないか。 守られた分だけ誰かを守ればいい、全て助け合いさ。 それを繰り返していけば、いつの間にか自身は誰かの頼りにされてるよ」

「そうですよ、春魅さん。 向上心は守った人の気持ちを良くしますし……」

「……ありがとうございます。 愛さん……」

「いいえ。 いいですよ」

「あれ？ なんかおかしい気がする……」

なんとなく、感謝強……いや、何も思っな。 見返りを求めている訳じゃないだろうッ。

「まあ、努力あつて奇跡は生まれるしね……」

努力して、次こそは実夏を生き返らせる奇跡を起こしてみせる。

29話

時遅し生還（後書き）

昌哉がイケメンキャラと言っ事を忘れていた。

30話

そんな日常は幸福だった（前書き）

なんか、書き方が話別で変わるとか、思ったのは俺だけではないはず。まあ、温かい目で。

それと、なんかゆる〜く30話に到達しました。嬉しい事です、本当に。

向上心をもって、もっと面白くなるような書き方が出来ればなと、思う所存です。

30話

そんな日常は幸福だった

ミッションの次の日。公は全力でやりながら、適当に仕事を終わらせると、少しずつ沈んでいく太陽を眺めながら学校に向かっていった。

そして数分後、学校が遠くに小さく見えてきた頃、公はあることに気づいた。

「なんだ・・・あれ？」

視線の先には記憶にある戦いの後があった。Zガンの攻撃、星人の暴れまわった後。様々な記憶がしっかりと蘇ってきた。

「そうか、ここだったのか・・・」

大しては驚いてなかったが、まさかいつも通っていた通学路に星人が潜んでいたとは思わなかった。

警察車両が沢山止まっている中、それを無視して学校に向かうとずらっと並ぶ自転車の合間に自身の自転車を停車させて、学校玄関を通過すると教室に入って、いつも座っている席に着いた。

そしてカバンからいつも読んでいる本をとりだすと、右手に顔を寄りかけ、左手で本をもって読みはじめた。

本の内容は「孫子」であった。

これからあの部屋で生きていく為に、少ないながら知恵の土台となる知識を手に入れるために、2度3度繰り返し返して読んでいる。

いい言葉や考えが沢山載っている。とくに、誰でも一度は聞いた事はある、敵を知り、己を知らば百戦危うからずとは素晴らしいものだ。

ほかには、戦いは奇をもって勝つも素晴らしい。

敵と戦うに、正しい策をもってあたり、破るには奇襲をもって変幻自在に勝る事である。

これから見ると、今までの戦い方はなんともレベルの小さいものなのだと感じた。涙を感じた昔の戦闘。それに勝る方法は沢山あった。

感心しながらそれを読み続けていくと、チャイムが鳴った。教室には30人程度の生徒が集結していて、授業が始まって私語は静まらなかった。

そんななかで授業を無視して本を読んでいると、女友達が声を掛けてきた。

「最近、来ないよね。昔よく来た女の先輩」

「先輩？ 誰だよ、それ」

「おいおい、酷い奴だな・・・いたべ？ えーと、亜鐘って言ったっけ？」

亜鐘。そういえば昔の記憶でそういう先輩がいたな。中学の頃よくお世話になった先輩だっけ。半年くらい前に行方不明になったとか、ちよつと聞いたけど。

「思い出した？」

「ああ。 はつきりとね」

「いま、どうしてるの？」

「・・・さあ。 連絡手段はなくなってしまったし、なにか、事件に巻き込まれたか家出かなにかしたんじゃないか？」

女がふうんと言い返すと、そのあとで質問したように思えたが、聞く耳を持たないで考え事に集中してしまった。

そうだ、結構前に来たときは、隣に赤髪の男性を連れてたな。その人にきつと何かされたか、かけおちでもしたか、そのくらいしか考えが浮ばない。

その時に俺は、ちよつとばかし黒い球の部屋に行っただのと思っただが、まさかそんな事とは思って考えるのは中断した。ってか、考えてなんになるってもんだしね。

その時に女が平手で俺の肩を力強く叩くと、痛みで反応した俺は

しかめっ面で振り向いた。

「無視なんていい度胸じゃねーか。そっちがその気なら私にも考えはある。もう無視が出来ないくらいに心体追いつめてやるぜ」

うつと、俺はしかめっ面を解く。そして手を合わせて許しを願うと、なぜか相手はさらにキレテ手首の準備体操をはじめた。

「あれ？　なんで、許してくれよ……………」

「その謝り方がなんか気に食わない。　覚悟しろよ」

いや、確かに謝り方にちょっと軽い感じがあっただけども、なににも殴るという選択肢に行き着くことないだろう。

「いや、本当。　反省してる。　許して」

「本当に反省してる奴は、許してなんて乞うはずはない。　歯を食い縛れ」

「あ…………あ？　じゃ、じゃあ、好きにしろ。　これが俺の反省の心だ」

「よく言った。　体の力を抜けよ？　無駄に力むと痛みは倍增するからな」

ダメだ。どっちに転んでも殴られる惨劇は変わらないのな。やめて、なに手にテープって言うか、包帯と言うか、巻いてるの？　今日の俺はスーツを着てないんだ、勘弁——。

10分後には職員室に呼ばれ、顔が腫上った俺と女が、延々と先生の説教を受けていた。

でも、それが楽しい日常だった。いつかあるミッションを忘れて、カタストロフィという事実無根を忘れて、ただ、楽しいとしか思えなかった。

それにしても、亜鐘先輩は本当にどうしたんだろうか？

...

部屋内に芳しい感じがある。台所で肉や野菜を焼いて飯の準備をしている加絵と、部屋の隅でテレビを眺めて変に緊張をしている昌哉はどうも、何も喋ることはなかった。

さて、どうすればいいのか。加絵さんは快くオレを部屋に迎え入れてくれたが、なにをすればいいのかさっぱり分らない。

家に止めてくれるだけでも嬉しいのに、さらに食事までもご馳走になって。オレはなにもお返し出来ないからどうすればいいのやら。なりゆきによって食事の支度や部屋内の掃除など、簡単なことしか出来ないけど、それを進言してみるか？なんか難しいけど。

「お待たせ・・・。味つきは薄いと思うけど」

加絵がテーブルに食事を置くと、適当に食べてと言われた。

とりあえず、食事にはまだ手を付けないで、お礼として今考えた

ことを言おうとした。

「あの、加絵さん……………」

そのまま喋り続けようとしたが、加絵さんはもう分かってるかのように首を横に振って言動を中止させると、ため息をつきながらテーブル近くに座る。

「変に気を使うなよ。お前のせいじゃないんだろ、もう1人になっちゃったのは。私に恩を返したいって気持ちは嬉しいけど、とりあえずは楽にしてな、心を落ち着かせてから、それからなにかやって欲しい事があつたら頼むからさ」

昌哉は言葉が出なかった。そういえば、死んでから、人にはあまり甘えた子とはなかったな。守られたりとか、そういうのはあったけど、身を委ねた訳じゃない。いつも、考えて考えて、どうやったらいいかとか、自分の価値を考えていたけど、安息は、加絵さんがくれた。

「ありがとうございます……………」

何度言ったか分からない感謝をまたと加絵さんに言った。それでも、とりあえず加絵さんのためにやっておきたい事を言おうとしたが、飯が冷めるとの理由で、とりあえず食べてからという理由でまたも中断された。

さて、それで飯を食べ終えた後にて、加絵さんに声をまた掛けると、今度はしっかりと話を聞いてくれた。

「彼方の優しさはしっかりと受け取ってます。ですが、出来る事

をやつてながらも考え事は出来ます。手伝いは・・・させてください」

加絵さんは後頭をぽりぽりと搔くと、「そっかー」と眉を顰めると、頷きながら「わかったよ」と、発すると、じゃあと言わんばかりに、してもらおうとする手伝いを言った。

「炊事、洗濯、掃除、あとは戦闘訓練のコツを教えて。あとは、本番の救援を・・・」

要求が多すぎるように思えるが、昌哉は鼻先でフツと笑うと、微笑みながら「承知です、任せてください」と答えると、いいの？と言いたげに加絵は呆然としていた。

それでいいさ。多分、それじゃ仕切れないほどの感謝があるし。

またも後頭を搔く加絵は、小声でなにかを呟いていたが、俺には聞こえなかった。

「あ、そうだ。聞きたいんだけどさ、廊下で公つて男と話してたとき、「オレとお前は似ているように思える」って言ってたけど、どこが？ 性格も顔も全部違うじゃん」

「ふん・・・。それは、性格とか、顔とかは関係なくてな、経緯とか、そんなものだと思う」

「公はもう1人なんて居ないんでしょ？ じゃあ違うじゃない」

「奴にも、昔は悲しい思い出があるらしい。だから奴は強いんだ。そして今回、今まで辛い思い出をしたことのなかった俺は、コピー

という現状で悲しみを生んだ。これからオレはきつと強くなっていくから、なんとなく公と似ているとでも思ったのかな」

「カッコいいね」。でも、強くなるなんて、どう分かるの？」

「考えた分だけ強くなり、決心した時にさらに強くなる。加絵さんも、今も強くなっていつてるんですよ」

「そんな考え方したことないよ……私も強くなってる、か」

成長なんてのは永遠なんだ。体の成長退化とか無視して、知を得たらそれはもう成長だと思う。

ただ、悲しい思いをしないで強くなった人間だっていると思う。恐らく愛さん。勝手に決め付けるようだが、あの人は普通に強い。誰かに勝るとか、力関係でなく、想いに重点を置けばのことだ。

まあ、とりあえず自分はまだ成長段階な訳で……。

...

「はあ。次のミッションはいつなんかな」

龍が廊下の窓際に座り込んで壁に寄りかかっている哲也に聞こえる程度に呟いた。

「ふざけんなよ。ミッションなんてそう沢山あったまるかよ、

俺は2日連続でもう、まいってるよ……一生来ないでほしい」

それを聞いた龍は驚いたように立ち上がると、哲也の顔を覗いて喋りだす。

「本気で言ってるのか……。一度でも面白いとか、そんなふうに考えた事なかったのかよ？」

「…………お前は思ってたのか。俺は、初のミッションのときははつきり言って吐きそうだったよ。星人の死体は普通に大丈夫だったけど、人間は抵抗があったな」

「人間……人間殺したの？」

「な訳あるか。星人の攻撃に巻添えくらった人達……………思っただけで吐き気がするぜ」

哲也は振り返って窓から外を眺め、深呼吸を繰り返して気持ちを落ち着けると、龍に向いて言った。

「得点貯めて更に強くなることを考えるより、生き残ることを考えたほうがいいと思うぜ？　いつまでも、あの程度の強さの星人が出てくる可能性は低いぜ。次のミッションだと、考えられない様な奴が出てくるかも知れない」

「そうかも知れないけど、考えてたらキリがないぜ」

座り込んで携帯をいじりはじめた龍は、暇つぶしにゲームを始めた。すると、ゆっくりと近づいてくる栞に龍は気づいた。

龍は、まだ外を眺めている哲也を見て、おもむろに立ち上がると「じゃあな」と別れを告げて何処ぞに歩いて行ってしまった。

そして、離れていく龍に気づいた栞は、外を眺めている哲也の隣にくると、顔を覗いた。

「て・・・哲也さん」

びつくりして哲也が栞を見る。よほど集中して外の景色を見ていたようだ。とりあえず深呼吸を数回した哲也は、何事かと栞に質問した。

「なんか用があるのか？」

赤ら顔で俯いている栞は、小さな声で哲也に伝える。

「昨日は龍さんが・・・居て、言いにくかったけど、ミッシェン一緒に行動しようって言うてくれてありがとう・・・ね」

哲也が考える。そういえば、龍にバイクの後席に乗ることを断って部屋に戻った後のことか。あのときは、あまりものを積極的に喋らない栞が孤立してしまうのを心配して言ったんだけどな。感謝されるなら願ってもないことだ。

「どういたしまして。　ってか、礼を言うほどじゃないぜ、それ」

「そんなッ、私は嬉しかったんですよ、本当に」

そう言いきったところで、栞の赤面は増し、自分が言ったことの

はずかしさによって逃げ出してしまった。

「あらら………」

全然嬉しいから気にしないでいい。それを言う前に姿を消してしまった。まったく、微笑ましくさせてくれる女だ。初恋の味ってか？

まあ、いい慣れてないと、恥ずかしいか。分かんんでもない。

...

「お前、本当懲りずに学校くるのな、キモいんだよ、チビが」

そんな言葉を投げかけられても、春魅は一行に気にしないで俯いていた。

春魅を囲む4人の女の1人が痺れを切らして机を力強く蹴飛ばした。それによつて春魅はビクンツと驚くが、それは恐れあつてのことではなかった。

まったく、なんなのか。同じクラスである私を虐めるこの人達ははっきり言つて、私はなんで虐められているのか分からない。別に、特別勉強ができる訳でもなければ、できない訳でもない。

運動もそうだ。同じ事。それを考えた上でもやっぱり分からない。

機嫌を損ねる様な事もしていないし。もし、体の事とかでそんな事をしているんなら、迷惑極まりないよ。どうしようも無い事なん

だ。

「今日も顔見たくないから・・・帰れ」

「そうそう。それで、明日こそは学校にくるなよ」

目を細めた春魅は、俯かせていた顔をあげて真顔で語りかける。

「聞かせてください。なんで私を虐めるんですか？ 私は貴女達に迷惑をかけるようなことをしましたか？ 理由を教えてください」

「は？ なんなの、いきなり・・・キモいんだけど」

質問を答えずに暴言が春魅に降りかかった。だが春魅は引き下がらなかった。ミッシヨンで経験したことを考えれば、この女達の言葉など赤子の鳴き声に等しいくらいにかわいらしいもんだ。

ゆっくり席を立て女達と対峙する。そして1人の女の顔を見上げると、女は眉を顰めて怒りを高調させて見下した。

「そういうところじゃない？ うぜんだよ」

「私は今までこんな行動をした覚えはありませんから、理由に足りません」

「そこを含めてってことだよ。 全部全部」

やっぱり。皆きつとこの1人の女と理由は同じだろう、理由なんかないんだ。ただ、暇つぶしに私を虐めてる。虐めに足る理由を持ち合わせていない。

いや、どんな理由があっても虐めてもいいという答えにはならないけど、この人達が思う感情は、自分勝手に卑劣なんだと分かる。

そう。そうだ。さっき言ったように虐めに足る理由なんてない。

どんな非道な事をして、どんな事があつたとしても。虐めは1人の自分勝手から始まり、それを面白く思った人間が、加勢するように虐めだす。

自分の考えなんだよ。人のせいにも出来ない。目先の欲に囚われて落ちぶれている事にも気づかずやり通していく。見てて不憫に思えてくる。

「納得したかよ、春魅」

「下らないです。文字通り、まじめに取り合うだけの価値を感じられません」

そのときに春魅の頬に強い衝撃を感じた。机や椅子を巻き込んで倒れていくと、キレた1人の女が、春魅に押し掛かって力の限り殴り続けた。

だが、無駄だった。春魅は服の下にスーツを着ていたからである。

殴り続ける女は、手首に痛みを感じて中断。「てってー」と痛みを表すと、わけも分からない顔で春魅の顔を見た。

「なんだ・・・こいつ。痛くないのか？」

「鍛えてますので」

嘘をついた後に上体を起こすと、女の腹部を持って押し弾いて体からどかした。

残りの女達がテメツと言って殴りかかろうとした瞬間、チャイムがなって授業はじまった。女達は動きを止めてチツと舌打ちするが、春魅がおもむろに立ち上がると、

「運がよかったですね。私、こう見えても合気道してるんですよ」

もちろん嘘。やった事は一度もなく、脅しのつもりで言ったのだ。

どんなことをする武道なのかは知らないけど、噂では「争わない武道」とか「愛の武道」などを聞いたことがあるから、いざという時でも殴る必要はないのだろう。

そして脅しが効いたらしい。女を軽々しく持ち上げて退かした事もあって、女全員が青ざめた顔で退いた。

まあ、スーツの力に頼った感じになったけど、とりあえず私は勝った。それから授業は何事もなかったように始まり、それからその日は、もう虐められることなく家に帰り着くことができた。

ほっとしながらも、幸福な一日であったことに違いはない。

31話

協力の法則（前書き）

最近、縦読みにはまっている。っていうか、縦読みのほうが読みやすい。縦読みにできる事を最近知りました。ハズい・・・。

31話

協力の法則

日常は止まらないで進み、ある休日に家で暇つぶしに本を読んでいると、集合のメールが届いた。

宛先は愛さんからだった。内容をみると、「訓練を今日、今すぐ出来ますか？ 昌哉さんと話して訓練方を考えましたので、出来たら今すぐ集まっていたきたいです。スーツの着用は自由。場所は……」であつた。

なるほど。行かない訳はないので、行く事は決定。スーツを着込んで、動きよさげのジーパンを穿き、着込んで馴染んでいる革ジャンを着ると、母には友達と遊びに行くと言って家を飛び出した。

自転車はもちろん乗らない。場所はそんな遠い所ではなかったし、走って行くことによって、ちょっとした準備体操と考えていたからだ。

場所は施設が多々建っている近くの大きな公園。

地面にはブロックが埋め込まれていて、木々は3mおきに植えられている。ちよつと歩けば運動場があるし、近くでジョギングをしている人もいた。

そこに、俺を含めた、年齢がバラバラな人達が集合した。だが、今日は無理だと雷武、修治、龍の姿はなかった。

「これない人には、それぞれで予習してくださいとメール送信しておきました、存分に訓練に集中してください」

愛さんがそう言うのと、皆を見合うように集合させて、手前に腕をだすよううながす。愛さんの表情は、なんとなく、何か企んでいるように微笑んでいた。

「ジャンケンをします。最初はグー……」

皆戸惑いながら手をふったあとにグーを出す。そして愛さんが「ジャンケン……ポン」と言う人と人が多くいるにも関わらず、勝負は一瞬にして決まった。

「俺だけ……。チヨキですか」

なんとも不幸を思わせる結果だ。俺以外は全員グーで、数人が口を抑えて笑いをこらえている。その中に、春魅や愛さんがいた事を俺は忘れないだろう。

「って、ジャンケンしたのはいいですけど、何するんですか？　って、なんか想像つくけど」

そこで昌哉さんが皆より前にでると、準備体操をしながら喋りだした。

「鬼ごっこだよ。単純にな」

「こ・・・子供みたいですね。 そんな遊びは中学以来ですよ・・・」

ため息をつきながら体を前のめりにすると、昌哉さんがさり気なくルールを言う。

「15分経つてもお前が鬼だったら、罰ゲームな」

「ええ！？ ちょっと、それ酷くないすか？ 俺は大丈夫か分かりませんけど、走りの遅い人はすぐに罰ゲームですよ」

「大丈夫だ。 そこもしつかりと考えてある」

昌哉さんはそこからルールを説明をはじめた。

鬼が15分以上継続された場合は罰ゲーム。

鬼以外の者は、足を止めてはいけない、敷地外への逃走は禁止。破られた場合、鬼と同様に罰ゲーム。

なお、ゲームのタイムリミットは1時間として、最後まで鬼だった者は罰ゲーム。

なるほど、実に単純なルールだ。 鬼以外は足を止めてはいけないから、疲れは増すだろうし、もちろんの様に鬼は負けてはいけない。

だが、このルールにはなにか、昌哉さんの意図があるように思え

て仕方がなかった。

なぜなら、ルールに欠陥がありまくりだからだ。鬼は敷地外追走はOKという考えができるし、足も勿論のように休めてもいい。

ああ、なるほど。これは黒い球の部屋のミッション時のルールと同じような感じだ。

星人はどんな事をしてでも住人を追いつめて倒していいが、住人はそれなりのルールの上で戦闘をしなくてはいけない。

まあ、このゲームの場合は、鬼から逃げるというものだけど、15分以上経ったら住人に負けという感じになっているし、すじは一通っている。

「じゃあ、ゲームを始めますよ。公さんは10秒経ってから追いかけてみてください」

「分かりましたよ、愛さん」

俺は、星人役というわけだな、やってやるぜ。部屋に昔からいた人間のそこ力を見せてやる。

ゲーム開始。俺は数え始めると同時に、皆がどの方向に逃げたかを確認した。

昌哉、加絵、春魅がまとまって俺から見て北に。哲也、栞は東に。愛さんは単独西へ逃げた。だが、その中で1人、俺の周りをジョギングで走っている豊南さんは、ニヤニヤ余裕の笑みを浮かべていた。

どういうことだ？ わざとしているということとは分かるけど、なぜこの様に余裕の表情でいられるのか。俺が数え終わったら第一の標的にされるのは目に見えているだろうに。いや、むしろそれが狙いなのか？ なにか考えがあつてのことなのか？

まあいい。最初の標的は嬰南さん、あなただ。

「じゅうッ！」

数え終わり、飛び出して嬰南さんを追走した。だが、運動が出来る方なのか、俺とは走る速さが互角のようだ。

嬰南さんの逃げた方角は、誰も逃げなかった南方面で、公園入り口に続く一本道だ。だが、ルールからすれば外に出れないので、嬰南さんがそのまま逃げ続ければ行き止まりということになる。

嬰南さんはそれを知らないのかと思つたが、言つつもりはない。行き着いてもらえれば好都合だし、相手が気づかないまま追いつめることに成功すれば、早々に罰ゲームからは解放されて、あとは誰の言葉を聞かないで逃走し続ければいい。

ニヤリと俺が笑つたとき、嬰南さんは入り口前で振り向いた。そして足踏みをはじめ、それでもなお余裕の笑みを浮かべていた。

「どうした、ルールはべつに破つてないぞ？」

「知ってますが、自分がいまピンチなの、気づいてるんですか？」

そう言つと嬰南さんはリズムをとりながら両足同時に跳ねて、ステップを取りはじめた。俺にはよくその行動の意味がよく分からない

かったが、このチャンス逃さないように動きを細かく見分けた。

そしてタッチしようと近づいた時に、頬に衝撃がはしり、地面に倒れてしまった。強いとは言えなかったが、それは嬰南さんによる防衛的攻撃だった。

そして俺が伏している隙に通過していくと、俺は勝負に負けたという形になった。

すぐに追うという選択は浮ばなかった。なにより、また追ってもすぐに殴ってくるだろうと思えたからだ。それならば他の人を探して追う方がマシだろう、きっと。

「ここは、春魅や哲也、栞などの年下の奴らを狙うのが鬼ごっこ醍醐味だろう」

そうとなればすぐさま行動を開始だ。すでに5分が経過している。俺は敷地外にでて、逃げる者の搜索にあたった。

敷地をグルッと回って東方面に到達した。ここには、施設が多々建っていて、隠れる場所にはきつと好都合だから、人がいるように思えた。

忍び足で音をたてないようにして耳を澄ますと、誰かの声が聞こえてきた。

「公って人間は、きつと単純だからここで足踏みをしていれば、何事もなかったようにゲームはそのまま終了するだろうな」

「確かに。　ここなら安全ですね」

声からして哲也と栞だ。塀のせいで姿こそは確認できないが、そこにいるのは確実だろうと思える。それにしても、なんだこいつらの会話は。俺を馬鹿にしすぎだろう。

「公は今、付き合ってる奴はいなさうだな。きっとあーいう奴はムツツリだよ。最初に隠れてつく人間なんだよ」

「確かに、愛さんの胸元に視線が集中しているのがバレバレでしたよね」

こいつら、何様のつもりだよ……。俺の怒りを買いたいらしいな。いいぜ、売ってやるよ、覚悟しやがれ…………。

塀をおもむろに上りはじめると、気配を察知されないように顔をだす。すると、どうやら余裕をかましてるのか、車が数台ならば、駐車場のど真ん中で足踏みをしていた。

「公って人間は……………」

言わせる前に俺は飛び出した。そして怒りをあらわにしながら哲也と栞を指すと、冷静さに欠けていたために、走るときに音をたててしまっていて、2人に気づかれて逃走されてしまった。

だが、俺が優勢であることに変わりはない。距離は少しずつ縮まっているから、いつかタッチが出来ることは必至と思えた。

そして施設の壁に、2人は追いつめられて身動きが自由に出来なくなったとき、公は2手に分かれるのに注意して、狙いを栞に定めると、哲也には目をくれなかった。

栞の足が壁に近づくにつれて遅くなっていく。哲也が離れた場所から俺を侮辱する声が聞こえるが気にしない。そして遂にタッチを目前に控えたとき、予想外のことが起きた。

宙に浮いて壁を蹴ったかと思うと、一瞬にして公の背後に着地したのだ。

「な・・・嘘だろ・・・」

そう言った後に追走するが、驚きあって一瞬隙ができてしまって、距離が縮まないと広がるばかりだった。

「マジか。あの栞にも負けた・・・。ってか、あの完璧な壁ケリはなんなんだ？　すぐさまの考えでできるようなものじゃないぞ」

そのときに、疑いが俺の心を支配した。

まるで訓練したかのような動き、嬰南さんの最初の行動。一瞬のうちに考えたものとはどうも思えない。もしかしたら、皆グル・・・。いや、それは考えすぎだろう。だが、可能性を考えればそうなるだろう。

俺は少し考え、これから先にもしかしたら起きる事を予想した。

「哲也と栞は北に逃走した。とすると、北には昌哉、加絵、春魅のいる確率があるから・・・。出くわす可能性は高い」

そのときに俺は、一手先を読んだ。もしこれがグルの行動で、策があるならば、皆は俺が北上すると思っっているだろう。ならば、あ

えて南下して相手の裏をかくか。

いや、哲也と栞は堂々と姿を現して足踏みをしていた。隠れながらもできただろうに・・・、そうかッ。

逆算すれば答えはでる。誰かここにもう1人潜んでいるのかも知れない。そして俺が北上したなら、それを皆に伝えて、次の策略で俺に才二継続をさせるに違いない。

俺はアスファルトの上に頭を密着させて辺りを見回すと、車の影に隠れてしゃがんでいる人影を発見した。

「きたぜッそこにいるんだろっツ！」

もし違ったら恥ずかしい以外なにも思い浮かばないが、確信はあった。そして隠れていた人陰は反応して、南下するように走りだした。

「作戦失敗、読めましたッ」

携帯を片手に、そう言う春魅がいた。

「やつぱり皆グルだったのかッ」

追走開始。春魅の背後を抑えて必死に走った。だが、ここで流石に疲れが俺の足を鈍らせた。

施設の敷地の大きさは分からないが、少なくとも、中央から南下するだけでも100mくらいは容易くある。色々走ってきた距離を計算してみれば、1キロくらい普通に走っているだろう。

さらに、意外と春魅の逃げ足が速いときた。これじゃ追いつけるはずもない、諦めるしかないだろう。

膝に手を立てて一時の休息をとった。この時点で10分以上が経過、残り少ない時間にあせりが見えはじめた。

「どうにかしなければ……」

春魅の作戦失敗宣言だ、きっと俺の移動のしかたに相手は合わせて行動するだろう。

そのときに、公はニヤリと笑って北上した。

「公さんが追ってこなくなった。……諦めた？」

春魅は、公が隠れた可能性を疑って辺りを見回すが、居ないことには確信がもてた。

なにしろ気配がない。携帯で北上した可能性を昌哉に伝えたと、

「わかった。安全であるなら、そこに止まっててくれ。こっちはこっちで策を練る」

春魅の電話先の昌哉が、携帯を閉じてニヤリと笑った。

「どうやら、北上してくるらしいな。公を陥れる準備をはじめてくれ」

近場にいる加絵、哲也、栞が頷くと、ばらばらに散って配置につきはじめた。

北には、大きな公園がある。子供がみて喜びそうな遊び道具、建物が多々ある。

「そろそろ15分経つな。公、お前に勝利という文字はない」

狙い通り物事が進んでいる為か、昌哉は笑みを絶やさないで、いずれくる公を待ち続けた。

と、そのとき。愛さんからの着信に携帯が唸る。どうした事かと昌哉は携帯にでるが、どうやら、緊急事態の報告らしかった。

「昌哉さん、公さんが・・・公さんがさっき中央通りから北上しているのが見えましたッ」

それを聞いて昌哉は驚愕した。東側から北上してくるんじゃないのか？ 春魅からは可能性だけとしか聞いてないが、東側からは北上するには、他には南下する以外に手はないはずだが・・・。

「ここは、俺の地元ということを忘れてましたね・・・・・・・・昌哉さん」

公が昌哉の背中にタッチする。タイムリミットは、残り10秒程度であった。

「嘘だろ・・・・・・・・」

膝を屈して美貌に満ちた顔が青さめていく。それを見た公は、勝

利の説明をはじめた。

「謎に思いますか。単純なことですよ。室内を通って中央に出ただけの話なんですからね……………」

「まさか。東側から室内に入れる入り口はないはずだが……………」

「ありますよ。トイレにある、あの小さな窓が。俺じゃ入れないと思ってましたか？ 否、地元で、昔からそこで遊んできた俺には、鍵が壊れている窓の一つや二つは知ってますし、体の使い方では窓を通れます。あと、昌哉さん達の、隠れるに相応しい場所も、だいたい想像がつかしました」

「バカな……………俺が……………」

昌哉さんがそう言いきったところで、公は笑みを浮かべて、

「俺の勝ちです。昌哉さん」

そうカツコよく決めて言ったとき、昌哉さんこそも笑みを浮かべ、おもむろに立ち上がった。

「ふふッ。なに寝言ってるんだ？ 公」

「へ？」

そう、まだ勝負はついていない。残り45分、手を組んでいる昌哉軍団から逃げなければならぬという使命が残っていたのだ。

そして、それからは散々なものであった。ただでさえ疲れて体力

がないのに、疲れを知らない昌哉さんに追いかけられ、逃げ切ったかと思うと、鬼が交代されて違う人に追われるという連帯作戦が俺を苦しめたのだ。

次の鬼が俺に切り替わったとき、負けを覚悟した。ってか、勝てるわけがない。無理だから、勢力的に・・・。

すぐに15分が経過してゲームが終了されると、罰ゲームへの恐怖心が芽生えはじめた。

「昌哉さん、勘弁してください。卑劣です、ずるいです、この腹黒がッ」

「仲間を作ってはいけないというルールはない」

そう言ったあとに、罰ゲームを行使するかと思ったが、どうもそんな空気ではないように思えた。

「どうだ、俺たちのコンビネーションは、指揮系統が最初は微妙だったが、最終的には勝利をおさめた」

「どういう意味ッすか？ 意味がよく分からないんですけど・・・」

「個の強さには限界がある。だが、それだけではきっと勝利はおさめられないだろう。だから、協力の強さを重視して、皆で話し合ってみて、公で試してみたというわけだ」

「実戦練習台というわけですね・・・」

俯いて納得すると、疲れを癒す為に座り込んだ。

まあ、確かに皆のコンビンーションは素晴らしかった。指揮系統をしていた昌哉さんもさすが、と、言えると思えた。秀でた武で星人に勝るのも才能だけど、それよりも、皆と協力しようとした方がもつと凄い才能に思える。

「やっと、今それが芽生えようとしているのか……………」

まだまだ不安は安息にはならないけど、それを実現させる為に、皆と協力して、星人に立ち向かっていく。いつかの自分が理想としながらも、できなかった事。

なんだか、今の皆とならできそうな気がする。

それは、俺のちょっとした希望だった。

31話

協力の法則（後書き）

どんな訓練だし。黒い球の部屋なめてんだろ。

32話

今回ばかりは刹那主義

訓練は日が積まれることに過激さを増していった。

当初は鬼ごっこで遊びを交えながらのものであったが、それは体力作りであって、今の皆は瞬発力や機動力を、結局鬼ごっこを使つて鍛えていた。

とは言つても、生ぬるい鬼ごっこことは呼べない感じになっていた。

「公が北から南下したッ愛さんと嬰南さんは、追いかけながら東側に追い込んでくださいッ」

昌哉がそう叫んで命令すると、2人は右手を上げて公の追放をはじめた。そして昌哉は北から東を指すと、加絵やらが中央に残つて公の逃げ道を塞いだ。

「くっそ、これじゃ挟み撃ちは免れない。突破するか」

逃げていた公は即座に相手（皆）の策を見破ると、振り返って愛、嬰南と対峙する。

ここで鬼は一体誰なのか、と、思うとき、今となつてはそんなものはなくなつていて、公を押さえたら連合衆の勝ち。逃げ切れば公

の勝ち。そんな感じになっていた。

公は失敗を踏まぬぞと、毎日の走りこみと適当な兵法書、心理書の適当読みをして、確実な進化を遂げていた。

もちろんそれは俺だけに限った事ではなく、メンバー全員も成長をみせている。

俺から見ての一番は、昌哉さんだと思う。合図を考えて統率力が向上させているし、人の才能を余さないように、活かそうとしている。

愛さんは刀での武力を誇っているが、突撃系ではないので支援が優秀と言えるだろう。なので、嬰南さんの支援は抜群だ。

哲也と栞のコンビネーションは、最近は凄い向上をみせているし、嬰南さんは狙撃は異常なまでに凄い。

龍は荒川近くでの射撃練習だけは顔をだし、そこで本来ある才能を開花させている。だけど、雷武、修治さんは全く顔をださない。加絵や嬰南が声を掛けるが、最近は音信不通で連絡すらできない。

どうしたものかと昌哉さんは首を抱えて悩んでいたが、どうしようもないらしい。

「くられッ!」

嬰南さんの蹴りが俺の体を捉える。だが、それを易々避けると、愛さんの捕獲進行も回避して走りぬけた。

「覚悟してくださいッ！」

春魅が伏兵として物陰から出現したが、俺は知っていたかのように頭を抑えて阻止すると、次の、可能性を考えて周囲の気配を感じようとした。

「二重伏兵は戦争じゃ当たり前ッ！」

哲也と栞による、上下の蹴り攻撃が俺を襲った。それをスレスレながら横転して避けると、人がいないと思える西方面に走りだした。

「加絵さんの姿がない。昌哉さんは東にまわったろうから……」

それが気が気でしかなかった。加絵さんは、いつも昌哉さんと居るらしく、最近は昌哉さんのように第二の軍師的役割を果たすから厄介だ。この前のゲームでも、昌哉さんが指揮をとっているかと思つてると、昌哉さんは囿で、加絵さんが裏で命令をだしていた。

「タッチ」

「あれ？」

加絵さんの声が俺の近くで聞こえた。だが、姿はどこにもなく、必死に加絵さんを探し続けた。

「周波数を変えたんだよ、公」

そうなのではと、内心思っていたが、本当にそれをするとは思わなかった。

「加絵さん。どこにいるかは分かりませんが、気をつけてくださいね。姿を現すところを人に見られたら、頭の爆弾が作動しますからね」

「分かってるよ、トイレで解除してくる……」

とりあえずここでゲーム終了。

「はあ、負けか……」

このようにルールが変更されると、成長に問題がでてくるんじゃないかって思うけど、俺が逃げて逃げて捕まることがなかったら皆は成長していくと思うし、俺がすぐに捕まるようであれば、俺は全力で向上を目指す。

終わらない訓練だね。

「今日は、もう終わりにしよう。暗くなってきたし、また警察に職務質問される」

皆が集合した後で、昌哉さんがそう呟いた。

そういえば、前ゲームをしているとき、昌哉さん警察に背を向けて逃走してたな。皆がみても驚く、異常な速さだったと思う。まあ、職務質問されても文句は言えないよね。年下の俺を追い掛け回してるんだから……。

そしてそれからは、それぞれ別れを告げて解散していった。俺は早々に重い足取りで家をめざすと、青空を眺めながら気づいたら呟いていた。

「次のミッション、絶対いけるだろうな」

生き残れる。そう信じれる。

...

今日は幸せ溢れる一日になる予定だ。

それもそのはず、今日は栞とのデートの日だからだ。このおれ、高橋 哲也は、前の訓練の日に勇気をもって栞をデートに誘った。

かなり緊張して、声があがったりしていた誘いだっただ、OKをもらったことにこの上ない幸せを感じている。

だがそれと同時に、不安がオレを支配していた。それは簡単に言えばファッションというものに鈍感であるからだ。とりあえず今の服装は上から下まで黒で染まっているのだが、どうも納得いかない感じた。それが無難な色と思っているからな……。

そしてその無難が不安に思えてしかたない。本当にこれは無難なのか、オレがタダ単にそう思っているだけなんじゃないか、そんな馬鹿らしい不安。

デートはちょっとくらい失敗した方がいいなどと言っているが、信じないぜ。つつか、信憑性がねえ。どこの情報だよ……教えてくれた龍くん。

服装が不安なら適当に黒に染めろ。髪は適当にふんわりさせとけ。靴は5cm増しの物を。

なんて言うか、うげえよ。龍のアドバイスを聞くと、失敗させるき満々だよ。

やっぱり自分で挑もう、栞はファッションをみて馬鹿にするような人間じゃないはずだから、俺らしくパーカーとジーパンの王道を進むんだ。

ファッションなんてクソくらえだぜ、もう暗号にしか聞こえないんだよ……。

パーカーにはフードがついている物でいいだろう。ジーンズは黒いもので……。そしたら結果としては黒とグレーで統一されている形になった。まあ大丈夫だろう。

そんなこんなで残りも適当にまとめてオレは家をとびだした。

栞と決めた集合場所は熊谷である。最近無駄に熱いと言われて、熱いぞッ！熊谷！だの知名度を上げようとしているが、どうも効果はないように思える。熱いところに誰が来たがるんだよってね。

熊谷駅、北口での集合約束。その10分前に到着し、栞がくるのをひたすらに待っていると、5分前になって遠方から栞が走ってくるのが見えた。すると自然に熱が込み上がってきて、緊張によって面が振れなかった。

「哲也……お待たせ」

赤面してるんじゃないかと思い、更に緊張していくが、勇気を持つて栞の方を振り向くと、あくまでクールをよそおった……。

「お……おう、おはよう。 いや、こんにちは。 ん……どっちだ」

どうでもいいところにツッコンでしまった。オレはそれだけ緊張している。

そして、栞の格好がいつにも増して可愛くみえる。着飾る様子はなく、ほんわりとした感じに仕上がっていると思える。森ガールだっけ？ 違うかもしれない。

「哲也、緊張してる？ 私も緊張してるから安心していいよ……」

やめるよ、そんな報告いらないよ、もっと緊張するじゃん。チクショ……。いつもの俺よ、帰ってきてください。それにしても、その場での急な行動では緊張はしないけど、どうも考えながらの行動はダメだな……。

「まあ、とりあえずどこか行こうぜ。 どこ行く？」

デートはどこ行くとかなんて決めても考えてもないよ。いっぱいいっぱいだしよ、その場で決める楽しさもあるだろ？ 1回くらい経験してみてもいいと思うんだ。

「じゃあ、CDショップ行かない？ 欲しいCDがあるんだ」

「いいよ。 行こう」

断る理由がないし、案を出してくれたのは嬉しいことだ。それに、

どんなジャンルが好きなのか知りたいしな。

……そう思った数分後には、オレはいつもの栞ではない栞を見ていた。

それもそのはず。CDショップに到着して、栞が直に向かったのはアニソンの多々並ぶ場所だったからだ。

別にアニメとか漫画を否定したいわけではないが、オレにはそのあたりの免疫がないから、恥ずかしいという気持ちがあったのだ。

「おお、執事でてるじゃん！ いただこう」

栞のテンションがMAXなようだ。それは嬉しいことだが、理解するには時間を要するだろうと思えた。

やがて、栞がレジを通し終わると、オレ達は、また行くところを考えなければならなかった。

俺としては、ちょっと早めの食事はいいと思うし、映画とかもいだろう。そう考えていると、栞がよこで目を光らせながら万遍の笑みである一方を見ていた。

目を伝っていくと、それはどうやらぬいぐるみがこれでもかと積んである方の店で、CDショップからでるや単独、その店に歩きはじめた。

目が点になっているなか、内心、こいつ面白いな……などと思いつながら付いていくが、そのときにいやいやと考えを改める。

明らかに栞のペースだ。このままじゃだめだろう。なんとか、俺がカッコいいところをみせて、この恋愛を成就させねばならない。いや、過去に告られているとかは無視でね、男の意地だろうこれは。

「し…栞、ぬいぐるみ好きなんだね……なにか、買う予定なのか」

まずはこういう質問をして、気をオレにむけた後、さり気なく次行く場所を伝える。そうした後で了承をもらったら、今度こそオレのターンだ。映画に誘うなりしてオレをみるよう仕向ける。

「ぬいぐるみは別に好きじゃないけど、面白いのがあったから……」

なるほどね。だったら話は早い、早々に次行きたい場所を栞に伝える……。

そのときに栞の腹からグウと音が放たれた。どんどん赤ら顔になっていく栞をみて、カワイイと思っていると、次行くといい場所が明らかになった。

「OKッなんか食おうッ！」

親指をビツと立てながらさういうと、栞は小さく頷いた。

よし。なんとかペースを引き寄せる事に成功した。喜びに浸っていると、オレは早々に行動を開始した。

比較的旨い店を知っているから、そこに連れて行くと早めの食事になった。

食事を適当に済ませて、さて、と、これからのことを考えると、

映画とかカラオケに行ったら面白いだろと考えが浮ぶ。

「このあとだけど、映画でもみる？」

「うん、いいよ」

決定だぜ、実はこの映画はいいんじゃないかと思ったのがあったんだよ。爽やかな恋愛ものの映画だったかな……イケルぜ。

「ん？」

そのときだった。オレの顔はみるうちに青ざめていき、哲也と栞の座る前に、心の読めない笑みで立っている龍が出現した。

「お前ら……デートか？ 僕も混ぜてはくれませんか？」

こいつに相談したオレが間違っていたんだな。まさか付いてくるなんて、空気読めないにも程があるぜ……。

「龍くん……偶然だね」

額に汗を浮かべながらそう言うと、怒りを顔に滲ませながら立ち上がり、龍を連れてその店のトイレに連れ込んだ。

龍はそれでも笑みを絶やす事はなかったが、オレの怒りはさらに上昇していった。

「どういつつもりだよ、龍。デートの邪魔なんて」

「実はさ、デートのアドバイスした内容でちょっと不安があったよ

……」

哲也はそれを聞いて、心底信じる気は起きないだろうと思ったが、不安によってきた龍をただ返すのは悪いかなと思い、適当に礼を述べて帰ってもらおうとした。

「大丈夫大丈夫。もうアドバイスはいいから帰ってくれ、ありがとうよ」

「いや、どうせだから付いて行く」

「なんでだよッ用件はもうないだろッ」

カッと全開された目が閉じようとしなかった。

「いやさ、考えたらお前と町にくりだして遊ぶことはそんななかったし、どうせだから一緒に遊ぼうかな」

こいつは……、気をつかうって考えはないのか？ 栞との初デートなのに、こいつによってぶち壊しにされて……。

それから心で色々文句を言うが、確かに龍とは今まで町にくりだして遊んだことはない。いつも家を行ったり来たりして遊んだことしかないし、どっか一緒にいこうといっても高校近辺の飲食店だし。

今回だけ、そういう考えで許すでしょう。

「しょうがねーな。次のはついてくるなよ。あと栞にオレのいいところを言いまくってくれたまえ」

「OK。任せといてくれ」

だが、あまり乗り気ではない事を、ここに言っておこうかな。

33話

龍の荒くれ

「哲也と龍はいつから友達なの？」

トイレから戻って席に着いた2人に栞は質問をした。

2人は一度見合つと、哲也が後頭を掻きながら栞をみた。

「いきなりだな、栞は本当……」

そう言いながら腕を組んで考えはじめると、まとめ終わったような顔をして話をはじめた。

「高校入って、2ヶ月くらい経ってからだったよな、龍」

「ああ、そうだな。そのときは、結構俺は荒くれてたもんな……」

友達のはじまりは、龍の粗暴からだった。

体育の時間をしていて、内容はサッカーだった。そのときまでは当たり前龍と哲也は友達ではなく、赤の他人で、組んだチームも

別々だった。

分かれたチーム同士で試合が始まったとき、誰よりも注目を浴びていたのは運動が誰よりもできた龍だった。試合開始から3分もしないうちに1点入れられて、哲也がいたチームは戦意喪失していた。

それもそのはず、哲也のいるチームの強力人達が龍の足元にも及ばなかったからだ。

さらに龍がゴールの枠内に入れるたびに放つ言葉に、人々は内心やる気と言うものをだし難かったんだと思う。屈辱的だったと思うもん、あの言葉は。

「なんツだよ、下手糞バツ力だな。お前ら本当にサッカー部なの？俺が中学の頃の奴らとは比べものにならねえ……」

「やめろよ、その言葉使いよ。逆上をかってやる気をださせようとしてんだろうけど、それじゃ誰も動かないぜ」

点差10点を迎えたところで哲也は注意を促した。だが、やはり顔が顔なだけに、少しばかり恐怖心を哲也は感じていた。

「お前こそ端でゆったり走ってて、戦線に貢献してなかったらうが」
「観察してたからな」

まさに自分の息が荒くなってきた。目の前にいる龍の片目が細くなって、俺をにらめつけてきたからだ。

だが、それでも平静を装って自然を見せると、強気にでて哲也は喋りだす。

「サッカーだぜ、楽しもうぜ。今やってるサッカーはスポーツなんだからさ」

龍の顔はなおさら険しくなっていく。だが、次の瞬間には少し緩くなり、オレに告げてくる。

「俺を楽しませてくれ。俺は楽しんでないからな……」

微かに笑いながらの言葉だった。もちろんオレはやる気をもってこれからサッカーを本気でするつもりだ。龍に勝てるかは分からない。でも、やるしかないんだ、皆で楽しまないと……。

次のホイッスルにゲームが再開されると、哲也は積極的にボールに触れた。

明らかに覚束ないなかで、近場のサッカー経験者にパスをすると、ボールは行き着く前に龍に奪われてしまった。

「やつぱ楽しくねーな、簡単にとれすぎ」

全力疾走でゴールにむかう龍には余裕がみえていたが、それもつかの間。隣を並ぶようにして哲也が走っていた。

「なッ!!」

驚いた龍はボールをキープしてドリブルを中断すると、哲也の動きに注意しながらドリブルを再開した。

「オレさ、バスケ部なんだよねッ。それに比べたら動きはまだまだ緩い感じだなッ」

挑発して龍の気を紛らわそうとしたが、それはうまく行きそうもない。

実際、龍の動きは容易く視認できる。だが、足がそれについていけない。ステップの取り方が根本的に違うし、戦略を読めないのが弱みだ。

次の瞬間には、龍はオレの背後を疾走していた。1対1のバトルに負けたのだ。

そののちにボールはゴールネットを揺らして、しかも1点が追加された。

「人間を一番向上させるスポーツはやっぱりサッカーだな。1試合に走る距離からして違うもん」

龍のその言葉に不思議とイラつきを覚えた。バスケを馬鹿にされたと思えたからだ。

次のホイッスルが鳴ったとき、積極的にボールをもって攻撃に参加した。そしてボールをキープし始めてから間もなく、龍と対峙する形になった。

今度こそ負けない。タイミングよく龍が突っ込んできたときに避けてゴールを目指そう。

だがそこで龍が奇妙な体勢になった。

身体を低く保ち、目はオレの足元に集中している。時々辺りをみ
てはオレの味方の動きを確認すると、またとオレの足元に目をやる。
隙という隙がない。勝てる気がしない。まるで目の前に大きな壁
があるように思える。

だが落ち気で勝負に挑んではいけない。それはバスケットにおいても
同じことだ。だからこそと思いつながら全力で龍を避けるようにボー
ルを動かすと、勝負に乗り出した。

だが、さっきの勝てる気がしないという言葉が現実のものになり、
龍はまるでオレが動きだすのを知っていたかのように余裕に近辺を
走っていた。

それに、オレが走り抜けようとしているのは、白線が引かれてい
るコートの外側に向かってだった。

「マジかよ。まるで相手に操られているみたいだ」

龍にも聞こえぬ小声でそう呟くと、ボールに触れて切り返そうと
した。だが、その行動が完璧に命取りになっていた。

龍の肩がオレの肩に力強く当たると、アッという間にバランスを
崩して地面に倒れこんでしまった。

「嘘だろ、体当たりッてアリかよッ」

これはルール上ではファールなんじゃないのか！？ いや、バス

ケ脳では説得力がない。

「肩と肩なら問題ねーよ。バスケでは経験ないだろ？ 残念だったな」

走り去ろうとした龍をみて、哲也は一瞬の内に様々な事を考えていた。

強い。強すぎる。サッカーが突拍子にうまいとか、そんな考えで思っているんじゃない。奴は、龍って人間はきつと、スポーツを愛している。不思議とそう思える。

だってそうだろ？ 奴の動きの良さを見れば、明らかに過去において努力を重ねてきたことが分かる。一つ一つの動作に柔軟性があるし、なにより誰よりもやる気があるじゃないか。

周りにいる人はすぐに諦めて、勝てないと思えばすぐに足を止めてしまう。そうだよな、文句の1つや2つはできるさ。まるで皆向上心がないんだもん。

「完敗だよ。マジありえねえぜ、龍って男……」

でもまあ、気持ちいい負け方だな。どうせやるなら、マジで、つてな。

「と、まあ。これからオレ等2人は仲良くし始めたという訳だ」

哲也が頷きながらいい話だと言わんばかりの顔をしていた。だが、それを良く思わなかったのか、龍は顔をしかめて哲也に意見を述べた。

「待てよ。いい話で終わらせんなよ。その後にも話はあっただろう」

哲也がピクリとも動かなくなった。

「この野郎はな、そのあとに背後からスライディングをかましてきやがってな、知らなかったの一言で済まそうとしてたんだぜ、酷い奴だよ」

「そ……そんな感動の話があつたんですね……」

グスグスと涙を浮かべている栞には、龍の言葉はまるで届いてなかった。

「っていつか、話が根本からして違う。哲也のいたチームはサッカー部ばかりいてな、俺のチームはまるで素人ばかりだったんだよ。すると俺1人しか動けないだろ？ だから俺がうごか……」

「龍さんは昔から熱い人間だったんですね。ちょっと調子に乗ったりするところがあるそうですが……」

龍は固まっていたが、とりあえず理解してくれた事に感謝を覚えた。

「俺だって悪魔じゃねーんだよ。親から愛情受け取ってんの……」

と、息を漏らしたその時だった。突如として首筋に寒気が通り抜けた。

「首筋に寒気……ミッション!？」

栞が不安の顔になった。

「龍、栞、スーツは持ってるか？」

『うん。 ああ。』

哲也の声に2人は頷いた。それぞれで持っているバックの中にスーツや銃器が入っているようだ。

「今回のミッションはどうなるんだ？」

哲也が不安の声を漏らした。

...

「ん？ マジかよ。 ミッションか」

首筋を押さえた公がそう呟いた。

このとき公は本を読んでいたが、本を閉じるとすぐさまベッドの下に隠し置いてあるスーツに着替えはじめた。

「くっそ。 意外と早い時間帯でのミッションだな」

時計はこのときに1時を過ぎた昼間の事だった。

銃器をホルスターにセットを完了させると、転送を待った。

転送が始まったのは、準備完了の数分後であり、頭が消えはじめて次の景色になったとき、公は思わず目を疑った。

「なんだ？　また人が出てきたぞ。　今度は黒い格好……の、オタク？」

目の前にした光景は、黒い球を囲んで座り込んでいる男達の10人の姿だった。

人がいるにしてはどうも女の顔が1人もみえない。まあ、今回はこんなもんなんだろうなと納得すると、廊下より出現したナウい格好の男にいきなりナイフを突きつけられた。

「な……なんだ？」

「動くな。　死にたくなかったら……」

意味不明だった。黒い球の周りで座り込んでいる男達に目をやると、すぐさま目をそらされてしまったし、とりあえずはただ事ではないように思える。

『キヤーーーーーッッッ！！！！　誰かッ助けてッ！』

その言葉に反応した俺は、大体のことを察知した。きっとこのナウい男の仲間だろう人間が、廊下で女を襲っているんだろう。部屋

に來た経験者は俺が一番みたいだし、早々に秩序を作らなければいけない。

「廊下で何をしてるんだ……？」

できる限りの情報を手に入れておきたいことと、この男の油断をおうと質問する。

「余計なことしたら殺すぞ。そっちの黒い球の近くで座ってる」

ここでコントローラーのステルスモードを発動させた。すぐさま体勢を低くして男のナイフを避けて廊下に向かうと、廊下には5人ほどの女と8人程度の男が女を襲っていた。

「な……なんだよッ消えやがッたッどうなッてる？」

さっきの男が混乱しているようだが、聞き流してとりあえずは目の前で襲われている女達の救出をはじめた。

姿が見えてないせいか、容易く群っている男達の近くに到着することができた。

まさに目の前では、服を剥がされようとしている女がいる。俺は、そんな男達をみて、同じ男として残念な悲しみが溢れてくる。

「な……なんだッ苦しッ……」

とりあえずは手前にいた男2人を持ち上げ、部屋への入り口へ放り投げる。女達は謎めいた表情をしているが、ハッとした後にはだけた衣服を直した。

「なんなんだ？　一瞬あそこに電気走ったよな？　バチバチッて……」

そのときにステルスモードを解除。姿を表した。

そしてちよつとの隙を与えないで男達を掴んでは入り口へ投げ捨てていくと、一瞬にして女達の救出に成功した。

「ツツツ……。なんなんだ。くッそ、テメエ、覚悟しろ、殺してやる」

「お前らもうやめろよ、見苦しいからさ……」

そう言いながらホルスターから柄を取りだすと、刃を伸ばして刀を野郎達に突きつけた。

「な……。なんだそりや、か……。刀!？」

青冷めた様子で男達が抵抗しようとナイフをそれぞれ取りだすが、それに動じない公に恐怖を感じているように思えた。

「お前ら全員ナイフを捨てろ。さもなくばこれで斬り捨てる」

男達はジリジリ後退していくが、ナイフを捨てる様子はなかった。

黒い球から光線が発射されて人が映しだされる。次に転送されてきたのはトイレで着替えたのだろっ、龍だった。

龍は、その場の空気でした事でないことを察知した。すると、廊

下からナイフを持ってでてきた男達を見て、公と同様に大体を理解した。

「黒い球近辺の奴ら囷にとろうぜッ」

だが、龍の存在に気づき格好を見た男達は、公と同じ格好をしていることに驚き、情けない声をあげながら地に倒れこんだ。

「おい、さっきの奴と同じ格好した黒い奴が居るぞッ」

狭い廊下と部屋の入り口に追いつめられた9人が額に汗を浮かべていた。

「待てよ、黒い奴らは武器持つてくるくらいだろ？ こっちは9人いるんだから、勝てんじゃねーの？」

「そ、それもそうだな……」

9人の男達がコソコソと小声で喋っている。とりあえずとして、人質をとるとしては龍と対峙する必要がある。龍の睨みに数人はビビっているが、人数の有利を考えて少なからず勝てる希望を持っていた。

「一気に行くうぜ……なーに、相手は見た目高校生だろうが……」

「なに喋ってんだよ？ 堂々としろよ」

龍の発言と共に男達がナイフを無闇に振るいながら向かってきた。

「うん。 まあザコイだろ……」

冷静な行動を完璧にとれていた。まず手前からくる2人のナイフを持った手を逸らすと、胸元の服を掴んで持ち上げた。

「がっうっう……」

次の瞬間には正面から1人の男が進行してくる。だが龍にかかればそんな余裕であり、ストレートに蹴りをかますと、見事に男の腹部をとらえていった。

男は痛みと苦しみに崩れ、それに乗せるように持っている2人を投げつけた。

「……はあ、俺が喧嘩慣れしてることを覚えとけよ」

完璧に男達の士気は低下していき、ナイフを投げ捨てて降参の証で両手を上げた。このときに、龍は溜め息交じりに呟いた。

「本物のヤンキーと、こいつ等を比較しないでほしいもんだな……」

34話

朗らかなる凶者

黒い球のある部屋とは別室の、キッチンのあるところに女を襲っていた男達を収容した。男達は座り込んで陰口を度々叩いているが、入り口前で睨みを効かす龍に恐怖を抱いているために、口はすぐに塞がった。

「あ、ありがとうございます。助かりました」

廊下から黒い球のある部屋に戻ってきた公に、付いてきた女達が礼を述べる。

「いやいや、別にいい。にしても、奴らはどうして……」

そう言ったところで女の1人である30歳くらいの主婦の格好をした人が小声で説明をはじめた。

「あの人たちは最初は大人しかったんですが、この部屋から出れない事と、なにやら過去に死んだ記憶があるとかと呟きだしたら、小声で噂するように喋りだして……」

「……ここが天国だとも思ったのか？ まだ生きてるのに……」

公の言葉に女達がひそひそ喋りだした。そして主婦が謎めいた顔

で公に質問してくる。

「生きてる？ 私達は生きてるんですか？ 死んだ時の記憶があるのに……」

「恐らく死んだ。 だけど、そこにある黒い球が生き返らせてくれた」

いつだったか、実夏が口にしていた事を言っていた。そして俺の発言に新人はおるか、龍までもが反応した。龍は恐らく生き返らせてくれたという表現に驚いたのかも知れない。

「だからと言って、無事に家に帰れると思わないでくれ。 これからあるミッションが始まり、そこでは意味不明な星人、宇宙人と競争をする。 それに生き残れた後で、無事に家に帰ることができるんだ」

全員の注目が公に向くなか、龍は目を逸らして俯いていた。

黒い球から光線が発射される。 どうやら次は桀らしい。 桀は人数の多さに驚いていたが、その他とくに反応もない様子で廊下に向かっていつて着替え始めた。

次に哲也が転送されてくる。 映し出されたときはスーツ姿で、片手のバックにはパンパンに衣服だろう荷物が詰まっていた。

「多いな。 公……さん、これって異例な感じかな？」

「さあ、分からないけど、俺には経験がないから今のところは異例かな」

それから経験者が次々に転送されてきて、最後に昌哉さんが転送されてくるころには、部屋はギュウギュウになって息苦しさを感じた。

「ただ事じゃないよな、この人数は。今回のミッションの辛さを感じ知らされる感じだ」

昌哉さんが呟いていた。公はそれを聞いていたが、説明できないのでどうしようもない。

「公さん、訓練後に筋肉痛とか大丈夫でした？」

側近にいた春魅が俺に質問をしてくる。

「今はもうないよ、確かに当初の訓練のときはあったけど」

イタズラっぽい顔で笑っている春魅に笑い返す。

「スーツ持ってるやつは着替え始めてくれ」

昌哉さんの言葉で周囲が動き始めた。いま廊下では、愛さんや加絵、嬰南さん達が着替えている。春魅は最初から服の下にスーツを着ていたので、行く様子はない。

着ていない雷武や修治が、女達と入れ替わるように廊下に向かって着替え始めた。

さて、と一言ついた後で黒い球を囲んでいる人達に退くよう勧めた。

「あと少しでその黒い球が歌い始める。そのときに黒い球の扉が開くから気をつけてくれ……」

なにを言っているのか。そんな表情が俺に注目している。だが説明の余地がないので無視して退くことを催促させるしかない。

さーいたまはーゆたかーなーところー
でもいがいとないもないー
でもいがいとーなにかあるー

あなた達の命は
亡くなりました

新しい命を
どう使おうが
私の勝手です

という理屈なのです

音楽を聴くと同時に、黒い球が注目的になった。

そして、球に映しだされた文字を覗くようにして皆が正面に集結すると、その文字列に不安の声を上げる人がいた。そしてそのあとで黒い球に映る文字が変換されていくと、さらにこぞって黒い球を覗いていく。

朗らか星人

特徴

タフ　こだわらない

腕が長い　舌が熱い

好きなこと

遊ぶこと　弄ること

口癖

むふ、むふふふ

ぶふ、ぶふふふ

黒い球に映る画像をみて、誰もが不安を感じた事だろう。

不気味に目下が目蓋に近づいていて、口に微笑が感じられる。見た目は人間に見えないことはないが、人間というにはあまりにも認められない顔立ちである。

それに、画面下の身体に目を向けると、数点穴が開いていて、皮膚の色が赤色になっている。

「なんだ……こいつ。不気味すぎる」

新人の男が不安げにそう呟いた。

それは経験者である俺も感じたが、それを口にすれば仲間の士気に影響するから余裕を装ってただ画像を見つめていた。

ガシャンッ

大きな音と共に、黒い球の扉が開かれる。公など経験者は迷うことなく黒い球に収められている武器に手を伸ばす。このときに、昌哉や加絵などの年上グループがケースケースを取り出して新人達に渡していく。

歳の高いの人に配らせたのは、信頼性の問題だと思う。下手に年下が渡しても、スーツの性能を信じて着てもらえるのに時間が要すると思えたからだ。

「廊下ですぐにでも着替えてくれッ時間がない」

ふと、9人の男達にはスーツを渡すのか？ そんな考えが浮んだので昌哉さんに尋ねたところ、

「渡した方がいいだろう。ただし、武器は限定した方がいいと思うが……」

と返ってきた。

隔離されている9人にケースを渡す。そのときに武器も投げ入れたが、それはYガンのみだけであった。

「こんなのに着替えるかよ……。だっせー。オタクにされる」

文句が飛び交う中、よく分からない中で屈辱的な顔で着替えだす奴もいた。それは2〜3人程度の事であるが、影から黒い球を見た

からだろうと思った。

公は別室のバイクや柄の置いてある部屋に移動した後、Zガンを拾ってバイクに乗り込んだ。そして春魅が後席に搭乗するのを確認すると、転送を待った。と、転送が始まる前に、昌哉さんが付近にくるとある物を渡してきた。

「邪魔にならなければいいが、簡単に花火とライターだ。負傷者、緊急事態のときはそれを使って知らせてくれ……」

「トランシーバーとか……そんなものじゃダメだったんですか？」

「携帯が使えないからな。ある意味不安があるし、資金的問題もある。なんなら使わなくてもいい」

渡された花火は、筒が細長いもので2本2種類の色であることがわかる。さらには、紐によって括られていて、俺はそれをバイクの運転席に適当に縛り付けた。

そしてそれから数分、転送が開始されたのを知ると、バイクのアクセルを力強く握って気を引き締めた。

景色が切り替わりわたった頃に、そこがどこなのかとか、それを理解するのにはそんな時間は要さなかった。

「来たことあるぞ……ここは」

「熊谷ドーム？」

春魅が公に続いてそう呟いた。

次々に転送されてくる人々が悲鳴を上げながら転送されてくる。きつと、自分が消えてくことに驚いてるのだろう。

「なんだよッ！ なにが起こって……て、なんだここ？」

まとめて人間が転送されてくる事に気づいたが、あまり深く考えないことにする。

数分にて部屋にいた人々全員の転送が完了した。そして昌哉さんが皆を集めて真中に立つと、チーム編成をはじめめる。

「今回初めての人間は、星人をみかけても戦おうとしないで常に安全に気をつかってくれ。それと、チーム編成はチームリーダーを俺と加絵さんの2つに分ける」

昌哉さんに着いていくのは栞、哲也、龍、修治の5人。

加絵さんに着いていくのは公、春魅、愛、嬰南、雷武の6人。

人数の多い加絵チームは新人の過半数を連れていくことにして、昌哉チームには荒くれの9人組を連れていってもらうことになった。

このときに、公はコントローラーをとりだしてリーダーで戦地と星人の居場所を確認した。

くまがやドームに転送されてきたここはどういう所なのか、それは簡単に言えば運動場がたくさんある場所であり、それは数えると9以上はあると思う。

広場とよばれるものは近場を数えるだけで6はあるし、とにかく広い公園である。

俺達が転送されてきたのはリーダーからみて中央であり、北の目の前にある大きくまがやドームの近場の広場である。確か、にぎわい広場だっけ？

南には陸上競技場のちよつとしたドーム？があり、北東にも競技場が見える。

さらには、その3つの運動場から星人反応があり、点の数は1運動場に5〜10はあった。

「加絵さんは南方面の星人をお願いします。俺はくまがやドーム行きますんで……」

昌哉さんの発言で全員が動き始めた。俺は南に向かっている加絵さんをバイクで通り越して南のドームを目指した。

とは言っても、そんなに遠くないのでバイクをすぐに下りる事になり、鍵の掛かっているドアをブチ破って入場した。

通路を適当に進んでいくと競技場に行き着く。なにをするためのコートなのかはよく分からないが、ただそこに星人がいることには確信がもてた。

「敵。 見えましたよ、加絵さん」

芝生のあるグラウンドの中央に、なにか生物がいびきをかきながら睡眠をとっている。それもリーダー通り数体いることが分かり、

遠目からだと大きさは3mくらいの巨体を誇っていた。

「狙撃でやッてしまッて」

加絵さんの命令で、敵にこちらの存在が気づかれる前の先制攻撃を仕掛ける。それぞれが銃器を星人に向けて狙撃体制になるが、そのときに俺はなんか星人に違和感を覚えた。

星人は寝かしていた頭を起こして辺りをキョロキョロ見回して、警戒しているように見えた。そのときに顔がみえたが、黒い球に映っていた写真と同じ不気味な笑みを感じさせる表情だった。

俺もZガンを構えて星人を狙う。だが、それは星人に気づかれる過ちだった。

チユイイイイ……

Zガンより流れるそんな小音が辺りに響く。それによって星人の全匹が顔をこちらに集中してきた。

星人の距離を考えればそんな音は届かないように思えるが、それは悪まで人間での話であり、それによって星人は余程音を捉える器官が優れているようだった。

「気づかれましたよ、公さんッ」

春魅が隣からそう伝えてくるが、そんなのは分かっている。気づかれたなら、あとは引き金を引くだけだ。

星人の一体が圧潰される音が此方にまで響いてくる。俺はなおさ

らトリガーを手前に引くと、それは次々に星人達を地に潰していった。

「嘘だろ……。どうなッてんだ……」

圧潰して倒したと思った次の瞬間には、誰もが目を疑って息を呑んだ。

「むふ、むふふふ……」

大穴から笑みを絶やさない星人の顔が此方に向いた。

「え？ なに？ あいつ等なんなのッ？ いやッ怖いよッ」

公達の額に汗が流れる中で、背後から新人達の不安の声が聞こえてくる。

はつきりいつて俺自体も不安なのかも知れない。努力して得た100点で手に入れた武器、Zガン。その威力や性能の強さに疑いの心を持ちはじめようとしていたからだ。

だが、気落ちしている余裕はなかった。変わらぬ笑みを浮かべる星人達がこちらにむかって進行してきていたからだ。

「皆ッ！早く撃ッて、星人をこっちに近づけないでッ」

加絵さんの催促によって皆が射撃を開始した。

「俺のZガンは効かない……。役に立ててない」

Zガン捨ててホルスターから柄を取り出すと、刃を伸ばして皆より一歩前にでる。

「公さん？」

春魅の呟きをよそに、俺は叫ぶ。

「どんどん撃てッ！ 奴らが近くにきたら、俺が何とかするッ」

そうだ、誰かが一歩前にでたら、後ろの人は安心して戦闘に集中できる。俺がその礎になるんだ。

「不安なときは、やっぱりお手本がないとだよな」

恐怖心はある。星人がどんな攻撃を仕掛けてくるのか分からない。でも、結局はやるしかないんだ。

35話

それも哲

「外、なんだよ……帰れんじゃん……」

9人のまとまって人間達がそんな会話を繰り返していた。

「熊駅近いし、歩いていこうぜ」

「待て、帰るなッ!」

制止させたのは昌哉だった。9人の内1人の肩を掴んでついでくるよう促す。

「なんだよ、うぜーな。帰ってもいいじゃねーかよ」

「帰ると頭の中の爆弾が作動して死ぬ事になるぞ？ それでもいいなら帰ってもいいが……」

昌哉の言葉を見つからないように帰っていく人に対し、もうこれ以上かける言葉は見つからなかった。

「ああいう奴らは放っておけばいい。今やっていることの重大さに気づかないんなら、部屋で生きる資格なんてないんだから……」

「だが、しかし……」

昌哉は龍の言葉に俯いてしまった。確かに此方は制止的発言を告げた。だが、それを全く聞かないで人にはもうなにを言っても無駄なのかもしれない。その思いに昌哉はもう、言葉がでなかった。

「なんていうか、諦めんなよ。 龍の言ってることはもっともに聞こえるけどさ、方法はそれだけじゃないはずだよ。 分かるまで話す、資格は俺らが作ってやればいい……」

横から割って入った哲也が助言する。

「出来んのか？ 哲……」

「龍が居るから少なからず戦闘は楽だろ。 だからミッションはそっちで適当に継続しといてくれ。 奴らを説得しだい、すぐに向かうから」

「あ……あたしも、行く」

振り返って9人を追う哲也に、こそりと呟いて栞も哲也と一緒に向かって行った。

龍はその姿を見てなにを思ったのか、チツと舌打ちをした。

「哲……お前は優しい。 昔の俺もそれに助けられたけど、今回はかりはそれは利道ではない気がしてならないぜ。 そいつら救ってどうなる？ 足を引っ張るだけだろうが……」

「哲也。 いつでも可能性を信じている人間か。 公と同じで、面

白い男だ」

昌哉と龍。 2人は2人で哲也を賞賛していた。

「多分、哲也がしていることはお人よしってもんだらう、正直になれない感じの……厄介なタイプだぜ……」

「だが、筋は通っている。 奴らをなんとか助けたいという優しさ……強いな」

昌哉が最後まで言うところには、すでに龍は背を向けて星人のところへと歩き出していた。 後ろで立ち尽くしていた修治は、待ちくたびれたように地に座っていたが、やっと進む事に対して「よっこいしょ」と、親父くさい発言をしながら立ち上がって龍を追いかけて行った。

先頭を走る龍は、くまがやドームを迂回して西側にきていた。 そこにはメインとなる入り口があり、競技場に行くには好都合に思えていた。

扉を開けて室内に入ると、そこではまだ働いている人が席に着いて書類と格闘をしていた。

リーダーの地図を確認しながら皆を置いていくように先を急ぐ龍は、ショットガンを手前に持ってきて星人との戦いの準備を始めた。

「そろそろか……。 よし」

ショットガンをもつ逆の手で刀を抜いた。 そして競技場に到着すると、すぐにそれらしい生物を発見した。

笑みを絶やさぬ星人の1体はすでに龍の気配に気づいたのか、万遍の笑みで辺りを見回していた。

そして龍が姿を表した頃には、完璧に龍から発されている音を捉えて顔が向けられていた。

「むふ、ぶふふふ」

「なんだこいつ。耳がいいのか？」

龍は躊躇うことなくショットガンを撃ち始めた。それは訓練の努力もあつてか、的確に星人に被弾していた。

だが、そんな確信があつたにもかかわらず、それは爆発することなく、その代わりに皮膚がパキパキと音をたてていた。

「なんだ？」

破裂しない。そんなのは理解が簡単に出来た。つまり威力が足りないのだ。

「はははッ、厄介な奴だ」

進行してくる星人に、龍は星人を超えるほど刀を伸ばすと、スーッの機能で腕を膨張させると勢い良くそれを振り下ろした。

「これもダメなのか!？」

頭を確実に捉えていたが、刃が効かなかった。多少は押しつぶさ

れるように体がしなつたが、現状は倒すには到つてなかった。

星人の丸太のように太い腕が、龍に迫ってきた。腕同様大きな手の平は、包むようであったが、龍はそれを軽く飛び避けると、手と腕の関節の上に着地した。

星人はもう一方の手でまたも龍を捕らえようとするが、龍はまたも飛び上がると、嫌味な表情を浮かべる顔に刀を突き刺そうとした。

それはスレスレで避けられてしまった。だが、それも計算に入れていたのか、頭に生えている毛らしき触手を掴んでその場で留まり、維持した。

伸びた刀を縮め、星人の顔元に刃を接近させて狙いを定める。

「いくら皮膚やらが固かろうと、内臓は無理があるだろう……」

星人は腕を首元に持つていつて龍を掴み取ろうとするが、巧みに移動する龍を捕まえるのは困難を極めた。

「よしッ」

狙いは定まった。不思議と失敗する映像も浮ばない。刃先を向けて構える、そしてスーツの効果を活用しながら星人の目玉を狙って突き刺すと、見事目玉には刃が通用した。

そのときに星人は口から赤い高温の熱気を放った舌を出現させた。それは迷うことなく龍のところへ進んでいった。

だが、今更そんなものにあたるほど龍は鈍くなかった。刺した刀

を抜き、顔を蹴って飛び上がると、昌哉と修治のいるところへ着地した。

「むふふふふ……」

血の吹き出ている傷口を押さえているが、どうも痛覚があるようには感じられなかった。龍は、内心再攻撃を望んでいたが、まずは敵の状況察知を考えていた。

すると、星人が舌を目玉に接触させると、肉が焼け焦げるような音と共に傷口は塞がれ、出血は止まった。

「なるほどな……。自分で自分を治療できるツてか……面白い」

龍は構えて再度の攻撃に挑戦しようとしたが、ここで星人の後方に似たような面子の星人が迫ってきていた。

「4……5、6体か。さすがに辛いかな？」

だが一步も引かない龍。その後ろでは、昌哉と修治がショットガンを構えて戦いの準備を完了させていた。

「なわけないか……」

龍は、足に力を籠めてスーツを膨張させると勢い良く星人の頭に飛び跳ね、昌哉、修治はショットガンを打ち始めた。

星人は龍を避けるように顔を左右させたが、龍はまたも触手を掴んだ為、星人は避けることができずに龍を頭の上に着地させることを許してしまった。

次の龍の目標は、恐らく星人の急所になるであろう耳である。

致命傷にはならないだろうが、少なくとも、音声を捉える機能は停止するだろう。

だが、耳に攻撃を仕掛ける前に、龍の背後からは他の星人の腕が向かってきていた。それも飛んで避けて、その星人の腕の上に着地すると、狙いを変えて、腕を伝ってその星人を倒しに向かった。

頭に到達するまでは、それほど困難ではなかった。慣れてしまったと考えれば早い話だ。そして、触手を力強く掴んで体勢を維持すると、何の迷いもなく刀を耳に刺し押し込んだ。

目を刺したときよりも激しく血飛沫が溢れ出てくる。星人はさすがに危険を感じたのか、余裕を思わせる声は発しなかった。

龍をなんとか落とそうと、頭を回してその動きをくり返すが、大した事はなかった。

すると、前の星人同様、口から舌を出して龍を抑えようとするが、やはり龍に2度目は効かず、耳から刀を引き抜くと、容易く舌を切断した。

さて、と思いながら龍は耳に再び刀を刺しこもうと試みるが、またも数本の太い腕が龍に迫っていた。

「チッ。面倒だな……」

嘆息を漏らしつつ、龍は飛び跳ねていった。

入り口近くでショットガンを連射している昌哉と修治は、これと言っほどの成果はなかった。

出来たことと言えば、致命傷になってない皮膚へのひび割れだけであるが。

「顔面を狙って撃ってくれッ」

昌哉はそう修治さんに告げると、自分も集中的に顔面を狙った。はつきり言って成果があるのか分からないが、龍がしている事を見ていると、少なからずはダメージを与えられるのだから、して損はないだろう。

昌哉はそんな攻撃を与えながらも、急所はどこであるかを計算していた。

顔面は龍が攻撃を行う前に攻撃していたし、その他股間部分なども攻撃していた。

「やっぱり体内破裂させるしかないか。だが……」

考えはあった。だが、ときはすでに、そんな余裕はない程になっていた。敵が目前に迫っていたからだ。

「修治さん、独断での行動をお願いしますッ！」

昌哉がそう叫んだ。はつきり言って、昌哉は他人に気を掛けられるほど余裕は持ち合わせてなかったからだ。

星人1体の腕が昌哉に向かってくる。それを地に転がって避けると、ホルスターからYガンを取り出して狙いを定める。

トリガーを引いた次の瞬間にアンカーはすぐに反応して、3点が拡大されていつて星人を包み込んだ。

「よしッ。 イケル！」

トリガーをもう一度引こうとした次の瞬間、紐の切れるような音と共に、星人は容易く捕縛から解放された。

「なに！？ まさかッ」

このときに昌哉は、星人は筋力も優れている事を理解した。

昌哉はホルスターから刀を取り出すと、飛んで星人の頭を目指した。避けられて頭を捉える事は出来なかったが、星人の近場に着地、再び跳ねて星人の頭を目指した。

だがここで、盲点に気づかないで横脇から星人に捕獲されてしまい、星人の顔面近くまで連れていかれた。

「しまった……ッ」

星人に捕まった。それは、昌哉がもつとも恐れていた事であった。希望はまだ捨ててはないが、細かく体が震えているのは、やはり恐怖心があったからに違いはない。

自分の腕が星人の手の中になかったのは不幸中の幸いだ。刀を片

手に備えているし、隙をみて星人の目玉を突くなりするしかない。

それで星人が怯む確信はないが、できるだけのは事はするつもりだった。

まずは隙が出来るまでだ。自身を握る握力の強さはそんなでもないから、恐らくはスーツが壊れるなどはないはずだ。

そう思ったときに、星人の笑みは更に増していつて口から舌を出して接近させてきた。

それが熱気を放っている事はすぐに理解は出来る。そして、自分の首筋間際まで接近してきた時、刀でもってその舌を切断した。

「む……ふふ……」

星人が口を開けて口内が晒しながら、昌哉は吸い込まれるように口の中へと引き連れていかれた。

だが、ここで諦める昌哉ではない。刀を口内に伸ばして突っ掛けると、星人の企みを阻止し、更にはグリップを力強く握って刃を伸ばすスイッチを押すと、停止どころではない考えをもっていた。

少しずつながら距離が開けてくる。

ここで星人は、力を強めて口内に取り込もうとしてきた。

「ぐ……あ。辛い……か」

そのときに、他で行動していた修治が駆けつけた。

修治は、どうにか昌哉を助けようと星人の顔面目掛けてショットガンを連射するが、それは顔面の皮膚を擦らせるだけで、容易く星人のもう一方の腕に捕獲されてしまった。

「くそッ。 修治さんも捕獲されてしまった……」

万事休す。 そんな文字列が脳内に浮ぶ。

ここで、龍の助けを望んだ。 助けに来てくれると信じている。 そう、祈るしかなかった。

36話

進退の勇氣（前書き）

どうも、いつも俺の小説を読むために、時間を割いていただいております。ありがとうございます。

かなり時間が経ってからの36話です。

これからできる限り早く更新したいですが、忙しい為に執筆時間がありません。

でもでも出来る限り早く更新したいと思います。

いつもGANTZ埼玉を読んでいただいて、ありがとうございます。今回、見苦しい感じになってない……ことを願います。

それでは、温かい目でみてやってくだせえ……。

36話

進退の勇氣

星人の皮膚には、齒が立たない事を厄介と思っていたのは、龍だけじゃなかった。公も同じように星人を斬りつけ、驚いている1人だ。

「なんだ……こいつら」

勢いをもって敵を倒そうにも勢いはなく、それを生む力も、星人を前にして困難を極めていた。

公は、何度と星人の各所を斬りつけていき、なんとか急所となる場所を探していくが、大した情報は得られなかった。

「公さん、ここは逃げましょうッ。 撃退法を思索の上で……」

春魅達は、公が前方で敵の気を引きつけているおかげで被害はないが、目前に敵が居るということで、気が気ではなかった。

「退いてくれッ。 それまで星人は惹きつけておくからッ」

公はその任を愛に言い聞かせた。愛はすぐさま行動を起こして競技場外にでるよう促すと、後方の敵を確認しながら続いていた。

そのときに、ホルスターから刀を取り出して、今から星人を倒しに行こうとしている雷武の姿に気づいた。

「……星人と戦おうなんて、やめてくださいッ」

「黙れ女……。いつまでも昌哉に下に見られるのは耐えられねえ……」

外が硬い。ならば、内をやればいい。そんな龍や昌哉の考えを、雷武ももっていた。

愛は背ってその場を後にすると、雷武は刃を伸ばしながら深呼吸を繰り返し、クツと目元に力を入れると、星人を見据えた。絶対に勝つ。そう心に思ってた。

次の瞬間には走り出していた。そこに、公の撤退を待っていた春魅が声をかけるが、聞こうともしないでただ突っ走って星人を目指して行った。

「皆後退したな。よし、俺も……」

公がそう思ったその時に、接近してくる雷武を見て遺憾に思った。

「なッどうして……雷……武……さ……」

公は、とりあえず撤退しようとして足を後退させるが、それでも走りぬいていく雷武にどうして声を掛けるか、今の状況からは考え付かなかった。

刀を伸ばしながら、空高く掲げて星人の前に行き着くと、スーッ

の効果で膨れ上がった腕で刀を振り下ろした。

結果はすでに分かっていたことだ。刃は頭部に接触したが、貫通はしないで触手を数本切断までにしかなかった。

「くッそがー!!」

どこも狙らわないうで、でたらめに刀を振り出して各所に刃を当てていくが、全て無に終わり、容易く星人の拳に包まれてしまった。

後方でそれを見ていた公は、進退悩んでいた。勝てないことに恐れている訳ではないが、逆に勝てないことにどうしたものかと考えを詰まらせていた。

星人の攻撃に遅れをとる公ではない。悩みは星人の手の内の中にいる雷武を見ると、助けなければという気持ちが高ぶってきた。

「公さんッ星人が迫ッてます！」

春魅が気づかせようと、声を響かせた。それに応えるように公はとつさに飛びのけ、星人の接近から距離を取った。そして、気づけば雷武のところ足を進めていた。

誰に言われた訳でもない。体が勝手に動いたのだ。

息が徐々に早くなり、力強く飛び跳ねると、雷武目掛けて手を伸ばした。

そのときに星人の大きな手が迫ってきた。それは刀で弾いて阻止するが、軌道が変わってしまい、近づくところではなくなってしまう

った。

「くッそ！ 誰か助けるッ」

叫ぶ雷武に対してどうすればいいのか。着地してから考えた。だが、そんなすぐに思い浮かぶものではない。あんな巨体を素早く動かすのだ、筋力はかなりのものだろうし、なにより手の中に捕まっている以上、どうしようもない。

それに、不可解な事が多すぎる。

刀や？ガンが効かないあの皮膚は、かなり硬いだろうと思える。なのに、自由自在に動かす事に矛盾を覚えるからだ。

伸縮性が優れていたとしても、スーツを着ている人間が振るった刀を通さないそれは、確実に現在の地球では解明できないように思えた。

「どうしろってんだ……」

そのときに、星人の口から熱舌が出現し、雷武を接近させるや、高温によって肉が焼ける音が響き渡った。

「ああああッッッ！」

当たり前の様に悲鳴をあげる雷武の顔は、今まで見たことの無い様な形相だった。大きく口や目を開き、涙や涎を滴らせていて、耐える事によって身体に振動をはしらせていた。

何かしなければ。そう思って身体は当たり前の様に動き出した。

刀を伸ばして、無我夢中に雷武を襲うその舌に接近させる。

星人の意識が此方に向いていると分かった時には、刀は避けられ、腕に接触していた。やはり腕に当たろうが貫通はするはずもなく、これと言ったダメージは与えられなかった。

そのときに、雷武を掴んでいた星人に異変が起きた。

ボコボコンと言った音声が聞こえるや、星人は倒れだし、腕の中にいた雷武は解放された。

倒れた星人の背後にいた星人は、それぞれ一方に顔を向けていた。

公から見て右、観客が座りそうな場所だった。

「なにが起きたんだ……」

星人が笑い声を上げながら、その一方に進み始めた。勢いよく全匹で突進していくが、向かうその途中で、次々に頭内部に異変が起きるや地に崩れていった。

そして、星人はついにその観客席にたどり着くことなく地に倒れ、身動きをしなくなった。

次の瞬間には、観客席の方から、ステルスモードを解除した嬰南が出現した。

「楽勝……ッ あたしの狙撃は最強かもね」

嬰南は、小走りで公の近くにきた。

「嬰南さん。 助かりました。 お陰で……」

「こいつらの脳を狙い撃ちしたから、そんな難しくなかったよ。 礼には及ばないよ」

公の発言を遮って余裕の言葉をならべた。 嬰南さんは、再びコントローラーを覗いてステルスモードに戻ろうとしたとき、地図画面をみて、納得しがたいものをみた。

「あれ？ 可笑しいな。 星人、倒したよね……」

画面には、倒した前と同様に、星人反応の点があった。

雷武を抱き起こした公は、コートの端に移動させると、そこで嬰南から報告を受けた。

「なんですか？ 嬰南さん……」

「多分、この星人は死んでないんじゃないかって……」

それを聞いた公は、すぐさまレーダーを確認すると、確かにそこには減ることなく点が光っていた。

「黒い球にタフってあったけど、これはちょっと過ぎねーか？」

星人を見つめる嬰南は、とても死んでないとは思えなかった。 それは、地球の生物をみても、手や足をやられても、すぐさま死に直結する分には思えないが、どんな動物でも、脳をやられれば終わり。そこで命令をだす器官がなくなったのだから、普通は死んでないと

言うほうが可笑しいのだ。

なのに、リーダーには、死んでいないという点がある。なにか可笑しい。なにかある。

嬰南は考えた。今回のミッションを知る限り、なにか腑に落ちないものを感じて、ただの戦闘ではないと、その考えを頭に叩き入れていた。

「なんか、本当誰も言うこと聞かない……」

ドーム場外から、新人を非難させていた加絵が戻ってきた。

加絵は、影で春魅や愛に個別で指示を出していたが、公の前線奮闘、雷武の単独による突撃、勝手に離れて狙撃体勢に入った嬰南。それで大そうイラつきを隠せずにいた。

「分かるよ？ みんなの気持ち。公は皆を逃がそうやら考えての行動。雷武は一攫千金狙い。嬰南はみんなの手助け。でもさ、そういう行動は謹んでよ。今の私達には、誰かが勝手に死んでいいほど余裕ないし、誰か1人死ぬだけで悲しむ人がいるんだからさ……」

最終的には勝ったような形になったが、确实の勝利を得るならば、加絵の言ってる事は正しいと、皆は感じていた。

「……で、この星人どうする？ 地道に粉碎していく？」

嬰南の発言で公はそれがいいと考えを決めた。もちろん、加絵もそれには賛成していた。

メンバーは？ガンで狙いをつけると、全員同時にトリガーを引いて各個を撃ち続けた。

破壊途上、加絵や公、愛は星人の分析をしていたが、どうやら、皮膚は硬いではなく、何らかの力で威力を吸収しているのだということが分かった。皮膚は想像異常に柔らかく、頑強に匹敵するほどの耐久性をもっていた。

「ちょ……ちょっと、これ見て」

それは、偶然ともいえた発見だった。嬰南が、頭部から出て伸びていた触手のようなものを？ガンで撃ったとき、毛のような触手ではなく、それは、生き物とも呼べるように、破壊行為を受けるやウネウネと動いて頭部から脱出を試みたのだ。

そして、それと同時に薄気味悪く感じていた星人の笑みが、気の抜けたように変わっていき、まるで、普通の人間の真顔を思わせるような表情になった。

もちろんそれを公が知るや、考えられる事は1つしかなかった。

「俺らが戦ってたのは、この巨人であり、だがその意思はなく……もしかしたら、この星人とは別の星人と戦っているのかもな」

「この触手……寄生虫？」

加絵が、公の言いたかった事を的確についた。

「俺は少なくともそう思いました。地球に潜んでいた星人が、この寄生虫によって操られてるか、宿主が逆転したか……」

「だとするならば、黒い球が言ってた朗らか星人って、この触手って事になるのかな？」

「そうだと思います。すでに、寄生している状態なんですから……」

加絵が顔を俯かせて考えごとをはじめた。そして、すぐさまひらめいたように顔を上げるた。

単純な攻撃でも倒せるじゃないか。それを知っていたならばの話で。

「頭部の天辺で、髪の毛の様に生えていた……」

「加絵さん、打開策が見つかりましたねッ」

この時に、皆の顔が明るくなった。それは、単純に死ぬ可能性が減ったこともあり、？ガンさえあれば弱い自身さえ生き残れる可能性があったからだ。

そんな、全員に希望が生まれてきたとき、チラリと星人の方を向いた愛は、思わず声を上げた。

「……ッ皆さん！ あれを見てくださいッ」

驚いて皆が星人に振り向くと、そこでは異様な光景が広がっていた。

地に崩れた星人の穴という穴から、寄生虫が溢れでてきていて、

その量は、1体の巨体から半分程度である。

それが数体いるとなると、総量は半端ないほどだった。地を埋め尽くし、その進む先は、命ある、生物のもとであることが、考えなくても分かった。

「こっち、来る。　殺さないと……」

公は、ショットガンを構えて始末しようとするが、量が量で、ここはZガンで潰すのが妥当と考えた。

取りに行こうとしたが、そこで聞いたことのある音が響いてきた。

チユイイイイ……

その後に、大きな圧縮音と共に、一瞬にして寄生虫の一部が地の中へと消えていった。寄生虫は液状になって、丸く空いた大きな穴の中で波をうっていた。

「……誰が？」

尽きることなく圧縮されていく寄生虫は、わずかに数発受けたところで殲滅した。

公は、その撃った人を理解するのに、大して時間は要さなかった。的確に分けながら圧縮していく、その芸当は、きつと嬰南さんしか出来ないだろう。

「公くん。　君はなんか感じがいいようだね、嬰南ちゃんだよ」

嬰南さんは行動が早い。寄生虫の行進に気を取られている間に、Zガンを取りにいていたのだから。

「点数は元々あたしのもののような感じなんだから、悪く思わないでね」

このときに、レーダーを覗くと、数点は消えて、死滅した事を表していた。

「ここは終わった……今回のミッションも、死人なしで……」

・・・

「早く逃げるッ！ のろのろ走ってるなッ！」

そこでは、確かに哲也の声が響いていた。

ピンポロパンポン…ピンポロパンポン……

頭部からはアラームが鳴り響き、背水という不利な状況に陥っていた。

「哲ーッ無理だよ、もう逃げ切れないよッ」

「諦めんな、栞ッ。ここはどうにかできるんだッ」

哲也と栞、それと7人の野郎達は、巨体を誇る星人から逃げた。

野郎達に追いついた哲也は、必死に説得を続けていたが、アラームが頭の中に鳴りだしてからは、無視して帰った3人が死亡。そこから完璧に哲也の言っていることを信用した野郎達は、哲也の命令で、龍達のところに戻ることを繰り返し言った。

そしてその戻る途中、大きな足音が聞こえると、遠方を眺める野郎達は星人の姿をみて逃走を開始、再びエリア外へと走り出した。

「エリア内を沿って逃げろッ！ 出れば破裂して死ぬこと知ってるだろうッ！」

その哲也の言葉を聞かないで、我先にと逃げ延びようとした人は、エリア外で頭部が破裂。地面に倒れた。

「ひッ……ひい！」

2人の頭が弾けた時点で、すでに野郎達の士気は無であった。逃げ切れない。そう心で感じたのだろう。

「沿って逃げろって言ってるだろうッ」

ぐずぐずしていた間に、逃げ道はなくなり、星人に囲まれる状況に陥ってしまった。

「も……もう無理だ、俺は死ぬッ」

「弱音吐いてる暇合ったら、見回して逃げ道無いか確認しろよッ」

逃げている途中で、星人に銃を撃って、効かないことは既に知っ

ていた。だから、銃を捨てるや、刀を取り出して警戒を強めているのだ。

「なにが無理だよ。勝手に決め付けてるな……俺は負けない。あの公つて男みたいに、この不利な状況を乗り切ってみせるッ！」

このときに一番恐怖を感じていたのは、ある意味、哲也が一番だったのかもしれない。唯一星人と対峙できる存在。勝てなくとも、一番負けない可能性がある男。それを知っている分、感じている分、自身が前にでて戦わなければいけない。

それは、前にでた分、死ぬ可能性が大きくなるという事。

哲也は、1人で数体の星人と対峙した。

36話

進退の勇氣（後書き）

誤字脱字は今に始まったことではないですが、お知らせください。それと、ここ意味が分からないなどありましたらどんな方法でもかまいません、知らせてください。はつきり言って、読み直すほど暇がないんです。

37話

誰のため、何のため

自分は強くなる。そう心で決めたあの日のことを思いだして、今おかれた状況をなんとか打破しようと、昌哉はスーツを更に活用して、刀を伸ばして勝利への道筋を考えていた。

そろそろ限界かもしれない。腕に力を入れすぎて、すでもはやなにをしているのか感覚がなくなっていたからだ。

それでも気を緩めないで諦めないのは、やはり死にたくない気持ちと、決心であった。

「龍の助けは望めないか……」

辺りを見回すが、龍は遙か遠方で星人と戦闘を繰り返していた。

大声をだして助けを呼ぼうかと思ったが、それほど余裕はない。声をだした時点で気が緩んでしまいそうだし、声が聞こえるかも疑わしい。

時々修治さんの状況を確認するが、握圧されて耐えている顔と声しか確認できない。

「ここは……自分で何とかするしかないか」

だが、今の状況では難しい。せめてなにかちよつとした進展さえあれば……。

そのときに星人に動きが見えた。熱をもった舌を昌哉の方へ伸ばすと、それは、じわりじわりと昌哉に迫っていった。

「やばいぞ、あんなもんが触れようものなら……」

片手を刀から離そうと考えたが、そうしたところでもなにも変わらないと自分自身分かっていった。だが、何かしなくては……。

舌が迫る中、更に不運な事が自分の追いつめる。星人との距離が縮み始めたのだ。それは、刃が縮んでいるとか、刀を手放したという事ではなく、刃が確かに星人の頭部を貫通していたのだ。

いくら攻撃を吸収して耐える強固さがあっても、持続した威力には耐え切れなかったようだ。それによって舌との接近速度が更に速まり、目前に迫っていた。

すると身体は嫌でも反応し、次の瞬間には刀から手を離して迫っていた舌を弾くように触れていた。

ジュツと、肉が焼ける音と共に、昌哉の顔が歪んで苦痛な顔を浮かべていたが、気づく事もあり、案外片手でも耐えられるように思えた。

「リスクを承知の上で舌を掴んで引き千切ってみるか？」

刀が星人の口内で刺さっているところを見ると、どうも痛覚はないようだ、考えている暇はない。結局やるしかないのだろう。

そのときに、もう片方の手に握られている修治に動きがみられた。

見てみると、握りつぶされる星人の力に反して力強く手を広げて脱出しようとしていた。腕はスーツによって膨張しており、少しずつ広がる星人の大きな手は、握りつぶそうと力を強めるが、修治の必死さに敵わず、更に広がって、『ブチンッ』とその音が数回にわたって連続で耳に伝わると、力を発揮できなくなった手から修治は解放された。

「修治さん……が、解放された……」

「ガッはぁ……はぁ……よしッ！ いけるッ！」

地に背中から落ちた修治は、すぐさま立ち上がって走り出した。行き先は星人の足元。とくに大した考えはなく、ただバランスを崩せば有利にことがはこぶと考えていた。

修治が力んで膨張したスーツで足を殴る。だが、威力を吸収する星人の特異体質によつてことは好転しなかった。

「なんでだッ……なんでなんだ、このスーツを着るとハンパない力出せるんじゃないのかよッ！」

知った効果とは、裏腹だ。修治の戦意は落ちていき、これは勝てないと悟ったのか、昌哉を置き去りにして逃走をはじめた。

昌哉はそれを見て絶望に心を支配されるが、修治には少なからずの考えがあった。

それは簡単な話、救援要請である。公達に助けを呼びに言ったところで役にたつのか分からないが、少なからず希望を秘めていた。

「助けをツ待っててくれッ！」

そんな言葉を放つ修治に昌哉は焦りを感じずにはいらなかった。

「ま……待って……」

もはや声は届かなかった。もう、自分でこの場をどうにかするしかない。

「やる……くつそ。 やってやる。 俺なら……できる！」

無我夢中とはこういうことなのだろうか？ 美形の顔を思いきり歪ませ、赤面させながら、片腕で体を持ち上げるようにすると、刀を下ろすように力ませた。

すると意外にも、星人の体は脆く切断されていき、後頭部を貫いていた刀は首もとまで下りてきていた。

勿論の様に星人の口許の接近が早まって汗を垂らしたが、悩んでいる暇はない。やってしまったなら、やりきるしかないんだ。

刀を手放して、筋力アシストをつまく生かし……自分の持てる全力をもって足を抜き出そうとした。

すると感覚でなにかを分かった気がした。抜け出せた足を目視しながら思う。

人間、全力をだせていると思うときは、大体なんでもできるものだ。物事考えすぎて、行動がおろそかになっていたもんだから、きっと誰かに甘えてて、必死なっていなかったのだ。

自分は出来る。いままでだってそうだったろう。顔がいいとか、運動神経がいいとか、色々褒められてきたけど、自分はいつだって自分の出来る限り努力してきたじゃないか。

何度妬まれた？ 何度陰口を言われ、何度邪魔された？ 顔だけの言われ、頑張ることはまるで馬鹿にされてきた。

自分は何の為に頑張ってきた？ 誰のため？ そうだ……自分のためだ。

夢があった。……自衛隊になりたい。文句を言うそこの人間とは違う、人を守りながらにして、応援できる。

はっきり言って、それ以外の職種でもいいんじゃないかと思っただけど、自衛隊は他の人より厳しい訓練を耐え抜いて、物事考えている人が多いと思った。だからそれがいい、安易な考えだが、自分はそれを信じたかった。

乗っている星人の手から飛び跳ねて頭上めがけると、触手でうめられている頭部に着地し、昌哉は攻勢に乗り出した……。

・・・

巨体が勢いもって地面に倒れる音が周囲の一般人を驚かせていた。一般人にはなぜにこのような騒音が響いているのかは理解し難い

だろうが、少なくとも、命を賭けて誰かを守ろうと必死の考えをもつ哲也の姿がそこにはあった。

「刃で切りつけているのに、斬れなくて、傷すらつかないのはどういうことだ？」

刀でもって星人を叩き弾いている哲也だが、そんな事をずっとしているほど余裕はない。1と2体の星人と対峙すれば、他の数体が逃げている栞達を追って襲おうとする。

今の現状では星人に太刀打ちできるのは俺しかない。逃げきつて、どちらかのチームと合流しなければ……。

哲は刀を手放そうとはしなかった。そして銃器を用いようとしなかった。それは、一番の目的が逃げることあつて倒す事ではないからだ。

「あとちょっと……あと少しで……逃げ切れる」

気づいた頃には公達が入っていったドーム近くを疾走していた。そしてそれを知った栞とヤンキー達は、瞳に涙を浮かべながら喜んでいた。

刀を振るって巨人を2体地面に叩きつけ、その間に通り過ぎた星人を追って立ちふさがり、叩きつけ、叫ぶ。

「し……栞！！早く逃げろ……！！」

繰り返し刃を当てて地面に星人を叩きつける哲也だが、まるで追いつくように距離は縮まりつつあり、一向に良い状況にはなる様子

はないが、走って一応の移動は出来る。

どうにかなりそうだ。それが少なからずの希望だった。

「おいッ！！ 前に黒い服来た奴がよッ 味方だッ！！」

生き残っているヤンキー2人が高らかに叫んでドーム出入り口から出てきた味方に救援を求める。

だが、それは思っていたような結果にならないと思うのは、近くにつれての出来事。

「やあああッ！！ なんでッ！ あっちからまたさっきのでかいのがッ！」

向かって助けにくると思った集団が引き返してまたもドーム内に入っていく、入れないとも言わんばかりに鉄の扉が閉められる。

「あッ！ ふざけんなよッ！！ 奴等閉めやがったッ」

ヤンキー2人が扉に激突して突破しようと必死になっていたが、スーツを使いこなせていない。扉は凹みもせず反動でヤンキーを押し返した。

今度は桯が扉の鍵部分をアシスト効果で一気に破壊、扉を左右の手でこじ開ける。すると、内側から閉じ付けようとする新人達の顔が見えたが、次第にスーツによっての力負けみよって扉が閉まっていく。

「こっちくんなよッ！！ 向こうに行きやがれッ」

「早く閉めてよッ 怪物がきちゃうじゃん」

「皆ッ 戻ってきてよ、大丈夫そうだよ？ 公が星人を………」

栞はすでに扉から手を放して諦めていた。加絵の声はすでに届いていない。そして星人と対抗している哲也に向くと、大声で叫んだ。

「ダメですッ！！ 仲間が…… 仲間が助けてくれませんッ」

戦いながら聞く耳をたてていた哲也は、頷かなかった。だが、どうしようもないと思ったのだろう、栞に合図をだすや我武者羅に走りはじめた。後方から栞が付いてきていたが、ヤンキー2人が気がかりで振り返ると、すでに公が置き去りにしたバイクで逃走を図っていた。

その光景をみて栞はただただ悲しげな顔しか浮かべなかった。いままで逃げおおせてきたのは哲也のお陰なのに……、そう思いながら栞は走り続けた。

「…… 大丈夫だ、栞。 俺が守ッてやッから」

後ろから聞く限り笑ってないことがわかった。栞はその言葉を受けて嬉しそうに頬を赤めるが、気をひき締めんと下唇を噛んだ。

哲也と栞のみで逃げるとなると、今までの移動の速さとは格段に上をいつていて、容易く星人とは距離が生まれて余裕ができていた。

そのときに、後方から人の声が哲也と栞の耳に響いた。

「ま…… 待ってくれッ！！ おいッ 待てッて……」

「いや、もつと強く扉を閉めてッ！！ 入ってくるッ！！」
「絶対入れんじゃねーッ！！」

それは、哲也と栞を見捨てた扉の向こう側にいて必死に扉を閉めている新人達と、バイクで逃げてあっさりと巨人に捕まったヤンキー2人の悲鳴であつた。

「……………」

栞は声がでなかった。

哲也自分を見捨てた人達。そんな人達を助けるなんて、普通そんなことはしない。自業自得なんだ。

扉は巨人の開けようとする力によってひん曲がり、バイクごと捕まれて熱舌が今にも触れようとしている、危険な状態。

そう、普通なら助けない。だが、哲は違う。栞の目には確かに映っていた。

「……………行ってくるの？ なら、援護は任せて……………」

「行ってくる」

勝てるか勝てないかじゃない。何で戦うのか、何で勝つのかなんだ。哲にはそれがしつかりと分かっていた。

「お前らのためだ。そして俺のためだ。くだらねえ理由や考えで俺は俺を捨てない。そう決めたなら、俺は勝たなきゃいけない」

哲也は震えてなかった。損得も考えてなかった。片手に持った刀が哲也の手によって伸びていき、それは星人に向けられていた。

「おらッ！！ さっきみたいに俺を襲ってみろよ！！ 俺が狩つてやるよ、この薄気味わりの笑顔をしてる化け物がッ！！」

哲也は笑っていた。

37話

誰のため、何のため（後書き）

7mアクセスありがとうございます。

38話

触手繁操

「この量はいくら俺でも無理だつて……!!」

巨人が地に寝転び倒れ、体内に潜んでいた職触手がものすごい量が、龍目指してうねっている。その量の多さに龍は若干驚くが、大きな笑い声を発しながら的確に、近寄ってくる触手を撃破していた。

次第に、触手の勢いに押されそうになったのか、ショットガンを手放し、刀で触手の山を右振左振するが、いつしか、刀を使う余裕はなくなり、退却際にショットガンを撃っている状況になった。

「さすがに……冗談言ってるヒマないな……。こんなときは公が持つてるような武器が欲しいけど……」

振り向き際に刀で飛び跳ねてきた触手数本を切り裂いた。そして急遽、場外に向けて走り出した。

ちょっとした室内を通り抜けると、扉を閉場。近場を走り回って何かを搜索していた。

「あ……あつたあつた。誰のか知らないけど、悪く思わないでくれよ」

龍は、原動機付自転車のガソリントankを力任せにもぎ取り、それによってあふれ出たガソリンを気にすることなく、閉場した扉に向けて投げたつけた。それは、見事なまでにあたってタンクが破裂して、爆発して空高らかに赤い炎の火柱が立った。

次に龍は、さらにどこぞに乗り物とは搜索をして数台のバイクをかき集めてくるが、それをすぐには扉に投げなかった。

時間とともに鉄の扉がひん曲がって開場。触手が溢れ出て龍に進行が開始された。

「よし……」

龍はそれを待っていたと言わんばかりにバイクを持ち上げた。案の定、それは触手に向かって空を飛び上がらせるが、手前付近に落下すると、そこで炎上した。

触手がガソリンに触れて瞬く間に焼け爛れ、焦げて腐臭を周囲に撒き散らした。

爆発に近いほどの威力である。数台投げ込むたびに爆風が肌に伝わり、わずか数分で触手の80パーセントを死滅させた。

「ふう……めんどくせえ……」

残りは？ガンで始末していく龍だが、このときに辺りで異様なまでの人数が集まって来ているのが分った。

「気づかなかった……警察もいるのか……？」

散らばっていく触手が人間に取り付いたら厄介だ。射撃速度を速めたが、次の瞬間には銃口を下ろして、取り付かれてしまった人間を視覚していた。

「……さあて、どういう展開になっていくのかね……」

周りでは消防が消火活動をこなしていき、警察が野次馬の整理とそのときの状況を一般人に聞いていくが、取り付かれた人間によってパニックが起こり始めた。

「ちょ……ちょっと？ 大丈夫？ 口から何か入ったの？ ねえ？」

「オグウ……ゲハ……なん……くる……」

「ちょっとこの人やばいよ。 救急車……！！」

「どうしました？ 大丈夫ですか？」

近寄ってきた警官が苦しむ女性の介抱をはじめて、背中を擦ったり寝かせて楽な状態にするが、次第に呼吸は弱まっていくと、ヒューヒューといった呼吸音によって場は凍りついた。

「え……心臓が弱いとか、そんなだよな…… 火事でショックを受けた……なんだ？」

弱まっていた呼吸が正常に戻った。だがホッと息をつくのもつかの間、目蓋が勢いもって開かれると警官を凝視して、とび襲い掛かった。

「おい、ちょッ、やめ!!」

「なにあの女、警官襲ってる……痴女かよ。変態だぜ」

「ってか、大丈夫なの？ あの女。さっきまで死にそうだったんだよね……救急車も遅いし……」

押し倒された警官の前で大口を開けて移し込むような仕草が伺えた。警官は女をどけて口の中に異物が入り込んだのを感じ、指を入れて除去しようとしたが、見えもしなければ、ウネウネ動いて暴れる触手を掴むのは困難であった。

「はぐッ……うぐ……。んはッの……飲み込んでしまったッな……なんだよッくそ……」

女は警官をはなしてからも人を襲いつづけた。1人、また1人と、口移しで侵食していくと、混乱は頂点に昇った。

侵食された人間がまたと人間を襲いだす。それは、ゲームやらで見た事のある光景と違いはなかった。

侵食された人間が5人にまで増えた頃、龍の心は決した。

「人間を殺すのか。まあ、でも、終わらせる為だもんな……」

人間を殺すのに躊躇わない者はいないだろう。勿論の様に龍はそれを感じていたが、躊躇ったとしても、決意するのには余程の気合が必要だろう。

刀を構えて息を整えると、走り出して最初に襲いだした女に刃を向けた。

右斜め上から振り下ろす基本的な素早い攻撃であったが、後ろを向いていた女はそれを分かっていたようにすれすれに避けると、振り返りつて無駄のない動きで龍を侵食しようとした。

「な……なんだッ!! こいつッ」

とつさの行動でスーツを膨張させて女を殴り上げた。女の胸部の露骨があらわになり、宙を泳いだ後に地面に重々しい音をたてながら激突した。

「はぁ……なんだ。この触手の能力は……」

女の体は動こうとしなかった。時折ビクツと痙攣したかと思うと、体内から触手が湧き出てきてまたも侵食するべき生物のもとへと移動を開始した。

そして、なにより龍を少し震わせたのは、触手が出ていった女の体であった。

「は……はああああ!!!! 痛いッ痛いッ痛いッなによこれッや……あッ……!!」

暴れだす。胸部を破壊されて痛がる女だが、見る限りでは暴れると言うほどの動きではなかったが、痛がるのも数秒、泡を吹きながら気絶。痙攣さえもなくなると、息絶えた。

「なんだ、これ。 使い捨てかよ……」

まじまじと女が叫ぶ状況を見たせいだ。龍は気分を崩して吐きそうになっていた。だが、そうしている暇がないことは承知していた。なにせ、今も止まることなく侵食は進んでいるのだ。スーツを着ているにも関わらず刀は重かったが、あまり乗り気ではない感情を抑えて人間に刃を向けた。

「こらッ止めなさいッ 刀を下ろせッ!!」

走り出そうとした瞬間での制止発言に、龍は耳を傾けた。

「なんだこいつ、俺が見えているのか？」

警官が拳銃を両手に力強く握り締めながら銃口を向けている。それによって龍は理解が高まった。

「なるほどね……星人になったのか」

龍が？ガンを向ける。すると躊躇することなく警官は発砲、額のと真ん中に着弾した。

「って……って痛くないけど、これでしつかりと分ったぜ。この星人、かなり頭いいようだな……厄介な」

ここで龍はコントローラーで時間を確認した。

「残り40分……いけるか？」

警官が最初の発砲で額を撃つとは到底思えなかった。

「10分あれば余裕かも……多分」

撃った後の震えも一切ない。

「こいつは、星人に操られてる。普通の人間なら騙せるけどな、俺は騙せない。だって分るんだぜ？ 侵食されているところを見ていたとしても、見てなかったとしても……演技とは思えない演技が、すごく分る」

根拠なんてないと言えば信憑性なんてない。少なくとも俺は、小さい頃から人間を疑って生きてきた。

だってみんな嘘つきだから。

だが俺は違う。俺は常に自分に正直だった。だからうざい奴にはうざいと言った、分らせた。自分の中の信じる考えを信じてきた。

だからこの星人には知性はないと断言できる。だが、人間の持つ知性や肉体を生かす能力がある。これも断言できる。

「確か人間の可能性は、科学的に考えるととてもないらしいな……誰だか、科学者が人間の体ほど完璧なものはないとか……」

知性あるうと、知性を手に入れるべき身体なくして知性はない。まあ、どうでもいいことか。死んでしまえば結局のところ肉だしな。

厄介なことは、人間の能力を生かす能力を、どこまで生かしてくるかという事だった。もしかしたら、俺の想定を超えているかもしれない。それでもいいが、つまらないのは勘弁だ。面白い方がいい

に決まってる。

警官が2発めを発砲。だが、龍は警官が引き金を引く前に移動を開始していた。耳元で玉が通過する音が聞こえたが、気にせず一直線に警官に刀を接近しながら振り下ろした。

「ッは！！ いいねえ、避けるかッ！！」

片足で器用に加重移動で左に龍の攻撃をかわしていた。さすがに警官、運動神経は大したものだった。

避けた後の警官はすぐに発砲。だが、執拗に接近してくる龍はその玉を予め出していた手の平でそれを受け止めた。そして龍の刀が、警官の首根っこに突き刺さる。

「チョロいもんだ。 想像は超えてなかった……」

首に刀が貫通していても、警官は発砲しようと銃口を龍に向けようとしたが、その前に龍が首を切断、脳からの信号を遮断された肉体は倒れていくしかなかった。

「この調子だな、この調子。 まだ楽勝だ」

龍はコントローラーで制限時間を確認した。

「驚いた。 1分も経ってなかったか……」

だが、たいがいそのくらいの時間があれば侵食は想像以上に進んでいることだろう。現に、20人の侵食されたであろう人間達に囲まれている。

「まあ、されてなかったら俺は見えないか……」

俺を囲んで凝視するこの集団は、ただ俺に焦点を合わせているだけだろう。きっと俺を敵としっかり人間の脳で理解していることだろう。

「おら、こいよ。 そんな見てたってつまんねーだろ？ 殺したいんなら殺しに來い」

呼応するかのように20人が襲いかかってきた。 さらにその行動に忖えて龍は人間の足元に刀を振るいきった。

肥満じみたオヤジ以外は龍の攻撃を飛び跳ねて華麗に避けていた。だが、龍はその行動がどんなに隙を作るものかを思わせるが如く刀を反転、地面に足を着かせる前に刀を振り切った。

だが、以外にも斬れたのは15人程度で、元消防や警官は前転するように攻撃を避けていた。

前転と同時に更に駆け出した消防警官は、俊足だった。 そこの人間とは違う訓練を受けているだけあるが、龍はここで刀を振ろうとはしなかった。 地面を滑らせるように消防警官に背面からのキックをすると、またと全員が避けるために飛び跳ねた。

あとは回転に合わせて刀を横にスライドさせるだけだった。 こうして残りの侵食された人間を掃討した。

「余裕……。俺だから……」

？ガンで体内から這い出てくる触手を掃討する。これでこの場にいた星人は片付いた。そう思った矢先での、遠方からまたと数十体の侵食された人間が歩み寄っていた。

「侵食力、恐るべし……。ゲームよりタチわりーだろ……」

戦闘に対しては素直に楽しめたが、どうもこれからまた人間を殺さなきゃいけないと思うと気分が悪い。さっきの女のように、痛がる様を見ていれば尚更だ。

「一々考えるのめんどくせーな……。とりあえずは、侵食を止める事から始めないとだな」

龍は、自分を追ってくる侵食された人間は無視して、人を襲っている人間の処理に当たった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9882p/>

GANTZ 埼玉

2011年10月23日06時30分発行